
魔法少女リリカルなのは 伝説の剣

アイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 伝説の剣

【Nコード】

N7557K

【作者名】

アイズ

【あらすじ】

第一部終了しました。

現在第二部

【INVASION OF NIGHTMARE】

スタート

プロローグ（前書き）

文章力が無くてすみません。

プロローグ

伝説の都からとある世界に迷い込んだ剣の物語。このお話しはフェイト達が中学に入学するほんの数日前から始まります。

メインはオリジナルキャラの主人公とフェイト・Ｔ・ハラオウン。さて、このお話しはフェイト達が中学に入学するほんの数日前から始まります。

メインはオリジナルキャラの主人公とフェイト・Ｔ・ハラオウン。設定も少し本来と違う部分があると思いますができるだけぎり本来の世界感の設定で書いていこうと思います。

また拙い文章ではありますが
これからよろしく願いたいします
では

『魔法少女リリカルなのは 伝説の剣』 ども アナタの生きる目的はなんですか？

夢の為？友の為？恋人の為？

私は……どうなんでしょうか？多分皆さんもそうだと思います。でも生きていれば自分の本当のやりたいことが見つかるはずです。

私は小学校を卒業しこんど中学校へ入学します。

学業と仕事を両立させるのはとても難しいけどとても充実した毎日を送っています。そして私は中学に入学する少し前、ある男の子と出会いました。

魔法少女リリカルなのは 時空の剣
始まります。

by・フェイト・テストロッサ・ハラオウン

プロローグ(後書き)

シッコミはナシで

プロローグ(前書き)

これにてプロローグ了

プロローグ

「」

中学校に入学するまで一週間を切り。

私、フェイト・テストロツサ・ハラオウンは日が傾いてきた時刻。一人自宅であるマンションへの帰り道を歩いていた。

両手にはスーパーの袋。そう私は晩御飯の食材を買いに義母であるリンデイ・ハラオウンに頼まれてスーパーへとお使いに行っていたのだ。袋の中はひき肉、玉ねぎ、ニンジン、玉子、小麦粉……。材料から察するに今夜の晩御飯はハンバーグだろう。ちなみに私はハンバーグが大好きである。さつきから機嫌がいいのはこれのせいだ。ちよつと男の子っぽいと思われるでしょうが好きなものは好きなのです。

なにか問題でも？

さて、逸れた話しを戻すが私は今、公園の前を通りかかったところ。この時、私は立ち止まり空を見上げる。

雲一つなく茜色に染まった空はとても綺麗だった。

ただぼうつと空を見つめ続ける私。ゆっくりと過ぎていく時間。

親友達と過ごす時間も好きだがこついつた時間も好き。

その時、何かの音が耳に入った。

「なんだろう……」

注意しないと気づかない程度の、本当に、本当に小さな音。多分気付いたのはたまたまだと思う。私は静かに耳を澄ます。この小さな音は子供の泣く声のようだ。

「…公園から。」

今まで止まっていた足を公園へと向ける。公園の中は茜色に染まり、夕日によって遊具やベンチは長い影を作っていてとても綺麗だと感じた。

こんな景色も乙なものだと年寄り臭いことを思いつつも公園を見渡し声の主を探す。そして見付けた。

その子は公園の隅にある木下でしゃがみ込み一人泣いていた。年齢的に保育園の年小組ぐらいだろうとても小さな女の子。

「こんばんは。どうしたの？」

私は女の子の所へ行き声を掛ける。その子はゆっくりと顔を上げるこちらの顔を見る。

見知らぬ私に対して怯えた表情を見せる彼女に私はできるだけ怖がらせないように易しい口調と笑顔で振る舞うようにする。そのかいがあって女の子は警戒を少し緩めてくれたようでも小さな声だけど喋ってくれた。

「遊んでたら……みんななくなっちゃったの……。」

なるほど、察するに一人この公園に来て他の子と遊んでいたらみんな帰ってしまったて一人になってしまったようだ。道なりに歩いてこの公園に辿り着いたので帰り道も分からないから帰りたくても帰れない。時間が経つにつれて薄暗くなっていき、だんだんと怖くなってきたので一人泣いていたのだろう。

私はその子を放って置けないのでまず彼女を泣き止ませる為に隣に腰を下ろしてポケットに手を入れて飴を取り出す。

「お家の人があるまで私が一緒に待っててあげるね。」

そう言っただけに、彼女に飴を差し出す。ちなみにレモン味だ。女の子は飴を受け取るとまじまじとそれを見つめる。そして何かを思い出したような顔をして私に返してきた。

「飴はあんまり好きではないのだろうか？」

「お兄ちゃんが知らない人から物をもらっちゃダメって……」

なるほど、よくしつけられた子だ。

でも知らない人って……。私は子供を誘拐しようとしている危険人物ですか？私はその反応に苦笑しながらも彼女に再び飴を差し出す。

「私はフェイトっていいいます。アナタのお名前を教えてくださいな」

この問いに彼女は何かを考える。そして彼女は再び口を開く。

「夕陽……」

「夕陽。綺麗な名前だね。」

そして夕陽の手に飴を置く。彼女はまたそれを私に返そうとするがそれを笑顔で断る。

「もう。私は『知らない人』じゃないよね？」

屁理屈な答えだが、的を射た答えに夕陽は笑顔になって飴の包みを解いて黄色い飴玉を口の中に放り込む。よっぽど食べたかったらしい。それから私達はいろんなことを話した。好きな食べ物、嫌いな食べ物、自分の自慢話、私のちょっと恥ずかしいドジな話し。

「夕陽の家族はどんな人？」

10分、20分話した所で私は次の話しのお題を上げた。このお題に夕陽は嬉しそうな笑顔で答える。

「キリトお兄ちゃんとサトルお兄ちゃんはとっても優しくてカッコイイの!!」

お兄ちゃんか、てつきりお母さんかお父さんが出てくるものかと思っただが

「へえ、優しくてカッコイイんだ。ちょっと会ってみたいな」

「うん！フェイトお姉ちゃん夕陽のお家に遊びに来て!!」

『夕陽!!』

男の人の夕陽を呼ぶ声がした。公園の入口へと視線を向けるとそこにはコンビニの店員の服装をした男の子が肩で息をしながらたっている。

「キリトお兄ちゃん!!」

その人物が自分の兄だと解ると一目散に彼の所に走る夕陽。その光景を私は見つめる。

お兄ちゃんに会えてよかったね。
そう思いながら立ち上がると夕陽と一緒に彼のお兄さんが一緒に来た。

「えっと……。夕陽ちゃんのお兄さんのキリトさんですね。」

夕陽のお兄さんのキリトさんは整った顔立ちの黒い髪、青い瞳が印象的な男性。夕陽の言う通りカッコイイ。

「ああ、妹が迷惑をかけた。ありがとう。」

そう言って頭を下げてきた。それを見て慌てて頭を上げさせる。

「頭なんて下げないでください。」

「お兄ちゃん。夕陽ね、フェイトお姉ちゃんから飴を貰ったの!!」

それを聞いて彼はしゃがんで自分の妹の頭を撫でる。夕陽の顔は気持ち良さそうでキリトさんの顔はとても優しいお兄ちゃんの顔だった。

私にも血の繋がっていない兄がいるが兄妹というのはこういうものなんだなと思った。

「それじゃ、俺達はこれで」お兄さんであるキリトさんが夕陽の手をとり立ち上がる。

「夕陽、フェイトさんにお礼を」

「はい!。フェイトお姉ちゃんありがとうございます!」

「どういたしまして。」

こうして私達は別れた。

これが私、フェイト・T・ハラオウンと彼、霧咲桐斗の出会いである。

プロローグ（後書き）

駄文だ

一話『入学初日』（前書き）

リアル鬼ごっこもねちねちと書いてます

一話『入学初日』

長い校長先生のお話しを終え。私は今自分のクラスである教室にいます。

席は窓から二つ目後ろから二番目の席、窓から入ってくる日差しがとても気持ち良く思わず寝てしまいそうですが私は寝ません。けっして寝ません。

「同じクラスだね。これからもよろしくねフェイトちゃん。はやてちゃん」

こちらの栗色のツインテールの女の子は高町なのは。私と同じ時空管理局で働いていて航空隊に所属している若きもとい若すぎるエース・オブ・エース。

「ほんまやね。なのはちゃんやフェイトちゃんと同じクラスでよかったわ」

そしてこちらの茶髪でショートヘアの子は八神はやて。同じく時空管理局で働いている優秀な特別捜査官。ロストログリア『夜天の書』を持つ『最後の夜天の主』。

二人とも小学三年生からの付き合いで仲のいい友達。親友です。

「ちょっと！私達もいるんだけど！！」

「あ、アリサちゃん。声大きいよ。皆見てるから」

あ、忘れていました。この二人はアリサ・バニングスと月村すずか。同じく小学三年生からの親友でこの世界では数少ない魔法の存在を

知る一般人です。

「フフ。アリサもすずかもよろしくね」

その後は先生が来るまで私達五人はお喋りに勤しむことにした。

10分ぐらいして担任であろう先生が教室に入ってきて生徒に席に着くように指示。

先生の挨拶が終わって次に私達生徒の自己紹介をすることになった。順番に自己紹介をしていく私も無事自己紹介を終えて次は私の左隣の生徒の紹介になった。

「じゃあ次。えとキリサキ君でいいかな？」

「はい……。霧咲 桐斗。趣味や在学中にやりたいことは得にありません」

なんか変な自己紹介だった。

在学中にやりたいことがないとはなんとも変な子だと思う。普通は部活動に入りたいなど沢山あるのではないだろうか？それにキリト……。どこかで聞いたような名前だな。

そう思いつつも横目でその変な自己紹介をした男の子を試してみる。

そして私は大きな声で

「あー！」

と叫んでいた。

「キリトさんここに入学したんだ。」

HRが終わって早速話し掛ける。先程のHRの時に声を上げてしまったのがとても恥ずかしい。多分今もちょっと顔が赤いだろう。ちなみに今日はこれで放課である。

けどまさか同じ年で同じ学校に入学しているとは思わなかった。こ

の前感じた彼の雰囲気は自分より年上の男性だったのだから。

「フェイトさんか……。この前はありがとう。夕陽がまた会いたって言ってるからフェイトさんがよかつたらまた会ってあげてほしい。あと俺のことはさん付けしなくていい。同い年だしフェイトさんには世話になってるからな」

「うん。時間があるときにぜひ。あ、私もフェイトでいいよ」

これに対して桐斗はわかつたとうっすら笑顔を見せてくれた。その笑顔をカツコイイなと思っていると視線を感じたのでなんだろうとそちらを向く。

そこにはニヤニヤしながらこちらを見ている親友四人がいた。

「フェイトちゃん。そちらのカツコイイ殿方はどなたかなあ？」

はやてがニヤついている顔を更にニヤつかせて背後に近づいてくる。最近彼女がおじさん臭くなってきたのは気のせいだろうか？否、気のせいではない。

「フェイトちゃんいつの間にこんな彼氏作ったの〜？もう、親友なんだから教えてくれてもよかつたじゃない」

なのはわかつて言ってるでしょ！？

今私には暴走気味の親友達を止めなければならぬという使命ができた。

「ち、違つよ！桐斗は彼氏なんかじゃないよ！！」

両手をバタつかせながら必死に否定する。多分、いや確実に顔は真っ赤だ。

否定する私にすずかは笑顔のまま桐斗の隣へ行き真否を彼に聞いた。

「霧咲君だったよね？フェイトちゃんはおあ言ってますが本当の所はどうなんでしょうか？」

すずか！！

心の中で叫び声を上げる。彼女は普段大人しいのだが多分私達の中で一番黒い。いや、どす黒い。

「ちょっとした顔見知りで世話になっただけだ。別に俺は彼女の彼女なんかじゃない。」

桐斗は顔色も変えずに普通に否定した。う、改めて否定されるとちよっと傷つくかも……ってなにがっかりしてるの私！？

自分の心の中になにがなんだかわからなくなっている私を置いて五人は自己紹介をしている。

「私、高町なのはっていいいます」

「うちは八神はやて言うんよ。」

「私はアリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

順番に自己紹介を進める四人。それに慌てて私も加わる。

「改めて私はフェイト。フェイト・T・ハラオウン。よろしく桐斗」

「高町に八神、バニングス、月村。了解、覚えた。」

彼は名前の確認を済ませると荷物を持ち立ち上がる。どこに行くのかと尋ねると用事で行くところがあると言ってそのまま教室から出て行ってしまった。もう少しお話ししていたかったが彼にも都合がある。そう割り切って少し残念な感覚の自分の心を落ち着かせると横ですがこちらを見ていることに気付く。

「どうしたの？」

「フェイトちゃんもつと素直になつた方がいいよ？」

彼女の言葉に再び慌てだす。

私は別になんとも思っていないよ！と否定に否定する。すると素晴らしい笑顔で彼女は私にとってとんでもないことを言い放たれました。

「フェイトちゃんアタックしよっか」

「ええ！？すずか！？」

まさかすずかがそんなことを言うとは。

再び混乱した私はなんとも言えないモヤモヤを抱え四人に弄られながらその後の時間を過ごすことになったのだ。

「うう………四人ともヒドイよ………」

「あはは。ゴメンね？」

あの後弄られ続け心身共にやつれた私は親友四人と共に喫茶翠屋へと足を運んでいた。

喫茶翠屋はなのはの実家であり女の子の中では大変人気のお店でもあるのです。

だけど今日はいつもと違った。いや、違うというのはおかしい表現だろう。いつも以上と言った方がいいのか。お客さんの数が物凄いのだ。お店の前にまで軽く列を作っていて正面からは入れない。なのははちよつと様子を見てくると言って裏口から一人翠屋へ入っていった。

「なんなんやる？」

「今日のお客さん凄いわね……」

「凄いな……」

なのはを除く親友三人も呆気にとられている。私だってそうだ。こんなこと今まででなかったのだから。

一話『入学初日』（後書き）

更新

『一話』まともりがめちやくちだ』(前書き)

正直言ってこの作品は自己満です

『二話』まとまりがめちゃくちゃだ』

目の前にできている列。なのははいっこうに帰ってこない。仕方がないので列の最後尾に並ぶ。そして30分ほどして次は私達の番となった時。お店の中からはがでてきた。

「ごめんね皆。入って早々お店に駆り出されちゃって」

申し訳なさそうに謝るのは。

彼女の今の姿は喫茶翠屋のホールスタッフの服装だった。

なるほど、彼女がこの服装をしているのは猫の手も借りたいぐらい忙しい時に帰ってきたなのは桃子さんが捕まえたからのようだ。

納得しなのは案内の下、席へと案内される。

店内の席はすべて満席。改めて今日の喫茶翠屋はいつもと違うと思っ

た。

「にしてもなんでこないなことになってんやる？」

「さあ？」

首を傾げるはやて、すずか。私もなんでだろと考える。視界の左端ではなのはが忙しそうに接客をしている。

本当に大変そうだ。手伝ってあげたい所なのだが素人が入ってしまった

えばかり足えって足を引張ってしまう。だからだから私は心の中で応援することにした。なのは頑張れ。

『いらつしゃませ。ご注文はお決まりでしょうか？』

「あ、すみません。ほんならうちは……へっ？」

はやてが変な声を出した。はやてどうしたの？スタッフの人がどうしたの？

そう思っているとアリサとすずかもポカンとしている。

え、なに？

なにがなんだかわからないままゆっくりと振り返る。

「早く注文を言ってくれ。今、忙しいんだ。」

学校で別れた筈の桐斗がいた。

喫茶翠屋のホールスタッフの制服。いわゆるウェイターの格好をしている。

驚いた私達はなんでここにいいのか問いただす。

「バイトだ」

と答えた。翌日。

私はいつも通り親友四人と学校に登校する。あの後はお店が混んでいたこともあつて直ぐに出てしまった。

その日の夜、なのはになぜ彼がバイトをしていたのかをメールで聞いてみたら『家庭の事情』でアルバイトをしているらしい。

「桐斗まだ来てないんだ……」

誰も座っていない席をみる。本鈴まであと二、三分。そして先生が入ってくると同時にチャイムが学校中に鳴り響いた。

『出席を取るぞ。阿部……』

『はい。』

担任が順番に生徒の名前を呼んでいく。そして桐斗の名前が呼ばれた。

『霧咲。どうした霧咲はいないのか？』

「霧咲君はまだ来てません。」

なのはが担任に伝える。

なんだ入学して次の日に遅刻か？と先生が飽きれていると教室の後ろのドアが開いた。桐斗だった。

生徒の視線の集まる中、彼は先生の所までいき頭を下げ

「すみません。寝坊しました」

と謝る。

次から遅れるなよと担任は注意し、桐斗は自分の席に座った。

「桐斗寝坊したんだ？」

「ああ、本鈴の10分前まで寝ててな……」

そう言つて彼は視線を窓の外へと移す。その日の午前中は誰とも喋らないまま桐斗は過ごした。

そしてお昼。

なのは達は桐斗を昼食に誘おうと言い出した。それには私も大賛成。さっそく誘ってみた。

のだが……。

「悪い。先客がいるんだ……」

「先客？」

『桐斗!!』

桐斗の名が呼ばれる。そちらへと視線を移すと男子二人がお弁当箱を手にこちらへとやってきた。

「なんだ？その子達」

「桐斗の友達かな？」

「紹介する。神田 相馬と天津 和弥だ。」

話によると相馬と和弥と呼ばれる二人は桐斗の幼なじみらしい。小学からの付き合いで同じクラスらしいのだが互いにあんまり興味を持ってなかつたらしい。

私も今はじめて知りました。

とりあえず私達は自己紹介をする。

その後八人一緒に屋上で昼食を取るようになった。屋上の日のよく当たる場所で輪を作る。

皆で楽しく食べる昼食はとても楽しくとてもおいしくて三年前では考えられないことでした。お喋りしたりおかずを交換しながらと楽しい時間が流れる。

皆がお喋りに夢中になってるときふと横に座る桐斗のお弁当を見てみる。

「桐斗のお弁当ってそれ？」

視線の先には菓子パンが一個と缶コーヒ―。それ以外はなにもなくこれが桐斗の昼食だということがわかった。

「それだけじゃ。とても持たないよ？。ほら、私のお弁当を分けて

あげるね。」

そう言ってお弁当を差し出す。だが彼は首を横に振る。

「それはフェイトのдар？俺のことはいいから」

「ダメ。育ち盛りなんだから」

「いいから。」

「食べなさい！」

「いらない。」

「文句を言わず食べる！」

卵焼きを一つお箸で掴んでぐいと差し出す。いっこうに引こうとしない私に桐斗は諦めたようにそれを食べた。

うん、他人の好意は黙って受け取っておくものです。

卵焼きを食べる桐斗を満足気に見る私。この後も何度か彼に食べさせてからそこで周りの視線に気付いた。

「さすが天然。フェイトちゃん無意識の時の方が行動力あるなあ…

…」

「ふえ？」

はやての言葉に首を傾げる。

私変なことした？とりあえず自分がした行動を四回ほど振り替えて自分がしたことに気付き、そのままフリーズした。

「まさかあの桐斗が簡単に折れるなんてな……」

「相馬くんそれってどういうこと？」

「あいつはマジ鉄みたいに頑固で折れないんだよ。ちなみに俺は見ることがなかった。」

「そうなんだ……あ、ちょっとごめんね」

なのはは急にかかってきた携帯を手に少し離れる。少しして戻ってくると念話で私とはやてに話し掛けてきた。

『フェイトちゃん！はやてちゃん！！エイミーさんから緊急の電話！！直ぐに来てほしいって！！』

『わかった行くでフェイトちゃん！！』

『うん。わかった！』

念話を切って私達はお弁当箱を持って立ち上がり、その際にアリサとすずかにアイコンタクトを送る。私達の事情を知っている二人は頷く。

「あ、なのはちゃん達用があって早退するんだっけ？」

「うん。ごめんねえ」

「仕方ないわねえ……。ノート取っというてあげるからさっさと行きなさい！」

「ありがとうアリサ。それじゃね桐斗」

私達三人はその場を後にする。

ここから変わる。『中学生』としての私達から『管理局の魔導師』
としての私達に。

『二話』まともりがめちゃくちゃだ』（後書き）

人物紹介

【霧咲 桐斗】

・キリサキ キリト

年齢《 12才

性別《 男性

容姿《 首にかかるかかからないかの黒い髪、青い瞳のクールなイケメン。雰囲気大人っぽく中一ながら身長が高めなため高校生に見える。

性格《 物静かだが話し掛けられれば普通に話す。頑固。のはず

趣味《 なし。

詳細（現段階） 本作品の主人公。小学はフェイト達とは違う学校に通っており中学はある事情で聖祥に入学。

学校にいる時以外はほとんどバイトに出ている。自分の下にいる二人の兄弟を異常なぐらい大事にしている。キレたら一番怖い。

【霧咲 夕陽】

・キリサキ ユウヒ

年齢《 5歳

性別《 女性

容姿《 首下まである黒い髪と青い瞳。おっとりとしたかわいい容姿
性格《 冒険家でちょっと泣き虫。お兄ちゃん大好きっ子。一度言い張ると桐斗が言っつまで首を立てに振らない。見た目とは裏腹にパワフル

趣味《 冒険

詳細（現段階）霧咲兄弟の一番下。歳の割には頭が良く、兄の言い付けをちゃんと守る。冒険家で休みの日にはフラフラと出かけて帰れずに兄である桐斗の迎えを泣きながらまっている。お兄ちゃん大好きっ子で家では桐斗ともう一人の兄のお手伝いをしている。またおっとりとした容姿とは裏腹にパワフルで主な被害は一つ上の兄と桐斗の親友の神田相馬が受けている。

最近はやフェイトに貰ったレモン味のキャンディーにはまっているとか。

桐斗にはもうひとり弟がいますが詳細は後ほど

【神田 相馬】

・カンダ ソウマ

年齢《 12才

性別《 男性

容姿《 黒い髪と瞳。髪は長いとも言わず短いとも言わないぐらい。

容姿は爽やかスポーツマンジャンナーズ(?)。

性格《 喜怒哀楽がはっきりしている。女性には手を上げないが信条趣味《 じっちゃんとの囲碁(ちなみに超弱い。

詳細《 桐斗の幼なじみ。から小学一緒に桐斗が聖祥に行くというところで彼も入学。頭はいいのだが普段からあまりやる気がなく授業中は寝ている。

【天津 和弥】

・アマツ カズヤ

年齢《 12

性別《 男性

容姿《 ちよつと茶髪気味(自毛)の髪と黒い瞳で優顔。(イメージはガンダムシードのキラ・ヤマト

性格《掴み所のない性格。いつも愛想を振り撒いてる。友人を大事にしている。》

趣味《ゲーセン荒らし。》

詳細《桐斗のもうひとりの幼なじみ。彼も桐斗が聖祥に行くということが入学。》

鳴海のゲーセンで手当たり次第記録を塗り替えた伝説を持つ。

三話『ストーリー性が悪いなこれ』(前書き)

やっぱり駄文です

三話 『ストーリー性が悪いなこれ』

【ハラオウン宅】

「エイミィさん緊急の召集っていったいなんですか？」

ここはなのはの自宅の近所にある私の家。なぜここにいるのかというエイミィさんから召集がかかったからだ。

「それは……」

『私が説明します。』

エイミィさんが答えようとした時、私の義母であるリンディ・ハラオウンが部屋に入ってきた。隣にはクロノも一緒だ。

「実はつい最近この街でロストロギアの反応が確認されたの。」

ロストロギア。

過去に存在した超高度文明より流出したもので得に発達した技術や魔法の総称。危険なものが多く次元空間に影響を及ぼすものも少なくない。

過去に私が関連したP・T事件の『ジュエルシード』やはやての持つ魔導書『夜天の書』もそうだ。

小さな石ころや一冊の本が信じられないような力を秘めている。それを身をもって体験している私達はロストロギアがこの街に存在しているという現状がなによりも衝撃だった。

「『つい最近』と言ったな。『ついさっき』ではなく……。」

重たい空気の中ヴォルケンリッターの将シグナムが口を開く。

「ええ、観測したのは一昨日。妙な反応が観測されて本局で洗ってもらったの。そうしたらとんでもない代物が上がったわ。」

リンデイの顔に雲が刺す。それを見て私達も事の重要さを感じられた。

「観測された反応はロストロギア『森の雫』に酷似されていることがわかったの」

「森の雫」

説明によると反応は極めて弱く、稀にしか示さないの今回観測されたのが奇跡と言っていていらしい。

危険度はSSクラス。管理局の『無限書庫』でユーノ・スクライアが調べた文献によると荒れ果てた世界に緑を取り戻す為に造られたもので暴走した際その世界は愚か隣の世界まで巻き込み世界のバランスを崩壊させたものらしい。

「なんかいいのかわいのかかわからねえロストロギアだな。」

「やね、自然に優しいロストロギアなのはわかるんやけど」

同じくヴォルケンリッターのヴィータにはやてが頷く。

私もそう思う。

その反応にクロノが厳しい表情で言った。

「暴走した時。自然そのものが僕達人間の敵になる。更に言つと『地球』という星が敵になると言っていていい」

その言葉に私達は皆暗くなる。

自然というものが相手では私達人間は無力である。

「今度は前みたいにアルカンシエルを撃つ訳にはいかない。」

「暴走させずに確保、封印するしかないわね。本局からも人員や別部隊を送ってくるみたいよ。」

長い沈黙の中、私達は解散となった。皆が帰って自分の部屋に帰る。今回の任務は難易度の高い物に加えてなおかつ世界を賭けたもの。不安が心の底から込み上げてくる。そんなとき義母のリンディが部屋に入ってきた。

「どうしたの？暗い顔して。前言ってたキリト君にフラれちゃった？」

「ちよつ、お義母さん!？」

いきなりなにを言うんだらうか？

顔を赤くしながら義母さんを見る。義母さんは笑顔で頭を撫でながら私を励ましてくれた。

「大丈夫。フェイト達ならきつとやり遂げれるわ。私はそう信じてるしなにより貴女は私の自慢の娘なんだから。」

「お義母さん……」

お義母さんは立ち上がると私に気分転換にお散歩でもしてくれればと薦めてくれた。

私は頷くと一人家を出て適当に歩き出す。

外は既に薄暗く。空にはチラホラと星が見えた。

のんびりと過ぎていく時間。今この瞬間ではこの街にロストロギアなんて危険なものがあるなんて嘘のようだ。

こんな時間を…友達を…大切な人を守りたい。

「よし！がんばろう！！」

空を見上げながら私はしっかりと頷いた。

『フェイト。こんな場所で上を見ながら立っていると不審者に間違われるぞ』

そんな時声を掛けられた。ゆっくりと振り向くと桐斗がいた。

三話『ストーリー性が悪いなこれ』（後書き）

感想お待ちしています

四話（前書き）

またもや駄文ですがお付き合い下さい。

四話

桐斗はどこかの飲食店の制服を着ていた。またアルバイトだったの
だろう。けど、アルバイトから帰るにしては早過ぎる時間だ。

「桐斗またアルバイト？アルバイトにしては早いね。それともこれ
から？」

「いや、本当はさっきまでバイトだったんだが妹の誕生日の話しを
出したら『早く帰ってやれ』追い出された」

やれやれとため息をつく。そんな彼に苦笑しつつ私も早く帰ってあ
げるように薦めた。

年に一度の誕生日だ。夕陽たつて家族に祝ってもらいたいだろう。
それが大好きなお兄ちゃんならなおさらだ。

「早く帰ってあげなよ。夕陽が喜ぶから」

『桐斗お兄ちゃん！！』

桐斗の名前を呼ぶと同時に彼の腰に抱き着く少女。

夕陽は満面の笑みを浮かべている。

「お兄ちゃん。今日『あるばいと』は？」

「今日は休み。ゆっくりお前の誕生日をお祝いできるぞ。」

「うん！！」

夕陽の顔を見ていると本当に嬉しそうなのがわかる。

邪魔してはいけないと思って帰ろうとしたのだが

「フェイトお姉ちゃん」

背を向けた瞬間私の腰に撃ち込まれた黒い砲弾。腰骨は悲鳴を上げ肺の中にあつた空気は全て外に吐き出される。

私は声にならないうめき声をあげながらその場に崩れ落ちた。

夕陽……。後でちょっとお話ししようか？

「夕陽……。フェイトが瀕死の重症を負ったぞ？」

「勝手に人を負傷者にしないで」

腰に巻き付いた夕陽と一緒に立ち上がる。今の一撃は痛かった。なぜこの子はおっとりとした顔つきなのにこれだけパワフルなのだろう。

苦笑しながら彼女を引きはがしどうしたのか尋ねる。

「フェイトお姉ちゃんお家に遊びにきてー!!」

「無理を言つな夕陽。フェイトにも都合が「いいよね？ありがとう義母さん」」

よし。義母さんから了承を貰った。

携帯を閉じながら二人の方を見る。片や呆れ顔で片や満面の笑み。

こうして私は二人のお家にお邪魔することになった。

「家に来るのはいいがちょっとやることがある。」

そう言うと桐斗はすぐ近くにある曲がり角に向かって呼んだ。

「智、相馬、和弥……。他にも二人いるな。三秒やる今すぐ出てこい。」

「へ？」

呼ぶと同時に慌てて出てくる中学生二人と小学生ひとり…そしてなのはとはやて！？曲がり角の陰から出てきたクラスメート二人にもそうだが親友二人が現れたことにも驚いた。なにをしてるの！？

「兄さん僕は止めたんです！！けど相馬さんと和弥さんが！！」

桐斗に向かって必死に弁解している小学生。『兄さん』と彼を呼んでいる所からして彼の弟で夕陽のもうひとりのお兄さんの『智』サトル』君だろう。

「相馬、和弥……説明しろ。」

桐斗に睨まれ汗だくの相馬と和弥の説明によると夕陽の誕生日は二人とも知っていた。そこで夕陽と智だけにしておくのはかわいそうなのでそれぞれプレゼントを持って桐斗の家に行ったのだが夕陽が『お兄ちゃんもいたらいいのに』と言ったので二人は夕陽と智を連れ出したらしい。

「そうか」

「それでなんでなのはとはやてがいるの」

「にははは……ちょっと考え事をしながら散歩してたらはやてちゃんと会ってその後二人を連れてる相馬君達に会ったの」

「ウチもや」

どうやら彼女達も私と似たようないきさつでそれぞれ出会ったよう

だ。

その後私は智に自己紹介をしていざ桐斗のウチに行こうとしたのだが

「夕陽、高町、八神、フェイトは先に行ってる。智、案内頼むぞ。」

「は、はい……兄さん。」

智の頭を撫でながら私の案内を頼む。心なしか智の声が震えていたような気がしたが気にしない方がいいだろう。

「桐斗？」

「やることがある。気にせず行ってくれ。」

「お兄ちゃん早く帰ってきてね。」

「さて……貴様等覚悟はいいか？」

「ま、まで……俺はよかれと思ってだな……！」

「そうそう……！」

「人の兄弟を勝手に連れ出した罪。相馬は天界で、和弥は冥界で償え。」

「アレ？なにか聞こえなかった？」

私は来た道を振り返る。なにか変な声が聞こえたような気がしたからだ。けどなのはもはやても夕陽も聞こえてないらしい。まあ、いいや。と私は桐斗の家へ再び歩きだした。

「智君の家ここなんか。」

「はい。僕達三人には無駄に広い家なんですけどね。」

智の案内により。彼ら三人の家に着いた。ちよつと大きい一戸建て。そして驚いたのが私の家のすぐ傍だということ。桐斗ご近所さんだったんだ……。

「三人つて……。ご両親は？」

「お父さんとお母さんもいないよ。智お兄ちゃんと桐斗お兄ちゃんと夕陽の三人暮らしなの。」

なのはの質問に明るい笑顔で振る舞う夕陽。

こんなに小さいのになんて強いんだろう。そう思った。

私もそうだったのだが彼女や智もまだ両親に甘えたい年頃だというのに二人の中ではこれが当たり前になっている。

なのはとはやてに視線を送り彼女達と一緒に笑顔で言った。

「それじゃ。今年は盛大にお誕生日を祝おっか。」

「ウチの家族も連れてきて沢山の人で祝うんや。ご馳走も沢山作つたるで。」

「今日の夕陽の誕生日はもちろん。智の誕生日もね?」

「ふう……………」

相馬と和弥の二人の処刑を終えた俺、『霧咲 桐斗』は自分の家に向かっている途中だ。

相馬は頭を地につけて俺に引きずられたまに『じいちゃん。そっちに行ったらダメだ』とか唸っている。

お前が帰ってきた方がいいと思っただがコイツは簡単には死なないので放っておく。

和弥はというと何事もなかったかのように俺の隣を歩いている。

「近頃はどうか？」

「ん？俺はまた新しくできたゲームセンターを潰してきた。高橋名人でもあの記録を塗り替えるのは難しいよ」

コイツはこの町と隣町のゲームセンターの記録保持者でゲーセンというゲーセンの記録を潰して回っている。

「時間ができたらまた三人で行こうか？パンチングマシンは桐斗が一番だからさ」

「時間ができたらな……………。であっちはどうか？」

「その話しはまた今度。ほら着いたよ。」

目の前にある俺の家の門。いつの間にか着いていたようだ。

さて、家に入ろうと玄関のドアを開けたのだが下を埋め尽くす靴の数々。先に行った五人より更に多い数の靴がそこにはあった。

「なあ、桐斗……。」

「なんだ？」

「靴の数明らかに多いよな？」

「多いな。」

「どうする？」

「まずは様子を見る。」

三途の川から戻ってきた相馬。俺達は家上がりリビングを目指す。奥からは女の子達の和気あいあいな笑い声が聞こえる。

なにしてんだと頭痛のする額に手を当てながらリビングのドアを開いた。

「……………」

頭痛が更に痛くなったような気がした。

リビングには夕陽、智、高町、八神、フェイトの他に女6人と男1人更には犬までいやがった。

こうなると怒る気を通り越して呆れてしまう。とりあえずフェイトを呼んで事情を聞くことにした。

「ごめんね。迷惑だとは思ってたんだけどせっかくのお誕生日だし賑やかな方がいいと思ったから……………」

申し訳なさそうに俯くフェイト。夕陽の為なら仕方ない。彼女もよかれと思ってやったのだから。

俺はため息を一回ついて彼女の頭に手を置く。

「気にするな。夕陽が喜んでくれたからむしる感謝してる。ただ、一言俺に知らせを入れて欲しかったがな」

「うん。アレ？桐斗って携帯もってるの？」

「ない」

「連絡できないじゃない」

俺のつまらない冗談に笑うフェイト。俺もうつすらと笑う。その後は八神の親戚という人達（＋一匹）、フェイトの義母のリンディさんと義兄のクロノ、エイミイさんと順番に紹介を受け俺達兄弟と相馬、和弥はそれを返した。

他にも皆で夕陽を祝って八神の手料理に舌鼓をうつ。そんな中ふと夕陽の様子を見る。智になにやらいろんなモノを混ぜたオリジナルドリンクを飲ませようとしている。

「無理です！そんなもの飲めません！！」

「夕陽ちゃんさすがにそれは飲めないぞ？色が青だし」

「それじゃ相馬くん飲んで！！」

「グブ！？」

夕陽により相馬の口に叩き込まれたグラス。中にあった青い液体は行く場がなく必然的に喉の置くえと流れ込んでいく。

我が妹ながらおっとりとした顔して行動はパワフル。ギャップが凄

まじい妹だと思う。そしてあわれ相馬。ゆっくりとスローモーションのように倒れる彼、普通なら慌てるのだが俺は慌てない。アイツはホントにしぶといのだ。実際に倒れた時慌てたのは高町だけで彼女がアイツを介抱して後の皆はまた新しいドリンクを作って今度は誰に飲ませようかと話している。

その時の夕陽の顔はホントに楽しそうだ。

俺は一言

よかったな夕陽。

そう心の中で呟いた。

四話（後書き）

感想お待ちしています

五話（前書き）

自己満街道まっしぐらです

五話

楽しそうにおしゃべりする夕陽達そこにフェイトがお皿を持って話しかけた。

「ねえ夕陽。ちょっとお菓子作ってみたんだ。食べてみて」

「ありがとう！フェイトおね」

夕陽の笑い声が消えた。

なながあつたのかそちらの方を見ると固まる夕陽。笑顔のフェイト。固まるギャラリィ。笑顔のフェイト。引き攣る夕陽。紫色のなにか。笑顔のフェイト

とりあえずフェイト……それはなんだ？

「フェイトお姉ちゃん……それなに？」

「ロールケーキだよ？」

なるほどロールケーキか……。

「桐斗、最近のロールケーキはあんなのなんだね」

「喫茶翠屋でバイトしてたが洋菓子であんなのは知らん」

和弥の問いを即答で切る。夕陽はというとフォークにささっている紫色のモノをまじ

「はい。あ〜ん」

と言ってきた我が妹。

その光景を微笑ましそうに見ているフェイト。

実際は違う。夕陽は逃走経路に俺を使ったのだ。

俺はため息を吐くとそれを口に入れた。

高町と八神達が驚いたようにざわめく。フェイトの義兄のクロノが恐る恐る聞いてきた。

「どうだ？」

「フェイト。」

「なに？」

「紫芋を使うのはいいが砂糖と塩を間違えるな。」

「フェイトお姉ちゃん帰っちゃだー!!」

楽しかった時間が過ぎ私達はとうとう帰る時間になった。
なったのだが夕陽が私にしがみついて離そうとしないのだ。

困ったな。

苦笑しながら親友二人の顔を見てる。彼女達も苦笑しながらどうしようか考えてるようだった。

「フエイトちゃん気に入られちゃったね」

「美人で優しいお姉ちゃんやしねえ」「ちよつと二人とも……」

いっこうに離そうとしない夕陽。私の腰に顔を埋めがちりとしがみついている。

「ダメですよ夕陽。我が儘を言っでは」

「やつ!!」

智が言っても全く言うことを聞いてくれない。さてどうしようかと
思っていると後片付けをしていた桐斗がやってきた。

「どうした?」

「兄さんも夕陽に言ってあげてください!!」

智から事情を聞き頷くと彼は夕陽の視線までしゃがんで彼女の頭を
なでる。

それに対して私の腰に埋めていた顔を少しだけ見せてくれた。
それを確認すると真剣な眼差して桐斗は問う。

「霧咲家家訓その四」

「う……。『私利私欲により他人に迷惑をかけるな』」

俯きながら夕陽は私を離してくれた。そんな彼女を見て桐斗はうつすらと笑いなが頭をなで一言『えらいぞ』と言った。

「霧咲君すごいなあ」

「アイツは小さい時から二人の世話をしてる。両親のいない二人の親として今までやってきたんだからな。これくらい当然だ」

はやて同様私もそう思った。あれだけ嫌がっている小さな子に言い聞かせるのはとても難しい。

素直に言うことを聞くということとはそれだけその人物を信頼し慕っているということだ。しょんぼりとしている夕陽。私は彼女の頭を撫でて言っであげた。

「また遊びに来るから。それまでお利口にしててね夕陽。」

「うん！」

目の端に涙を浮かべながら笑顔で頷く彼女。

その時義母のリンデイさんが笑顔で私の背中を押して桐斗達兄弟の前に突き出した。

「もうすっかりお姉ちゃんねえ。夕陽ちゃんそんなに寂しいならフエイトを泊めさせてくれないかしら？」

「母さん!!」

いきなりの発言にクロノが反対だと言わんばかりに抗議の声を上げ

る。だが、それはエイミイさんより放たれた砲弾のごとき拳を腹に叩き込まれ却下される。

「クロノ君ちよつと黙ってようか？」

「あの姉ちゃんこええ……………」

エイミイにより軽く場を恐怖に包み込まれた中。夕陽はものすごく必死にお願いしている。

「桐斗お兄ちゃんお願い！！！」

「……………」

やっぱりダメなのだろう。他の家の娘を泊まらせるのだ相手方の親が良といっても安易に泊まらせるわけにはいかない。

桐斗はちらつと私を見た。

私の反応をうかがっているようだ。ちなみに私はちよつと期待していたりしてます。

少し考えた後彼はため息を吐いてわかったと言った。それを聞いて喜ぶ夕陽と私。義母さんからは念話で頑張つてとエールを受けエイミイさんとアルフは他界寸前のクロノを引きずる。

「なあ桐斗。俺達も泊まっていいいか？」

「俺達の両親も出かけちゃって家がひまなんだよね」

「……………」

うわぁ…………、桐斗もの凄く嫌な顔をしています。あんまり感情を表に

出さない桐斗がものすごく嫌な顔をしています。もしかして二人になれないのが嫌だとか……。
なんだかんだで避外妄想を始めた私だった

「アイツ等がいると五月蠅いんだよ……」

「でも大勢の方が楽しいよ？」

今、桐斗の家のリビングは賑わっていた。桐斗に智、夕陽、相馬に和弥。
そして

「霧咲君も一緒にやろうよ」

「そや。一人だけ仲間外れは寂しいやろ？」

なのはとはやてもいる。彼女達は二人が桐斗の家に泊まると言い出した時に便乗したのだ。
なのはの時は兄の恭也さんがはやての時はシグナムが猛反対したがそれぞれ抑えられて今に至る。ちなみに今私達はなのはが家から持ってきたトランプをしている。

「はい。上がりー!」

「私も上がり〜」

「俺も……」

「僕も上がりです。」

「うちもや」

「俺も上がりつと。相馬弱いよね」

さつきから相馬がずっと負けています。これで八回連続。物凄く弱いです。夕陽と智、桐斗は頭がいいらしく一回も負けません。

「だああああ!」

「相馬は頭がいいのに弱いよね。」

「不思議だな」

「そうなの?」

後で聞いた話ですが相馬と和弥、霧咲兄弟は結構優等生のようで相馬と和弥は普段はあんまりやる気がないらしいです。まあ、そんなことはいいとして八回連続負けの相馬君には青い悪夢が再びやってきました。

「はい。相馬くん」

夕陽の手から笑顔で渡される青い液体が入ったグラス。そう、お誕

生日会で出たあのドリンクです。それを見た瞬間相馬の顔がどんどん青くなっていき『いやだいやだ』と首を振っています。青い飲み物なんて自然界にあるのでしょうか？飲みたくはないですが。

「嫌だ！！それを飲んだ時じいちゃんが見えたんだ！！！」

「いや、相馬のじいちゃん生きてるじゃん」

その後夕陽、はやて、和弥に無理矢理飲まされて再びおじいちゃんと感動的な再会を果たした相馬は今なのはに膝枕されている。

「相馬君大丈夫？」

「大丈夫…。わりい高町…ちょっと寝るわ」

「なのはでいいよ。おやすみ相馬君」

「わかった…おやすみなのは…」

そのまま相馬は小さな寝息をたてて寝てしまった。よほどあのドリンクの威力が凄いのだろう。ところで二人ともいい雰囲気だったね。

「なのはちゃん相馬君とええ感じやなあ」

「は、はやてちゃん！」

かなり慌てているがちょっと嬉しそうなのは。それを羨ましそうに見ている私。

「ええなあ。私もいい人見つげんと。どや？和弥君うちと」

「いいよ？」

はやての冗談に即答で返した和弥。この返事は予想外だったようで呆けた声を出した彼女は口をパクパクさせながら固まった。

「はは、冗談だよ。はやてもいやだろ？」

「え、うちは……」

なんでしょう目の前で起こっている現象は。はやて真っ赤になつてますね。私から見ても桐斗も相馬も和弥もカツコイイですし仕方がないといえば仕方がないですね。

「フエイトお姉ちゃん。目の前がピンク色だよ？」

夕陽にもそう見えますか。

そういえば時間ももう遅いですし良い子の教育上良くないので二人を寝かせることにしましょう。

「夕陽。もう遅いから寝よっか？」

「は〜い」

「智。お前もだ」

私達に言われ二人は立ち上がる。その際夕陽が私の袖を掴んできた。

「一緒に寝よ？」

「うん。一緒に寝よう」

笑顔で頷く。夕陽は嬉しそうに私を自分の部屋へと連れていった。

俺は二人が行ったのを見届けると高町と八神に言った。

「二人は廊下の先にある和室を使ってくれ布団は押し入れの中にある。」

「うん。それよりゴメンねいきなり。」

「気にするな。夕陽の誕生日に来てくれた礼とでも思ってくれ」

フェイトを含め高町と八神には感謝している。夕陽や際の誕生日には全くついてあげられなかった。

おそらく初めてだこれだけたくさんの人に祝ってもらえたのは。図々しいかもしれないが今度は智の誕生日にも来てほしい。きっと智は喜ぶだろう。指示した部屋へ向かう二人を見送る。

部屋の戸が閉まる音を確認するとため息をつきリビングに残っている二人に話しかけた。

「今、そっちではどうなってる？」

この時の俺の声はとても冷たかった。

それは例えるなら冷え切った鉄のように冷たく鋭い剣のように鋭く。

五話（後書き）

感想お待ちしています

六話（前書き）

ちよっと頑張りました。

六話

「フェイトお姉ちゃん今日はありがとう。」

私は夕陽と一緒に彼女の部屋で横になっている。

女の子の部屋とは思えない殺風景な部屋。人形など一つもなく生活に必要最低限なものしかない。

『寂しい』それがこの部屋の第一印象だった。

私が九歳の頃も同じような部屋で生活していた。甘えたい。美味しいものを食べたい。遊びたい。夕陽の年代はそういった年代だ。夕陽は私達以上に早くから大人にならなければならなかったのだ。

そう思えばこの子はホントに強いと思う。

「夕陽。寂しくない？」

この言葉にほんの一瞬だけ寂しそうな顔を見せたが次の瞬間には笑顔を見せて私に言った。

「桐斗お兄ちゃんと智お兄ちゃんがいるから寂しくないよ」

そして彼女は私に抱き着くなり胸に顔を埋める。そして小さい声で呟く。

「桐斗お兄ちゃんは毎日アルバイトで忙しいし智お兄ちゃんはお家のお仕事をやってるから夕陽は寂しいって言ったらだめなの」

それを聞いて私は彼女を優しく抱きしめる。

「今は甘えてもいいよ？」

「ありがとう……。」

彼女の声がゆっくりと小さくなっていくどうやら眠たくなってきたらしい。そして眠りに着く瞬間。

「お姉ちゃんがホントのお姉ちゃんだったらいいのに……。」

そう呟いて夕陽は眠りに落ちた。

私は彼女の頭を優しくなでる。

大丈夫、これから私は夕陽のお姉ちゃんでいてあげるから。

だからいつも笑っていよ？

そして私は神様に祈る。

どうかこの子の平穏がずっと続きますように

私【リンディ・ハラウン】は今自宅でエイミイとクロノと一緒に

モニターの前にいる。

モニターに映っているのは一人の男性。長い髪と決して崩さない愛想笑いが印象的で【いい人そう】が私達三人の第一印象。

「今回の任務のご協力感謝します。『エグゼナ・エリオス』提督。」

【エグゼナ・エリオス】

第44艦隊総隊長にして時空管理局本局でも腕利きの魔導師。私も何度か彼の隊と共に任務をこなした事があるが正直圧巻の極みである。

本局の第44部隊は別名【魔導騎士の座】と呼ばれておりそこに座るミッド、ベルカの魔導師は総勢12名。一人、一人がストライカークラスのエースであり最低が援護型魔導師の空戦AAランク、最高で空戦オーバーSランク。

彼等で要塞攻略戦を繰り広げたら3時間で陥落という偉業の記録もあるほどだ。

またこの12人という人数が戦闘員の数であり後は魔力を持たないが腕利きの通信士、デバイスマイスター、操舵士等である。この事から判るように第44部隊は少数精鋭、本局のエリート部隊なのだ。そして彼、エグゼナ・エリオスはその魔導騎士の筆頭である。

「気にしないでください。私としても高名なハラオウン提督と一緒に緒できることを光栄に思っていますので」

「またまた。相変わらずお上手ですね」

彼の部隊は今次元航行艦で待機しているらしい。明日から自分を含めた数人を鳴海市に下ろして探索を開始するとのことだ。

「提督自ら探索なさるのですか!？」

クロノが驚いたように見を乗り出す。それにエグゼナは笑顔で頷く。我が息子が驚くのも無理ない。私や彼のような部隊のトップはそう簡単に前線に出る事はない。

何故なら指揮する人間がいなければ部隊は機能しないからである。

「相変わらずですわね。エリオス」

苦笑混じりに画面の向こうの彼の笑い掛ける。そう彼はいつもこうなのだ。少しでも危険度が高くなると指揮を副官に任せて自分も前線へと赴く。

彼曰く。

「そう言わないでください。クロノ君、命令するだけなら誰でもできます。しかしそれでは部下は心から信頼してくれないと私は考えているのです。ですから私は自分から任務に参加するようにしているのですよ。それに使える戦力は使う。後で取り返しがつかなくなつてからじゃ遅いんです」

エグゼナ・エリオスは時空管理局では指折りの提督として部下からはもちろん本局からも多大な信頼を得ている。

息子はその理由を少しかいま見たようだ。

「それより。面倒なことが起こりました」

この言葉に私達は視線を彼に向ける。

面倒な事? 愛想笑いが少しだけ曇つたのを見逃さなかった私は直ぐに何事かと尋ねた。

「何処から漏れたのか。【狩人】が『森の雫』を狙ってそちらの世界に来ているという情報を得ました」

【狩人】

ロストログアを狙って次元をまたにかける大型の次元犯罪者集団。個々は大したことはないものの奴らの組織としてのシステムは目を見張るモノがあり管理局は何度もロストログアを強奪されている。そのため本局では奴らの危険度をSクラスと認定。今まで奪われたモノを含めての奪還と組織の鎮圧の為に目下捜索中。

「『狩人』か……面倒だな」

クロノが呟く。

確かに現段階で『狩人』の介入は問題だ。ただでさえ探索に困難なロストログアだ。もし奴らの手に渡ったらこちらには打つ手がなくなってしまう。

そうなれば一刻も早く『森の雫』を見つけ出し封印しなければならぬ。

「貴重な情報のご提供ありがとうございます。こちらからもなにか分かったら連絡させてもらいますわ」

「お力になれてなによりです。あ、そうそう。」

彼は何かを思い出したらしく何か作業をしている。少しすると何かのデータがこちらに届いた。

「私の隊からのプレゼントです。こちらでは周りが大人ばかりで彼らがかわいそうなのでよかったですらそちらで使ってあげてください。」

そう言って通信は切れた。

エイミーが首を傾げながらなんだろうと送られてきたデータのファイルを開く。

そしてモニターが開かれた時私達三人は驚きの声を上げた。

窓から差し込む陽光。暖かな光がカーテンの隙間から私の顔を照らす。

少しだけ重い瞼をさすりながらゆっくりと身体を起こして私、フェイト・T・ハラオウンは起床した。

ここは霧咲家にある夕陽の部屋。昨日彼女のお誕生日会をしてそのまま泊まったのだ。

必要最低限のモノしかない彼女の部屋。その片隅にあるなんの飾り気のない時計に目を向ける。

「6時……。」

起床にはまだ少しだけ早い時間だ。私が目覚めたことにより夕陽を起こしてしまわないかと思って隣で寝ている夕陽に視線を向ける。

「……………」

寝ている……はずなのだが。そこはもぬけの殻、しかも今朝は少し冷えるらしく私に暖かい毛布が掛けられていることに気づいた。

どうやら夕陽が掛けてくれたらしい。更に御丁寧に小さい机の上にウサギちゃんの絵が描かれた肩掛けが置かれておりメモで『寒いから使ってね』と書かれていた。

彼女は本当に5歳なのだろうかと思ってしまう所なのだが、それは彼女に対してとても失礼なので素直に用意された肩掛けを羽織ると部屋を出た。

ちなみに夕陽の部屋は2階。子供三人で住むには本当に広い家だ。もう少し小さなアパートに住めば経費が安くて済むのにと思ったのだが智曰く『両親の数少ない遺産ですから』と言われた。

両親の遺産か……。

私には今はいない母がいた。私は造られた存在で今亡き母の遺産といえは私自信。

形は違えど亡き親の遺産：『形見』といえは同じようなもので彼ら兄弟の気持ちは良くわかる。

そんなことを考えていると下から賑やかな声と共に美味しそうな香りがしてきた。この香りからしてお味噌汁と焼き魚。そしてこの明るい声は智、夕陽、はやたと相馬に和弥だろう。

賑やかな声達のなかに含まれない聞こえない声。なのは朝があまり強くないし桐斗にいたってはこの前寝坊したと言っていたのでまだ寝ているのだろうか？二人の声が聴こえない。

そう思いながらも階段を下って廊下を歩きリビングのドアを開く。リビングには台所で料理をしているはやたとその手伝いをしている智。ソファーに座り楽しそうに話している相馬と和弥。寝ぼけているのはがいて……。

「あ、お姉ちゃんおはよう！！」

油断してました。

放たれた本日一発目の【黒い砲弾】。

その砲弾は運動エネルギーをすべてダメージに変えて私のお腹に叩き込まれた。

肋骨は悲鳴をあげ頭は鳩尾に入り左肩は肝臓『リバー』を捕らえる。綺麗にくの字に曲がった私は大笑いする相馬と和弥の笑い声に送られて夕陽と共に再びリビングから退室するのであった。

夕陽……。お姉ちゃんと本当にお話する？

「おはようみんな」

何事もなかったように笑顔で挨拶する。

リビングには先程のような相馬と和弥の笑い声は響いていない。

代わりに庭から唸り声が聴こえないこともないですがここは『日本』

朝が好きな幽霊もいるはずです。

ところで夕陽。何故そんなに怯えているのですか？お姉ちゃんはいつも優しいですよ？さっきのだって【お話し】で済ませてあげたでしよ？

「おはようフェイトちゃん朝っぱらからなんやけどいきなりシユールなもん見せんといってくれへんかな？」

台所からお盆に乗せた朝食を運ぶはやと智。

失礼な。これは教育です。夕陽がちゃんと育って貰う為の教育なのですよ。ところで智、なんで顔が引き攣っているのかな？

「フェイトちゃん笑顔が怖いよ。夕陽ちゃんも怯えてるし。」

なのはには負けませよ。

「そんなことないよね夕陽？」

「ハイ！オネエチャン！！」

ほらね。

「はいはい。そんなことより朝ごはんにするで 夕陽ちゃんも手伝つてな」

「はい。はやてさん！！」

猛ダッシュで台所へと走る夕陽。そういえば夕陽もエプロンをしている。なんの絵柄もない緑のエプロン。

「夕陽もお料理するのかな？」

「あの歳では信じらんねえだろうが夕陽を含めてこの家の人間は全員料理上手だぞ？」

私の疑問に【黄泉帰り】してきたであろう相馬が答えた。彼の後ろの方では和弥が庭で柔軟体操をしている。

「しかし、姫の砲弾は相変わらずえげつない威力だな。フェイトの身体が宙に浮いてたぞ？」

姫とは夕陽のことだろう。確かにアレは痛かった。身体の芯までダメージが貫通して受けた瞬間は正直生きた心地がしない。

「姫も姫だが桐斗も桐斗だな。アイツあの砲弾喰らってびくともしねえんだからよ」

それは凄い。流石お兄ちゃんというべきか。アレを受けて平然としているのか。

そう思っていると和弥が戻ってきて興味深い話をしてくれた。

「そういえば桐斗って小学校の頃『小皇帝』なんてよばれてたっけ？」

「『小皇帝』？なんなのそれって？」

首を傾げるなのは私。それに対してはやたと智が答えた。

「小皇帝って中国の子供に出来やすい性格の総称ちゃうん？」

「確か一人っ子政策の影響でできるものですよね？学校でちょっと聞いたことがあります。兄さんが『小皇帝』なんですか？」

智……博識だね。

感心する私を余所に相馬が苦笑しながら言った。

「まあ、そつちの意味もあるが。桐斗に付けられたもんとは違うな。」

「

「桐斗は小学校の時結構モテてね。それを根に持った同年代や上級生が桐斗にケンカ売ってきたんだよ」

「いわいるひがみってやつだな」

「相馬君達は？」

「「返り討ち」」

揃えて答える二人になのはは苦笑する。

この答えに桐斗も同じだったのだろうと思って言ったのだが違った。桐斗は殴られても蹴られても倒れず直立不動を貫いていたと言う。それに見兼ねて二人が助太刀に入ろうか？と言ったそうなのだが彼は断固として断ったそうだ。

「アイツ。『こつちも手を出したら負けだ。相手にも妹や弟にも迷惑がかかる』って言ったんだよ。」

「ホント出来た兄貴だよ。自分からは一度も手を出してないんだから。」

凄いと思った。自分よりも他人、自分の兄弟を優先するのだから。

私には無理だ。でも彼はそれをやってのける。

本当に彼は優しい。

そう私は思った。

「それで『小皇帝』なんてあだ名が付いたんやね」

「いや、話しはこれで終わりじゃないんだけどな……………」

なんか歯切れの悪い返事と共に相馬は玄関の方を親指で指す。それを見た和弥が笑顔で夕陽の頭を撫でて言った。

「兄上がお帰りになりましたよ姫様」

それと同時に夕陽は玄関へと走っていきその後を智が追いかけていく。

お帰りになった？桐斗はどこかに出掛けていたのだろうか？

「桐斗君寝てたんとちゃうの？」

「桐斗は毎朝牛乳と新聞配達のアルバイトしてるんだよ。」

「あ、さっき話したことはアイツには秘密な？」

相馬に口止めされ少しすると玄関の方が騒がしくなった。夕陽が桐斗の手を引きながら笑っているのだろう。

そしてリビングのドアが開き二人を連れだ桐斗が入ってきた。

ジャージ姿の彼。小さい頃から毎日こなしているのだろうか。

「おはよう桐斗。朝の配達の仕事してたんだ。じゃあこの間言っていた寝坊は嘘なのかな？」

「表面上の言い訳だ。バレたら強制的にやめされられかねないからな。」

席に着く桐斗になのは達がそれぞれ挨拶をし彼もそれに返す。智と夕陽は桐斗の分の朝食を彼の元へ持って行っている。

そんな光景を見ているとなんとなく彼の身体が心配になってきた。毎日学校が終わったらアルバイト。朝、誰よりも早く起きてアルバイト。いくら肉体や精神が強くて遅かれ早かれガタがきてしまう。そう思ったからだ。

「桐斗。無理したら駄目だよ？桐斗が身体を壊したら意味がないんだから……」

「大丈夫だ。フェイトが思っているほど俺はやわじゃない。………それより」

一番最初に朝食に手を付けている桐斗が時計を指差して言った。

「お前ら帰らなくていいのか？」

「……え？」

なのはとはやてを含め私達三人が呆けたこえを揃えて時計を見る。

時刻【7:20】

ヤバい。かなりヤバいです。女の子の身仕度には時間がかかるのです。私となのはは自宅が近いのでまだいいですがはやては更にヤバいです。

「遅刻しちゃうー!!」

「和弥君なんで教えてくれんかったん!？」

「いや〜。あまりにこの空間に溶け込んでいたものだから」

慌てて朝食を食べる私達三人。夕陽は笑いながら、智は苦笑しながら私達を見ている。

ところでなんで相馬と和弥はそんなにのんびりしているの？

「いや、俺達は荷物持ってきてるし」

「基本だろ？」

「相馬君（和弥君）のバカアアア！！」

ぎゃあぎゃああと騒がしくなった朝食。せつかく作ってくれた夕陽と智には悪いけど私も時間が厳しいので食べるペースを早める。

そんな食事風景を見ていた桐斗はため息をつくと相馬と和弥の肩を叩き二人になのはとはやてを送るように言った。

「お前達たしか自転車だったな。二人を乗せてけ。得に和弥は大至急でだ」

「しゃあねえな」

「りよ〜かい」

二人は別の部屋で着替えなのはとはやてをそれぞれ自転車の荷台に乗せて彼女達の家へと行った。

私も早く家に帰ろうと玄関にでた所をいつの間にか制服に着替えた桐斗に呼び止められる。

「お前は俺が送る。早くでるぞ。夕陽、智すぐに戻る」

「いってらっしゃいお兄ちゃん。お姉ちゃん」

「気をつけてくださいね」

二人に送られて私は桐斗の自転車の荷台に乗って出発した。自転車に乗っている時すぐそこにあつた彼の背中はとても大きくて温かかった。

そういえば夕陽の私に対する呼び方が【フェイトお姉ちゃん】から【お姉ちゃん】に変わっていた。変わっていないようで変わっているこの呼び方。そのことに思わず笑みがこぼれる私だった。

「どつした？うれしそうだがなにかあつたのか？」

「うん。ちょっとね」

六話（後書き）

感想お待ちしています。

りあるおにじっけはも少しお待ちください。

七話（前書き）

駄文です

七話

皆さんおはようございます。

霧咲家次男『霧咲 智』です。

兄さん達が家を出てちょうど5分ぐらいですか。僕と妹の夕陽は今朝食を終えて後片付けをしています。

お皿洗いは僕の担当でその片付けは夕陽の担当。

家では兄弟それぞれがいろんなことをその時で担当しているんです。あ、兄さんももちろん料理やお皿洗いをしますよ？朝は基本的に僕達が担当していますけどね。

「お兄ちゃん。お弁当できたよ」

おっと、夕陽のお皿の片付けが終わっていつの間にか今日のお弁当の準備にかかっていたようです。

彼女に呼ばれるままりビングに向かうとテーブルの上には小さなお弁当箱が二つ。

片方は緑色の布に包まれ片や灰色の布。

これは僕達のお弁当。

本当は兄さんのお弁当も作りたいのですが。兄さんが意地を張って『俺はいらぬ』と言うものですから作れません。

とは言えこのお弁当はほぼ全部夕陽の手作り。彼女の秀才ぶりには兄である僕も驚かされます。

まだ5歳だというのにこの天才少女ときたらホント自分に自信をなくしちゃいますよ。

軽く苦笑いを浮かべながら灰色の布のお弁当を手に取りカバンしま

う。

この時僕はため息をつきながらほぼ毎日のように彼女に言います。

「夕陽。また今日も探検に出る気ですね？」

「エへへ。わかった？」

そりゃあわかりますよ。ご自分のお弁当を作っているのですから。どこからそんな影響を受けたのか夕陽は冒険家でしょっちゅう歩き回っています。外は危険なんですから兄さんももう少しこの子の冒険魂にストップをかけてくれたらいいのですが。

「僕が言っても殆ど聞いてくれないのはわかっているのですが。いいですか？探検に出るのは兄さんも咎めていないので僕も言いません。ですがこれだけは気をつけてください。『遠くに行かない』霧咲家家訓その2です」

「はい。『他人からの、得に身内からの忠告には注意すべし』だよ。ね。」

その返事に笑顔で頷く。ちょうどその時家の前からフェイトさんの声が聴こえてきました。

『智！バスが来たよ！！』

もうこんな時間ですか。

慌てて荷物を持ち家を飛び出す。家の前ではフェイトさんが兄さんの自転車の荷台に座っていました。

「フェイトさん教えて下さってありがとうございます。それでは兄さん、夕陽行ってきますね。」

「ああ、夕陽もいい子だな。霧咲家家訓その1」

「はい。』やりたいことはやるべきことを終わらせてから』。お洗濯とかちゃんとやっておくね。いつてらっしやい。桐斗お兄ちゃん、智お兄ちゃん、お姉ちゃん」

元気よく返事する夕陽と僕の頭を撫で僕はバスに、兄さんはフェイトさんと一緒に学校へ行った。

思ったのですが。いつの間にか夕陽のフェイトさんに対する呼び方がちよつと変わってましたね。

僕もフェイト姉さんって呼んだ方が良いのでしょうか？

いや、勝手に呼んではフェイトさんに失礼ですね。なんてことを考えながら僕はバスに揺られながら学校へと登校するのであった。

「ふう……………」

やっと午前中の授業が終わりました。いつも思うのですがこの学校レベルが高いです。

中学から習いそうな問題を小学三年からするんですからエリート学校っていうのは伊達じゃありませんね。

僕が通うのは兄さんと同じ聖祥学園系列の『私立聖祥大学付属小学

校』小学校から大学までエスカレーターで進む学校なのですがここにいる学生は皆それなりの学力を必要とし親御さんもそれなりの学費を必要とします。

最初は別にわざわざこんなお金のかかる学校に行かなくてもいいと言ったのですが亡くなった父さんと母さんの遺言らしく僕達三人にはいい学校に行けとのことで遺産の七割が学費に当てられています。おっと復習と次の授業の予習をしないと……。

お昼なのに机に張り付いて予習復習にペンを走らせている。がり勉強なんて言われても仕方ないですが。やっておいて損はありませんから。

簡単だけでも進めておかないと……。

「智くん」「」

来ましたよ……。

机から顔を上げるとそこには同じ顔の女の子が二人。金髪のショートカットが印象的なこの子達は僕と同じクラスの女の子で名前を伊集院 恵那 と 恵美。

このことからお分かりの通り彼女達は双子。

僕が三年に上がるちよっと前に転校してきた子達です。同じ学年ではかわいいと評判なのですが。何故か僕の勉強の邪魔ばかりする子達です。

「なにかなぐ？ものスツゴク嫌な顔してるんだけど？」

「こんなにかわいい子が声を掛けてるのに？」

自分で言いますか……。

ため息をつきながらペンを置き二人を見上げる。

「それでなんの御用ですか？用がないのでしたら勉強したいのですが……。」

こんなこと言っても結局無駄なんでしょうけど。

「うわっ、がり勉!！」

「そんなんじゃモテないよ？」

余計なお世話です。

「モテなくて結構。別に自分がモテるなんて思っていないですし、興味ありませんから。それに今の僕にはこっちの方が大事です。」

ただでさえレベルの高いこの学校でやっていく為には一部の油断もできません。

というより恵那さんだきつかないでくださいよ。

「うわ、流石にここまで鈍感だと自信なくすわ……。」

「そんなことよりお昼食べにいかない？」

「……今の話聞いてました？っていうかなんで人を引きずっているのでしょうか？」

人の話しを無視して僕を連行もといドナドナしていく二人。恵那さんの手には僕のお弁当が握られている。

「ちよ、離してくださいよ!！」

「せつかく誘ってあげてるんだから来なさいよ!！」

はあ……。今日はなんだか嫌な予感してなりません。仕方ない開き直ることにしましょう。せっかく誘って下さったお二人にも悪いですすね。霧咲家家訓その4です。

「わかりました。わかりましたから。その手を離してください。」
そう言うと二人は手を離す。

「それではお二人のお言葉に甘えさせていただき今日のお昼はご一緒」

最後まで言い終わる瞬間僕は言葉を止めた。背筋に冷たい汗が流れる。

「すみません。忘れ物をしたのでお二人は先に行っていてください。」

そう言っ僕は返事を待たないまま踵を返して走りだす。

後ろの方で二人がなにかをいっていたような気がしましたが僕は彼女達に構わず走り去った。

「」

わたし霧咲夕陽は今鳴海市海浜公園にいます。

お兄ちゃん達が学校へ行った後、お掃除と洗濯をやってしまっ

こに来ました。

今日はお天気がいいので気分的に探検じゃなくてピクニック。この公園には前に探検に来て帰れなくなった場所の一つです。

道は桐斗お兄ちゃんと一緒に帰った時に覚えたのもう迷いません。気持ちはいい日差しの元海が一望できるベンチに座って持ってきたお弁当を取り出す。ちなみにもうお昼でお腹もすいてきたのでわたしはお食事タイム。

お弁当の中身はというと今日はやてお姉ちゃんに教えてもらったロールケーキとミニハンバーグ、タコさんウインナーにデザートにちゃんと作り直したお姉ちゃんの紫芋のロールケーキ。フフフ、実はこれロールケーキ以外みんなわたしの手作りなのです。

ロールケーキは昨日、桐斗お兄ちゃんがお姉ちゃんに教えると同時に作り直したものを。

さすがお兄ちゃん
はむはむ と軽快にお弁当をやつつけてわたしはベンチから立ち上がり林の方を見る。

木漏れ日が光りのカーテンとなったあの空間にわたしは今日は抑えていたはずの好奇心がワナワナと疼きだす。

「うん。今日はピクニックのつもりだったけどこのまま探検しよう
と」

毎回後になつて帰れなくなり後悔するような思いをするのですが関係ありません！昔の人曰く『かわいい子には探検させる』なのです。

あれ？文と使い所間違えたかな？

「ま、いつか」

開き直ったわたしはそのまま林の中へと踏み込んで行った。

この時わたしは気付かなかった。わたしの後ろを『わたしの日常を壊す』人がついていることを……。

そして後悔する。

今日はピクニックだけで済ませておけばよかったと。

七話（後書き）

よろしければ感想をお願いします。

八話（前書き）

駄文だよねえ

八話

「あれ？はやて達は来てないんだね。」

俺が通う私立聖祥大学付属中学校の屋上。昼休みの時にフェイト達
が来るまで横になり寝ている所を和弥が声を掛けてきた。

「和弥に相馬か……。あいつらは今月村とバニングスの二人と一緒
だ」

閉じていた瞼を開ける。

フェイト達は昨日俺の家に泊まったことをなんだかんだと二人に責
められていたことを説明する。それに合わせて和弥ははやての家の
シグナムさんに相馬はなのはの兄である恭也さんに酷い目に逢わさ
れたと苦笑しながら言った。

「そいつは災難だったな。」

「人事のように言っな。」

「実際『人事』だけどね。」

俺達は三人が来ないので先に昼食を取ろうと弁当を広げる。
さて、喰うかと相馬が言った時に屋上の扉が開いた。

「アンタ達！！」

「やあ、バニングスさん。どうしたの？」

やってきたのはバニングスと月村。

「アリサでいいわよ。」

「あ、わたしもすぐかでいいから。実はね」

二人の話しによるとフェイト達は急用で来れなくなっただけで、
がら三人で食べていてくれとのことだ。

急用なら仕方ないとアリサとすずかの二人を改めて食べようと含め
再び相馬が弁当に手をつける瞬間、今度は相馬の携帯が鳴った。

「……………どこのどいつだかしらねえが狙ってやってるだろ？」

「アンタの日頃の行いが悪いからじゃない？」

バニングスの嫌味を軽く流した相馬は携帯を開く。どうやらメール
らしい。

文章に目を通していているうちに彼の表情は真剣になっていく。

「相馬君どうしたの？」

「なるほど…………。はやて達は海浜公園だね。」

弁当を食べながら言った和弥の言葉にバニングスと月村は驚く。

それを余所に相馬は立ち上がると胸から一つのペンダントを取り出
した。

「和弥。先に行くぜ…………」

「わかった。閉鎖領域をあの結果も覆つように展開するし。援護は
ここからでもできるから」

「か、和弥君達なに言ってるの？」

同じくペンダントを取り出す和弥に月村が恐る恐る問い掛ける。二人はその問いに行動で返した。

「ヴァルナ……」

「アルテミス……」

二人の足元にそれぞれ蒼と深紅の三角形のような模様が浮かび上がる。

「Set up」

【その10分前】

「なのは……海浜公園の魔力反応って……」

「うん。もしかしたら『森の雫』かも……」

私たちは今鳴海市海浜公園に向かって飛んでいる。

途中まで走っていたのだが大型の結界が展開されたのでBJを装備

し更に閉鎖領域を展開して現地に向かっている。私を含めなのはとはやての表情は険しい。結界が展開されたということはその場所に誰かがいるということ。この前義母さんが言っていた協力してくれるという他の隊の人だろうか。とにかく今は一秒でも早く目的地に行くことが先決だ。

「なのは、はやて。先に行くね。」

「分かった。無茶はダメだよ？」

「気をつけてな……。」

飛行速度を更に上げる。三人の中から飛び出し一人結界へと向かう。

「……………」

この時、なにか嫌な予感がしてならなかった。

なんて言ったらいいのだろう。早くあの場所へ行け。本能がそう言っているような気がした。

「こちらフェイト。魔力反応のあった場所に到着。結界へと侵入します。」

その結界は妙なものだった。触れてみれば簡単に侵入できて逆から出てみようとするとうれえない。

まるでなにかを閉じ込める為にできた『檻』。

「なんだろう……。とにかく迂闊に入っちゃマズイってなのは達に連絡しておこかないと……。アレは。」

私はある林の周りに集まる無数の人影に気づく。あの人達は管理局ではない。私達管理局ではない別の組織で目的は『森の雫』だというところが安易に想像ができた。

【更に5分前】

「うわああ」

目の前に広がる美しい空間。木々から差し込む木漏れ日のカーテン。小さい花々の絨毯。

こんな綺麗な場所は前に来た時は気付かなかった。いい発見をした。今度お姉ちゃんを連れて来よう。そう思いつつ花の絨毯の上に腰を下ろし鼻歌を歌いながらお花を摘む。そうしているうちになんだか眠くなってきた。ここで寝てしまっわけにもいかずどうしようかと考えているとあることを思い付く。けどこれは安易にはいけないとお兄ちゃんに言われたことだ。だが……。

「……………ちょっとだけならいいよね？」
右手の人差し指を立てるとそのまま空中を自由に動かす。それに逢わせて周りの木々や草花がまるで生き物のように成長動きだす。瞬く間に二本の木の間に花で彩られ木の葉の屋根を持つ蔓でできたハンモックが出来上がった。
普通の人が見たら驚いて気絶してしまうだろうこの力。
これがわたしの秘密『草木を自由に操る力』。
安易に使うなど言われたがだれもみてなければいいと思いつた。

『まさかこんなお嬢ちゃんが『森の雫』なんてねえ……』

いきなり後ろから男の人の声がしたので慌てて振り向く。
そこには見たこともない服装の男の人達がいた。

見られた！？

背筋に汗が伝う。

立ち上がり一歩また一歩とゆっくりとさがる。

男の人達は全員で五人。その内の一人がなにやら独り言でこの場所のことを話している。話しの内容からして他に仲間を呼んでいるようだ。

「さて、この嬢ちゃんを連れて帰ってお頭に報告だ。」

ゆっくりと男の人達は近づいてくる。

わたしからみるこの光景に足は震え、目に涙が浮かび、心の底から恐怖した。そして一人の手がわたしへと伸びてきて恐怖のあまり目をとじた。

お兄ちゃん…………。

心の中で助けを呼ぶ。その瞬間わたしへと手を伸ばした男の人の悲鳴が耳にはいった。なんで叫んでいるのだろうと思っていると慣れ親しんだ兄の声が聴こえた。

「呼びましたか？」

目を開けるとそこにはわたしに笑顔を向けてくれている兄の顔があった。

「夕陽今日の探検はどうでしたか？なにかいい発見できましたか？」

わたしの頭を撫でながら智お兄ちゃんは優しく言ってくる。力を使ったことを怒られると思った。

「怒らないの？」

「もちろん怒ってますよ？こんな場所にまで走らされた上に僕は今日昼食を取ってないんですから。」

彼はわたしが力を使ったことに怒ってはいなかった。けどわたしを撫でるその手からは確かな怒気が感じられた。

「さて、どこのどなたかはしりませんが。大事な妹を泣かせた代償は払っていただきませよ……………」

振り向き男達を睨む。視線の先には泣き叫ぶ仲間の一人を戸惑いながら介抱している人達。

お兄ちゃんが手を下したであろう男の手は石になっていた。

石になったその手は二度と元に戻ることはない。これが神話になぞられたお兄ちゃんの力。

『石化』

これは呪われた力だと言っていて使おうとしなかった。

「……………」

無言で男達に向かって走り出す。同時に兄の両腕が真っ黒に染まり腕には灰色の蛇の紋様が、手の甲には蛇のような眼が浮かび上がる。悲鳴を上げる仲間に気を取られ反応が遅れた一人の足をその手が掴んだ。

そこはたちまち石に変わりまた一人悲鳴を上げてのたうちまわる。更に一人、また一人。身体にある四肢の一つを石に変え再起不能にする。お兄ちゃんは自分から力を使おうとはしないし言葉にも出さなかった。

これは呪われた力だと桐斗お兄ちゃんに言っていたことを思い出す。それを自ら禁を破ったのだ。それを意味することは一つ
智お兄ちゃんは本気で怒っている。

「おちすみなわい……。」

八話（後書き）

「オリジナルキャラ【更新版】」

【霧咲 夕陽】

・キリサキ ユウヒ

年齢 5歳

性別 女性

容姿 首下まである黒い髪と青い瞳。おっとりとしたかわいい容姿。性格 冒険家でちよつと泣き虫。お兄ちゃん大好き子。一度言い張ると桐斗が言つまで首を立てに振らない。見た目とは裏腹にパワフル

趣味 冒険

能力 『草木を操る力』

詳細（現段階）霧咲兄弟の一番下。歳の割には頭が良く、兄の言い付けをちゃんと守る。冒険家で休みの日にはフラフラと出かけて帰れずに兄である桐斗の迎えを泣きながらまっている。お兄ちゃん大好き子で家では桐斗ともう一人の兄のお手伝いをしている。またおっとりとした容姿とは裏腹にパワフルで主な被害は一つ上の兄と桐斗の親友の神田相馬が受けている。最近はやイトに貰ったレモン味のキャンデーにはまっているとか。

彼女の秘密は『草木を操る力』。本編であつたようにこの力で草木は意のままに動き実際に彼女は草木でできたハンモックを瞬く間に作りあげた。

この力の源は『森の雫』による影響である。

霧咲 智

【キリサキ サトル】

年齢 8歳

性別《男性》

容姿《黒い髪と青い瞳の男の子。カッコイイと夕陽は言っていたがどちらかと言えばかわいいが合う。》

性格《年上はもちろん年下にも敬語を使いちよつと気の弱い性格。》

趣味《勉強と音楽観賞。》

能力《『全てを石にする力』》

詳細（現段階）霧咲兄弟の次男。兄を慕い妹を大事にしているが妹からは玩具のように扱われている。

彼の秘密はものを石化させる力で彼はこの力を呪われた力だと言っている。

また、この力もなにかの影響によるものなのだがそれはまた後ほど

九話（前書き）

連続投稿

九話

「なに？今の悲鳴……………」

林の中から耳を突くような悲鳴が上がった。

林の周りにいる男達は突然の仲間の悲鳴に戸惑う。

林の中で一体なにが？

『森の雫が暴走でもしたか！？』

隊長格の人間であろう男の判断で林への侵入を指示する。

このままではマズイ。彼らの林への侵入を阻止しなくては。

すぐに私は自分の相棒であるデバイス【バルディッシュ】に指示を出す。

「バルディッシュュ！！」

【S o n i c m o v e】

機械音声とともに駆ける金色の閃光。それは男達の間を走り抜け彼らの前へと踊り出る。そのままバルディッシュの切っ先を向けた。

「時空管理局魔導師フェイト・T・ハラオウンです。所属と目的を言っただ大人しく投降してください。」

『管理局か！てめえら！！』

私が管理局の人間が解ると同時に己の武器を取り出す男達。なるほど魔導師か、大人しく投降していれば弁解の余地があったのに自分

で自分の首を絞めている。

「罪状に無断魔法使用を追加。これよりアナタ方を逮捕します」

バルディッシュをハーケンモードに換装。戦斧は鎌へと形状を変えそれを構える。相手の数は三十数人。本当なら少し厳しいが今はそうではない。

「なのは牽制お願い」

【Divine Buster】

バルディッシュとは違う別の機械音声と共に上空から桃色の砲撃が放たれた。

それは地上にいた男達の内一人を捉えると盛大に爆発する。

砲撃の主は私の親友のなのは。

さすがと言いたいところなのですが。今の砲撃明らかに込める魔力多かったですよね？跳んでる時になんとなく機嫌が悪かったみたいだけどうサ晴らしのつもりで撃つたの？

あ、今なのはものスッゴくいい顔してる。

「ミストルティン！！」

更に叩き込まれた砲撃。は、はやて？流石にいきなりこの魔法はな
いんじゃない……。

どうやら彼女もご機嫌ななめのようなのだ。

私はため息をつくき呆れながら男達へと立ち向かっていった。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫です夕陽。早くここから離れましょう。肩をお借りできますか？お恥ずかしながら今は一人じゃ歩けなくて」
「うん……………」

「ハーケン…セイバー！！」

ハーケンモードのバルディッシュから金色の魔力刀が放たれ敵を切り刻む。

気を失ったのを確認すると今度は悲鳴の上がった林をみた。

敵の数も半分以下になった。いまならなんとか行ける。

心のながで私は頷くと一気に林へと突っ込んで行った。

フェイトちゃんが林の中へと飛び込むのが視界の端に見えた。彼女の行動から察するにあそこが魔力反応があつた場所だろう。

「なのはちゃん……………」

私の後ろにはやてちゃんが降りてくる。私達は背中合わせで男達を

睨みつける。

『今フエイトちゃんが…』

『うん。多分あそこに魔力反応の原因があるんだと思う』

念話で話しを交わすと私達は互いに笑いながら再び構える。視線の先にはこの結界の中に転移してくるあの男達の仲間。推測するにBクラス。中にはAクラスというのが一人あたりの魔導師の平均ランク。一対一なら問題ないのだがなにぶん数が多い。でも負ける気はしない。

「なのはちゃん 思いっきりいつてええかな」

「うん全力全開でやつちやおう」

はやてちゃんはヴォルケンの皆に通信を入れている。私はレイジングハートに話す。

「乙女の怒りの恐さ教えてあげよっか」

『YES, My Master.』

うん。レイジングハートも大賛成のようだ。

そして私達が魔力をチャージして放とうとした時念話が私達に繋がれた。

『なのは、はやて動くなよ!!』

次の瞬間私達の真上から物凄い数の砲撃が降り注ぐ。

魔力光はヴィータちゃんより更に深い赤。深紅の砲撃は寸分違わずに男達を襲う。中には避けたり防いだりした人もいるがほと三分の

二は射抜かれた。

「な、なんや今の!？」

「今の念話の声、もしかして相馬くん!？」
驚く私達。

すると目の前の景色が水にできた波紋のように歪み、そこから神田相馬が姿を現した。

その姿は蒼い軽装の甲冑に身を包み手には3メートル近い槍が握られていた。

「よっ。相変わらずすげえな。『エース・オブ・エース』と『最後の夜天の主』は」

何気ない口調で軽い挨拶をしてくる彼。

それに対して呆けている私達。相馬君は管理局の人間!?

こんな身近に魔導師がいたことにも驚いた。

「時空管理局第44部隊所属・神田 相馬一等空尉だ。と言っても昨日そっちに協力するために出頭命令が下ったんだけどな。」

「そ、そんなの聞いてないよ!？」

「俺だってさつき知ったんだよ。文句ならうちの提督に言ってくれ」
肩をすくめてやれやれと首を振る。

きっと相馬君は私が魔導師だということを知ってた。だったら教えてくれてもよかったんじゃないのかな?

なんだかどんだん黒いオーラを纏い出した私だった。

「ところで今の砲撃は相馬君なん？」

「いや、今は和也だ」

『やあ、はやて』

突然通信が入り目の前に小さなモニターが出てきた。そこに映るのは深紅の弓を引き絞る和也がいた。彼の周りには深紅の魔力光の環状魔法陣を周囲に八つ展開させてある。どうやら今の砲撃は彼の魔法らしい。
そして彼の後ろに映る人物達に気づく。

「アリサちゃん、すずかちゃん！？ということはそこって学校！？」

「そないな遠くの場所から撃ったん！？」

「今はそんなことはいいだろ？それより」

相馬君に言われて周りを見る。

周りには先程より増えた魔導師達が私達を取り囲んでいた。

「なのは接近戦は任せろ。俺がしっかり守ってやるからよ」

「うん！！」

『はやても接近は苦手みたいだから無茶はしないでね。近づく奴は俺が射抜くから』

「ほなお願いしようかな」

私達は構える。この時、この瞬間、私達は負ける気がしなかった。

「アンタ達も魔法使いだっただの!？」

私立聖祥大学付属中学校の屋上。

俺達の目の前で黙々と深紅の砲撃を放つ和弥。
そんなアイツにアリサは声を上げてまくし立てる。だが和弥はなんの反応もしない。

「無駄だ。今のアイツの意識はここじゃない。」

「どういうこと?」

以前和弥と相馬は自分の能力は遙か昔に存在した能力だと言っていた。

「どういうこと?」

以前和弥と相馬は自分の能力は遙か昔に存在した能力だと言っていた。

相馬の能力

『空間歪曲【Space distort】』

指定した空間を捻曲げて別の空間に繋げるワームホールを作るというもの。

そして和弥の能力

『領域掌握【Area assumption】』

これはアイツの半径5キロの範囲の情報をデータとして認識する能力。今、和弥はそのデータを読み取るのに意識を自分の中に移しているのだ。

俺の説明を聞いて二人な納得したように頷いた。

「もしかして桐斗君も魔法使い？」

さすが俺の顔を見て言ってきた。それはそうだが俺はあいつらの私情を知っていたのだからそう思われるのも仕方がない。

「俺は違う……。俺はただの現地協力」

「桐斗!!」

答終わる前に和弥がこちらに意識を戻したらしく俺の名を読んだ。

「さつきまでノイズがかかってて正体不明だった魔力反応の正体が解った。」

「……………まさか!？」

和弥の慌て様に俺は意識を自分の底に持っていく。

……お兄ちゃん。
……兄さん。

まさか……。海浜公園にいるのは俺達は意識の深層では繋がっている。俺からあいつらへのパスは細いが集中すれば二人のことが解る。

「くそ!!」

吐き捨てた言葉と共に俺はフェンスを飛び越え屋上から飛び降りた。後ろでアリサとすずかがなにか言っていたが無視。

迂闊だった。もっとあいつらのことを見ておけばよかった。

後悔の念が沸き上がる。

迫る地面。だがたたき付けられることはない。俺は空を蹴ると海浜公園へと飛んでいった。

九話（後書き）

【神田 相馬】

・カンダ ソウマ

年齢《 12才

性別《 男性

容姿《 黒い髪と瞳。髪は長いとも言わず短いとも言わないぐらい。

容姿は爽やかスポーツマンジャンニーズ(?)。

性格《 喜怒哀楽がはつきりしている。女性には手を上げないが信条。

趣味《 じつちゃんとの囲碁(ちなみに超弱い)。

所属《 時空管理局第44部隊

役職《 一等空尉

魔導師ランク《 AA+

魔力量《 S

魔力光《 蒼

使用魔法《 ベルカ式、古代ベルカ式

使用デバイス名《 ヴァルナ

デバイス形状《 槍

レアスキル《 【Space distort】

詳細《 桐斗の幼なじみ。から小学一緒に桐斗が聖祥に行くというところで彼も入学。頭はいいのだが普段からあまりやる気がなく授業中は寝ている。

実は彼もなのは達と同じく時空管理局の人間。

戦闘スタイルはフロントアタッカー。槍による接近戦と投擲攻撃を得意としている。レアスキル【Space distort】は空間同士を歪ませて繋げるワームホールを作る能力。

魔力量が高いのにランクが低いのは彼があまりそういうのにこだわらないから

【天津 和弥】

・アマツ カズヤ

年齢《 12

性別《 男性

容姿《 ちよつと茶髪気味（自毛）の髪と黒い瞳で優顔。（イメージはガンダムシードのキラ・ヤマト

性格《 掴み所のない性格。いつも愛想を振り撒いてる。友人を大事にしている。

趣味《 ゲーセン荒らし。

所属《 時空管理局第44部隊

役職《 一等空尉

魔導師ランク《 AA -

魔力量《 SS

魔力光《 深紅

使用デバイス名《 アルテミス

デバイス形状《 弓

使用魔法《 ベルカ式、古代ベルカ式

レアスキル《 領域掌握【Area assumption】

詳細《 桐斗のもうひとりの幼なじみ。彼も桐斗が聖祥に行くということ入学。

鳴海のゲーセンで当たり次第記録を塗り替えた伝説を持つ。

相馬と同じく時空管理局第44部隊所属。彼の戦闘スタイルはロングやアウトレンジからによる超遠距離砲撃を得意としている。

またレアスキル領域掌握【Area assumption】は自分から半径5キロの中の物の配置人の所在を正確にデータとして認識する能力。

十話（前書き）

こんな駄作でも読んでいただいてる皆様に感謝

十話

「オラアアアッ!!」

雄叫びと共にまた一人落とす。

警戒を解かずに周りを見渡すが周囲にはもういなし新たに転移してくる人間もない。

どうやら今のが最後のようだ。

下の方ではなのは達がバインドで男達を拘束している。

すると目の前にモニターが開いた。

『ソウマ君ご苦労様。流石ね第44部隊が誇る魔導騎士は』

「おだててもなにもでないっすよ。リンディ・ハラウン提督。」

モニターに映っていたのは俺達が出頭することになった先の次元航行艦【アースラ】艦長【リンディ・ハラウン】。

「なんすかこいつらいきなり現れて。それに俺達も感じたあの妙な魔力は一体……」

『それは後で説明するわ。すぐに事後処理班が向かうからしばらく待機しててね』

彼女の命令に軽く了解と返すとモニターは閉じた。

だがすぐにまたモニターが開く。今度は和弥が映っていた。なにやら焦っているようだ。

「相馬！魔力反応は姬ちゃんだ!!」

夕陽が魔力反応の正体！？なるほど兄貴が兄貴なら妹も妹ってわけか！！

「本当か！？」

「本当だ！今までノイズがかかっていて解らなかつたけど一瞬だけ見たんだ！ヤバいぞ桐斗がそっちに向かった！！」

一気に頭から血の気が引く。マズイ、このままじゃこの場所一帯が血の海になる。俺はなのはとはやてに向かって叫んだ。

「そいつらを転移させる！お前等は離れろ！！」

俺に言われ二人は一瞬呆けた顔をするが俺の必死の形相を見て察したのか慌てて離れる。それを確認するとバインドで拘束されている男達に向かって手を翳す。

「ヴァルナ！アースラの位置！」

『マスターの直上大気圏外の位置に』

よし！！

心の中で喝を入れる。瞬間奴らの下の地面が波紋ができたように歪んだ。

【Space distort】発動。

男達はゆっくりと歪みの中に沈んでいく。アースラの連中には悪いが今は緊急事態だ報告書なんぞいくらでも書いてやるよ！。そして最後の一人を送り終えた時。

「相馬……夕陽と智はどこだ。」

俺のすぐ後ろに怒りに燃える皇帝が降り立った。

「……………」

そこは悪夢のようだった。四肢の一つが石になっていて悲鳴を上げる男達。枯れた草木。なにがあったのだろうか。

さつきから妙な魔力反応を二つ感じる。一つは【森の雫】で間違いないだろう。けどもう一つは？

そんな事を考えながらゆつくりと森の奥へと歩いていく。
昼間なのに森の中は気味が悪い。それはこの男の石像のせいだろうか
それとも……

「……………」

この不気味にうごめく植物のせいだろうか。
なにはともあれここに森の雫があることは間違いないようだ。
一歩、また一歩と歩いていくとなにやら人の声が聞こえた。

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

私は耳を疑った。今の声は夕陽と智！？なんで二人がここに！！
私は走り出す。
そして茂みを抜けた時私は思わず息を飲んだ。そこは小さな広場だ
った。花々は枯れ周りには男達の石像。そしてまるで生き物のよう
にうごめく荊。その中心に二人はいた。まさか【森の雫】の暴走に
巻き込まれた？けどなんで智まで？

「夕陽！智！！」

一瞬思考の海に沈みそうになるが私はそれを振り払う。
そんな事はどうでもいい今は二人の安全が最優先だ。

「……………お姉ちゃん？」

私の声に俯いていた顔を上げる。彼女の瞳からは涙が流れ悲しみに
歪んでいた。

「フエイトさん？」

私の声と同じく俯いていた智も顔を上げる。彼の瞳からは光が消え、真つ黒な血の涙が流れていた。私は思わず息を呑んだ。

「どうしたのそ　「お姉ちゃんもあの人達の仲間なの？」

智の異常を聞こうとしたが夕陽の言葉に遮られる。この時の彼女の声は震えている。そして彼女の表情と感じられるいびつな魔力がこの場所で異常な事が起こったという事をことを教えてくれた。だから私は彼女を怯えさせないように小さく笑みを浮かべる。

「違うよ。私は二人を助けに来たの。」

ゆっくりと二人に近づく。

それに合わせて夕陽が手を振ると荊が動き出し道を作った。それで確信した狙われたのは夕陽だ。けどなんで夕陽が【森の雫】を“持っている”のかがわからなかった。

「夕陽は大丈夫？智はどうしたの？」

「うん……。」

「僕は一時的な失明をしています。しばらくしたら元に戻るのに気にしないでください。」

「気にしないわけないよ。」

私は智の頬の血を拭う。そして二人を抱きしめた。

「夕陽も智も私の大事な妹と弟なんだから。」

『感動的な場面ですな』

後ろから聞こえた男の声に私は振り向く。気付かなかった。心配すら感じられなかったのだ。額を冷たい汗が伝う。

「何者だ!!」

バルディッシュを構え二人を守るように立つ。後ろでは智が夕陽を守るようにしていた。

「これは失礼。私はハロルド・ヴァルディア・セヴァスティン。しがないコレクターですよ」

その名を聞いた瞬間背筋に冷や汗が伝った。
目の前にいる男は危険度Sクラスの危険人物。
欲しい者は全てどんな手段を使っても手に入れる。
殺した人の数は数えきれない。
そしてこの男は『狩人』のトップだ。

「お姉ちゃん……」

「フェイトさん……」

私を見てくる二人。私は二人に心配をかけないように笑顔で言った。

「大丈夫。お姉ちゃんが絶対二人を守るから。」

『Flash move』

瞬間、私は雷光の如き速さでハロルドの真後ろに滑り込む。

「ハアアアアッ!!」

繰り出す連激。猛る咆哮。私は二人を守る為にバルディッシュを奮
う。

だがそれは全てかわされる。ハロルドは防がずに全てかわしている。

「いやはや。この歳でこの技量。素晴らしいの一言に尽きる」

「煩い!!」

私は間合いを取ると円形の魔法陣、ミッドチルダ式の魔法陣を展開

周囲に八つのフォトンを形成する。

絶対に倒す。二人には手出しはさせない!!

「プラズマランサー……。ファイア!!」

『Fire』

放たれた魔力弾は真つ直ぐに彼に向かっていく。だがそれもハロルドは全てかわす。もちろんこれで終わりではない。

「ターン……」

私の号令によりかわされた魔力弾は180°。方向転換する。そして再び彼に襲い掛かった。

「おおお!?!」

かわしきれないとわかったのかハロルドは即座にシールドを展開させ魔力弾を防ぐ。その瞬間を私は狙っていた。

『プラズマ……』

プラズマランサーに続いて再び魔法陣を展開。展開された環状魔法陣と共にハロルドに翳す手の先に魔力が集まっていく。放つは轟雷。それは金色の閃光となってあの男を撃ち抜く。

『スマツシャー!!』

林の中を閃光が飲み込む。『捉えた!』そう思った。だがそれは私

の首筋に突き付けられた冷たい感触によって否定された。

「全く末恐ろしいお嬢さんだ。今のはいい手でしたよ。ですがいささか正直すぎる。もっと経験を積めば素晴らしい魔導師になるでしょう。」

詰めが甘かった！！これが危険度Sクラスの魔導師の実力。唇の端を噛み締める。

この状態ではソニックムーブを使う時間もくれないだろう。

考える考える考える考える考える！！

この男を倒すにはどうする！？戦況を覆すにはどうする！？二人を逃がすにはどうする！？

「……………」

目線だけで二人を見る。

大丈夫……約束はちゃんと守るからね。

差し違えてでも二人を逃がす。

腹を括って行動に出ようとしたとき少女の声が林に響いた。

「お姉ちゃんに手を出すなアアアアア！！！！」

「なに！？」

夕陽の咆哮とに呼応して木々がハロルドに襲い掛かる。それは四肢を縛り上げると今度は智の方へ彼を連れていく。

「夕陽！智！？」

「お兄ちゃん！！そのまま真っ直ぐ前！！」

「フェイトさんに手は出させない……。 」

ゆっくりと立ち上がった智。夕陽の指示の通り自分に迫るハロルドへと左手を翳す。同時にその腕は真っ黒に染まり明灰の線で彩られた蛇の紋様が腕に蛇の眼が手の甲に浮かび上がる。

「くそっ！！！」

もがくハロルド。だががっちりと締め付けられた木々は外れることはない。

そして智の右手は彼を捉えた。

フェイトさんを危険に曝した代償は払って貰いますよ。

「相馬……夕陽と智はどこだ。」

冷たく鋭い口調で友人を問いたただす。
そこへなのはとはやてが来た。

「桐斗君なんでここに!？」

「てゆうか今空から降りてこんかったか!？」

煩い。そんなことはどうでもいい。

今は二人の方が俺には先決だ。

煮え繰り返る頭の中。誰だ俺の妹と弟を危険な目に合わせたのは…
…。

「落ちて桐斗! 姫を狙った奴はもう護送した!! 姫は無事だから
落ち」

「もう一度言う……智と夕陽はどこだ……。」

相馬の言葉を遮り俺は再び問う。すると林の中から凄まじい光が溢
れだした。

「フエイトちゃん!？」

なのはが林の中を見ながら彼女の名前を呼ぶ。そして俺は確信した
なるほど……そこか。

俺は溢れ出す光を掴み林へと一歩踏み出した。

十話（後書き）

小説を書くのって難しいですね

十一話（前書き）

短いです

十一話

「そ、そんな……。」

「……………」

目の前には地に崩れ落ちたお兄ちゃんの姿。

お兄ちゃんが触れたはずのあの男は光の粒子となって四散した。

そしてお兄ちゃんは力無く崩れ落ちたのだ。

なにが起こったのか全く解らない。

なんでお兄ちゃんが倒れている。完全に不意をついたはずだ。

なんであの男は平然とお兄ちゃんの側で立っている!?

「惜しかったですな。」

陽気に笑いながら私達三人を見下すあの男。

「お前智に何をした!?!」

「ただ気絶して頂いただけですよ。ああ、今の手品のタネがにになるのですね」

男は機嫌がよいようで私達に自分が何をしたのかを得意気に見せた。一瞬だけ男の姿が霞む。すると次の瞬間奴の横にもう一人同じ人間が姿を現した。

「幻影!?!」

「そんなちやちなモノと一緒にしていただきたくはないですな。彼

は紛れも無く本物。もう一人の私ですよ」
現れたのは実態。証拠にもう一人の奴は側にある木を魔法で切り倒して見せた。

「レアスキル……。」

「ええ、私の能力。『失われた兄弟』というものです。素晴らしいでしょう。」

恍惚な笑みを浮かべながら彼はお兄ちゃんを見る。

「それよりも私は今感激に満ち溢れているのですよ。まさか、こんな場所でアルハザードの遺産にそれも【二つ】に巡り会えたのですから。」

アルハザード？遺産？

何を言っているの。

聞き慣れない単語に私は不安な気持ちになっていく。

「アルハザードだと……？」

お姉ちゃんにか知っているの？

不安な表情で私は姉と慕う人物を見る。彼女の顔はとても悲しくて苦しそうな顔だった。

「『アルハザード』失われた伝説の超高度文明。その世界には不可能はないとされる。

私ですね。コレクターである前に考古学者でもある。私が見つけた文献では植物を自在に操るロストロギア『森の雫』はその世界から流出した兵器と記されているのですよ。」

植物を操る能力……。私の力？ロストロギア？森の雫？兵器？

「もう一つのロストロギアの名は『ゴルゴン』全てを石に変える凶悪な兵器の名です。」

石に変える？お兄ちゃんの力？

「そして奇跡的に二つはここに存在する！！このお坊ちゃんと……」

言わないで……。その先を言わないで……。

「あなたですよ。『お嬢さん』」

その瞬間私の目の前は真っ暗になった。

私は普通じゃない。私は人間じゃない。

私はお姉ちゃん達とは違う。

私は技術。

私は兵器。

私は……。

私の瞳からは光が消え失せた。

私はみんなとは違うんだ。今思えばわかりきったことだったんだ。

普通の人には植物を自由に操ることなんてできない。最初は神様が私にくれた才能だと思っていた。

だって素晴らしい力だったんだから。

「黙れ……黙れえええええ！！」

私は怒声と共にハロルドへと切り掛かる。そうやって人を人と見ない人間があの子達のような子供を苦しめる。

お前のような人間が……！！

怒りに震える私。この時私はあの子達を自分と重ね合わせていたと思う。

造られた自分とあの子達は同じだ。

だから守りたかった。

たがら力を奮ったのに。

「くそおおおおおっ！！」

成す統べもないまま私は地に伏されていた。

「おやおや強気なお嬢さんだ。弟と妹の為に命を張る姉、感動的ですな」

嘲笑の下見下される。

頭を足蹴にされ私は自分が無力だと痛感した。

「あなたの御兄弟は私が大事に保管致しましょう。『コレクション』としてね」

ハロルドは手を宙に翳す。その手に暗い緑色の光が集まると杖となつた。

そしてそれを振り上げる。

「お姉ちゃん!!」

夕陽が叫び木々を襲わせる。だがそれよりも早く振り下ろされた。

「貴様が……弟達に手を出したのは」

私は信じられないモノを見た。私の目の前、私の影から手が伸びてきて私の頭を突き刺そうとしている杖を受け止めていた。

「誰だ!？」

ハロルドは何が起こったのか解らずに後ずさる。

私は立ち上がると智を起こして夕陽の所へ駆け寄る。

「夕陽大丈夫!？」

その時夕陽の様子がおかしいのに気付いた。

「……………ち……………る。」

私は彼女の声に耳を傾ける。

「……………が怒ってる」

彼女は震えていた。そうなにかに怯えていた。その時、智が私の手を掴んだ。

「兄さんが……怒ってる……………」

「桐斗が？」

ハロルドの方を見る。彼の足下には私の影がありそこから桐斗が現れた。

「なんなんだ君は!？」

「お前が手を出した二人の兄だ……………」

桐斗は空いている手をゆっくりと上げる。その手にはなにか光るモノが握られていた。

『我が名は陰陽を統べる剣。光よ従え…』

次の瞬間握られていた光は剣となり彼の手に収まる。それを見たハロルドは驚愕の顔となった。

「お前は!！」

「冥界、天界どっちでもいいそこで懺悔しろ」

桐斗はそのままハロルドを一閃。だが奴は自身の能力で分身を身代わりとし間一髪で脱していた。

「今回は引くべきですね。またお会いしましょう。」

体中汗まみれのまま言い残すとそのまま転移してその場から消え去った。

「逃がすとても思っているのか……」

殺気に満ちた桐斗は奴を追おうと自分の陰に沈んでいく。だがそれを夕陽と智の二人が阻止した。

「お兄ちゃんダメ!!」

「僕達は大丈夫です!!」

抱き着く二人。桐斗は二人に視線を移すと移動するのを止め二人を抱きしめた。

「無事でよかった。」

「お兄ちゃんごめんなさい!!」

「ごめんなさい兄さん!!」

必死に謝る二人。桐斗は二人の頭を撫でると私の方を見た。

「フエイト……ありがとう。」

この時の桐斗の顔はとても優しく暖かいお兄ちゃんの顔だった。それを見て私も安堵の溜め息を漏らす。が次の瞬間この場は再び緊張に包まれた。

「動くな!!」

突如現れた時空管理局の武装隊員。

彼等は私達を取り囲むとデバイスの切っ先を向けてきた。

いや、これは私達ではない。彼等兄弟に向けられていた。

「時空管理局だ！大人しくついて来てもらう！」

十一話（後書き）

感想待ってます

十二話（前書き）

更新です

十二話

私達は今次元航行艦【アースラ】にいる。

あの後桐斗、智、夕陽の三人は時空管理局に保護されそのままアースラへと護送されることになった。

そして今、

「霧咲 桐斗君。智君。夕陽さん。貴方達に聞きたいことがあるんだけどいいかしら？」

彼らは義母さんと義兄さんの二人から事情聴取を受けている。

私となのは、はやて、相馬、和弥は特別に立会いを許して貰えた。

名前、生年月日など基本的な質問から始まり20分ぐらいして本題に入った。

「それじゃ次、フェイトから聞いた証言だと君達はアルハザードから流出した技術。すなわちロストログアだということだがどうだ？」

この質問にビクリと夕陽の肩が震える。

桐斗は横目で夕陽を見るとゆっくりと答えた。

「その通りだ。俺も含めて智と夕陽はアルハザードで創りだされた。」

周りが重苦しい空気に包まれる。

「その事を知っているのは？」

「俺の他には智と相馬と和弥だけだ。」

相馬と和弥も知っていたの!?

私は二人を見る。私の視線が彼等を集まる。

「親友を守る為っすよ……」

相馬はそれだけ言って後は何も喋らなかつた。

「続けるぞ。智は『ゴルゴン』夕陽は『森の雫』、俺は『陰陽の剣』
という名称を持つてる。」

そのまま桐斗は自分達の説明を淡々としていく。

「俺と智は言うなれば生体兵器だ。俺達はアルハザードの技術を狙
う他の世界から守る【守護者】と呼ばれていた。」

淡々と語る彼。けど私はそんなことは耳には入らなかつた。ずっと
俯いている夕陽が気になったからだ。

やはり、自分が兵器だと言われたことが気になっているのだろう。
そう思っているとクロノがあることを聞いた。

「それで、君達が暴走する可能性は？」

「クロノ!?!」

私は身を乗り出して彼に迫る。それをなのははやてが慌てて制し
たが私は兄を睨んだままだった。

「すまない。だが重要なことだ。」

「……………確かに…だが安心しろ。俺達が暴走することはまずない。」

「文献には過去に森の雫が暴走したとあるのだけど？」

「それは別の世界の森の雫だろう。アルハザードの技術者はそれを応用して独自のオリジナルを創りだした。」

それが夕陽。

彼等は自分と同じ造られた命。

そのことを思うと胸が苦しくなった。

「今度はこちらから聞いていいか？『俺達』をどうする気だ？言っておくが兵器として利用したいならお断りだ。俺と智は自身が兵器だったことを自覚している。だが夕陽は違う。この子は兵器なんかじゃない。環境保全の為に創られた優しい子だ。俺もだが封印処理など受けるつもりはないし、コイツ等を封印させない。」

クロノはこの質問に詰まった。普通なら封印処理をして厳重に保管となる。

。彼等の場合はどうなるのだろうか。私もこのことは気になった。沈黙が場を包むなか義母さんが口を開く。

「上の判断待ちね…。私達では決められないわ。」

そして事情聴取は終わった。今回の件については一時保留。彼等は自宅待機となった。

各自部屋を出て最後に私と桐斗が部屋を出る時。桐斗は義母さんに向かって言った。

「上の人間に伝えておいて下さい。智と夕陽に手を出したら覚悟しておくようにと。言っておきますが管理局など半日もあれば俺と智

で消し去る事ができるので」

それだけを言い残して彼は部屋を出ていった。

「いやはや……。まさかここでアレとお会いすることになるうとは」

私が転移した先は海浜公園から大分離れた山の中。

そこで木に身体を預けながらゆっくりと腰を下ろす。

アレの出現は予想外だった。まさかあの二つについていようとは。

「全く……。楽しませてくれる。」

不適な笑みと共に沸き上がる欲望。

欲しい。あの【三つ】が欲しい。私のコレクターとしての欲求は頂点に達していた。

「必ずや手に入れてみせますよ……………」

不意に脇腹に痛みが走った。そこを左手で拭くと真っ赤に染まった

自分の手。

あの一瞬。避けきったと思っていたがどうやらあの切っ先は私を捉えていたらしい。

「これは暫くお預けですね。部下も四分の一は落とされたようですし」

ため息を漏らしながらゆっくりと立ち上がる。

次の瞬間。私のいた場所は轟音と共に凄まじい土煙を上げた。

土煙が晴れる。だがそこには私はいない。

『ほう、今のを避けますか……。』

土煙の中から私は飛び出す。

背筋に冷や汗が伝う。警戒は怠ってなかった。なのにあの一瞬まで攻撃に気付かなかった。

着地すると土煙の中から姿を現す男を睨みつける。奴の手には巨大な鉞。

「どなたですか？」

「フフ……」

「!!!!!!?」

突然背中に激痛が走った。

背中から血が噴き出したのだ。

バカな!? 完全に避けた筈だ!!。

地に膝を付き息を荒げて顔を上げる。あの男がもつ巨大な鉞には私の血がついていた。

それを男は自身の舌で舐めとる。

「貴方はつい先程、危険度SSに認定されました。ですから生死問わずに連行させて貰います。」

次の瞬間私は信じられないモノを見た。

そしてそのまま意識は永遠に闇へと葬られた。

次元航行艦アースラでの事情聴取を終えた後私達はそれぞれ帰路に着いた。

誰ひとりなにも話さずに散り散りに帰っていく。

私もその一人だった。

ぼんやりと海浜公園からの帰り道を歩く。

考えてたのは霧咲兄弟のこと。

彼等は自分と同じ造られた存在。もともと自分のことを知っている二人はまだしも自分が造られた存在だということを知らなかった夕陽にはとても深い傷だろう。

自分がそうだったように彼女も苦しんでいるのだ。

助けてあげたい。少しでも気持ちや和らいでほしい。

ぼんやりとした視線を上に向ける。

街中で見上げる空。それは造られた存在としての自分を濃く思わせた。

「ねえ……お兄ちゃん……。」

「なんだ？」

わたしは帰り道。聞き取れるか聞き取れないかぐらいの声で兄を呼ぶ。

わたしの表情は暗く。気持ちもどん底。そんな中私は質問した。

「なんで黙ってたの？」

「お前の為を思ってた……。」

「わたし達普通とは違うんだよね？」

「少しだけな……。」

この質問の後そのまま私は黙ってしまった。家に着き、お風呂に入
って床に着く。時間はまだ8時。

良い子でもまだ寝る時間には大分早い。

私は頭まで毛布を被るとそのまま声を殺すように泣いた。

「兄さん」

「なんだ？」

「僕は今日、人を石にしてみました。」

夕陽が自分の部屋へと戻ったあと僕は兄さんに今日のことを打ち明けた。

「解ってる。あの時お前の目から光が消えてたからな。」

そう僕は力を行使した。

あの時失明したのは眼を触媒に睨んだ標的を石にする力。

夕陽が人質に取られたときに使い僕は一時的な失明をした。石になったモノは元には戻らない。`今更`だが僕は人を殺したのだ。

「僕は人殺しです……。」

「お前は夕陽を守る為に力を使った。俺はお前を責めない。他の誰かがお前を責めるなら俺はそいつを叩き潰す。」

そついい終わると兄さんは僕に疲れただろうからもう寝ると言い僕はそれに従い眠ることにした。

「……………」

俺は一人リビングで天井を見上げる。

ぼうつとしているその瞳はなにも捉えずただ虚空を見つめている。
いつかはバレるとは思っていたがそれが予想以上に早かった。
その為に夕陽を傷つけた。

あの子にはとても荷が重い。頭がいいのなら尚更だ。

俺は立ち上がると外へ出た。

妙な気分を紛らわせる為だ。

4月でも少しだけ冷える鳴海市の夜。

空気は澄み星が良く見える。明日は風が強いなど適当なことを考えながら公園の前を横切ったとき

「桐斗？」

公園のベンチに座っていたフェイトに声を掛けられた。

「なにしてるんだ？」

「うん。ちょっとね……」

ベンチに腰掛けている私の隣に桐斗は腰掛ける。

夜風に揺れる黒髪。整った顔立ち。彼も含め夕陽や智が造られた存在とは思いつまなかつた。

桐斗はどんな想いで二人を守ってきたのだろう。

一人は辛くないのだろうか。苦しくはないのだろうか。

そんな考えが私の頭の仲を駆け巡る。

「フェイトは俺のこと怖くないか？」

沈黙の最中桐斗は私に聞いてきた。

「なんで？」

「俺は今の技術では再現できない兵器だ。俺が小さい頃、生まれて三つぐらいの時か。その時には既に戦場にいた。アルハザードの技術を狙う他の世界から守っていた。沢山殺した。数千という敵を全て葬った。そんな俺をフェイトは怖くないのか？」

静かに語る桐斗。私は黙ってそれを聞いた。

「私は怖くないよ。桐斗はとっても優しい。弟や妹の為に一生懸命なんだよね？」

「この世にいる俺の唯一の肉親だから……。」

そう言つて桐斗は懐を漁りだした。何だろつと見ていると取り出したのは長方形の小さな箱。

「桐斗……。桐斗は未成年だよね？」

「……………」

「……………桐斗。」

彼が取り出したのは日本では二十歳にならなければ吸うことのできない物『タバコ』、私は横目で彼を睨みつけて手を差し出す。だが彼は渡そうとはしない。奪い取るつとするが奪えない。

「くら。渡しなさい!!」

「断る。これを手に入れるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ!!」

「そんなの知らないよ!!……………キャツ!??」

「うお!??」

ベンチの上で必死の攻防をしていれば必然と私達は落ちてしまふわけ

私は彼に覆いかぶさる形になってしまった。

「おい。大丈夫か？」

「う、うん……………」

彼の顔が近い。ほんの数センチで触れてしまっぐらいだ。ドキドキと張り裂けそうになってしまっぐらい心臓が脈打つ。私は自分のことを話した。

「私もね造られた存在なんだ。」

「フェイト？」

「私はクローン体。それも出来損ないの。私は望まれて産まれてきたんじゃないんだ。」

【プロジェクトF】

《正式名称：プロジェクトF・A・T・E》 記憶転写技術。クローン体に記憶を写すこの技術は私の亡き母、プレシア・テストロツサが完成させたモノ。

クローン体に記憶を写すことはできるがクローン元の仕草や利き手、性格、魔力資質それ故に私は母から愛されることはなかった。

それに私も自分がクローンだと知って相当のショックを受けた。

だから夕陽の気持ちは良く分かる。私より若い時にその事実を突き付けられては今後立ち直れないかもしれない。

だから……。

「私も桐斗と一緒に妹達を支えたい」

私は彼に笑顔で告げた。

十二話（後書き）

よろしかったら感想をお願いします

【オリキャラ紹介】（前書き）

霧咲家のプロフィールです

【オリキャラ紹介】

「オリジナルキャラ」

【霧咲 桐斗】

・キリサキ キリト

年齢《 12才

性別《 男性

容姿《 首にかかるかかからないかの黒い髪、青い瞳のクールなイケメン。雰囲気が大入つぽく中一ながら身長が高めなため高校生に見える。

性格《 物静かだが話し掛けられれば普通に話す。頑固。のはず

趣味《 なし。

【正式名称：陰陽の剣】

能力：陰陽、光と影の使役。

詳細（現段階） 本作品の主人公。小学はフェイト達とは違う学校に通っており中学はある事情で聖祥に入学。

学校にいる時以外はほとんどバイトに出ている。自分の下にいる二人の兄弟を異常なぐらい大事にしている。キレたら一番怖い。

彼はアルハザードから流出した技術であり兵器。

霧咲 智

【キリサキ サトル】

年齢《 8歳

性別《 男性

容姿《 黒い髪と青い瞳の男の子。カツコイイと夕陽は言っていたがどちらかと言えばかわいいが合う。

性格《 年上はもちろんな年下にも敬語を使いちよっと気の弱い性格。

趣味《勉強と音楽観賞。

【正式名称：ゴルゴン】

能力：石化の魔手、摩眼

詳細霧咲兄弟の次男。兄を慕い妹を大事にしているが妹からは玩具のように扱われている。

気が弱い性格だが妹の為には強く出るお兄ちゃん。

兄の桐斗と同じくアルハザードから流出した技術であり生きた兵器。

【霧咲 夕陽】

・キリサキ ユウヒ

年齢《5歳

性別《女性

容姿《首下まである黒い髪と青い瞳。おっとりとしたかわいい容姿。

性格《冒険家でちょっと泣き虫。お兄ちゃん大好きっ子。一度言い張ると桐斗が言うまで首を立てに振らない。見た目とは裏腹にパワフル

趣味《冒険

【正式名称：森の雫】

能力：植物の自在操作。

詳細（現段階）霧咲兄弟の一番下。歳の割には頭が良く、兄の言い付けをちゃんと守る。冒険家で休みの日にはフラフラと出かけて帰れずに兄である桐斗の迎えを泣きながらまっている。お兄ちゃん大好きっ子で家では桐斗ともう一人の兄のお手伝いをしている。

またおっとりとした容姿とは裏腹にパワフルで主な被害は一つ上の兄と桐斗の親友の神田相馬が受けている。最近はやイトに貰ったレモン味のキャンデーにはまっているとか。

彼女も同じくアルハザードから流出した技術。

兄達は兵器として造られたが彼女は純粹に自然保護の為に造られた。過去の文献で森の雫が暴走したという記述があるがそれは彼女ではなく彼女が造られる前に存在した別の世界で先に造られた森の雫。

アルハザードの技術者はそれを応用、独自の技術で夕陽【森の雲】
というオリジナルを作り出した。

【霧咲桐斗】、【霧咲智】、【霧咲夕陽】というのは彼等の偽名。
本名はかなぐり後で公開します

【オリキャラ紹介】（後書き）

ん、こうして見ると反則キャラばっかかも

十三話（前書き）

これから怒涛の更新!!!

十三話

「私も桐斗と一緒に妹達を支えたい」

笑顔で告げる私。

桐斗はまっすぐ私の目を見ている。

「だから今日から桐斗の家に住むね」

「……………今日は風が強いらしい良く聞こえなかった。すまないがもう一度言ってくれないか？」

今日は風なんて吹いてない。

それに私は苦笑するともう一度言った。

「今日から桐斗のお家に住むから」

「今すぐ帰れ」

桐斗は私を押しよせると立ち上がり額に手を当てる。
む、そんなに嫌なの？

「フェイト。お前解って言ってるのか？」

「うん。夕陽の為に智の為にこれが一番いい方法だよ」

「お前の家族はいいのか！？家族は絶対反対」

「いいよね？うんありがとう義母さん。お兄ちゃん嫌いね。うん説得よろしく。」

桐斗がいい終わるまでに家に電話を済ませる。これで詰めだ。荷物を取りに帰る時にリビングが真っ赤だろうが問題はない。それを見ていた桐斗はため息をつき、私から守り切ったタバコに火をつけると一言。

「勝手にしてくれ……」

と諦めたように呟いた。

「……………」

わたしは窓から差し込む日の光と共に目覚める。目は真っ赤に腫れてとても人前に出れるようなモノではなかった。でも起きなければならぬ。

兄達の朝食やお弁当を作らなければ。

この家で一番早く起きるのは桐斗お兄ちゃん。朝の新聞配達とかがあるからだ。そして次にわたし。そして智お兄ちゃん。

わたしは重い体を起こして顔を洗いに洗面所へと向かう。少しでもこのヒドイ顔をごまかす為。顔を洗っているとあることに気付いた。

洗面用具が一人分多いのだ。

これ女の子が使っようなモノだよね？
なんであるの？

疑問に思いながら顔を洗い歯磨きを済ませてリビングへと向かう。
そして扉を開けた時。

「おはよう夕陽」

「おはよう」

エプロン姿のお姉ちゃんとお兄ちゃんがいました。

「お姉ちゃんなんているの!?!」

寝起きと共に大絶叫の夕陽。

うん、今日も元気だね。けどまだ6時前だから静かにしようね。

「今日からこのお家で一緒に住むことになりました。」

ブイ と彼女にピースサインを向ける。隣では桐斗がため息をつきながら朝食の準備をしている。

それを聞いて夕陽は一瞬嬉しそうな顔をするが直ぐに表情が暗くなる。おそらく昨日のことを引きずっているのだろう。

私はそんな彼女を優しく抱きしめる。

「私は夕陽のことを嫌ったりしないよ。なにがあっても絶対に」

「……………」

夕陽は私の胸に顔を埋め声を殺して泣いた。私は彼女の頭を優しく撫でる。

その光景を桐斗は優しい笑顔で見つめる。さ、ご飯にしようか。と彼女から離れ背を向けた時。

「お姉ちゃん大好き!!!!」

『黒い砲弾』が私の腰に叩き込まれ換気の為開けておいた窓から退室することとなった。

「オニイチャン。キョウハアルバイトハナカッタノ？」

朝っぱらからシユールな我が霧咲家のリビング。

朝から輝かしい笑顔フェイトの隣では夕陽の視点が現実を捉えずにクルミ割り人形みたいな顔になっていた。夕陽……。お前は頭がいい

んだから少し学習しろ。そしてフェイト夕陽になにした？

「今日はいい。最近は貯蓄に余裕ができてきたからな。たまにはな」

「兄さん。その『たまに』が今回初めてなんですか？」

む、そうか？

「ところで兄さん。なんでフェイトさんがいらっしやるんですか？」

あまりにも溶け込んでいて違和感が無かったから触れなかったらしい。俺はこれまでのいきさつを話す。

「フェイトさんここに住むんですか！？」

「うん」

元氣よく返事をするフェイト。

智は心底驚いている。

普通はそつだ。

一体なに考えてるんだか。

再び俺はため息をつく。

そんな時、チャイムと共に軽快な声が玄関から響いてきた。

「桐斗！時間だぜ！！」

その呼び声と共に俺は立ち上がり。智に弁当を渡す。ちなみに今日は俺が作った。

「あれ？お兄ちゃん。このお弁当は？」

智に渡した弁当の他にもう三つ弁当があることに夕陽は気づく。緑の他に黒と黄色の布にそれぞれ包まれた弁当だ。その質問に対してフェイトが答えた。

「これは夕陽と私と桐斗の分」

「……………お姉ちゃんを作ったんじゃないよね？」

「それはどういう意味かな？」

「安心しろ。今日は俺が作った。」

「桐斗……!!」

なにが不満だったのか俺は頭をスリッパで叩かれた。そんなかなだでギヤーギヤーやっていると待っていたであろう相馬が上がってきた。後ろには和弥やなのは、はやても一緒だ。
「遅いぞ…ってなんでフェイトがいるんだ？」

「フェイトに聞け。それより智、時間だ。」

「あ、はい！行ってきます!!」

質問はフェイトに任せて俺は智を送り出す。

次に夕陽の頭に手を置くとうっすらとした笑顔で言った。

「出かける支度をしろ夕陽」

朝のHR。クラスはざわめきに包まれていた。

『え、しばらく。霧咲の家の都合で妹君がこのクラスに居ることになった。皆は先輩としての手本となりまた助けてやってくれ』

その言葉にクラスのほとんどが一斉に彼の方を見る。

それにビクリと肩を震わせて兄の腕にしがみつく彼女。

そう、霧咲桐斗の妹、霧咲夕陽はいま私達の学校に来ているのだ。理由は昨日のようなことがあったから夕陽を一人にしておくわけにはいかないというもの。

義母さんは付近に監視をつけると言ったのだが彼はそれを断った。そして今に至る。

夕陽が座る席は私と桐斗の間。

なんでここなのかを尋ねると『お兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒にだそうだ。』

全く嬉しいことを言ってくれる。HRが終わった後は凄かった。桐斗と夕陽に対する質問責め。怒涛の質問、質問、質問が洪水のように二人に降り懸かる。

私はというと二人から離れた場所でその光景を見ていた。

「凄いね……。」

「フェイトちゃんの時もあんなのだったよ?」

「しかも女子ばかりやし。」

そう、私はそれが面白くないのだ。

桐斗に群がる女。なんでだか解らないけどアレがムカつく。

「あれ？知らなかったの？」

ムスツとした表情の私にさすがが言ってきた。

「桐斗君。実はかなり人気あるよ？」

「え？」

初耳だ。

話しによると桐斗は上の学年からはもちろん。得に同年代の女の子にとっても人気があるらしい。

声を掛けたくても私達が一緒にいるから声を掛けられなかったらしい。

「フェイトちゃん大変やね」

「それはどういう意味かな？」

「相馬や和弥もよ？」

「「え？」」

アリサに言われはやてとなのはが同時に彼女を見る。

二人そろって驚愕な表情で同じ行動をしたのがちょっと不気味に思

えたがそれは置いてとりあえず相馬と和弥の二人を探してみる。

「あれ？いないよ？」

「ああ、どうせ中庭でしょ？」

中庭？

「あの二人何回も告白されてるのよね。全部断ってって、なのははやて！？」

アリサの解説を聞き終える前に二人は教室を飛び出していた。なんか二人の手に赤いビー玉が付いたペンダントと十字架のネックレスが握られていたような気もするが多分気のせいだろう。うん、気のせいにしておこう。

「大方、話し掛けるきっかけでも探してたんじゃない？」

あー、なんででしょうか。どんどんムカついてきたなあ。そう思っていると人混みの隙間から夕陽と目が合った。するとトテトテと歩いてくる。周りの視線が彼女に集まる。私の前に立つと私の制服の袖を掴み桐斗の所まで引っ張っていく。そして私を桐斗の横に立たせて

「霧咲夕陽です。兄の桐斗と姉のフェイトがお世話になってます。
(ぺこり)」

沈黙。

たっぷり三十秒間沈黙してとある女の子が口を開いた。

「……………姉？」

「うん。フェイトお姉ちゃんは夕陽のお姉ちゃんになるの」

次の瞬間、クラス中学生徒による大絶叫が学校を飲み込んだ。

そしてHRが終わり授業へ

「……………」

今の私は顔が真っ赤になっている。

夕陽が爆弾発言をしてかる私は物凄く恥ずかしい思いをした。
なのに……………。

「……………」

なんで悠々と寝ているのでしょうか？

雰囲気という和我関せず。

「お兄ちゃん。授業中だよ……………」

夕陽が小さな声で桐斗を起こそうとする。だが彼は起きない。
もう、呑気なんだから。

十三話（後書き）

感想お待ちしています。

十四話（前書き）

ほつれ

十四話

「あの……。なんででしょうか？」

僕は今学校で恵美さん、恵那さんの二人にせまられています。理由はおそらく昨日のことでしょう。

学校を飛び出した後、そのまま戻ってませんし。

「私達の誘いを断って」

「昨日なにしてたの？」

そのままズイズイと顔を寄せてくる。させようしようかと考える。

ダメだ全くだいい案が浮かばない。

「まあ、いいわ。今日は大丈夫よね？」

「ええ、今日は大丈夫ですよ。」

「じゃあ、早く行こ」

そう言っつて恵那さんが僕の手を掴んだ瞬間。

あの光景が浮かんだ。あの光景が浮かんだ。触れたモノが石となる光景。周りの全てが自分の手によって石となる。

「うわあああっ!?!?」

「きゃっ!?!」

思わず叫びと共に僕は恵那さんを突き飛ばした。それに彼女は目を丸くする。

「あ、…ああ……あ」

僕は震えていた。

あの力を使ったのは何年ぶりだろうか。

力を使っている時は自分が自分じゃなくなってしまっただ。

それが僕達“守護者”

妹を守りたい一心で使ったのに途中少しの間だけ自分が自分じゃなくなっただ。

そう…、アルハザード時代の時ように。

「……………智?」

呼び掛けられて顔を上げる。

そこには怯えた表情の恵那さん。驚いた表情の恵美さんのかおがあっただ。他のクラスメートの人達も何事かとこちらを見ていた。

「……………すみません。」

「どっしたのアンタ……………」

「すみません……………」

僕は立ち上がると荷物を持ち教室の外へ向かう。

「智!?!」

「すみません。気分が優れないので早退します。お手数ですが先生
によりしく言っておいてください。恵那さん、驚かせてすみません」
僕はふらつく足どりで教室からは出ていった。

「……………」

智がでていった後を私は見つめる。
すると姉さんが携帯を取り出した。どうやらメールのようだ。
少しすると姉さんは私に携帯を渡してきた。
私はメールを見る。
一瞬だけ驚愕な顔をするが次の瞬間には元の表情になる。
そして私の姉は一言だけ言った。

「仕事よ……………」

その声はとても冷たかった。

「……………」

頭がくらくらする。何度体験してもこれだけはなれない。
そんな中僕はふと昔を思い出す。

『敵陣第三防衛線突破されました!!』

凄まじい爆発音。飛び交う閃光。

ここは戦場。

超高度文明『アルハザード』

その世界は今、複数の世界からによる攻撃を受けていた。

『くそっ！これ以上は近付けるな！！なんと少しでも死守するんだ
！！』

指揮官の艦隊の前には巨大な質量兵器。それはこれまでの防衛線のことごとく突破、最終防衛線まであと一線と残す所まで迫ってきていた。

『本部より通達！！これより『ゴルゴン』を投入とのことです!!』

その報告を聞き指揮官は顔を前に向ける。そこには宙に浮かぶ一人の少年がいた。

『あの子が……………』

少年の瞳に光はないボウツと虚空を見つめたままだ。ゆっくりと迫る巨大な質量兵器。

少年はゆっくりと瞳を閉じる。

『くるぞ……。全員あの子の後方に下がれ!!』

指示に合わせて艦隊は全て少年の後ろへと下がる。

それに合わせて少年はゆっくりと瞳を開く。その瞳は青から染まっ
て真っ赤になっていた。

次の瞬間。

巨大な質量兵器は巨大な石の塊になった。その光景に隊員は感嘆の
声を上げる。

『こちら【ゴルゴン】敵部隊殲滅に入ります』

通信に少年の機械敵な音声が入る。

同時に少年は宙を掛けた。

そして彼は目の前に迫る敵を次々と石に変えていった。

「……………」

気づけばそこはとある公園の前だった。
時計を取り出して時間を確認する。

「1時か……………」

どうやら帰るつもりが適当にぶらついていただけになっていたようだ。だが目眩や手の震えは治まった。
こんな所で立っただけでもなにもならないはやく帰ろう。
そう思った時。

『ロストロギア【ゴルゴン】だな。』

覆面で顔を隠した二人の人物に挟まれていた。

「どちらさまですか？」

「ご同行願おうか？」

まったく……………。こつちの話しは無視ですか……………。

内心ため息を着きつつ。僕は相手を睨みつける。

ここで騒ぎを起こすのはマズイですね。安全な場所に移動しなくては。

僕は意識を底に落として兄さんと夕陽へのリンクを切断する。

兄さん達には迷惑は掛けられない。「少し抵抗しますけど。それぐらいは許してくださいね？」

同時に僕は掛けた。当てる懐へ滑り込み掌を叩き込む。

その一瞬は閃光。僕は力の代わりに図書館やインターネットでこう

いった武術を調べていた。
データとして取り込んだを僕の中で反復して鍛練した。
まあ、実戦はこれが初めてなのですが。

「ハアアアツ！！」

「ちっ！！」

僕の拳を紙一重で避け距離を取る。

慣れてない格闘で動きは鈍いですがまあまあでしょうか。

僕の攻撃を避けた相手は懐から銃を取り出す。後ろの奴も同様だ。

。力を使わない僕には遠距離戦闘の術がない。その気になれば二人とも始末できるんですが。

少しだけ思考の海に落ちる。

この場合でできることは……。

『閉鎖領域展開』

次の瞬間この一体を閉鎖領域が包んだ。

「たく、なにフラフラしてんだ。桐斗とフェイトが心配するだろ？」

降り立つ蒼天の外装の騎士。蒼銀の槍を手に彼は僕の前に現れた。

「今回のことは秘密にしてやるからもしもの時はフォロー頼むぞ？」

「相馬さん……」

「黙ってる直ぐに済む」

そう言つて槍を構える。

「第44部隊所属、魔導槍騎士神田 相馬…参る」

瞬間、相馬さんの姿は消える。二人の内一人の後ろに周り込むとそのまま槍を一薙。槍はそいつを捉えて吹き飛ばされる。

「チイツ!!」

吹き飛ばされた相方を見てもう一人は舌打ちと共に銃を撃つ。それに合わせて相馬さんは槍を投げた。

「貫け蒼天!!」

『HEAVENS JAVELIN』

蒼銀の魔力を纏った槍は放たれた魔力弾を掻き消す。相手はかろうじてそれを避ける。だがそれだけで相馬の攻めは終わらない。

【Space distort】発導

「動くな……………」

前方にいた筈の相馬さんはアイツの後ろで槍の切っ先を突き付けていた。

「名前と所属、出身世界を教えてください」

いきなり僕達二人の視界を桃色の閃光が埋め尽くした。

十四話（後書き）

まだまだいきます!!

十五話（前書き）

じじま

十五話

「……………」

「……………」

俺達二人は空いた口が塞がらなかった。

今のなに？

多分智とは考えが同じだろう。

今の閃光はアイツだ。絶対アイツだ……。

プスプスと煙りを上げているアルテミスから視線を上空に向ける。

いらっしやいました。白いバリアジャケットを身に纏った『管理局の白い悪魔』が。

「相馬君大丈夫!？」

「そのセリフは俺じゃなくてコイツとヴァルナに言ってやってくれ。」

俺は確かにコイツを追い詰めたよな？そこをデイバインバスターで撃ち抜くとは……。

ため息をついてももう一人をバインドで拘束。

なのはが俺の横に降りてきた。

『なのはさん？今、追い詰めてたの見てましたよね!？機器破損率45%ってどういことですか!？』

ヴァルナがキレてる。めっちゃくちゃキレてる。

「ゴメンね〜ヴァルちゃん。ちょっと威力出し過ぎたみたい。」

『マスター……。最大魔法を彼女に打ち込みたいのですが?』

「お、落ち着けヴァル。なのはもキャラがおかしいぞ?」

とりあえず俺はヴァルナを自己修復に専念させて智を見る。
なにやら自分を襲った奴の顔を見ようとしているらしい。

「智君も大丈夫?」

なのはが声を掛ける。襲った奴らの覆面へ伸びる手が止まり智はこ
ちらへとやってくる。

「はい。おかげ様で」

「怪我してないよね?」

「大丈夫です。例え怪我しても僕は普通とは違って大した怪我に
はなりませんから」

その言葉に俺は表情を暗くする。

普通とは違う……か。

智は自分の力を呪われた力と言っている。いくら自分が兵器だとい
う自覚があってもまだ子供のコイツにはツライだろう。

「そんなこと言っちゃダメだよ?」

なのはは軽く智の頭をゴック。

そして彼に視線の高さを合わせると言った。

「君が傷ついたら桐斗君も夕陽ちゃんもフェイトちゃんも悲しむよ？もちろん私だって悲しくなっちゃう。」

「僕は兵器です。普通ではありません。」

「兵器でも普通でなくても智君は智君だよ？智君の力は呪われたモノじゃなくて誰かを守る為の力なんだよ？」

「……………」

智は顔を下に向ける。俺には智は泣くのを必死に我慢しているように見えた。

そこになのはは優しい声で聞いた。

「智は誰を守りたいの？」

「僕は……………」

智は顔を上げ笑顔で答えた。

「僕は僕の周りにいる人達を守りたいです」

その笑顔はとても清々しく。とても明るかった。

「相馬さん、なのはさん。この二人どうします？」

バインドで拘束した片や黒焦げ、片や気絶している智君を襲った謎の人物。

持っているのは銃型のデバイス。

処置としてはアースラへ護送、艦長であるリンディさんの指示に従うのがベストだ。ベストなんだけど

「今気付いたんだけど……。」

「なのはさんどうかなさいましたか？」

智君が首を傾げる。相馬君は気付いてるみたい。

「ちっさいな……。」

「うん……。」

「僕の成長はまだまだこれからですよ!?!」
いや、智君じゃないんだけど……。

「この二人のことだよ。」

身長からしてどう見ても子供。体型から女の子というのがわかる。
そんな子がなぜ智君を……。

「とりあえず素顔を拝ませて貰うか……。」

「あ、僕がやります。」

智君は二人に近付き覆面を外す。智君を襲った人物の素顔はとても可愛らしい女の子だった。

更に

「双子!?!」

そう。全く同じ顔が二つ彼女達は双子なのだ。
その時、智の異変に気付いた。

「そ、そんな……………」

手に持っていた二人の覆面を落とす。その手は震え、彼の顔は信じられないモノを見たようで真っ青だった。

「智、お前の知り合いか?」

「は……………い……………」

言葉が震えている。

「彼女達の……………名前……………は。伊集院 恵美と、恵那。僕の……………クラスメイトです」

目の前にいるのは僕のクラスメイト。いつも勉強の邪魔をしてお昼には問答無用に連れさって。無駄に元気な二人。

その二人が僕を襲った？

頭の中がぐるぐると周り混乱する。

なんで？ どうして？なぜ？

わからない。わからない。わからない。わからない。わからない。

わからない。わからない。わからない。わからない。

「おい！智！！」

「智君！？」

なのはさんと相馬さんが大声で呼び掛ける。

その呼び掛けに僕は身体をビクつかせて二人の顔を見る。

「信じたくないのはわかる！だが今は落ち着け！！」

「二人を安全な場所に連れて行って事情を聞こう？」

二人の提案に僕は頷く。

相馬さんが恵美さんを、なのはさんが恵那さんを抱える。

「このままアースラまで転移するぞ」

「うん……けど今日はこのまま早退になっちゃっね。」

「仕方ないさ」

そう言つて相馬さんは自身の持つレアスキル【Space dis
tort】を発動させようと意識を集中する。

するとその時、なのはさんに迫る刃が目に入った。

「なのはさん……！」

「……………え？」

僕は叫ぶがなのはさんは反応が遅れた。

迫る刃はなのはさんを捉える。

十五話（後書き）

まだいきます!!

十六話（前書き）

たりや

十六話

「なのはさん!!!」

智が叫ぶ。俺が視線を彼女へと向けた時はなのはに刃が迫っていた。咄嗟に彼女と刃の間に入った。自分でも驚くぐらいの条件反射だったと思う。

【Protection】

自動修復モードのヴァルナをたたき起こし防御用のシールドを展開した。

弾ける閃光。

シールドを砕こうと障壁を削る光が辺りを飲み込む。

俺の背筋に汗が伝う。

重い。これ程までに重い一撃は受けたことがなかった。

歯を食いしばりながらなのはと智に言った。

「逃げる……」

次の瞬間。俺の防御障壁は破られ俺はヴァルナで自身を守ったが衝撃で吹き飛ばされる。

「かつ……!!?」

「相馬さん!!」

「相馬君!!」

その際背中を打ち肺の中の空気が全て吐き出される。意識の端に二人の声が聞こえたがそれを無視して瞬時に状況を整理
現状は招待不明の敵による襲撃。

戦力分析。

敵の実力はおそらく俺より上。

俺がああ瞬間まで気づかなかった所からして相当の実力者だ。武器は巨大な鉞。細い体つきとは見合わないがパワータイプだろう。

対してこっちは砲撃が得意な魔導士と接近戦重視の俺。智は除外だ。そしてヴァルナはどっかの誰かのせいで半壊。たく……。

「泣けてくるね……」

俺は立ち上がると二人の前に立ち見慣れぬ敵と対峙する。

よし……。プランは決まった。

『なのは……。俺が先に突っ込むからデカイの頼む。』

『うん。気をつけてね』

なのはに念話で指示をして俺はヴァルナを構える。頬に痛みがある。どうやら先程の一瞬でかすかながらアイツの刃は俺を捉えてたようだ。

その証拠に奴の鉞には俺の血がついている。それを仮面をつけた不適な笑みで舐めている。

趣味の悪い変態か？

そう思いつつヴァルナに指示を出す。

「ヴァルナ……三十秒だ。その間耐えろ」

『YES Master』

ヴァルナの返事を聞くと俺は大きく息を吸い込む。

後ろでは智があの子の双子の片割れを支えなのはがレイジングハートを構えている。

いくぞヴァルナ。全開のノンストップだ。

瞬間、俺は駆ける。

蒼い閃光は一瞬で間合いを詰めて仮面の男に突きの雨をを降らせる。さながらそれは蒼銀の流星群。

普通の使い手なら避ける間もなく平伏すだろう。これを奴は口元に笑みを浮かべながら巨大な鉞を使い捌く。

だが俺はそれを既に予想していた。

だから攻撃の手は休めない。

突き、切り裂き、薙ぎ払い。全てを一連の動作で行う。

もちろんヴァルナには魔力をこれでもかというほど込めている。

半壊のコイツにこれはキツイのはわかってはいる。だが手を抜けばこちらが危うい。さっきもヴァルナに言ったが三十秒だ。三十秒持たせればこちらの勝ちだ。

『あと15秒！！！』

内心で叫びながら徐々にスピードを上げていく。

俺の戦法はスピードによる攪乱と手数。そして【Space distort】による変則攻撃。

魔力量もSランクとなのはに匹敵するモノを持っているがデカイ一撃は隙が出来やすいので最終的なキメとして用いている。それに魔力は身体強化にも回しているしデカイ一撃はなのはの方が威力が高い。

『あと10秒!!』

だから今俺はスピードと手数で攻める。

もっと早く! もっともっともっともっともっともっともっ

!!!!

限界なんてしてるか。限界は自分で作らなけりゃ限界なんて存在しねえ相手に余裕を持たせるな意識をこっちにだけ向けさせる

『5……4……』

残り5秒。俺は奴に向かって突貫。モーションが大きいため奴は俺には向かって己の獲物である巨大な鉞を横一閃に奮う。

俺は奴の間合いに入る瞬間。地にヴァルナを突き立て大きく軌道を変えた。

自身に迫る刃を紙一重で避け放物線を描きながら奴の頭上を飛び越える

『3……2……』

そして背後にあった壁に両足で着地すると足に力をこめてそのまま着地した壁を粉碎し再び仮面の男へと切り掛かる。

宙で身体を捻り長物であるヴァルナの遠心力と先程の推進力、限界まで魔力を込めたを一撃。

「蒼天一閃!!」

叫び声と共に切り掛かる。

奴はそれに答えるように全力で鉞を奮ってきた。

その鉞にも相当な魔力が込められていることが分かる。俺のデバイ

ス「ヴァルナ」と奴のデバイスである巨大な鉞。
それがぶつかりあう瞬間

「……………取った」

鬱すらと浮かべた笑みと共に奴の鉞とぶつかり合うはずのヴァルナ
と俺の姿は突然消えた。
そして……………

『ゼロ!!』

「スターライトオオオオ……………ブレイカー!!!!」

星を砕かんと言わんばかりの巨大な収束砲が放たれた。

相馬君が駆け出すと共にカウントが開始される。

私は智君を見る。彼はとても不安そうに現状を見つめている。いまでもまだこの子がロストロギアだなんて信じられない。だって普通の男の子だから。

「智君……」

目の前で必死に仮面の男を引き付けている彼を見ながら智君を呼ぶ。

「なのはさん？」

「智君。周りの人達を守りたいって言ったよね？それは私もなんだ。私には智君のような力はないけど私なりに出した答え……見せてあげるね」

私はレイジングハートを構える。

残り15秒……

『Exc elie on mode stand by』

機械音と共にレイジングハートの形状が変わる。

「いくよ……レイジングハート」

『OK・My Master』

残り10秒。

私は大威力の集束砲を放つ為に自身の周りに魔力を散布させる。その際相馬君の戦いぶりを見て私は正直に凄いと思った。

限界を知らずドンドン加速していく動き。早く、鋭く、凄まじく。

スピードはフェイトちゃんと同じかそれ以上か。

そんな中でも彼は私達に意識が向かないように立ち振る舞い、相手の余裕を奪っていく。エイミーさんから聞いた。第44部隊は別名『魔導騎士の座』と呼ばれていることを。私が本来『騎士』とよんでいるのははやてちゃん守護騎士『ヴォルケンリッター』のように優れたベルカ式魔導師の総称である。

相馬君や和弥君もベルカ式魔導師だがちよつとちよつと違うらしい。理由はなんだかんだでよくわからなかったが相馬君は『魔導騎士の座』の中は『魔導槍騎士』と呼ばれているらしい。

私と同じ年で私より凄い人がいるなんて思わなかった。彼が傍にいと安心して砲撃に集中できる。

残り5秒……。

チャージもあと少し。

相馬君が頑張つて押さえてくれている。私は私のできることをする！！おそらく彼のレアスキル【Space distort】だろう。

そこを私はすかさず

「スターライトオオオオ……ブレイカー！！！」

大型の集束砲『スターライトブレイカー』を叩き込んだ。

閃光が辺りを包む。手応えアリ！！と心の中でガッツポーズを決める。

今の一撃は確実に標的を捉えた。あのタイミングでは避けるのは不可能。それに私のSLBは防御障壁など意味を成さない。防御ごと

ぶち抜くのだ。

「なのは!!」

左の方から相馬君が私を呼ぶ声がした。レアスキル【Space distort】により転移した後私達の所に駆け付けて来たのだろう。私は笑顔で彼の方をみる。

だが……。

彼の顔は笑顔ではなかった。むしろ必死の形相だった。

すると自分の上空から飛来する膨大な魔力に気付いた。

桃色の集束砲撃魔法。

それは間違いなく私の魔力であり。

先程放ったスターライトブレイカーだった。

十六話（後書き）

まだまだいきます

十七話（前書き）

チエスト

十七話

目を開けるとそこはどこかの森の中だった。

木々の隙間から差し込む光。鳥たちのさえずり。

私はあの公園とは全く別の場所にいた。

「なのは大丈夫か？」

声をかけられ視線をそのまま横に向ける。そこには相馬君がいた。

「うん大丈夫。それより智君とあの子は？」

「お前の後ろで気を失ってるよ」

そう言われ私は後を見る。視線の先には気を失っている智君と彼を襲った双子の女の子の一人。

「わりい……。あのタイミングではもう一人を連れることができなかった」

「あの子ならきつと大丈夫だよ。それよりここは？」

「どっかの山の中。適当にゲートを開いたから場所まではわからん」

なるほど。私達が助かったのは相馬君がレアスキルで助けてくれたらしい。その時、私はあることに気がついた。

「相馬君……………」

何故か嫌な予感がする。

震える手で指差す。

その先には宙に波紋ができた空間があった。

「なんでゲートがまだ開いているの？」

「……………え？」

次の瞬間虚空に波打つ波紋の中心から腕が伸び相馬君をその中へと引きずり込んで行った。

「あの光…なのはちゃん？」

うちは今海浜公園にいる。和弥君を叩きのめしていたとき。遠くに見覚えのある魔力光が目に入った。

桃色の魔力光。私の親友の一人高町なのはのもの。

それに今気付いたのだがこの一帯を閉鎖領域がおおっていた。

「はやてここから5キロ西の山の中になのはがいる様子を見てきて」

「和弥君？」

さっきまでノビてた和弥君は立ち上がるとバリアジャケットを纏った。

「絶対にくるなよ……」

そう言うと勢いよく飛び立っていった。

空を駆ける深紅の閃光。

俺の背筋には冷たい冷や汗が伝っていた。

俺のレアスキル領域掌握【Area assumption】は自分から半径5キロの中の物の配置人の所在を正確にデータとして認識する能力。

またこの力は範囲内に存在する対象の情報放たれた砲撃なども読み取ることができるのだが

『相馬が落とされた？』

俺がはやてに追い詰められた時展開された閉鎖領域。てっきりなのはが展開したモノだと思っていた（ちなみに無断魔法行使）。

その少し後に放たれたであろう俺達二人の視界に入った桃色の集束砲。

アレは気軽に放てるレベルではなかった。だから直ぐに俺は領域掌握【Area assumption】を展開二人の事を探した。

結果は急を要する事となった。

なのは西に5キロの山の中。ノイズのある対象おそらく智と共に【unknown】情報が全く得られないなにかと一緒にいる。

彼女の方はバイタル、魔力量共に安定しているから問題はない。

問題は相馬の方だ。

彼は同じく情報が全く得られない【unknown】二つと共にいる。

相馬のデバイス【ヴァルナ】は45%の損傷。そして彼女のマスターである彼自身は瀕死の重傷を負っていた。

俺が知る中でも相馬は優秀な魔導騎士だ。

第44部隊別名『魔導騎士の座』

八人の前衛陣中で俺と同じく最年少、そして提督に続き俺と共にN.O.2の実力者。

それがこうも易々と落とされたのだ。

俺は目的地まで残り1キロの所までくると急激に上へと上昇する。そして相馬がいる場所との直線距離が2キロの所で停止するとデバイス【アルテミス】を構える。

「【魔導騎士】天津和弥参る。射抜くぞアルテミス」

『YES MY load』

領域掌握【Area assumption】展開。

弓を引き絞る状態で俺の意識は自分の中へと落ちる。
例えるなら真つ暗な空間で球体リーダーの中心にいると思ってくれ
ていいだろう。そこで表示される膨大な情報。人、建物、動物。
様々な情報を読み取り俺は自分から半径5キロメートルの領域を掌
握する。

相馬……。

死ぬなよ……。

『目標捕捉………。発動魔法選択……。』

俺の周囲に三十数個の魔力スフィアを展開。
展開したスフィアは激しく燃え上がる。

俺の魔力資質は炎。

敵を焼き尽くす天の炎。

次の瞬間三十数個の燃え盛る魔力スフィアは放たれた。
炎の魔力弾は全て【unknown】へと降り注いだ。
爆炎が激しく爆ぜる。

だが

【……………ターゲットロスト】

自身の深層で標的をロストしたことに驚いた。
転移魔法の発動は確認できなかった。

狙った筈のあの【unknown】が姿を消した？

その時背中に激痛が走る。

それで俺は自身の深層から引きずり戻された。

「……………な!？」

背中から吹き出す血液。驚愕する俺の視線の先には仮面を被った男がいた。

いつからそこにいた!? 吹き飛びそうになる意識を意地で保ち俺は急速に距離をとりつつ砲撃を放つ。

放たれた砲撃は真つすぐ仮面の男へと向かう。

その時俺は信じられないモノを見た。

「……………」

仮面の男が自分の手に持つ鉞についた血を舐めニヤリと笑う。すると彼の姿がぶれて同じ人間が二人になった。

そしてそのまま砲撃を避けると俺に向かって突っ込んでくる。

俺は咄嗟に迎撃する。

しかし……………。

気付けば俺は地に落ち血溜まりの中に沈んでいた。

「……………」

森の中で僕達はただじっとしていた。なのはさんは俯きながらギョツと拳を握りしめて震えている。動けないんだ。僕と恵那さんがここにいるから……………。そんなとき空からはやてさんが降りてきた。

「なのはちゃん智君!!」

「はやてちゃん!!」

なのはさんははやてさんに掴みかかる。なのはさんの表情は必死そのものだった。

「早く!早く!!」

「なのはちゃん落ち着いて!!ついさっき和弥君が増援に向かった所や!!!!」

「和弥君だけじゃダメなの!アレは普通じゃない!!」

「普通じゃ……………ない?」

『しぎげんよつ……………』

僕達は一斉に振り向く。

そこには仮面を被った一人の男性がいた。なのはは一瞬絶望の表情を見せた。そう、奴がここにいるということは彼は

「あゝあああああああああ！！！！！」

なのはさんは叫びながらレイジングハートを仮面の男に向ける。

「おやおや……。」

仮面の下に不適な笑みを浮かべる。

「デイベインバスタアアアアアアア！！！！」

放たれた桃色の直射砲。邪魔な木々を薙ぎ払って奴に襲い掛かる。

「フン……。」

それを鼻で笑い奴は手を眼前に翳す。瞬間空間は水面できた波紋のように歪んだ。

そこになのはさんの砲撃は吸い込まれていく。

今この瞬間、僕達の目の前で起こったこの現象は神田 相馬さんのレアスキル

【Space distort】

なんであいつが……。

「なんやアンタ……なんで相馬君と同じ能力を……」

「八神とゴルゴン……。その力素晴らしい……。」

はやてさんの力……。レアスキル【蒐集行使】そして僕の…僕自身としての力【ゴルゴン】

奴の狙いはそれが……。

なにが目的で力を集めるかは解らない。

奴がここにいるということは恐らく相馬さんだけではなく和弥さんも……。

はやてさんも感じているだろう。唇を噛み締めて奴を睨んでいる。なのはさんも涙を目に浮かべつつレイジングハートを構えている。

「なのはさん……。」

僕は一度だけなのはさんを見ると仮面の男に向かって問い掛けた。

「恵美さんはどうしましたか？後で気を失っている恵那さんのお姉さんです？」

「彼女ですか？彼女はもう用済みでしたので」

奴は僕達に向けてあるものを投げ渡した。それは血にまみれた銃型のデバイスだった。

「そう……ですか……。」

溢れ出す感情を押し止めつつ僕は意識を深層へと落とす。

僕達兄弟は深層ではリンクしている。これは僕達を作り出した人達

がつくつたもの。いままで切っていた接続を再びつなぐ

兄さん……夕陽……。今から指示する場所に行ってください。相馬さんと和弥さんが危険です。

お兄ちゃん!?

智!?!どこにいる!?!?

急いでください。お二人を頼みます。それと兄さん。

僕は今度は護る為に力を使います。

そしてリンクを切る。

「なのはさん、はやてさん。相馬さんと和弥さんの所には兄さん達が向かいました。大丈夫ですあのお二人はとても頑丈ですから」

笑顔でそう言う。僕は恵那さんを見る。

転校してきた彼女達は学校では唯一の友達だった。

その彼女達がなぜ自分を襲ったのかは解らない。

だけど目の前にいるアイツはその友達に手をかけた。そしてなのはさんを泣かせた。

それだけでは飽き足らず力が欲しいという勝手な理由で僕の周りの人を更に傷付けようとしている。

ならば遠慮はいらない。

「なのはさん……はやてさん……いますぐここから離れてください。」

「智君？」

僕は額に左手を当てる。

【封印解除シークエンス開始】

「今からここは僕の戦場となります。力の影響を大きく受けますので、いますぐ退避を……」

【第一、第二、リミッターリリース】

「智君だけじゃダメだよ!!」

「せや!!ウチラも戦うで!!ウチラじゃ勝てのうてもせめて桐斗君が来るまで持ちこたえればええ!!」

【第三、第四プロテクト、ブレイク】

「ウゥン……。そういう訳じゃないんですよ。僕は一対一や一対複数に特化してるんで僕の視界に間違っって入っって欲しくないんですよ。」

「だけど……」

「お二人は相馬さんと和弥さんの所に行っってあげてください。」

「なのはさん。さっきのあの言葉嬉しかったです。あの……よかつたら姉さんっって呼んでもいいですか？」

「……うん。気をつけてね智」

「ハイ。姉さん」

なのはさん達……姉さん達は僕を今一度見ると相馬さんと和弥さんの所へ飛び立っっていった。

「へえ……。案外すんなり行かせてくれるんですね……。」

「彼女の力も魅力的だが先ずは君の【ゴルゴン】の力の方が欲しくてね」

なるほど……。だからすんなり行かせくれたんですね。僕は冷たい笑みと共に額に当てていた左手を下ろす。

この時、僕の瞳は青から真紅に染まる同時に蛇の眼に変わる。
瞬間、僕の視界にある全てが次々と石となっていく。
緑の世界が一瞬で灰色の世界となった。

ここは僕の世界。一方的な略奪の世界。

「人の悲しみの代償、払っていただきますよ」

最終プロセス

コード入力

承認

アルハザード第四防衛戦守護者【ゴルゴン】

起
動

十七話（後書き）

まだいきますよ

十八話（前書き）

だっしやー

十八話

次々と目の前が石に変わっていく。草木が、虫が、鳥が……。

ここは僕の世界。

一方的な略奪の命のない世界。

「……………」

僕は上着を脱ぎ捨てる。

仮面の男はもう僕の視界にはいない。僕の視界に入るということは

【死】を意味する。

だからあの一瞬で奴は姿を消した。

気配は感じられない。物音もしない。魔力も感じられない。

いる筈なのにいない。あの男はそれを体現している。

全く……兄さんとは正反対ですね。

僕はぐるっと一回り見渡す。それに合わせて僕の周りは全て石となる。

これでこの場所には僕以外の命はない。その空間で生命を感じられるということは……。

一本の木に向かって駆け出す。

リミッターを全て解除した僕の身体能力は文字通り異常。

石柱となった木を勢いよく突き出した左手が貫く。

凄まじい破壊音と共に木が倒壊。その影から飛び出した人影を睨みつけて石に変える。

だがその人影は光の粒子となって四散した。
次の瞬間自分の後方から迫る魔力反応を感じとった。
魔力砲撃だ。

直ぐさま右手を砲撃にたたき付け受け止める。

この程度なんの問題もない。僕は砲撃を掻き消すと砲撃が放たれた方へ突っ込む。

この【死】の世界では生命は自ずと見ずからの命の存在を教えられる。

命を感じ取ることができたなら奴は必ずそこにいる。

「バレバレですよ……………」

僕が突っ込む先の木の影から二つの影が飛び出してこちらに突っ込んできた。

その二つの影とは仮面の男だった。

仮面で容姿は解らないが姿形は全く同じ。行動も全く同じ、同じ動きでこちらに突っ込んでくる。

この現象にも見覚えがあった。ついこの前僕と夕陽を襲った男達、フェイトさんの義母さんの話によると時空管理局が指名手配していた犯罪者集団【狩人】。

そのトップ

【ハロルド・ヴァルディア・セバステイン】

彼の持つレアスキルで自身と全く同じ存在を作り上げる力【失われた兄弟】。奴がこの力を持っているということは恐らくハロルドは兄さんから逃げた後に襲われたのだろう。そう考えれば納得がいく。

「だが僕には関係ない!!」

僕の視界に入った生命は自動的に死ぬ。
突っ込んで来た二人も石となり砕け散る。
『素晴らしい……ますます欲しくなったよ……』

不適な笑い声が耳に入る。瞬間、僕の周囲の空間に波紋がいくつも出来た。そこからいくつも飛び出してくる魔力弾。凄まじい数のそれは全包围から僕に襲いかかった。

「この程度で……」

僕は足に力を込める。

こんな状況なんて昔は何度もあった。自分のみに降り注ぐ攻撃の雨。僕達がまだアルハザードにいた頃。その世界の兵器として戦った頃。

何度も経験している。

「僕を落とせると思うな!!」

眼前から迫る魔力弾を睨みつけ石に変える。そこを駆け抜けて魔力弾の雨から脱出した。

「いやいや、本当に素晴らしいね彼は。」

僕から離れた位置で仮面の男は一人笑っていた。

「流石アルハザードの第四防衛線を任されていただけあるよ。」

その手には明るい茶色の魔力光の鉞型のデバイスが握られている。

「だが、君の弱点はもう見抜いた」

さあ、怪物狩りといこうか

「……………」

絶え間なく続いていた攻撃の雨は突然止んだ。

炸裂音や倒壊の騒音で包まれていたこの【死】の世界は沈黙に包まれる。

不気味に流れる沈黙。

背中に鬱すらと冷や汗が伝う。

さっきまで感じていた生命が忽然と消え失せていた。

何故いきなり消え失せたのか。

まさか、はやてさんを追っていったのか？

いや、その可能性は低い。あっちには兄さんがいる。兄さんは僕とは次元の違う強さを持っている。

そんなリスクを自ら負うとは思えない。

「なにか仕掛けて来ますね……」

そう考えるのが妥当だろう。

僕は灰色の空間の中心で身構える。

……来た。

自分の真上に右手を翳す。

次の瞬間、凄まじい威力の魔力砲撃が右手にたたき付けられた。茶色の魔力光の直射砲は先程とは比べモノにならない威力だった。歯を食いしばる。

重い……けどまだいける！！

「ハアアアッ！！」

思いっきり腕を振り抜き砲撃を掻き消す。

それに合わせて周囲に円を描くように空間にいくつももの波紋ができる。

そこから魔力弾が大量に放たれる。

それを僕は飛ぶことで避けようとする。

だが

さあ、怪物狩りを初めますよ

「！！！？！？」

地から伸びた腕に足を掴まれることよってそれを阻止された。

そこにすかさず叩き込まれた魔力弾の雨。全身に激痛が走る肉が焼ける。

骨が悲鳴を上げる。

僕人身の身体が普通とは違ったら今頃ただの肉塊になっていただろう。

だがこの身体を捉えた非殺傷設定を解除された魔法は僕の意識持つていこうとする。

それを歯を食いしばり耐える。意識がぐらつく。しかしのんなことはお構い無しに僕の眼前の波紋からなにかが飛び出す。

今の僕の視界に入ったモノは例外なく石になる。

だが、波紋から飛び出した何かは石になる寸前に爆ぜた。

瞬間、僕を飲み込んだ凄まじい閃光。

瞳を焼かんばかりの光は僕の目を捉える。

「があ、ああああ！！？」

網膜を焼かれるような痛みには僕はその場に疼くまる。やられた……。

奴は僕の一番の武器であるこの眼を封じてきた。

僕は暗闇のなか震える足で立ち上がる。

逃げなければ……。

どこでもいいから逃げなければ。

アイツにこの力を渡してはいけない。渡してしまったら皆が危険になる。

足元に明るい灰色の魔法陣が展開された。

僕達も一応は魔法を使える。数こそは少ないが緊急用として昔アルハザードで記憶したモノだ。発動するは転移魔法。

『チエック……』

だが、奴はそれを許さなかった。

今だに周囲に展開し開いているゲートその全てから一斉に何か飛び出す。

それはレアスキル【失われた兄弟】によって作り出された仮面の男達。

男達はその手に持つ鉞型のデバイスを一斉に振り上げる。

……… 兄さん。

僕の意識は完全に刈り取られ深い闇に落ちた。

俺とフェイト、夕陽の三人は智からの連絡を受けて相馬と和弥の所へ空を飛び向かっている。

「フェイト、なのはとはやての居場所を探してくれ。そこに二人はいる筈だ」

「うん、わかった。」

俺の指示を受け彼女はなのはとはやてに念話で呼び掛ける。少しすると彼女は額に汗を伝わせ俺に言ってきた。

「ここから2キロの公園。二人ともそこにいるよ。相馬と和弥とても危険な状態だつて……」

「そうか……」

俺の表情に雲が刺す。

俺も二人の事は良く知っている。実力も確かだ。だがその二人が落とされた。一体なにがあった？。

「お兄ちゃん……」

俺の背に乗っている夕陽が心配そうな表情を見せる。恐らく相馬と和弥が落とされたことにより智が心配になってきたのだろう。

「大丈夫だよ」

そんな彼女の気持ちを悟ってかフェイトが彼女を安心させるように

笑顔を見せる。

「ああ、アイツら二人は俺が潰そうとして生きながらえた奴らだそう簡単には死なない。」

「桐斗一体なにしてたの？」

フェイトのジト目を軽く流し、俺達は目的地に着いた。下に見えるのは相馬と和弥の側で必死に彼らに呼びかけて治療魔法を掛けているのはとはやて。

彼女達の側に降りるとモニターが開いた。

『相馬君と和弥君は大丈夫！？』

モニターに姿を現したのはフェイトの義母【リンディ・ハラウン】

「義母さん！！緊急医療班はまだ！？」

「今、そっちに転送の準備をしているから二分……いえ、一分だけ待って！！」

「そんな時間はない。そっちの治療室の準備をしろ！直接送るから座標を言え！！」

声を上げ地に手を当てる。

すると相馬と和弥の真下に漆黒の魔力光のミッド式魔法陣が展開された。

それを見たフェイトを含む五人は驚く。

これは昔に記憶したモノ。滅多に使わないモノだ。

『座標を言っわね！！』

リンディが言った座標を俺は人の六倍のスピードで言う。そして二人は【アースラ】へと転移された。

「お前達はアースラへ行け……。俺は智の所へいく。」

「桐斗私も行くよ……。」

フェイトは立ち上がると俺の目を見て言ってきた。

「……わかった。夕陽お前はアースラへ行け」

「うん……。」

「桐斗君……智をお願いね……。」

「わかってる……。」

なのはに言われ俺は頷く。そしてなのはとはやて、夕陽はアースラへ転移した。

「桐斗……智の場所わかる？」

「問題ない」

【第一、第一4リミットまで解除】

リミッターを解除したことにより突然に吹き出す膨大な魔力。

木々を揺らし大気を震わせ、大地を怯えさせる。

コード入力

コード確認

漆黒と白銀の魔力は俺に纏わり付く。それが爆ぜた時、漆黒の外装、白銀の装飾が施された鎧が姿を現す。

アルハザード最終防衛線守護者【陰陽の剣】

起動開始

伝説の超高度文面アルハザードを守護する剣が姿を現した。

十八話（後書き）

いづれか

十九話（前書き）

チエリオ!!

十九話

「フフフ……。貴方の力は確かに頂きましたよ……。」

仮面の男の前に広がる血の海。そこに沈み動かない少年。

男は血に塗れた手を舐めながら狂気の笑みを零す。

「さて……次は八神はやてのレアスキル【蒐集行使】ですね。」

彼の目的は他にはない能力の略奪。

少年から次は少女に標的を移す。

領域掌握【Area assumption】発動。

その少女を探し出す為につい先程奪った魔導弓士の能力を発動する。この能力により半径5キロに【存在】する全ては彼の手から逃れられない。

『なるほど……。そこですか。おや？』

先程まで【存在】していた八神はやての反応が消失した。その隣にいた高町なのはの反応も一緒にだ。

この世界から次元空間に転移したのだろう。

仕方ない彼女はまたの機会だ。そう思い能力の発動を止めようとした時。自分の周囲にいきなり現れた反応を確認する。

男は直ぐに能力を止め現実に戻る。

そして彼の目に入ったのは

「おやおや……。」

周囲に浮かぶ白銀に光の剣群だった。
数にしておよそざつと五十本。その全てが一斉に襲いかかる。
男は身構えることもなくただ笑みを浮かべる。

【Space distort】発動

足元に波紋ができる。彼はそこに消えることで自分に襲いかかった
全ての剣をかわした。

少年だけ取り残された空間。

一本の木の影から金髪の少女と黒髪の少年、私、フایت・T・ハ
ラウンと霧咲桐斗が姿を現す。

「智!!」

私は血の池に沈む少年に駆け寄る。全身傷だらけの私にとっては弟
的なこの子。みるみるうちに血の気が引いていくのを感じ今にも倒
れそうになる。

けど、倒れる訳にはいかない。必死に彼の名前を呼ぶ。

「智！しっかりして智！！」

「フェイト落ち着け！！」

取り乱し気味の私に桐斗の冷たい声がかかる。思わず私は彼を睨んでしまった。

なんでそんなに冷静でいられるの？

「智が大怪我してるんだよ！？手当てしないと！！」

叫びつつ智に治癒魔法をかける。私はあまりこの魔法は得意ではない。正直気休め程度にしかない。

私はどんどん焦っていく。

お願いだから無事でいて。

「すまない……。俺は破壊の為に造られた存在だから治癒魔法のよ
うなことはできないんだ。」

その言葉に私は冷静を取り戻す。彼は冷静ではなかった。内心ではかなり焦っている。破壊の力しかなく治すことのできない自分を彼は悔やんでいるのだ。

「ゴメン……。」

「いや、気にしなくてもいい。そのまま続けてくれ」

「え？早くちゃんと治療できる場所に送らないと」

「そいつを確実に仕留めるには首を落とすしかない。出血は酷いがもう止まってる」

その言葉を聞いて私は智の身体を見る。確かに出血は止まっていた。

「自己防衛が働いたんだろう。一時的な仮死状態だ。」

「でも!!」

「ああ、確かにそのままじゃ危険だ。」

桐斗はゆっくりと後ろに振り向く。そしてある一点を睨みつける。視線の先には手を真っ赤に染めた仮面の男が立っていた。

「だがアイツを叩き潰しても遅くはない」

「お前が……」

男の手についた血を見て私は激昂する。

お前が手にかけたのか!? お前がこの子をこんな姿にしたのか!? 引いていた血の気が今度は煮えたぎるように沸き立つ。

私は自身のデバイスであるバルディッシュを手を立ち上がろうとする。がそれは桐斗の手によって制された。

「お前はそいつに着いてやってくれ。」

そう言うと彼は自分の影に左手を沈める。引き抜いたのはねっとりしたような負の威圧感を放つ漆黒の短剣だった。それを仮面の男に向けると静かにいい放つ。

「どうやってこの世界に来た。お前はまだロールアウトすらされていない筈だ」

彼は何を言っているのだろうか？

ロールアウト？ 彼は何かの機械なのか？

そう思った時、私は一つの結論に至った。

「君達がこの時間、この世界に渡ったすぐ後だよ。」

「なんの為にだ？」

「君達の破壊……。まあ、そんなことはもうどうでもいいんだけどね」

桐斗達の破壊。

その言葉が意味することは一つ。

「さて、君の力も頂くとしよう。アルハザードの絶対守護者【陰陽の剣】と呼ばれた孤高の皇帝の如き力を……。」

「新顔の分際で雑魚が意気がるな。【模倣と侵略の悪鬼】。」

行き着いた結論。そう、彼もアルハザードから流出した兵器【ロス
トログリア】だということだ。

「そっちの名前はもう捨てていてね。今では君達のように別の名と
肩書きを名乗っているよ。」

彼の側の空間に波紋ができる。そこに腕を差し込むと巨大な鉞型の
デバイスを引き抜いた。

「時空管理局第44部隊『魔導騎士の座』筆頭【エグゼナ・エリオ
ス】。まあ、この名も私にはなんの価値もないのだけどね」

「エグゼナ・エリオス!？」

私は耳を疑った。その名は相馬と和弥が所属している部隊の隊長。時空航行艦【ヤーウエ】の艦長にして提督である人物の名だった。エグゼナは仮面を脱ぎ捨てる。その顔はこの前見たエグゼナ・エリオス提督本人だった。

「何故貴方がこんなことを……まがいにも管理局の人間の貴方が……」

私は拳を握る。

エグゼナ・エリオスという人物は私も知っている。部下や上層部から信頼を置かれ、悪を許さない人物だ。相馬と和弥も彼の事を信頼していたのだ。それに対して私は怒りを感じている。

「その質問に答えよう。一つは彼等を探すのに都合が良かったから。もう一つは【裏切り】を知った時の人間の顔が私にとっての楽しみだからだよ」

「貴様……」

「フェイト、もういい」

桐斗はゆっくりと漆黒の短剣を振り上げる。

「【模倣と侵略の悪鬼】……貴様を見ているだけで不愉快だ消えろ。」

そして振り下ろした。次の瞬間漆黒の魔力の波動が濁流の如く吹き荒れ彼の前を飲み込む。

この時感じた魔力に私は身震いする。

これが彼の力。その力は正に孤高の皇帝。何人たりとも寄せつけない絶対の力だ。

『流石皇帝。凄まじいモノだね』

濁流のすぐ上に波紋ができ、そこからエグゼナが姿を現す。

その力はおそらく相馬と同じモノだった。それを冷たい視線で見つめ桐斗は私に言った。

「一分でカタを付ける。それまで智を頼む」

「うん……」

私は彼に頷いて返事をする。

彼は今度は右手を横に翳し握りしめる。

握りしめた右手に光が集まるとそれは光り輝く白銀の剣に変わった。そして冷たくエグゼナに言い放つ。

「いくぞ……。」

それから正直無茶苦茶だった。

表現がおかしいと思うがこれが一番正しいと思う。

私の目の前で吹き荒れる白銀の嵐。荒れ狂う漆黒の濁流。

彼が一度白銀の剣を振るえば石となった木々は跡形もなく吹き飛ばされ。漆黒の短剣を振るえば大地に生々しい傷痕がつく。

彼はその場からほとんど動いていない。

ただ剣を、短剣を振るうだけ。

それだけで相手を一撃で葬る波動を放っている。

エグゼナの方は時には相馬と同じ能力で避け、時には以前智達を襲ったハロルドと同じ能力でもう一人の自分を作りだしそれを桐斗に仕向ける。

目の前で起きているのは私の中の常識を越えた戦い。

一切の介入を許さないモノとなっていた。

「どうしたのかな！！君の力である【陰陽の剣】は使わないつもりかい！？」

エグゼナは狂気に震えた笑顔で叫ぶ。

「そんなにお望みならくれてやる」

次の瞬間。夥しい数の光の剣がエグゼナに降り注ぐ。

それを相馬と同じレアスキルでかわして桐斗に向け砲撃を放つ。

「無駄だ」

彼は軽く漆黒の短剣で一閃、砲撃を掻き消す。

「貫け……」

すかさず桐斗が呟くとエグゼナの影から黒い剣が伸び襲う。

それを飛ぶことでかわすエグゼナ。

休む暇もなく繰り返し出される漆黒と白銀。普通の魔導師ならとっくに葬られている。

いや、一流の魔導師でも葬られているだろう。

それだけ彼等が異常なのだ。

「ふむ。ではこれでいこう……。」

エグゼナは突如動きを止めて左手を額に当てる。

「……………まさか!？」

その行動になにか気づいたことがあったのか桐斗は突然私達の方へ振り向き漆黒の短剣を私の足元へ突き刺す。

「桐斗!？」

次の瞬間。漆黒の短剣は溶けて影となり私達を飲み込んだ。真つ暗な空間。音も光も届かない闇。

そこは不安も恐怖感も感じられない。この影は恐らく私達を護る為に桐斗が作ったモノだろう。

「お願い…無事でいて…………。」

そこで私は外で戦っているであろう彼の無事を祈るのであった。

「……………」

フェイト達を影で包み込んだのを確認すると俺は奴に向き直る。

アイツが使おうとしているのは智の力。

【ゴルゴン】の石化の力。

フェイト達では奴の視界に入った瞬間石にされてしまう。

「器用貧乏な兵器だな……」

「それが私の取り柄でね。少々勿体ないが君には死んでもらうよ。」

そして奴は左手を下ろした。瞬間、俺の身体に枷がかかったように重くなる。

だが

「言っておくが俺には効かん」

視覚とは光が物体に反射され水晶体を通り網膜に映った映像を認識するモノ。

【ゴルゴン】の石化の瞳はそれを逆手に取り光の水晶体へ入射する光にそのまま術式を載せ送り返す。この際に送り出される術式は石化の魔法を何千、何万と凶悪にしておりあたかも神話のように魅入られたモノは石となる。

ならばその光を捻曲げればいい。

今の奴には視界が真っ黒になっているだろう。

そして俺自身にはいくつもの強固な障壁が展開されている。故に俺には効かない。

「なっ!？」

ここに来て初めて奴は焦りの色を見せる。

「一応言っておこう。その力は智だけが適性を持てた力だ。そのままその眼を使っていると魔力が枯渇して死ぬぞ？」

「かあっ!?!」

俺の忠告と同時に片膝をつき苦しみ出す。俺はゆっくりと歩み寄る。もう先程のような身体にかかる枷のような重みもない。

【模倣と侵略の悪鬼】を見下しながら剣を振り上げる。

「安易に力を吸収し過ぎたな。」

「このままでは……終わらないよ!?!」

苦痛の表現のままその手に持つ鉞を振るう。

だがそれは力なく俺の頬を掠め小さな傷を付けただけで終わった。

「もういい……消える。」

その一言で空を埋め尽くすように次々と作られていく光でできた巨大な剣の数々。

それらは俺の命令の下振り下ろされた。

十九話（後書き）

次でラストオオオオ!!

二十話『第一部最終話』(前書き)

つ、疲れた……

二十話『第一部最終話』

私達を覆っていた影が取り払われた時にはもう決着が着いていた後でした。

桐斗の外傷といえば頬にできた傷とエグゼナの返り血を浴びただけ。エグゼナの至つ遺体は彼が跡形もなく吹き飛ばしたらしいです。

その後、智は直ぐにアースラの治療室へ運ばれました。命に別状はなく桐斗曰く二日ほど休めば完全に回復するとか。その事をみんなが聞いた時もの凄く驚いてたなあ……。まあ私もそうなんですが。夕陽は彼の側で付きつきり看病をしていた。本当にお兄ちゃん想いなんだなと思います。

相馬と和弥も一命をとりとめたそうです。なのはとはやては泣きながら喜んでいました。

その後の管理局の動きとしては第44部隊『魔導騎士の座』は解体。部隊の隊員は他の隊へ転属とのこと。エグゼナ・エリオスの本性。アルハザードの存在の発覚で上層部は大混乱。

過去に滅んだ筈のアルハザードの流出したロストロギアである桐斗、智、夕陽は封印処置の必要無しと判断。エグゼナに一時期加担していた伊集院恵那さんも意識を取り戻した。何故加担したかを聞くと変な力で操られていたとか。恐らくエグゼナが過去に取り込んだ力の一つと思われ彼女は保護観察が付きながらも無罪となった。

ただ私は納得いかないことが一つあります……。

「なんで桐斗が収容所に入らなければならないの!？」

桐斗が今回の事件により時空管理局の収容所に入れられることになったということです。

地球にある私のマンションでテーブルに乗り出しながら義母さんとクロノに詰め寄る。私の額には青筋が浮かんでいることでしょう。

それはもうはつきりよ。

「ごめんなさいフェイト。私も進言したんだけど。殺人が絡んでいて。執行期間を軽くすることしか出来なかったの。」

「自己防衛ですよ!？」

「すまないフェイト。これは彼も了承して弟の分まで罪を背負ったんだ」

「智の分まで？」

「ええ、あと自分がいない間の弟、妹の面倒を条件に釈放後の管理局加入も述べて来たの……」

「……期間は？」

「七年だ……」

私は顔を伏せるて拳を握る。
そして顔を上げると二人に言った。

「智と夕陽の、弟と妹の面倒は私が見ます。」

「わかってるわ。それだけは無理にでも通してあげる。」

「ありがとう。それとクロノ……」

この時の私の顔は極上なくらい怖い笑顔だったと思う。
なんたってあの義母さんの顔が引き攣っているぐらいだ。

理由はもの凄く簡単八つ当たりしたい気分だったから

「だいつキライ」

「!!!!」

このセリフを聞いた瞬間。石化するクロノ。それはもう智に睨まれたように。
それだけを言い残し私は部屋を出た。

【三年後】

「夕陽つたら」お姉ちゃんは「からお料理勉強し直さないとダメ！」

！』つて言つて私のお料理たべてくれないんだよ！？」

「いやそれは智と夕陽に教えられて全然進歩のないフェイトに問題があるんじゃないのか？」

今私は桐斗が收容されている時空管理局の收容所に彼の独房の中にいる。

中学を卒業してまず私はここに来た。

卒業した事を彼に報告する為にだ。ここは刑の一番軽くかつ管理局に協力を表明した人間が入る場所。

本当に收容所？と思われるほど快適な場所だったりする。

ちなみに私がここへ簡単に入れるのはクロノの根回し。

普通ならこんな場所でも桐斗とはガラスごしにしか話せないけどそのおかげで私達は水入らずでお話ができるのだ。

そんなこんなで私は半年ぐらい嫌っていた兄への関係を元に戻してあげたのだ。

また、初めてここに来た時私は彼を怒鳴り付けた。『何を考えているの！？』や『智や夕陽はどうするの！？』など最終的には泣き崩れてしまった。

それに対して桐斗はなんども『ゴメン』と言って私に謝る。

そして自分が收容所に入った訳も話してくれた。

ロストロギアである自分達が関わった事件のせいで時空管理局になにかと大義名分を与えてしまったということ。その気になれば管理局に敵対しても今の生活は続けようと思えば可能とのことらしいがその為弟妹が狙われるのと私と敵対することが嫌だったらしい。だから自己犠牲という形をとったのだ。

けどこれが彼なりの弟、妹の守り方なんだと今は思う。

そして今

「……………智と夕陽は元気か？」

「うん……………。二人とも元気だよ。私が家事をしようとしてももう終わってる程だし」

「そうか……………」

この答えに桐斗は満足そうに頷く。

「ねえ、桐斗……………」

「なんだ？」

「私ちゃんとお姉ちゃんできてる？」

「大丈夫だ。」

沈黙が狭いこの部屋を包む。

私は勇気を振り絞り桐斗に言った。

「私、本当のお姉ちゃんになりたいんだ。」

「なってるだろ？」

「違うの。言葉だけの関係じゃなくて本当のお姉ちゃん……………」

首を傾げる桐斗。

「それもあるんだけど。あのね！私！！」
その日の空は私の気持ちを応援してくれているように綺麗に、とても綺麗に澄み渡っていた。

貴方の生きる意味はなんですか？

私は大事な人と過ごす為に生きます。

貴方の生きる意味。

見つかるといいですね

。 b y 時空管理局執務官 フェイト・T・ハラオウン。

二十話『第一部最終話』(後書き)

とりあえず感想お待ちしております

あとがき(前書き)

第一部あとがきです

あとがき

どうも魔法少女リリカルなのは〜時空の剣〜
を書いてるアイズです。

一応この作品の第一部はこれで完です。

まずめちゃくちゃ変な終わり方になったこと自分の文才のなさをこ
こにお詫び申し上げます。

読者の皆様本当に申し訳ありませんでした。

そして最後まで読んで下さった方ありがとうございます。

さて、私の作品はこれで終わりではありません。

次書かせていただきますのはこの作品の続編。

主人公【霧咲 桐斗】が収容されて7年後のお話しになります。

物語の構成を考えていますのでその間はこちらに番外編をSS感覚
で書いていきます。

桐斗本人の登場は少なくなると思いますがそれでも読んで下さった
ら幸いです。

最後に今後とも

よろしくお願いいたします。

あとがき（後書き）

次は番外編を更新します

伝説の剣番外編 1 (前書き)

今日はこれで終わりと思ったたら大間違い!!

伝説の剣番外編 1

「お姉ちゃん朝だよ!!」

カーテンから差し込む日差しが気持ちのいい朝。部屋に女の子が私を呼ぶ声が響く。

ここはとあるマンションの一室。

そこで私【フエイト・T・ハラウン】は気持ちのいい夢の中にいた。

時刻は朝の8時。普通は既に起きてもいい時間である。

「……………もう少しだけ寝させて。」

唸りながら自分を覆っている毛布を頭まで被せる。

今日は日曜日!!寝ていてなにが悪いのか!?

しかし、我が妹【霧咲夕陽】はそれを許してはくれない。

「なに言ってるの!さっさと起きなさい!!」

そう言っただけ私にかかっている毛布を引っぱがした。

うう、最近夕陽が冷たいです。昔(?)はあんなにかわいかったのに……………。

仕方なしにまだ重いまぶたさすりながらベットを抜け出す。それを見て満足そうに頷いた夕陽は先に一人部屋を出ていった。

「もう朝ご飯できてたんだ……………。今日こそは私が作りたかったのに……………」

桐斗が管理局の收容所に入りおよそ三年と半年が立つ。私は中学を

卒業して本格的に執務官として働いている。

「お姉ちゃんがいつまでも寝てるからだよ」

夕陽は八歳になり私の後を追って一年前に管理局に入局。

今は執務官候補生として私の下で働いています。

もしかしたら最年少の女性執務官が誕生するのも知れません。

この天才少女には私もびっくりです。正直もの凄く自信を無くします。

「それに料理したいならフェイトさんは最低僕レベルになって下さい。」

智は桐斗が入所して一年後に管理局へ入局。今は執務官になり今は兄のクロノ提督が艦長を勤める【アースラ】にいます。

私と同じ日に試験を受け受かったのです。私は一回落ちたのに……

「最近……お姉ちゃん悲しいなあ……」

「「「だっただらもっとしっかりしてください（しよつよ）」」」

とまあ、こんな感じで異質な執務官兄弟は今を楽しく過ごしています。

「それにしても珍しく休暇が被りましたね。」

「そうだね。お兄ちゃんが私達の休暇と被るのは珍しいよね？クロノおじさんの所スツゴく忙しいんじゃないかなかったっけ？」

管理局で働く局員は滅多に休みが取れない。例え取れたとしてもこうして別々の所属の人間が被ることはほとんどない。そんな感じに話している二人を見て私はフッフ と不気味な笑みを零す。ちなみに二人は気付いていない。

「ええ、何故かいきなり『お前は明日一日休みだ。』って言われたんですよ」

首を捻る智。

実は今日の休み、私が根回ししたのだ。使ったのはたった一言。

『お話しする?』。

なにやってんだこの人?なんて思われようが関係ありません。大事な弟や妹と過ごす為には手段を問わないのです。

「智は今日暇だよね?よかったら一緒に買物でもどうかな?」

「そうだね一緒に行こう!お兄ちゃん!」

「すみません。今日は行く所があつて……」

申し訳なさそうにする智。残念そうにする夕陽。

そしてこの世の終わりのような顔をした私。

え?なんで?今日は皆で過ごす予定だったのに。その為にお兄ちゃんにお願ひして、脅して、実力行使に出て掴んだ皆一緒の休日。

それが一緒に過ごせない？

「さ、智はどこかに行くの？」

「ええ、あ、もうこんな時間ですか！すみません。お先にいきますね。夕陽、後片付けをお願いします！！」

「はいはい」

笑顔で兄を見送る夕陽。笑顔で出かける智。

「残念だね。今日は二人でお出かけ……ヒィ！？」

そして言葉にできないぐらいな味のある顔をした私だった。

【時空管理局本局・訓練施設】

「……………」
「……………」

えっと、私と夕陽はいま本局の訓練施設に来ています。それは何故かというと

「何しに来たんだろ？」

「お姉ちゃん……ものスッゴク怪しいよ？」

一緒に過ごすという予定を笑顔でぶち壊してくれた智の尾行ストーキングです。何故皆で過ごすこの素晴らしい一日を蹴つてまでここに来る理由を私は突き止める為気配を最大限に断っています。後ろでは夕陽がなんか軽蔑するような目で立っていますが関係ありません。今はこっちが大事なのです。

それより夕陽！！もつと隠れて！！

「はぁ……けどお兄ちゃん一体なにしに来たのかな？」

「わからない。もしかして執務官という権力を使って彼女の所に！？まだ智には早いよ！それよりもなんでお姉ちゃんに言ってくれないの！？はっ……もしかしてこんなお姉ちゃんを彼女には紹介したくないとか……。いや、相手は自分とは五つぐらい違う年上か年下、それってどっちもどっちで犯罪」

変な妄想を始めた私。

その後ろでは『なんでこんな人を姉と呼んでるんだろっ』という目をした夕陽。

ちなみに私は気付いてない。

そうしている内に智はてくてくと先にあるいていく。私達も置いていかれないように急いでなおかつ気付かれないように後を追った。

そして辿り着いた先は訓練用の立体シミュレーターがある訓練場。ここは沢山の訓練生が一人前の魔導師になれるように汗水流し訓練

に励む場だ。
どうやら今も訓練中のようだが……。

「アレ？あの教導官ってなのはさん？」

あ、本当だ。視線の先には訓練生をボコボコに痛めつけている我が親友【管理局の白い悪魔】こと高町なのはだった。

今はここで教導してるんだと思っていると彼女は智に気付き訓練を中断して訓練生に召集をかけた。

「実は今日、ちょっとしたゲストが来ています。霧咲智執務官です」

「始めまして。今日一日訓練に参加する事になりました霧咲智です。階級は僕の方が上ですが皆さんの方が年上なので僕の事は気軽に接して下さい。」

いきなり現れた若い執務官に驚くかと思いきや皆は知っているらしく。彼の笑顔に男性は弟を見るような視線。女性はかわいいと黄色い声を上げ、

私は『よく出来ました!!』

と彼の完璧な挨拶に心の中で賛辞を送る。

なんて事を思っていると訓練が再開された。

「それじゃ智、いきなりでなんなんだけど模擬戦いける？」

「ハイ！大丈夫です!!」

ゲストとして参加した智の始めの訓練は訓練生達との模擬戦。ルールとしては訓練生5人对智。一撃クリーンヒットを加えればその人物は撃墜。それをどちらかが全滅するまで行う。智はそのルールで3・4グループと戦うことになる。大丈夫なのはわかっている。あの子は私が胸を張って自慢できるぐらい強いのだ。だけど

「智、大丈夫かな？」

ものすごく心配になっている自分がいたりする。

「それじゃ始め!!」

【一時間後】

「はい。お疲れ様。」

「ありがとうございます。」

模擬が終わりなのは智に飲み物を渡す。

先程の模擬戦は智の圧勝だった。

当たり前といえば当たり前なのだがこうして改めて見ると彼の強さは凄いと思った。しかも今使っているのは一応強化されているとは

いえ支給されるストレージデバイスだ。使う魔法はシューターと飛行魔法のみ。後はデバイスを棍棒のように使ってるだけである。

「はあ……。フェイトさん、夕陽。出てきたらどうですか？」

「ふえ？」

いきなり呼ばれて私は変な声をあげる。どうやら見つかったらしい。

私達は苦笑いを浮かべながら二人の前に出る。その際に私の姿を見て訓練生達がなにやら騒いでいるようだが私は気にしない。

「フェイトちゃんなにしてるの？」

「夕陽と買物じゃなかったんですか？」

「そ、それは……。お兄ちゃんが一緒に来てくれなかったからお姉ちゃんがストーキングでしたの」ゆ、夕陽！！」

夕陽が私の心情を暴露した。

本当に最近私に冷たいよね！？仕方ないでしょ！？楽しみにしてたんだから！！

「で、いつ気付いたの？」

「いいよ。いいよ……。どうせ私は……。」

いじける私を余所に夕陽は智に尋ねる。

「忘れてませんか？夕陽と僕は深層ではリンクしているですよ？近くにすることはもう知っていましたし、休日にフェイトさんが夕陽

を一人にするはずがないじゃないですか。」

「あはは……。相変わらずだねえフェイトちゃん」

なのはまで私を虐める……。

もはやどん底の私でした。

「ところでなんで急に？本局へ？」

私は智に問い掛ける。

「え、いや……その……。」

すると智は気まずそうに頬をかきながら目を泳がせる。

それを見て夕陽となのはの目がキラーンと光った。

「お兄ちゃん。なに隠し事してるのかなあ？」

「私にも話せないことなのかなあ？」

スッゴク生き生きしてます。周りの訓練生が呆然とし、しまいには引いてしまっぐらい生き生きしてます。

智に詰め寄る二人。智は汗を流しながらゆっくりと後ずさる。

その時、彼の背中に誰かが抱き着いた。

「ヤッホー智」

それは金髪のショートヘアの可愛らしい女の子。それを見てなのはと夕陽は呆然とする。

すると私はあることに気付いた。

「もしかして……恵那？」

「お久しぶりですお姉さん　夕陽ちゃんもなのはさんも」

彼女は三年前の事件の被害者の一人伊集院恵那だった。
話によれば一年前に管理局へ入り、今は三等陸尉として働いているらしい。

智は休暇が取れたので彼女の所へ遊びに来たとのこと。けど友達としては二人の雰囲気はなにかちがった。なんかこうホワワン(?)
てきなモノを感じる。
そこで夕陽が一言。

「恵那さんもしかして……」

「うん。智の彼女さんやってます　よろしくね」

次の瞬間訓練場に私達三人の仰天の叫び声が響いたのであった。

「二人はいつから？」

訓練が終わって私達は本局のレストルームにいる。私、なのは、夕陽の三人の前には智と恵那。二人が付き合っていたことには驚いた。

「去年の今頃です。いろいろあってこうなりました。」

「ふん……。なんで私に教えてくれなかったのかな？」

多分私は今ものすごく怖い顔をしているだろう。なんせよこの夕陽が震えているのだから。

「私は早く知らせようと言っただけですけど智が。」

「ち、近い内に紹介するつもりでしたよ!？」

あたふたする智。なんか今私は弟を取られたような気分です。まあ、ここで喚いても仕方がないので私は二人に笑いかけることにした。

「恵那、智のことよろしくね。智はしっかり恵那の事を守るんだよ?」

「ハイ!」

私のいつつけに二人は元気良く返事をし、私はそれに満足そうに頷くのだった。

【その晩】

「桐斗…。智に彼女が出来たんだって……。」

「そうか……」

私は今日のことを報告する為に桐斗のいる収容所にきていた。とりあえずまずは私の愚痴を聞いてもらっている。延々三時間。途中眠たそうにしたら無理矢理叩き起こして続きを聞かせる。弟を取られた気分は正にこんな感じなのだろうか?その時知ったのだがあ

の二人。桐斗の所へ一番最初に来ていたらしい。それも去年の冬だ。それを聞いた私は奮起。智をとつちめるべく愛用の黒い戦斧を片手に自宅へと帰った。

あ、ちなみに智と夕陽、恵那が管理局に入局したのはまだ話していないのであしからず。

フェイトが出ていった後俺はため息をつく。

弟、妹思いなのはいいのだが……。最近過剰になってきてはないか？

「とりあえず逃げろとだけ智に言っておくか……」

もう一度ため息をつくと俺は自信の深層へと潜りミッドチルダに滞在しているであろう弟へ向けてフェイトという危険が迫っているという事を知らせた。

その夜、ミッドチルダの街に一人の少年の叫び声が響いたとか響かなかったとか。

伝説の剣番外編1（後書き）

智君に彼女さんがでてきました。

感想お待ちしております。

伝説の剣番外編2（前書き）

更にいきます!!

伝説の剣番外編2

「……………智」

「は、ハイ!!」

今、私と智は本局にあるレストランにいます。

普段は他の局員達で賑わっているこのレストラン。

今は私達二人しかいません。

それは何故かというと

ものすごく怒っている私の殺気がここに充満しているからです。

目の前には我が義理の弟である智。かれは文字通り蛇に睨まれた蛙ガタガタと震え汗を滝のように流しながら自分の足元に視線を向けている。

一向に顔を上げない。

多分ロストロギアをここまで怯えさせる魔導師は私やなのはぐらいだろう。

さて、読者の皆様にはなぜこうなっているのかイマイチ解らないと思う。

ちよっと時間を遡ってみましょう。

【一時間前】

「はあ〜。やっと終わった。」

机にぐでつと突っ伏す夕陽。彼女は今まで書類仕事をしていた。

「お疲れ様夕陽。はい」

私も仕事が一段落ついたので彼女に炒れたコーヒーを出していた。

ここは私の執務室。

そして今は仕事の合間の休憩、時には事件の話し、時には最近のブームの話など楽しく談話をしている。その時、私の所に通信が入ってきた。

「アレ？智からだ」

「お兄ちゃんから？」

今彼は管理外世界で兄であるクロノ提督の下任務についているはずだ。なにかあったのだろうかと私は不思議に思いながら通信を開く。

『やあ、フェイトさん、夕陽。』

「智どうしたの？今任務中でしょ？」

モニターの先に現れた笑顔で私達に挨拶をする。

『実は任務が早く片付きましたのでそっちに戻ってきたんですよ』

「流石お兄ちゃん」

私の後ろからひよっこりと顔を出す夕陽。そんな彼女に智は苦笑しながら言った。

「よかったら一緒にお昼でもどうかと思」

「うん。いいよ。今日は帰って来れるんだよね？じゃ、お昼に本局のレストランで」

返事も待たずに私は通信を切った。

「お姉ちゃん……お兄ちゃんなんにも返事してないよ？」

そんなことは知りません。

あの子に拒否権などないのです。

「なにか言った？」

「なんでもないです！サー！！」

【本局・レストラン】

「智どこだろ？」

お昼、私達は智の誘いでレストルームに来ている。
食事時ともあってここは人でいっぱいだ。この中から彼を探すのは
一苦労だろう。

「そんなことないと思うよ？ほらアレ」

夕陽が指差す先には笑顔で手を振る智。

私達は彼の所へいきそのテーブルに着いた。

「お兄ちゃんお疲れ様」

「怪我とかしてないよね？もしクロノにイジメられたら遠慮なく言
つてね私が懲らしめてあげるから」

「あはは……。僕のことなら心配いりませんよ。あの程度なら遅れ
を取るつもりはありませんから。」

その後は楽しく会話しながら食事をする。任務の内容やクロノの面
白い話、恵那とは最近どうなのかとからかったりとまあこんな感じ
だ。そんな時。

「あれ？フェイトちゃんに夕陽ちゃん、智？」

「なんや執務官兄弟勢揃いやなあ」

なのはとはやてが私達を見つけて近づいてきた。

「なのは、はやて。」

「はやてさん珍しいですねこっちに来てるなんて」

「ウチはちょっとした用事でな。そこでなのはちゃんと会ったんや」

「それで一緒にお昼になった訳。あ、ここいいかな？」

「どうぞ」

こうしてなのはとはやてを交えての昼食となった。

「そういえばなんで智はフェイトちゃんの事を『フェイトさん』って呼ぶん？」

「え？」

「そう言えば確かにお兄ちゃんは【お姉ちゃん】や【姉さん】って呼ばないね？」

「あ、いや……」

「私の事は【姉さん】って呼ぶのにね」

「智……それ、本当？」

瞬間、空気が一瞬で凍った。このレストルームは一瞬で氷河期に突入したのだ。注文したカルボナーラを食べようとしているはやての手は口元で止まり。夕陽は笑顔のまま硬直。なのははなにが起こったのか解らず首を傾げ智にいたっては汗を滝水のように流している。私は口に使っていたコーヒーマグのコップを静かに置き。

「なのは、はやて、夕陽……。ちょっと席を外してくれるかな？」

「「いえっさー！サーー！」」

はやてと夕陽はダッシュでレストルームから退室する。その姿は文字通り脱兎の如く。

「どうしたのフェイトちゃん？」

現状をわかってないなのは。私はいいかちよつとだけ二人で【お話し】させてといい退室して貰った。

そして現在に至る。

「……………智」

「は、はい!!」

私の呼びかけに返事をする。その声はとても震えていて目に見え怯えているのがわかった。

「いつからなのはこのこと【姉さん】って呼んでるの?」

「さ、三年前です」

三年前……。あの事件の時か……。

「じゃあなんで私のことは【姉さん】って呼んでくれないのかな?」

「そ、それは……。」

「私の事キライ?」

「いえ!そんなことはありません!!」

どんどん冷たくなる私の口調。それだけ夕陽と桐斗を含め智の事を大事に思っているのだ。

「なのはに先越されちゃったなあ……。どうしよっか?」

「どうしよっかと言われても……。」

笑顔でコーヒークップの中にあるスプーンを掻き混ぜる。そんな動作がドンドンと智を追い込んでいく。

「言ってみようか?【姉さん、お姉ちゃん、姉様、姉ちゃん、姉貴、

姐御、お姉【さあ……】

「い、今ですか？」

智は周りを見るが誰もいない。既に逃げたのだ。

「ほら、言ってみようよ。【姉さん、お姉ちゃん、姉様、姉ちゃん、姉貴、姐御、お姉】。ほら」

「あ、あの……」

しどろもどろしている智。それを見て私はある行動に出た。

「智顔を上げて」

「は、はい……」

私に言われて智は顔を上げる。

次の瞬間

「姉さん！お姉ちゃん！姉様！姉ちゃん！姉貴！姐御！お姉！！」

とたんに大絶叫していた智がいた。

「うん 私も強制は良くないと思うんだ。だから智が素直な子でうれしいよ」

後に某少年執務官は語る。

『顔を上げた瞬間首を撥ねられるかと思いました。』

次の日からフェイトの事を【姉さん】と呼ぶようになった智がいた。

「そんな事があったのか……」

今日も来ました収容所にある桐斗の部屋。

「うん 私はやっと二人に【お姉ちゃん】と呼んで貰えてうれしかった。なのはに先越されちゃったのは悔しいけどね」

笑顔で笑う私。

「それは結構なんだが。あんまり二人をびびらすなよ?」

「そんなことないよ。だって私は」

二人の【お姉ちゃん】なんだから。

伝説の剣番外編2（後書き）

お姉ちゃん怖いです……

感想お待ちしております。

伝説の剣番外編3（前書き）

更に続く!!

伝説の剣番外編3

「終わらないよ……」

私は今、お姉ちゃんの執務室で事務仕事をこなしています。

一つ一つは正直簡単なんですけどこう量が多いとなかなか終わりません。

今日、お姉ちゃん別件でお兄ちゃんと一緒に出ている。だから今日は私一人。

正直飽きてきました。延々と同じ作業を4時間。このまま仕事を放り出して探検にでも出たい所だが我が霧咲家の家訓には

『やりたいことはやるべきことをやってから』
というものがある。

それに最近お姉ちゃんを怒らせると怖いと感じてしまうので脊髄反射レベルでこの提案は却下されてしまいました。

「終わらない……!!」

悲鳴的な歎き声をあげながら黙々とこなす。

そんな時、ドアを誰かがノックした。誰だろ？と首をかしげ視線をドアへと向ける。

「お勤めご苦労様」

スライド式のドアが開き姿を見せたのは私の義理の姉、フェイト・

T・ハラオウンの義理の兄クロノ・ハラオウンだった。

私は慌てて立ち上がり敬礼をする。

「ご苦労様です。クロノ・ハラオウン提督」

「固くならなくていい。今日はプライベートで来たんだ。」

「そう？ところでクロノおじさん今日はどうしたの？」

首をキョトンと傾げる。

「フェイトから君の面倒を頼まれてね。それより仕事がある程度済んだら移動するよ」

「????？」

とりあえず先程の倍のスピードで作業を再開し残り半分の所で中断。クロノおじさんと一緒に出ることになりました。

「お姉ちゃんそんなこと言ってたの!？」

お姉ちゃんはクロノおじさんを脅して私のことをお願いしたらしい理由は

『どうしよう!夕陽は今日一人なの!あの子すっかりしてるからなにもないと思うけどまだ小さいし…。もし夕陽達の事情をしゃっている人達がいきなり来たら……。大変だよ!夕陽が危ないよ!お兄ちゃん!夕陽のことお願い!!夕陽になにかあつたら私…私……。』
お兄ちゃんのこと殺しちゃうかもしれない。仕方ないよ……。私がこんにお願いしてもお兄ちゃんは聞いてくれなかったんだし。罰ぐらいは仕方ないよね?ううん。罰じゃ足りなう。まず私の魔法を全部撃ち込んでいくんだ。何回も何回も何回も…。自分から死を望むまで。そして殺せて叫んだら一旦中断、終わったと思わせてまた再開。え、なんでこんなそんなことするのかって?お兄ちゃ、クロノは知らなくていいよ。フフフ…。』

薬でもやっていたのお姉ちゃん!?

という思考はとりあえず置いて私は『義姉がご迷惑をおかけします』と苦笑しながら言う。クロノおじさんは『いや、気にしなくていい』と同じく苦笑しながら返してくれた。

「最近どうだ？」

「ん？なにが？」

車の中で質問をかけられた。ちなみにこれはクロノおじさんの所有物です。なかなかカツコイイ黒のスポーツカー。

そつえばお兄ちゃんも早く免許が欲しいって言ってたっけ？

「なにがって執務官へのだよ」

「ん〜……多分順調。お姉ちゃんは教えるのが上手だし。たまにお兄ちゃんも私の模擬戦手伝ってくれるから。」

「そつか……」

「周りの人達はいいい人達だよ。上の人達だって良くしてくれてる。内面は知らないけどね……。」

私は作り出された存在。ロストロギア【森の雫】。私達の事情をしらない人達はまだしも私達の事をしている上の人間は是非とも仲

良くなっておきたい存在だろう。私はそういつたことを自然と感じていた。

「あ、おじさんはそうじゃないのはしっているよ？おじさんやリンデイさん、エイミィさんは皆いい人達だよ！！」

つい口にてた失言を慌てて訂正する。それを聞いたおじさんは苦笑しながら私の頭を撫でた。
思わず顔が赤くなる。

「気にしてないさ。そういえばデバイスはまだ支給されるアレを使っているのか？」

「うん。私の本質は植物の操作にあるし。強化されているとはいえ無理に魔法を使うとすると私の魔力でデバイス自体が大破しちゃうんだ。ちなみにこれで20は壊しちゃってます」

うーん。智お兄ちゃんみたいにはいかないなあ……。

「それは初耳だぞ。」

そうこうしているうちに車はある場所に着いた。

そこはおじさんの御実家でかなり大きなお屋敷です。これでここに来るのは三回目になるけどやっぱりおつきいです。

「夕陽ちゃん」

車を降りると同時に私を抱きしめるお方。お姉ちゃんの義母リンデイ・ハラオウンだ。

歳とかなり不相応な容姿は『本当にこの人××歳？』と思ってしまう程。そんな彼女の胸の中で私はじたばたともがく。

苦しい……。苦しいです……。

「く、苦しいよリンディおばさん……。」

「なあに？ 良く聞こえないんだけど？」

腰に回された腕が閉め上がり腰の骨がバキバキと音を上げる。

私は更に悶絶し声にならない悲鳴を上げた。

「か、母さん。そのままじゃ夕陽が……。」

「あら、ごめんなさい」

やっと解放された私は地に伏せピクピクと痙攣しているのであった。本当に……。不思議な人達だよ……。

それからしばらくの時間はリンディさんと一緒に家事をこなしていた。私達は皆家事ができるので苦にならない。それにお母さんがいたらこんな感じなのかな？とも思え楽しかった。

「はい。お疲れ様 夕陽ちゃんがいてくれて助かったわ」

「こっちこそ楽しかったです」

「そうだわ。夕陽ちゃんに渡したいものがあるの」

私はリンディさんに言われリビングへと移動する。そこにはクロノおじさんとエイミイさんがいた。

「夕陽。君に渡したいモノがある。」

そう言って私に渡してきたのは深緑の宝石がつけられたらブローチ

だった。

それを見て私はこれがなんだかすぐ分かった。

「これ…デバイス？」

「そう。夕陽の為に作られた特注品なんだよ。まだ武器の形状とかはしっかりと登録されてないけどこれから自分に見合った子にしてあげようね」

私はまじまじとそれを見る。

見ているだけでドンドン嬉しくなってきた。

「私から夕陽へのプレゼント。アルハザードの技術とは劣るけど文句なしの作品よ。」

「ありがとうございます」

頭を下げる。私はいつも思っていた。

模擬戦はしても実戦に出ることはない。それがとても悔しかった。守られてばかりだからだけどこれで私も戦える。

お姉ちゃんやお兄ちゃん達と一緒に……。

「早速だけど名前を付けてあげたら？」

「うん！貴方の名前は……セレスティア」

『YES、your highness』

「おじさん！！早速模擬戦やるよ……！！」

「お、おい!!」

私はクロノおじさんをひつつかまえて訓練施設へと向かう。

【管理局訓練施設】

訓練フィールドの中心に私達は立つ。

目の前には既にデバイス。【S2U】と【デュランダル】を手にしているおじさん。

私はその手に持つブローチをゆっくり上に掲げると唱えた。

我は深緑を司るモノ。

優しさその力は弱きモノの為に

集え、木々の、草花の意思よ。

我が問い掛けに答えん。さすれば我は汝ら
と共に戦う刃となるろう

セレスティア……Setup。

これが後に【深緑の女王】と呼ばれる少女の誕生となった。

伝説の剣番外編3（後書き）

夕陽のデバイスができました。詳細は第二部で。

感想お待ちしております

伝説の剣番外編4（前書き）

もう一回！

伝説の剣番外編 4

「戦闘機人ですか？」

「ああ、ナカジマ三佐に頼まれ恵那君が陸でそれを極秘に調査しているらしい。」

ここは次元航行艦【アースラ】の館長室。休憩時間にクロノ提督は恵那さんが戦闘機人についての調査を行っていることを教えてくれた。

「そうですね…。僕の方でもジエイル・スカリエッツィの行方と一緒にそつちも調べてみます。」

「頼む。あとそれと……。」

「分かってます。【アノ】ことはまだ姉さん達にも伏せておきます。確証が持てないことで混乱は招きたくないですからね」

「すまん……。」

「気にしないでください。あ、紅茶の代え用意しますね。」

そう言って立ち上がる。クロノさんは別にお前がやらなくてもいいのだぞ？と言うのですが僕的には何度かやっておかないと腕が鈍るのでできるだけやりたいし、地球にいた頃の癖でやっていないと落ち着かないのだ。

「あ、そうそう。君は明日休みだ。」

「……………また姉さんですか？」

義理の姉であるフェイトさん……。アナタはまたご自分の兄を脅したのですか？

僕は軽く痛くなる頭を押さえたため息をつく。

「内容はあながち間違っていないが今回は恵那君だ」

「彼女が？」

【翌日】

「ごめんね智。いきなり呼び出したりして」

「僕の方は大丈夫なのですが。いきなりどうしたんですか？」

僕と恵那さんは街のオープンカフェにいる。今日はたまたま休日とすることもあり一人の数が多い。

「聞いていると思うけど今度私は極秘任務につくことになったの。私の能力が役に立つんだって」

伊集院 恵那と今は亡き恵美の能力は【隠された存在】。あらゆる索敵魔法や能力から逃れる力。例外として和弥さんの能力があるがそれでもそこにいるという【存在】だけしか認知できない。ある意味隠密に適した能力である。

「そうなんですか……。無茶はしないでくださいね。」

心配そうに恵那さんを見る。だけど彼女は明るく振る舞う。

「大丈夫大丈夫　しばらく智に会えないのは淋しいけど我慢する
だから智も頑張って」

「恵那さんも頑張って」

彼女に笑顔で返した。

その時、遠くが騒がしいのに気がついた。僕たちは何だろうと思いつちらへ向かった。

着いた先には人ゴミが道を埋めていた。皆あるビルを見ている。

「なにかあったんですか？」

「このビルで立て籠もりがあったらしい。何人かが人質に取られているんだ。」

「智……。」

「分かってますよ……。恵那さんは先に潜入してください。僕は後で奇襲をかけます。詳しい場所は念話で」

「お、おい！！なんなんだ君達は！？」

ビルへと向かう僕達に視線が集まる。

「「管理局です」」

「……………」

中階層の中心にあるフロア。そこに人質は集められている。敵の数は7人。私は訓練生だから外ではデバイスの持ち運びはできない。それでも魔法は使えるのだがタイムラグ等の問題があつて安易に使える物でもない。

私の隣にいる青い髪の彼女なら単独でも対処できるかもしれないが相手はプロ。人質が他にもいる状態では人質を危険に晒してしまう。正直八方塞がりだわ。

「ねえ……………」

隣の青い髪の子が念話を繋げてきた。

「私が引き付けるからその隙に何とかできない?」

「……………危険過ぎるわよ」

「大丈夫。私達ならできるよ」

私は少し長考に更けることにした。
そして

『わかった。三秒稼いで……』

『了解!!』

『レディ……』

私の合図で行動に移ろうとした時。

何者かが物陰から飛び出してきてその手に持つ銃型のデバイスで瞬にして7人を撃ち抜いた。

『……………子供!?!』

飛び出してきたのは私と同じぐらいの女の子。

自分のデバイスも銃型なのだがはつきり言って技術が違い過ぎる。それを見て私は思わず唇を噛んだ。

「大丈夫?」

私が苦虫を噛み潰したような表情をしているとその女の子は「こちらに歩み寄ってきた。」

「大丈夫ありがとう!!」

隣の子は彼女に頭を下げ例を述べている。
その時、

「動くな!!」

隠れていたであろう敵の仲間が彼女にデバイスを突き付けていた。

だが彼女は平然としている。

「とりあえず言うておくけど投降する気はない？」

「黙れクソガキ!!」

「はぁ……。智、お願い」

彼女がため息を付き誰かを呼んだ瞬間。フロアの天井が砕けた。

そこから現れたのは私と同じくらいの少年。彼は男の頭をわじづかみするとそのまま床にたたき付けた。

いきなりということで私達二人は呆然とする。そんな私達に少年は笑顔で安否を確認する。

「大丈夫ですか？」

「は、はい!!」

「大丈夫大丈夫 彼女達には傷一つないよ」

「ならいいですが。お二人は訓練生で？」

「うん、そうだよ。」

少年は私達の素性を聞いて来たのでそれを教える。

「へえ、私達の後輩になるんだ」

「え？」

私は呆けた声をだす。

「あ、自己紹介がまだでしたね。僕は次元航行艦アースラでクロノ提督の下に所属してます。霧咲智執務官です。」

「時空管理局陸士84部隊所属伊集院恵那二等陸尉よ」

それを聞いて私達は慌てて敬礼する。目の前にいるのは同じ年とはいえ立派な上司なのだ。

「し、失礼しました!!」

「上官殿とはつい知らず!!」

「いいんですよ。気にしないでください。」

「そうそう。私達今日はプライベートで来てたんだし。」

その言葉私達は安堵のため息をつく。

「だけど、ちょっとだけ上官としてお説教かな？」

「「え?」」

私達は顔を上げる。

「お二人共……。自分で打破しようと思いましたね?人質がいるこの状況で」

「もしかしたら人質が怪我したかもしれないんだよ?そこは考えた

？もし私達が来てなかったらどうなっていたか」

「「……………」」

私達二人は押し黙る。

「それを考えられるようになればもっと伸びるようになると思いますよ。」

「頑張つてね」

「ああ〜。折角のデートが台なし!!」
「まあまあ……………」

僕達は後から来た管理局の局員にその後の引き継ぎを済ませた後、再び街へと繰り出していた。

ただど時刻はもう夕方。空は茜色に染まっている。

隣のお嬢さんはせっかくのデートが台なしになったせいでかなり「機嫌斜め」。

さて、いかがでしたものしょうか？

「しばらく会えないんだよ？なんでそんなに冷静にいられるのかな？」

「残念といえばたしかに残念ですけどこれが今生の別れではありませんから」

「むう……。じゃあ、ごうしょう！」

なにか閃いたらしいです。

ものすごく嫌な予感がするのは何故でしょうか？

「私は明日の6時から任務につく予定だからそれまで一緒にいなさい！！」

「え！？僕は明日5時に乗艦なんですよ！？」

「いなさいつたらいなさい！！彼女のお願いなよ！？」

「お願いじゃなくて命令じゃないですか！！！」

「今まで智に拒否権あった？」

「……………ないです」

がつくりとうなだれる。恵那さんは腕を組みそのままズイズイと僕を連行するのであった。

伝説の剣番外編4（後書き）

名前はでませんでした。がスバティアの登場

感想お待ちしております

伝説の剣番外編5（前書き）

ラストオオオオ!!

伝説の剣番外編 5

『「苦勞だった」……。流石、【陰陽の剣】だな。君のおかげでこの世界の住民はまた生き残ることができた。』

目の前には朽ち果てた兵器の数々。

なにか戦争でもあったのか？と言われても仕方がないこの光景。

戦争と言えば戦争だろう。×××年××日。この日もまたこの世界は他の世界からの襲撃を受けていた。

目的は奇跡的なまでに進歩した技術。

ここ最近は何の世界の進行も増えてきた。それに合わせて出撃する回数も増えてきている。

「……………こちら【陰陽の剣】これより帰還します」

「……………」

とある施設の通路。俺は一人歩いていた。この時の俺は【陰陽の剣】として最終チェックを前にしていた。

これで俺は完全な兵器として戦うだけの存在となるだろう。別に怖くはない。それが存在理由だということを俺は自覚している。それに……………。

「……ん？」

ふと視線を前に向けると自分より年下の少年がいた。

顔は伏せておりどことなく落ち込んでいるのが分かった。

彼は俺の弟、名前は【 】
【触れたモノ、見たモノを石にする力を持つ。】

故に付けられたコードは他の世界の神話から取り【ゴルゴン】。

俺は頭を撫でる。すると彼は顔を上げ、

「すみませんでした!!」

と声を上げて頭を深く下げた。

今回、俺とコイツは出撃していた。

俺は最終防衛線を、彼は第四防衛線を担当していたのだが

今回は珍しく俺の所にまで敵が来たのでおそらくコイツは敵を通してしまったことを気にしているのだろう。

「気にするな……。」

俺達のように作られた兵器はその防衛線を死守するのが任務である。守護者は複数人いるが防衛線毎に配置される俺達のような兵器は一人。

俺達とて無敵ではない。中にはあまりの物量で殺された者。ロールアウトされたばかりで経験が足りなく無残に死んだ者。

俺の所まで敵がきたのは物量で攻められてやむを得ず通ってしまったのだらう。

それでも大半の敵は一人で抑えたのだ。俺達を指揮していた上の人間はそれをどう判断したかは知らないが俺はコイツを誇りに思っ

いる。

「それよりもお前が無事で良かった……。」

「子供扱いしないで下さい……。知っているはずですよ？僕を完全に殺したいなら首を落とすしかない。」

「それでもお前が無事で俺は嬉しい……。」

肩を抱き一言『帰るぞ』と言い。俺達はこの世界にある家へと帰った。

ある都市にある一つの高層ビルの一つ。
その一室で俺は横になっている。

殺風景な部屋。あるのは写真立てのみ。
写真に写っているのは大人の二人の男女、二人の男の子。そして女性に抱かれた赤ん坊。

「……………」

俺はゆっくりと起き上がり部屋を出る。

「おはようございます兄さん。」

「ああ…。【】はどうしてる？」

「ぐっすり眠ってます。調整でよっぽど疲れたのでしょう。けどこれで彼女もあとは経験のみですね」

俺はリビングの隅にある幼児用のベッドに目を向ける。

そこにはかわいい寝顔の赤ん坊。

彼女は俺の妹、戦いとは別の植物を操る力を持っている。後にこの世界の自然関係に大きく貢献することになるだろう。

「ああ……。それに父さんや母さんも【】が戦いに出ることはないことで安心しているだろう。」

ここで説明しておこう。

俺達の両親は俺や弟と同じく兵器として作られた。

この世界を守る守護者としてだ。

戦いの中二人は恋に落ちた。そしてまずは俺が生まれた。次に弟の

【】そして妹の【】。

だが二人は妹の【】が生まれて直ぐに戦死した。そして今…。

「おはよう。【】ちゃん……」

部屋に入ってきた三十代の女性。

彼女の名前はエイナ・ダーヴィン。

両親を亡くした俺達にとってもうひとりの親のような存在で俺達のコーディネーターいわゆる【調整者】だ。

「おはようございます。エイナさん」

「おはよう」 【ちゃん。直ぐにご飯にするわね。」

そう言つて彼女は台所へ向かうのだが俺と 【は同時に彼女の肩を掴んだ。

「ダメです。やめて下さい」

「俺達はまだ死にたくありません」

俺達が彼女を止めた理由。それはいうまでもない。彼女の理由が殺人的なのだ。俺自信初めて食べた時、倒れて一週間昏睡状態になった。

その際に他の世界が侵攻を開始してきた時かなり危ないことになってしまったのだ。

「今度は大丈夫だから」

「……………」

冷たい眼差し、ものすごく冷たい眼差し。

「最近、他の世界からの侵攻も頻繁になってきましたよね？」

「最高評議会からも禁止令出しましたね？」

「大丈夫よ。二人とも頑丈なんだから」

「結構です！」 【今日の朝食はお前がやれ！！」

「了解しました！！！」

「ひどい……。」

なんともまあ、意味のわからない朝だった。

だけど楽しく居心地のいい時間。俺は命をかけてでもこの時間、この瞬間を守るそのつもりでいた。

だが、その日の昼。その願いは音を立てて崩れ去った。

突如街を飲み込んだ第一種警戒警報。

最初はまた敵襲か？と思ったのだがどうやら違うらしい。

事実を確かめる為に本部へと連絡が取れない。それだけではないあらゆる通信手段が使えなくなっている。

「【ちゃん！！】」

「エイナさん？」

いきなり部屋にエイナさんが入ってきた。

彼女は腕にまだ小さい【】を抱き、後ろにはなにがなんだかわからないという表情をしている【】がいた。

彼女は俺の手を掴むと他の二人を連れてある施設へと赴いた。

「どうしたんですか？敵襲ですか？だったら俺達は出撃しないと」

「違うの！！この世界は滅んでしまつかもしれないのよ！！」

「えっ？」

滅ぶ、この世界が？

「一体何があつたんですか!？」

施設に響く俺の怒声。この世界が滅ぶなんて信じたくなかった。

エイナさんは俺の肩に手を乗せて俺を落ち着かせる。

「研究所で実験が失敗して次元断層ができたの……それが大きくなつて虚数空間がこの世界を飲み込もうとしているわ。良く聞いてね。今から貴方達を別の時間、別の次元世界へ転移させます」

「エイナさんは!？」

「私は貴方達を送らないといけないから……」

そう言つて彼女は杖を取り出した。瞬間足元に広がる巨大な魔法陣。

「ダメですよ!!エイナさんも逃げないと!!」

「いいから……。今ぐらい母親らしいことやらせなさい。貴方達を引き取つてから料理もできない。洗濯やお皿洗いもできないこの女に……」

「でも……」

「いいから子供は黙つて言つこと聞く!!」

俺に妹を渡し俺を含む三人を魔力でできた球体で包む

「エイナさん!!」

【】が彼女の名前を叫ぶ。エイナさんは笑顔で俺達に言った。

「この魔法はこれが初めてだから保障はできないわ。あとは貴方達の魔力で補強してね。それと貴方達はお兄ちゃんなんだかしっかりね。」

「ハイ……。」

そして俺達は転移された。

「……………夢…か…。」

目を開ければそこには無機質な天井。

どうやらいつの間にか寝ていたらしい。

壁に表示される時間を見るともう夜の9時。

そろそろフェイトが来る時間か…。

それなりにしても古い夢を見ていた。

あの後、俺達は地球の日本に降り立ち霧咲老夫婦に引き取られた。

名前もそれぞれ変えて夕陽には普通の女の子として育ってくれるよ

う祈った。

いつも思っていたことがある。

あの時、もうひとりの母と言っていていい彼女を残してこの時間、この世界に来てよかったのだろうか？

もしかしたら自分の力でなんとかできたのではないのか？

そんなことを考えていた時があった。

「桐斗」

格子の隙間からフェイトが顔を覗かせる。

彼女は部屋に入って来ると俺の隣に座り今日の出来事を話し始める。俺はそれに対して軽く返したり頷いたりしている。

そっいえば彼女と出会ってからだ悪い夢やあんな事を考えなくなったのは。

「フェイト……。」

「なに？」

「俺はお前をなにがあっても守る」

「桐斗？」

「いや、ただ言いたかっただけだ。」

俺は目を閉じて彼女の膝に頭を乗せて顔を腕で隠す。

「どうしたの？」

「ちょっと眠くてな……。少しだけこのままでもいいさせてくれ……。」

「うん……。」

天国の父さん、母さん、エイナさん……。

俺は今、幸せだよ……。

伝説の剣番外編5（後書き）

霧咲兄弟のアルハザードから去らなくちゃならなかった出来事編です
ね。

エイナさんの料理はロストログアをも殺せるポイズンクッキング

感想お待ちしております

今までいろいろな出会いがありました。

友達、

親友、

遙か昔の世界から来たかわいい妹、弟

そして愛しい彼。

辛くもあつた過去。

楽しかったあの頃。

ずっとこのままこの時間が続いて欲しい。
そう思った。

あの日から7年私は19歳、只今幸せの絶頂です。

ただこの時はまだ気づかなかった。

後ろから忍び寄る悪夢の足音に。

魔法少女リリカルなのは 伝説の剣 第二部

I
N
V
A
S
I
O
N

O
F

N
I
G
H
T
M
A
R
E

は
じ
ま
り
ま
す
。

「……………」

私は今、ヘリの中から親友のなののはに向かって手を振っている。
丸窓から見えるのは荒れ果てた街。

ここは数年前に破棄された廃棄都市区画。ついさっきまで魔導師試験が行われていた場所。

試験を受けていたのは新設部隊を立ち上げる為に前々から目をつけていた子達で名前を『スバル・ナカジマ』、『ティアナ・ランスター』。どちらも素材としては申し分ない。ちよつと危なっかしいのがネックだがなのはが教導するのだ。

「あの子達は問題ないようやな。智と夕陽の方はどなうなん？」

「智も夕陽大丈夫。二人共かなりのリミッターをかけるけどね。」

はやての質問に笑顔で返す。

新設部隊には私の義弟と義妹もよんでいる。

智に至っては私の義兄のクロノから出向するよう命令を受けている。その際に二人共かなりのリミッターをかけなければならぬのだが夕陽が動きづらいついていた。

まあ、仕方がないだろう。一つの部隊に収容できる魔力ランクの総合計は決まっている。隊長陣全員もリミッターをかけているのだ。

これは裏技と言ったら裏技で上の許可がないとリミッターは外せない。強力な敵が来たら対処が難しいということである意味諸刃の剣でもあるだろう。

「彼ははどうなん？来てくれるんやったら相当な戦力になるんやけ

ど」

「もうすぐなんだけどまだ出所してないからなんとも言えないし、囑託扱いだからちょっと厳しいかな」

私は苦笑しながら言う。

長かった。彼が収容所に入って7年。私が赴いてちよくちよく会ってはいたがやっと普通に会えるとなると自然と頼が緩む。

「けど、部隊の新設が上手く行きそうではなかったね」

「まあ、後ろ盾が相当なモンやからね。」

今回の部隊の新設には

リンディ・ハラオウン統括官

クロノ・ハラオウン提督

聖王教会騎士カリム・グラシア

元第44部隊所属の魔導騎士であり現在は提督の地位に着いた

魔導槍騎士、神田相馬提督

魔導弓士、天津和弥提督

が後ろ盾に着いた。

また智と夕陽を隊に入れる時は相当苦労した。彼らが後ろ盾でなければ二人を入れることはできなかつただろう。

「けどよかったん？夕陽と智が管理局に入ったの彼は知らんのやろ？」

「大丈夫だよ。私達には優しいから。」

「まあ、ええけど。それよりはよう戻って二人を勧誘せな」

「そうだね。」

「私は二人を六課のフォアードとして迎えようと思つとる」

試験が終わり私とはやては二人の勧誘を始めていた。

「スバルは高町教導官の直接の教導を受けれるし」

「は、はい」

スバル・ナカジマ

数年前。元第8臨海区画の空港で起こった大規模火災で高町なのはに助けられた。

それ故、彼女はなのはをととても尊敬している。

「ティアナは私達でよければ執務官の勉強を見てあげられるから」

「いえ……そんな。恐縮です……。」

執務官を希望しているガンナータイプの魔導師。数年前に兄を亡くしている経歴を持つ。

「あゝ。ハラウン執務官。よろしいでしょうか？」

「なにかな？」

「今の私「達」って？」

スバルの質問に一瞬私は『なにかおかしいこと言ったかな？』という顔をするが直ぐに気づいて訳を説明しようとする。

「私達っていうのは……」

『お姉ちゃん!!』

「噂をすればやな」

なにか面白そうに笑うはやて。

私達四人は声の主の方に視線を移す。

そこには黒い髪の少女と少年。

二人はこちらに歩いてくるとはやてに敬礼。それを彼女も返す。

「二人共紹介するな。この子達は霧咲智と夕陽。」

「私の義理の弟妹で二人共執務官。夕陽は私と一緒に、智はクロノ提督の下で働いているよ」

「はじめまして。霧咲夕陽執務官です。」

自分の方が階級は上だが丁寧に挨拶をする夕陽にえらいえらいと頭を撫で褒める私。

「同じく霧咲智執務官です。」

うん。よくできました。

ニコニコと笑顔の私を余所にスバルとティアナは慌てて立ち上がり、智に向かって敬礼する。

「お、お久しぶりです!!」

「以前はお世話になりました!!」

あれ？二人共知り合い？

首を傾げて智を見る。

「お久しぶりですね。お二人共お元気そうだなによりです」

話に寄ると三年程前、偶然智が出くわした事件で顔見知り程度だが知り合いになったらしい。

「智も訓練の映像は観とったやろ？どや、上司からみて。得にティアナとは同じガンナーやろ？」

「二人共申し分ないと思いますよ。最後と途中のアレは見逃せないですが。彼女の、えっと…ティアナさんでしたね？貴方も問題ないかと。」

智の言いようにスバルは顔を輝かせ、ティアナは顔を赤くして俯いている。

ていうか智、知り合いだったんだね。お姉ちゃん聞いてないんだけどなあ……。

「えっと……。お取り込み中かな？」

「うん。ちょっと待ってて今、取り込み中になるところだから……」

「フェイトちゃん。新人ちゃんにシユールなモン見せるにはまだ早いで……」

ウフフと素晴らしい笑顔の私。首を傾げている新人。やれやれの親友。ガタガタ震える妹。滝汗の弟。

「フェイトちゃん。誰だつて秘密の一つや二つあると思うんやけど……」

「いや……これは秘密以前の問題じゃないのかな？」

とりあえずフォローの親友二人。それにとりあえず頷く新人二人。

そんなの関係ありません

どうツツコミを受けようがこの兄弟間では私が法律です。

誰がなんと言おうと私が有罪と決めれば有罪、ギルティなのです。

とりあえず智、【お話し】しょうか？私は立ち上がると弟の頭をわしづかみにしドナドナと連れていくのでした。

この時彼がなにか叫んでいましたが。まあ、皆さんはもちろん私にも関係のないことなのです。

「全く、スバルの奴……」

スバルにからかわれ彼女軽く締め上げた後私は物思いにふけていた。私の目の前に現れた二人の若き執務官。

あの歳で執務官となれた。それに比べ私は二等陸士。

また才能か……。

心中でため息をつく。

私は凡人。魔力量も高くないし身体能力も人よりちょっと高いぐらい。

陸士学校を主席で出たのも死に物狂いで頑張ったから……。けど凡人はどれだけ努力しても天才には勝てない。

私はそれを知っている。

ぼうつとしていてふと横を見る。

「アレは……」

そこにいたのは今日紹介されたハラオウン執務官で義理の弟妹の二人。

なにやら妹の方が兄の手を引っぱってどこかへつれて行くようとしている。

「まあ、私には関係ないか……」

そんな時ある事を思い出した。三年前あの事件の時、彼はデバイスなんて持ってなかった。持っていたのはその時もう一人いた相方の女性。

それを今日、八神二佐は『同じガンナーとしてどうだった？』と聞いたのだ。

彼も銃型のデバイスなのだろうか？

少しだけ考えるが直ぐに自分とは関係ないことに気づき考えるのをやめる。

まあ、いいわよ。利用できるのは利用して私は私の夢を叶えるんだから。

私は踵を返しスバルと合流するべく歩きだすのだった。

見ていてね……。お兄ちゃん。

『1111は……。』

昔に見た街の光景だった。他の文明とは著しく違い発展した建造物。光に覆われた空。

ここは超高度文明アルハザード。

俺が生まれ兵器として造り上げられた世界。

俺はその都市の真っ只中にいた。

黙って周りを見渡す。

誰もいない……。人もなにも、命の存在は俺以外なにもなかった。

『
』

誰かに名を呼ばれた。振り返るがそこにはやはり誰もいない。

『
』

もう一度呼ばれた。

今度は誰ががいた。

声の主は女性、顔は良く見えないが女性にしてはちょっとだけ背が高く俺と同じ黒い髪を持ち主。

その手には黒く輝く巨大な鎌。

何故そんなモノを持っているのだろうと疑問を感じたが次の瞬間には分かった。

『
』

また俺の名前を呼ぶ。彼女の持つ獲物には真っ赤な血が滴っていた。気味の悪い笑顔を浮かべゆっくりと歩み寄ってくる。

俺は対峙するため俺の手に集うよう光に命令を下す。だが、光は集

まらない。

また一步俺に近寄ってくる。

気づくといつの間にか俺の周囲は真っ赤に染まっていた。

この時目の前にいる彼女が死神に見えた。女性は俺のすぐ側まできた。この時、彼女の顔がはっきりと見えた。

『お前は……』

『愛してあげる……』

ゆっくりと鎌を振り上げる彼女そしてそれは俺の首目掛けて振り下ろされた。

愛してあげる……狂う程に

ゼノ

「……………」

気づけば目の前には天井が広がっていた。この七年見慣れた天井。

「夢か……………」

身体を起こし自分の身体が汗にまみれていることに気づく。久しぶりにアイツの事が夢に出てきた。

思い出したくもない過去に少し頭が痛くなった。

脳裏にちらつくアイツの顔を掻き消そうと他の事を考える。

「今日は出所の日か」

そういえば今日でちょうど期日の7年が立つ。

あれから智と夕陽はどうしているだろうか。ちゃんと学校に行って真つ当な人生を送っているだろうか。

そんなことを考える。

まあ、フェイトがついているから大丈夫なのだろうか。

俺は左手に輝くアクセサリーを一見すると立ち上がる。

「誰だ？」

「アラ、気付いていたの？」

「目を覚ました時から…」

視線を向けた先にいたのは一人の女性。

「私はミゼット・クローベル。貴方を迎えに来たの。私と一緒に来てくれるかしら？」

「ミゼット・クローベル……。管理局の基礎を作った伝説の三提督か。」

「あら、博識なのね。」

「7年間管理局の事については勉強させてもらったからな。」

ミゼット提督はクスリと笑うと真剣な眼差しで俺を見る。

「なら話しは早いわ。今から私と一緒にある場所に行って貰います」

「了解……」

そして連れて行かれた先は管理局にある暗く広い一室。そこには老人が二人いた。

「おはよう。気分はどうだね？久しぶりの外は」

「まあまあだ」

「そうか。ではまずは自己紹介というところ。」

目の前にいるのは三提督の残りの二人。

ラルゴ・キールとレオーネ・フィルス。フェイトいわくこの三人が揃うことはまずないとか。

二人の間にミゼット提督が座ると直ぐに彼女は本題に入った。

「単刀直入に言うわ。貴方には私達直属の部下になってほしいの。」

「理由は？」

「この時空管理局は崩壊しかねない状況にある。」

「私達は影響力はあっても自分達では動けない。」

なるほど。それで自分達で動かせる部隊的なモノが欲しいと……。

「別に俺じゃなくてもいいのじゃないのか？」

「君を他の隊に渡したらどうなったモノか分かったものじゃないからね。」

まあ、そうだな。上の人間は俺の事を知っている。都合のいい強力な兵器になるだろうな。

「まあいい。こっちへのメリットは？」

「君へに対する制限のほとんどを免除。それと見合う地位をあげよう。」

「貴方には新設される部隊に行ってもらおうわ。そこには彼女もいるから。」

「分かった。」

俺は頷く。

「ではこれより桐斗・K・ハラオーナー等空佐は我々の部下になる。」

「ちなみに今の会話の内容は機密事項とする。くれぐれも他言しないように。」

「了解。」

俺は三人に背を向け部屋を出ようとする。

「あ、そうそう。」

「なんだ。」

「貴方の弟さんと妹さんとてもいい子で優秀よ。あの歳で二人とも執務官だなんて。」

「……………今、なんて言った？」

この後俺はミゼット提督に信じられないことを聞くことになった。

第二部【INVASION OF NIGHTMARE】『Prolog』(後)

とりあえずプロローグだけでも更新しました。

これからよろしくお願いします!!

original characters profile (前書き)

プロフィールを書きました

original characters profile

【桐斗・K・ハラオウン】

キリト・キリサキ・ハラオウン

年齢》19才

性別》男性

容姿》首にかかるかかからないかの黒い髪、青い瞳のクールなイケメン。雰囲気が大入っぽい。

性格》物静かだが話し掛けられれば普通に話す。頑固。

趣味》最近は弟の智と共に音楽にはまっている。

所属》三提督直属の部下

階級》特例の一等空佐

魔力量》測定不可

魔力光》白銀だったり漆黒だったり

魔法式》無し

戦闘スタイル》直立不動のフロントアタッカー。

詳細》本作品の主人公。フェイト達とは中学からの知り合い。7年前の事件で弟の罪も被り管理局にある収容所に入る。

そして現在三提督の誘いで直属の部下になり19歳の若さで特例の一等空佐の地位を得る。

これは特例の処置であり三提督以外は、カリム・グラシアとクロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウンしか知らない。

彼の正体は過去に滅んだ超高度文明アルハザードから流出したロス
トログア【陰陽の剣】光と影を使役し武器として扱う。

1年前にハラオウンへ籍を入れ夫婦になったが弟妹は知らない。(
フェイトが口止めをしている。またリンディ、クロノ、エイミィだ
けが知っている。)

また逆に弟妹が管理局に入ったことを彼は知らなかった。

彼の戦闘スタイルは一方的な力の蹂躪と言った方がいいたろうか。

ほとんど動かず放つ膨大な魔力の波動。光と影を使役する能力で作
り出した剣の遠隔射撃など。

その姿からスバル達に【不動の剣】と言われそれが彼の二つ名にな
った。

能力は異常な数のリミッターをかけているためAランクまで低下し
ている。

この状態で彼が【陰陽の剣】の能力を使えるのは恐ろしいまでの繊
細かつ強固な術式による魔力操作故。

【陰陽の剣】

桐斗のロストログアとして持つ名称。

光と影を使役し己の武器や盾、転移の際の門ゲートなどに用いる能力。異
常な量の魔力と共に強固かつ繊細な技術が用いられる為【光】とい
う粒子の操作、使用をアルハザードの技術者は実現させた。ちなみ
に影の操作はその応用である。作品中では無類の強さを誇る彼だが
現段階ではまだ不完全な未完成体。これは完成間近にしてフェイト
のいる時代、地球へアルハザード崩壊寸前に転移してきた為である。

【霧咲 智】

・キリサキサトル

年齢《 15歳

性別《 男性

容姿《 黒い髪と青い瞳の男の子。カッコイイと夕陽は言っていたがどちらかと言えばかわいいが合うという子供時代からうって変わりととてもカッコイイ爽やかな少年に。性格《 今も年上はもちろん年下にも敬語を使う。頼まれては断れない性格。

趣味《 勉強と音楽観賞。

所属《 時空管理局時空航行艦【クラウディア】

階級《 執務官・一等空尉

魔力光《 ライトグレー

魔力量《 測定不可

魔法式《 ミッド式

魔力変換資質《 【石】

デバイス名《 【ウロボロス】

デバイス形状《 ゴツイリボルバータイプの二丁拳銃。柄の部分に蛇の模様が刻まれている

個人能力《 ゴルゴン

戦闘スタイル《 ガンナーながらもフロントで戦うがセンターバックもできる。

詳細《 霧咲兄弟の次男。兄を慕い妹を大事にしているが妹からは玩具のように扱われている。

けど妹の為には強く出るお兄ちゃん。

成長し現在では義兄の指揮するクラウディアで執務官を勤めている。

今作品ではリミッターをバカみたいな数かけてAまで落とし六課へ出向となっている。

智の力は能力リミッターをかけていて術式媒体である瞳と両手からの術式照射お呼び展開が安易にできなくなっている。

桐斗に黙って妹と一緒に管理局に入局。兄とフェイトが結婚したのを知らない。

姉の【金色の閃光】と並び【明灰の略奪者】という二つ名を持つ。由来としては【ゴルゴン】の能力で標的の自由、時間、未来、命を奪うという所から来ている。（名付け親はリンディ）。

また、クロノ、フェイト、智、夕陽が執務官資格を持つことから【執務官兄弟】とも言われている。

【ゴルゴン】

智のロストロギアとしての名称。

睨んだ対象、触れた対象を石化する能力。

『石化の魔眼』

人の目は物体が反射した光を映像として捉えるというメカニズムを逆手に取り水晶体に入ってくる光の入射角にそのまま超強力な石化の術式を送り出すというもの。

使用後の後遺症は一時的な失明。

『石化の魔手』

両手、手首から先全体に石化の術式を展開し触れた対象を石に変える力。

これらの能力は智のみ適性を持ってた力で他の人間が同じ力を使うと一瞬にして魔力の枯渇状態に陥る。

【霧咲 夕陽】

・キリサキユウヒ

年齢《 12歳

性別《 女性

容姿《 首下まである黒い髪と青い瞳。おっとりとしたかわいい容姿。性格《 冒険家でちよつと泣き虫は克服。お兄ちゃん大好きっ子は治つておらず。一度言い張ると桐斗やフェイトが言うまで首を立てに振らない。見た目とは裏腹にもものすごくパワフル

趣味《 探検

階級《 執務官・二等空尉

魔力光《 ダークグリーン。

魔力量《 測定不可

魔法式《 ミッド式

戦闘スタイル《 てフェイトの動きと近いが速度はフェイトの方が全然早い。

デバイス名《 セレスティア

デバイス形状《 でっかいハルバート

詳細《 霧咲兄弟の一番下。とても頭が良く、基本的に兄の言い付けをちゃんと守る。冒険家で休みの日にはフラフラと出かけている。ちなみに最近の仕事ばかり現在は最年少女性執務官としてフェイトと共に仕事をしている。

彼女もアルハザードより流出したロストロギアで名称を【森の雫】。植物の自由操作を能力として持っている。

植物操作は繊細な術式操作によって行われているため天才とも言えどもまだ未熟な彼女には能力リミッターの制御下では安易に使用できない。

兄、姉に並び【深緑の女王】として名を持つという天才っぷりを発揮している姫ちゃん。

この二つ名の由来は文字通り植物操作から来ている。（名付け親はクロノ。

【森の雫】

夕陽のロストロギアとしての名称。

植物に夕陽のみが持つ特殊な魔力を送り込んで急激な成長、生命維持、操作を行う能力。元は別の世界の技術だった【森の雫】をアルハザードの技術者は独自に改良、そしてオリジナルの【森の雫】を作り上げた。

それが霧咲夕陽である。

今日はこれでおしまいかな？

っ、疲れた

記念小説（前書き）

つい先程アクセス確認したら本日のアクセスが1万をこえてました。

それにふまえて皆様に感謝とお礼を兼ねまして簡単なモノですが記念小説をかきました。

つたない文章ですがよろしかったら読んであげてください。

タイトルは

【カラオケ大会しよ】

記念小説

「カラオケ？」

「ええ、作者が記念小説の題材として使いたいそうで僕達にカラオケパーティーをしろとのことですよ」

本局のレストルームで俺と智は一緒に昼食を取っていると智の携帯に作者からメールがきていた。

「面倒臭い。大体皆仕事だろう？そんな時間ある訳がない。」

「ですよねえ。あ、またメールが来ました。え〜と……『作者ナメるな』。無理矢理でも時間を作るみたいですね」

思わず頭が痛くなった。

なに考えてるんだアイツは……。

「そんなにやりたいなら俺抜きにしてくれ……。」「

「あ、追伸です。『逃げれると思うな』だそうです。」「

「知らん。俺はこれから三提督に報告があるから先に行く」桐斗く
く……！』」

立ち上がる瞬間にレストルームを飲み込んだ大声。そこにいる全員が俺を見る。シンク口でもしているかのように揃ったその動き、多分子供なら泣き出しているかもしれない。俺自身ちよっとビビってしまった。

それなことよりも今の声。

「あはは……姉さんは今日も元気ですね」

「あ、いた桐斗!」

「フェイト……TPOを考えろ。」

声の主は本局執務官。フェイト・T・ハラウン。

「え、今は【お昼】で場所は【レストルーム】、だよな?」

「最後の【O】はどうした? まあいい、何の用だ?」

とりあえず本題を聞く。

嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

「カラオケしよ?」

目をキラキラさせてらっしゃるこのご婦人。

対して俺はやっぱりかど額に手をあてため息をつく。

「皆仕事だろう?。」

「他の皆は大丈夫だって。あとは桐斗だけ。」

「僕はなにも言っていないんですけど」

「智に拒否権があるわけないよ」

「……………」

智は既に拒否権を剥奪されていた。

「俺はいい。俺抜きでやってくれ」

第一歌うってガラじゃないからな。

改めて席を立ちこの後の予定である三提督への報告へ向かおうとした時。

「桐斗…。来ないの？」

「……………」

フェイトが俺の手を掴んだ。

その時の彼女の顔は捨てられた子犬のように愛らしかった。

反対の手に黄色い魔力刃が見えなかったら

「一緒に……………しよ？」

「……………YES、your highness」

「さあ始まりました姉さんに強制実行されたカラオケ大会。解説は
私時空管理局 古代遺物管理部起動六課、スターズ分隊長補佐霧
咲智執務官と」

「なんで私がこんなことしなくちゃいけないのよ……」

「まあまあ、そこをなんとか……。」

「はあ、仕方ないわね。同じくスターズ分隊スターズ04ティアナ・ランスターです。」
拍手喝采。

「で、今日は大会なんだからルールとかあるんでしょ？」

「いや、実はルールもなにもなくて大会というのは名前だけで実際はただのカラオケパーティーなんです。」

「はあ！？じゃあ解説なんて必要ないじゃない！！！」

「一応大会らしくってことで解説を頼まれたんですよ。」

「なに考えてんのあの作者！！！」

申し訳ないですティアナさん（土下座）

「それではまずは一発目。我等が部隊長八神はやてさんに歌っていただきます。」

曲は『あなたを想う』

「どござ」

今も あなたの涙と笑顔のことを思い出し
今この日々への感謝とさびしい気持ち感じます。

分かりの痛みに押し潰されてた日々が過ぎた頃にも
思い出だけにしまい込むことまだできずにいます。

今、あなたがくれた祈りのさなかそつと時を重ねています。
今、あなたのいない世界の中でみんな過ごしています。

涙落ちる悲しい夜が誰にも来ないようにと込めてあなたがくれた
この空の下。

「これははやてさんの思い出を歌った曲ですね。」

「八神部隊長すごいですねえ。」

「次は私達スターズの隊長なのはさん」

「曲は『あなたの笑顔に』」

拍手。

「ママ〜。頑張ってる」

「ありがとうヴィヴィオ ママ頑張るよ」

「愛娘からの声援を受けお母さん歌います」

「それではどうぞ」

ねえ、出会ってから今までの小さな思い出そつと二人で消えないように繋いだ手のその中に

ねえ、傍にいられる間はだれより優しく抱くよ。

いつか遠く離れた時の温もりに変わりようぬ

ふれあえたやさしさと微笑みと愛しい気持ち

全部あなたの笑顔に贈る幸せになれるように

「優しく歌声ですね。」

「ヴィヴィオ愛されてますねえ」

「続いてはティアの番ですよ」

「わ、私はいいわよ（焦り）」

「まあまあそんなこと言わずに はいマイク」

「ちょ、私はまだ……」

「それではティアナ・ランスター。曲は『二人の翼』どうぞ」

「ああもう!!」

迷いなんてなにもないと一人の背中にいつも

羽ばたきをしない翼 背負って俯いて

遠く空を駆ける 鳥達の自由だけを憧れて求め続け心擦り減らして
た。

ただどいつの頃から 変わっていた心は

何気ないありふれた出会いから

今駆け出して踏み締める足元の確かな強さにへと

あたながくれたモノ いつも眩しい笑顔に

数えきれない優しさと安らぎと勇気が溢れていた。

背中を合わせたらどんな時でも怖くなかった。

「ありがとうございます。綺麗な声じゃないですか」

「死ねる。私今すぐ死ねる……」

「大丈夫ですかティア？」

「智つるさい！！ほらスバル！次はアンタ！！」

「ハイハイ。それじゃ歌います」

「曲は『空色の約束』。それではどうぞ」

「うう…今すぐ死にたい…」

ね、出会ったあの日の最初の言葉
今も覚えてるよ

そ、まっすぐな瞳、あの頃からね変わらずにいるよね

信じた道駆け抜けて行ってあなたの行くその道を私がどうか守れま
すように

星の夜空誓い合った

叶えたい夢と憧れ、手を伸ばしてもまだ届かない星も

諦めない信じたからどこまでも高く飛べるはず

描いた夢への道 あの空に届け。

「お疲れ様です。スバルさんも凄いですね。」

「あはは、そんなことないよ」

「謙遜謙遜。十分に自慢できますよ。」

「ありがとね智」

「次はライトニング隊長のフェイトさんね。」

「姉さん準備はいいですか？」

「お姉ちゃん頑張ってる」

「あはは…、いざとなるとちょっと恥ずかしいな」

照れてます。

震える指握りしめて 静かに願いを込めた

うずくまって逃げられない過去から 飛び出したいよ

たとえ消えそうな僅かな光だって

追いかけてたい あの星のようにすべて受け

入れ そう、どこまでも高く…

銀河を舞う DIAMOND DUST - 天使の囁き -

確かな記憶を辿って

これからきつと生まれたく 真実へのトビラ

どんな冷たい暗闇に縛られていても

僕は知りたいから決して止まらない

「流石姉さんですね。」

「ほんとねえ……。それじゃ次は」

「ハイハイ！！私が歌いたい！！」 「わかりました。次は夕陽です。ね。」

「それじゃ準備しなさい」

「了解です」

夕陽準備開始。

「夕陽って歌上手いの？」

「いや、僕もまだ聞いたことないんですよ。兄さんは聞いたことがあります？」

「いや、俺も聞いたことはないな。フェイトはどうだ？」

「私もないよ？」

夕陽、準備完了。

「それじゃ歌います。初めてですが聴いてください」

「……………」

何事もなかったように一人拍手をしている人物が一人。兄の桐斗だ。

「初めてにしては上出来じゃないのか？」

『『『今ので上出来！？』』』

屍と化している皆が同時にそう思った。

ていうかアンタなんで大丈夫なんだよ？

「えへ それじゃもう一曲いきま〜す！！」

それからまさしく地獄絵図だった。

その後、六課内では夕陽に歌わせてはいけないという法律ができたのだった。

記念小説（後書き）

いかがだったでしょうか？

こんな作品でもよろしかったら感想を書いていただけると幸いです。

また、リクエストもございましたら。なんとか時間を作って書きますので希望がございましたらどうぞ

FILE 1 (前書き)

りあるおにじっこはもう少し待ってください

「今日から新しい部隊で仕事だねお姉ちゃん。」

「そっだね」

今、私と夕陽は八神はやて率いる新設部隊【古代遺物管理部機動六課】、通称機動六課に向けて車を走らせていた。

今日から活動を開始するにあたり懐かしい面々が揃うことになる。皆どうしているだろうか。変わっているだろうかなどの思いを胸に秘めている私。

夕陽もとても楽しみにしているようで今まで笑顔が絶えない。

「あ、智お兄ちゃんだ。」

そんなとき私の車の後ろから追ってくる一台のバイクがいた。ライトグレーのあのバイクは智の持ち物で彼の地上での移動手段だ。

「お兄ちゃん〜ん」

大好きな兄を見つけて嬉しいのか窓を開けて身体を乗り出し手を振る夕陽。

私は危ないから中に入りなさいと注意しつつも笑顔で軽く彼に手をふる。

あ、智も返してくれた

そんなやりとりをしているうちに私達は六課に到着した。

「よかつたなあ。ラインにピッタリのがあって」

【古代遺物管理部機動六課】その部隊長室に八神はやたと彼女のユニゾンデバイスであるラインフォース・？はいた。

八神はやては若き特別捜査官で現在の階級は二等陸佐。対するラインは曹長。

二人はなにをしているかという今日出向してくる親友とその弟妹を待っている所。ラインは自分にピッタリサイズのデスクにはしゃいでいる。

「ピッタリサイズですう」

思うに彼女のデスクはおもちゃ屋で手に入れたのではないだろうか？
まあ、使えればなんでもいいのだが。

そんな所へ

「失礼します。」

六課の制服に着替えた私となのはが部隊長室へと入る。執務官が着る黒い制服とは違い茶色の制服。
慣れない制服にちよっと恥ずかしかったりします。

「皆さんお似合いです」

「フフ ありがとうリン」

なのはがリンに御礼を言う。

まあ、褒められて悪い気はしないけどね。

「そつえば智と夕陽はどないしたん？」

ああ、あの二人はもうすぐきますよ。

「お待たせ」

「こら夕陽。ノックぐらいしないと失礼ですよ」

ほら来た。

勢いよくドアを開け放ち登場したのは我が妹夕陽。その後ろから困

ったような顔で現れる弟の智。

私達は苦笑しながら二人を迎えた。

「久しぶりやな智に夕陽。元気そうだなによりやわ」

「お久しぶりです八神二佐」

「そんな固くならんでええよ。うちの仲やし。」

楽しそうに笑う夕陽とはやて。

「智もかっこよくなったねえ 本局の方じゃモテてるんじゃない？」

「か、からかわないでくださいよなのは姉さん」

にやにやしなから弟分をからかう姉貴分のなのは、からかわれてあ
たふたしている弟分の智。

こちらもちちらで楽しそうです。

うん、私だけ仲間外れかな？

ちよつとだけ寂しい思いをした私は三人に呼びかけてはやてに向か
い綺麗に整列し敬礼する。

「只今より。高町なのは一等空尉。」

「フェイト・T・ハラオウン執務官」

「霧咲 智執務官」

「霧咲 夕陽執務官。機動六課へ出向となります。よろしくお願
いします。」

「はい。よろしくお願います。けど、執務官を三人も抱えとる隊
なんてツッコミ所満更やな」

この言葉に私達は引き締めた表情を崩し笑うのであった。

その後、レテイ提督の息子さんのグリフィス・ロウランが来て開式の準備が整い全員ロビーに到着したとの報告を受けた。それを聞いて私達はロビーへ移動する。

「機動六課課長及び部隊長の八神はやてです」

はやての挨拶から開式の式典が始まった。目の前のフォアード陣は智と夕陽を見て改めて驚いている様子。

「ま、長い話しは嫌われるんでこれにて機動六課課長及び部隊長八神はやてでした。」

最後に片手を上げて挨拶を終えるはやて。開式が終わった後。私は夕陽と智をある二人に会わせることにした。

「智、夕陽。紹介するね。この二人はエリオとキャラ。」

「は、はじめまして！エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「お、同じくキャラ・ル・ルシエ三等陸士であります。」

緊張しているらしくガチンガチンの二人。そんな二人に私達は苦笑しとそんなに気を張らなくていいと言うと智と夕陽はそれぞれ自己紹介する。

「あ〜。お二人はフェイトさんとはどういったご関係で…」

「フェイトお姉ちゃんは私達の義姉だよ」

「今はまだですけどね」

それに驚く二人。私はそろそろ訓練でしょ？と二人に言う。それを聞いて慌てて走り去る背中を見ながら私は頑張ってね と手を振っていた。

「姉さん。あの二人って…」

「私が保護責任者になっている子達だよ。」

「お姉ちゃん19で二児の母ですか……。」

あの子達がそう思ってくれてると嬉しいんだけどね。

「フフ あ、そうだ。二人共訓練を見て来たら？」

「そうします。行きますよ夕陽。」

「はい」

二人を見送った後私は自分の車を止めているガレージへと向かう。今日で期日の7年が終わる。彼を迎えに行く為鼻歌を歌いながら私はその場を後にした。

機動六課訓練スペース。

高町教導官による完全監修の立体シミュレーター。海の上に現れた訓練スペースにわたしと智お兄ちゃんは驚く。何気に本局の訓練スペースより凄いかも……。そこでは新人のフォアード四人が訓練をしている。彼女達の相手は【ガジエトドローン】。その？型で形状はカプセルのようなモノ8年前から目撃されているらしいがここ最近頻りに姿を見せるようになってきた。また、自律判断を行えるAIを搭載しているとも思われ近頃どんどん動きが良くなってきているから改良が重ねられているのだろう。目の前にいるガジエトはまだまだ弱い時期のモノだ。けど新人のお姉ちゃん達はなにかと苦労しているようで攻撃はなかなか当たらない。

「アレ、すばしっこいんだよねえ」

「そうですね。更に面倒なモノを持ってますし」

フォアード陣の一人。ティアナさんが放った魔力弾が二体ガジエトを捉える。

「ただど当たる直前にそれは掻き消されてしまった。」

「Anti Maggiling Field」

私とお兄ちゃんは同時に呟く。

「そう、これが厄介で大抵の魔法は掻き消されてしまう。」

「更には全開で展開されると飛行も困難になってしまうのだ。」

「夕陽はどう対象してますか？」

「消される前に無理矢理の力押しかな？お兄ちゃんは？」

「消されないモノをぶつけます」

フォアード陣のお姉ちゃん達もそれぞれ考えて何とかガジェットを全て倒したようだ。なのはさんの所に四人が集まる。彼女は私達を見つけると手を振って呼んだ。

「智と夕陽はまだ時間大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですけど？」

「よかつたら。やってみる？あの子達に若手執務官の実力を見てもらいたいし。」

「私達の？」

見てもあんまり参考にならないんじゃないか……。

「自分達と同じぐらいの子が上にいるといい刺激になると思うの。」

「わかりました」

「それじゃ準備するからお願いね」

そう言うと直ぐに私達に合わせて設定を始める。

『夕陽……。分かってはいるとは思いますが。』

『大丈夫……。力は使わないよ。ていうかりミッターをバカみたいに掛けてるから使いたくても使えないんだけどね……。』

お兄ちゃんが念話を繋げてきたので私も返す。

お姉ちゃん達は知っているけど私達は普通の人間ではない。超高度文明アルハザードから流出した技術。ロストロギアなのだ。故に魔力値は規格外、並の魔術師の何占何万倍の魔力を持っている。

今はこの六課に入る為に異常な数の能力リミッター、抑制リミッターを自身にかけてAマイナスまで落としている。お兄ちゃんもそうだ。

これはお姉ちゃんの義兄のクロノ提督。聖王教会騎士カリム・グラシアがリミッター解除の権限を持っている。

『まあそうですね。では夕陽。貴方がどれだけ成長したか見せてもらいますよっ。』

『はい。』

「それじゃ智、夕陽始めるよー!!」

なのはさんに言われ私達はそれぞれ待機中のデバイスを取り出す。

「いくよ。セレスティア。」

『YES、your highness』

「起きてください。ウロボロス」

『OK。Master...。』

「」Set up「」

次の瞬間。深緑と明灰の閃光が私達を包んだ。

FILE 1 (後書き)

感想をお待ちしています。

FILE2 (前書き)

更新です。

FILE 2

なのはさんに呼ばれて私達フォアード四人の前に来た二人。

名前を霧咲智、霧咲夕陽。

あの歳で既に執務官の二人は管理局の中でもなのはさん達に続く若手エリート。私がいた陸士訓練校でも『若手イケメン執務官』『最年少女性執務官』などいろいろな話題が入ってきていた。私自身執務官を目指しているのである程度そいつた情報は入ってくる。どうでもいいと思うのは流しているが…。

そんな二人の実力をなのはさんが私達に見せたいと言ってきたのだ。

『ねえティア…』

『なによ…』

訓練校からの腐れ縁であるスバルが念話を繋げてくる。

いつも思っただが何故彼女はいきなり念話を繋げてくるのだろうか？

『霧咲智執務官って凄いらしいよ？』

『そりやそうでしょ？伊達に執務官やってるんだし』

あの歳で執務官だ。実力も相当なモノなのだろう。

スバルの話しによると何度か彼女の姉であるギンガ・ナカジマが稽古をつけて貰ったらしく、ギンガさんは一方的に負けたとか。

『それじゃ……。もう一人の女の子は？』

それは私も考えてた。12歳ぐらいの女の子。見た目はおっとりとしたかわいい女の子。以前私達が昇級試験で初めて会った時、この子が執務官とは思えなかった。

『なんとも言えないわね……』

「「Set up」」

そうこうしているうちに二人は待機中のデバイスを取り出して機動する。

深緑とライトグレーの閃光が二人を包み込む。

「それじゃここで二人の簡単な説明しとくね。」

二人を横目になのはさんが口を開いた。

「二人は兄妹でフェイト隊長の義理の弟妹。霧咲智執務官はフェイト隊長の義理のお兄さん、次元航行艦クラウディアの艦長クロノ・ハラオウン提督の下、単身で難事件を解決した腕利き執務官、通称『明灰の略奪者』。」

彼は私の補佐、隊長補佐として着く事になってるの」

閃光が晴れ、お兄さんの智執務官は黒のロングコートとライトグレーのスーツを身に纏い手には蛇の彫刻が彫られた二丁の銃を持って現れる。

『不備はないわよマスター。』

「ありがとうございますウロボロス」

妹の夕陽執務官は黒を貴重とし深緑装飾が施されたの軽装甲冑を纏う。

手には巨大なハルバートの形状をしたデバイスが握られていた。

「そして霧咲夕陽執務官。彼女はフェイト隊長と共に数々の難事件を解決した最年少女性執務官。通称『深緑の女王』。彼女はフェイト隊長の補佐に着く予定になってる」

彼女の

『機動完了。いつでも参れます姫殿下…。』

「うん。ありがとう」

「……………デカ。」

スバルが呆然とする。

小柄な女の子が自分とは全く見合わない巨大な獲物を掲げていることに。

「本当にガンナータイプの魔導師なんだ…。」

私は呟く。彼が本当に自分と同じガンナータイプのことに。

「二人共いくよ。設定はオールAだからナメてると痛い目見るからね。」

「ハイ!!」

「それじゃレディ……」

なのはさんが上に手を上げ、二人は身構える。ガジエトの数は20。設定は私達より数段上。

「GO!!」

そして訓練はスタートされた。

一番最初に飛び出したのはお兄さんの智執務官。黒のロングコートを靡かせ地面スレスレを走り抜ける。ガジエトは頻繁に飛び回り彼に向けて光子力光線の雨を降らせ彼を仕留めようとする。後方で戦う私とは全く違うガンナータイプの戦い。

『アラアラ今日もモテモテねマスター。熱烈なファンじゃないの。』

「あんなのにモテたくないですよ。」

『まあいいわ。ギャラリーもいるし今日はタンゴの気分ね』

彼はガジェット達のご真ん中に移動し私達に向かって一礼。そして同時にガジェット達は一斉に撃ってきた。

『stone statue』

女性の機械音と共に爆発する智執務官。私達四人は直撃！？と驚嘆の声をあげる。

「四人とも心配すぎだよ。ほら」

爆発と共に舞い上がった土煙が晴れる。そこに現れたのは石のような色をした智執務だった。

「もしかしてあれ…石ですか？」

「もしかしなくても石だよアレ」

石のデコイの上に智執務官はゆっくりと降り立つ。

「さあ踊りましょうウロボロス。彼女の為に…」

『grief rain』

瞬間、一体のガジェットが曝散した。彼の周りに展開された魔力スフィアが貫いたのだろうか？それにしても今の攻撃、ガジェットのAMFが発動しなかったのは何故だろうか？

私は首を傾げ考える。だがその理由は直ぐに分かった。

「なんだアレ……」

エリオが言った。彼の視線の先で魔力スフィアが棘のように形状を変え石のように硬化していた。

「アレが智執務官の持つ能力で異例中の異例、魔力変換資質『石』。私も見るのは初めてなんだけどね」

なのはさんが言うに彼の魔力変換資質は今までに類を見ないモノ。他の魔力変換資質である『電気』『火』『風』『水』などとは全く違いAMFをほとんど無視できるらしい。それを駆使して次々とガジェットを落としていく彼。敵の攻撃のど真ん中で撃ち、最小限の動きで避け、また撃つ。

全く無駄のないその動きはまるで踊っているようで私は思わず見惚れてしまった。

同じガンナーでここまで強くなれるのだと。

「……………」

そしてちょうど10体仕留めた所で彼は動きを止め私達に向かって一礼する。

私達四人は首を傾げ、なのはさんは笑顔で拍手している。

この人はなにか訓練をシヨールのように見ていたのだろうか？

「さて夕陽。次は貴方の番ですよ。」

彼は身を沈め足に力を溜めるとそのまま飛び上がってガジェット達の暴風圏から退場した。

それと同時にどこからか放たれた深緑の砲撃。

残り10体のうち8体はなんとか避けたが残りは避けきれずに曝散

する。

「行くよセレスティア！お兄ちゃんにいいところ見せなきゃね」

後に飛来したのは巨大な獲物を手にした軽装甲冑の女の子。霧咲智執務官の妹、夕陽だ

まずは一体へと彼女は突っ込んでいく。

あんなに大きな獲物を持っているのにその動きはローラーを履いてる私より速く鋭敏。

「だあああつ！！」

気迫と共に飛び上がると彼女は空中で身体を捻り己の獲物に遠心力を持たせる。そして勢いの着いたまま最後は片手で振り抜き一閃させた。

「次！！」

一閃させたままの勢いを殺さずに次の標的を定める。

『C r i i u s W h i p』

彼女の武器であるハルバート。その深緑の魔力刀が輝く。そしてそれは鞭のように伸び敵を切り裂く。

「流石天才少女。あの歳で伊達に執務官やってないね。」

なのはさんは満足そうに頷きながら彼女の戦いを見ている。

「夕陽ちゃんってなのはさんと同じ世界の出なんですか？」

「同じ世界の同じ街にいたよ。夕陽は5歳の時にはお兄さん達のお手伝いもできて一人で家事もできるんだよ？」

ほえ〜。凄いですねえ…。

私は感心の眼差しで彼女を見る。力強く。美しく舞う彼女。自分とは何が違うのか。それを考える。

「お、やってるな！」

「ふむ。夕陽もなかなかの騎士に仕上がっているな」

後ろから声がして振り返る。そこにいたのは八神部隊長の騎士。シグナム二等空尉とヴィータ三等空尉。

私達のご苦労様です！と敬礼する。

「夕陽ちゃん凄いですね。智執務官も」

「そりゃそうだろう。あの二人、智はクロノ・ハラオウン提督に、夕陽はフェイト執務官にみっちり扱われているからな」

英才教育ですか…。

「それにあの二人の兄貴がバケモノだからな。」

「二人のお兄さんですか？」

「ヴィータちゃん!!」

「う、ワリイ……」

なのはさんに怒鳴られヴィータ二等空尉は気まずそうに顔を伏せる。まだお兄さんがいたんだ……。けど二人のこの気まずそうな雰囲気は何だろう。

その時、凄まじい魔力の波動と共に周囲が深緑の閃光に包まれる。夕陽ちゃんが直射砲でも放ったのだろう。

閃光が晴れた時。夕陽ちゃんと智執務官の二人は空にいた。二人共飛べたんだ。

「うん。なかなかよかったですよ」

「エへへ」

妹の頭を撫でる兄。夕陽ちゃんは気持ち良さそうな顔をしている。

「夕陽、智お疲れ様」

なのはさんに呼ばれ二人はゆっくりとこちらに降りて来る。

「二人共ありがとね。できればチームプレーを見せてほしかったんだけどね」

その言葉に二人はしまったたというような顔をして私達は笑うのだった。

FILE 2 (後書き)

感想お待ちしています

FILE 3 (前書き)

誤字修正しました

FILE 3

「久しぶりだな。智、夕陽」

「お前ら元気でやってたか？」

霧咲兄妹の演習が終わり二人は副隊長であるシグナム二等空尉とヴィータ三等空尉に挨拶をしている。

「私はいつも元気だよ」

「こら夕陽失礼ですよ！」

いや、夕陽執務官はシグナム二等空尉と同じ地位で智執務官にいたってはなのはさんやフェイト執務官と同じ、つまり二人の上司のはずですが？そんな事を思いつつふと智執務官を眺める。

私と同じガンナーで執務官。
3年前から彼の噂は聞いていた。クロノ・ハラオウンに続く若き執務官。

陸士訓練校にいる時は同年代の女の子が何やら騒いでいたのを覚えている。

まあ彼女達の言うようにたしかにカツコイイが…。

いいわよね…才能がある奴。

いつの間にか拳を握り締めてあの人を睨んでいた。

「ティアナさん？」

私の様子がおかしい事に気付きキャロが声をかけてくれたが私の耳には全く入ってきていなかった。

「それじゃ今日の訓練はここまで。お疲れ様。」

なのはさんの解散の合図に私を除く三人がありがとございましたと返事をし隊舎へとあるいていく。

隊長、副隊長陣も彼女達の後を追う中私はまだ彼を睨んでいた。彼も私の視線に気付いていたらしく。隊舎へ戻らずにこの場に残っている。

「ずっと睨んでいるみたいでしたけど。僕はなにか気に障るようなことしましたか？」

流石、やっぱり気付いていたのね。

「いえ、ただ随分と素晴らしい才能をお持ちだなと思ひまして」

私のこの言葉に彼は一瞬だけ悲しそうな顔をしたような気がした。

「買い被りすぎですよ。」

「余裕ですか？」

私は再度睨みつけると彼は肩を竦めた。

その仕草が私を虚仮にしているようでむかつく。

「そんなことはありません。あ、同い年なので別に敬語などは必要ないですよ。」

相手は善意でやっているのだろう。

だが私はその行動が更にムカついて差し出された手を握り返さずに

背を向け歩きだす。

「どうだか」

それだけ言い残すと私はそのまま隊舎に戻る。

「才能か……。人一人守れないこの力のどこが素晴らしいんでしょうか。」

一人取り残された少年は空を一人見上げていた。

「……なにやってんだろ私」

智執務官と別れたあと一人隊舎へ向けて歩いている。

やっと頭が冷えてきて幾分落ち着きを取り戻した私はため息をつき自分の持っているアンカーガンを取り出して眺める。

このデバイスは訓練校に入った際に自分で組んだモノ。訓練校で支給されるのは杖だけなので死んだ兄のようなガンナーを指す私には自分でデバイスを組むしかなかった。

今日、再び目の前に現れた彼は私や兄と同じガンナーで私の夢である執務官。

彼の存在は決定的な才能の差を突き付けられているようではなかった。

「うつん…そんなの関係ない。私は私の力でのし上がってみせる。」
気合いを入れ直し隊舎に入ろうとした時。急に身体が動かなくなっ
た。

「アレ？」

懸命に動こうとするが全く動かない。身体どこからか指一つ動かな
い。

コツ…コツ…。

自分の後方で小さな足音が聞こえた。
身体が震えだす。
なにかは解らないが底から溢れ出す恐怖を感じた。
足音の主はゆっくりと私の横を通り抜ける。

「……………誰？」

私は呟く。するとその人は立ち止まりゆっくりとこちらを見てきた。
漆黒の黒髪に綺麗な青い瞳。一瞬見とれそうになるが凄まじい殺気
に現実に引き戻される。

「霧咲智と霧咲夕陽はいるか？」

自分の上官の所在を聞かれ私は身構える。

「上官になんの用!?!」

殺気で硬直した身体を強引に動かしアンカーガンを向ける。

「もう一度聞く…。」

彼の影からゆっくりと真っ黒いなにかが伸びる。

ソレは影から切り離されると彼の左手に収まった。

握られたソレは漆黒の短剣。

「智と夕陽はどこだ?」

「ッ!? 敵襲!?!」

私は大声で叫んだ。

「……………」

私は智、夕陽と別れた後地上本部までちょっとした用で出かけていた。

いや、ちょっとした用事ではなくとても大事な用事だ。

桐斗を迎えに行つたのだ。だが桐斗は既に出所した後で収容所には誰もいなかった。故に今私はものすごく不機嫌である。なんで私を待たずに出て行つちゃうのでしょうか？信じられませんか！！とりあえずこの鬱憤を親友にぶつけるべく六課へ車を走らせている訳で……。

『フェイト執務官！！』

いきなりモニターが開いて姿を見せたのははやての副官であるグリフィス。

その顔はとても焦っているようだった。

「どうしたの？」

『敵襲です。すぐに戻って来てください！！』

敵襲？六課ができたその日に？

「現状を詳しく教えて！敵の数は！？」

「一人です！！今は高町隊長、シグナム、ヴィータ副隊長他フォアード陣で応戦していますが相手が異常です！！急いでください！！」

「ちょっとまって！！智と夕陽は！？」

何故二人の名が呼ばれないのか疑問に思い聞いてみる。

「それが……」

なにか気まずい表情をするグリフィス。思わず二人になにかあった

のだろうかと思ってしまう。

「二人は走って何処かに行ったとスバル・ナカジマから連絡を受けました。食事中二人揃って顔色を悪くして急に走り去ったとか」

「今すぐ二人を捕まえて。シャマルとザフィーラがいるでしょ？あと飛行許可お願い。」

「り、了解しました！！」

彼はなにかを言おうとしたが私の静かな殺気ですぐに飛行許可を出すともモニターを閉じた。

車を最寄のパーキングに止めて車を飛び出すとバルディッシュを出す。

「バルディッシュ…：Setup！！」

「Standby Lady・Setup。」

金色の閃光に包まれバリアジャケットを纏った私は空に飛び上がると六課目掛け一直線に飛んで行った。

「フォアード陣は後方に下がって！！前は私達が出るから！！」

「……は、ハイ!!」

隊長である私の指示でフォアードメンバーは後方に下がる。

四人の目の前では私達隊長陣が戦っている。

何故こんなことになっているかという訓練が終わった後の食事中いきなり緊急事態のアラートが鳴り響いたのだ。

詳細はティアナからの敵襲の報告。最初はティア、エリオとキャロ、スバルの四人で構成されるフォアードメンバーで当たったのだがなにをしても全く攻撃が通用しない。

近接戦闘が主のスバルとエリオが最初に突っ込んで行ったが敵から溢れ出す魔力の奔流に近づけない。次に砲撃による遠距離攻撃を仕掛けたのだが簡単に掻き消されてしまった。

仕方なくフォアード陣を下げて私達が前に出ているのだが

「なんだコイツ!?!」

「強すぎる……」

いきなり襲撃してきたあの人はヴィータちゃんのグラーフアイゼンを素手で、シグナムさんのレヴァンティンを黒い短剣で軽々と受け止めているのだ。

正直無茶苦茶です。

「二人共避けて!!」

『shooting mode set』

私は少しでも活路を見出だすべくレイジングハートをシューティングモードに換装。同時にチャージされる魔力とその周りに展開され

た環状魔法陣。

ターゲットのロックと二人の離脱を確認するとあの人に向けて砲撃を放った。

「デイバイン…バスター!!」

大気を揺るがす私の直射砲は標的を捉え爆発する。
だが

「オイオイ……。」

ヴィータちゃんの声が耳に入る。

爆炎の中から現れたのは無傷の男性。彼の右手には光輝く剣が握られている。

「悪魔の砲撃をアレで斬ったのかよ……。」

ヴィータちゃんのアノセリフは後で問い詰めるとして私自身驚いている。

その時。

「お前…高町か？」

「え？」

彼が私の名を読んだことに呆けた顔をする。

彼は私の事を知っている？

「そっちはシグナムさんとヴィータか？」

「何故我等の名を知っている」

シグナムさんはレヴァンティンの切っ先を彼に向け威圧する。私は彼女を制すると前に出て向き合う。

「私は起動六課スターズ分隊隊長高町なのはです。貴方の名前と目的を教えてください。」

その言葉に彼の殺気が消えうせその顔に鬱すらと笑みが浮かぶ。

「そうか……久しぶりだな高町。」

「久しぶり？」

「覚えてないか？俺は「こんな所にいた!!」」

大声と共に彼の横に降り立つ一人の女性。金色の髪を靡かせるその人は私の親友の一人フェイト・T・ハラオウンだった。

FILE 3 (後書き)

感想お待ちしています

FILE 4 (前書き)

誤字修正、少々加筆しました

FILE 4

「なんであそこにいないの？ついさっき迎えに行ってたんだよ？敵襲って聞いたからまさかとは思ってたけど」

「悪い。昼前に別の迎えが来てな」

私達がついさつきまで戦っていた人にガミガミと文句を言っけらっしやるフェイトちゃん。その光景を呆然と見ている私達。

「あの…。その人は一体……。」

「アレ？エリオとキャロには紹介してなかった？」

「「してません」」

キョトンとした表情のフェイトちゃんと同時に頷く六課メンバー最年少の二人。

その時私はあることに気づく。

「もしかして桐斗君？」

「もしかしなくても桐斗兄さんです。」

隊舎の影から智が出てきた。彼の後には夕陽が隠れている。二人とも物凄くビビっているようです。

「久しぶりだな智、夕陽。」

「はい……。」

「久しぶりお兄ちゃん……。」

「紹介します。僕達の実の兄である霧咲桐斗です」

隊舎にある食堂で僕は皆さんに兄さんの紹介をする。

兄さんと僕達の関係を知っている方々以外はとても驚いている様子。

「だったら早く言えよなお前ら。」

「ごめんなさい。」

夕陽が皆さんに頭を下げています。

先程の戦闘に僕達がいなかった理由。それは文字通り【逃げた】からです。

兄さんがここに近づいていたのに気づいたのは食事をしている最中で深層でリンクしている僕達は兄さんの怒気に気づきました。

夕陽に至っては気づいた瞬間フォークを落としましたね。

兄さんは僕達が管理局に入った事をしりません。あとりあえず僕達

は逃げることにしたのですが、シャマルさんとザフィーラに捕ま
て……。

「智と夕陽の【お話し】は後で私達が受け持つことにして……」

あ、やっぱり見逃してくれないんですね。がっかりとうなだれる夕
陽を余所に姉さんは仕切り直す。

「ほら、改めて自己紹介。せっかく会いに来てくれたんだから皆に
ちゃんと知ってもらわないと」

「ああ……」

兄さんが来て姉さんは嬉しそうですね。

席を立ち上がると兄さんは皆に向かって敬礼する。

「本日付けで古代遺物管理部起動六課に出向となった桐斗・K・ハ
ラウン一等空佐だ。俺達の弟妹が世話になっているようだが共々
よろしく頼む。」

「「「……………」」」

何故か食堂が静かになりました。

兄さん今なんと？

ていうか姉さんもなに驚いた顔してるんですか？

「どこの所属でここに出向になったの？私聞いてないよ？それに階
級がはやてより上？」

混乱している義姉さん。無理もない、兄さんは今日まで収容所にて

服役していたのだ。出所したその日に一佐昇進なんてありえない。

「本局所属だ。階級等はずい最近辞令が出た。流石に次元世界の果てにある世界での長期滞在任務はこたえたな。あんな場所には二度と行きたくない。」

溜め息混じりにやれやれと肩をすくめる彼。そんな時、フォアードや僕達の過去を知らない人を覗く人間に念話がつなげられた。

『お義母さんや義兄さん達がいりいろやってくれてな特例処置だそう。一応言っておくが元囚人だということは内密に頼む、ここは話しを合わせてくれ。』

それを聞いた後に隊長陣は瞬時にアイコンタクトを交わし兄さんに話しを合わせる。

「桐斗君が着いてた任務って確か一年中氷河期みたいな世界で運ばれてくる仮封印状態の危険度Sクラス認定されたロストロギア封印作業だったよね。良く7年もいる気になれたよね。」

「封印し終えた矢先に次々と別のロストロギアが来るんだ。帰る帰らない以前に生きるか死ぬかだな。まあおかげで階級はうなぎ登りだ。」

なのは姐さんがすぐさま話しを合わせる。

「私、その話しを聞いた時、思わずクーデータ起こそうかと思ったんだけど……。」

そして義姉さんも合わせる。

確かにクーデータ起こそうとしてましたね。内容は別としてクロノさん相手に……。

持て。」

「ハイ。」

食事をしながら兄さんは僕達を真剣な眼差しで見る。

そして軽くため息をつくと言わずと笑顔になる。その顔は7年前と同じ力強くも優しい兄の顔だった。

「まあ、こつちも黙っていたのは悪かったな。」

「これでお互い様だね。」

「う、お兄ちゃん!!」

やっと緊張が解れたのか夕陽は兄さんに抱き着くと胸の仲で大声を上げて泣いた。やはり7年も会えないと寂しかったのでしよう。僕も顔を背けて涙を我慢していますから。

「あの……よろしいでしょうか。キリサキ・ハラオウン一佐」

夕陽がやっと泣き止んだ頃ティアナさんが僕達の所に来た。ちょっと気を利かせてくれたようです。

「君は？」

「ハイ。スターズ分隊スターズ04ティアナ・ランスター二等陸士であります。」

「ティアナはなのはの分隊のフォアードをやってるんだ。ちなみに執務官志望。」

敬礼するティアナさんに兄さんは楽にしていいたいと言いつつ彼女をテーブルに着かせる。

ちなみに僕は彼女に嫌われているようでちょっと気まずいです。

「ランスターは智と同年か。頼りない弟だが頼りにしてやってくれ。」

「は、ハイ……。それよりも先程はすみませんでした。」

立ち上がり兄さんに向かって深く頭を下げるティアナさん。それに対して僕達は四人そろって首を傾げている。

「なにがだ？」

「いや、先程の戦闘。発端は私ですし」

「「「ああ、アレ」「」」

僕、夕陽、姉さんが同時に謝罪の訳を理解する。それを呆けて見ている方が一人。

「アレはランスター、君の責任じゃない。説明してなかったこつちが悪いからな。だから気にしなくてもいい。」

「ハイ、ありがとうございます。」

その後、ティアナさんと姉さんと夕陽がその場に残り、僕と兄さんははやてさんにお呼び出しを受けたので部隊長室へと赴くことになりました。

「ようこそいらっしやいました。時空管理局古代遺物管理部起動六課課長兼部隊長の八神はやて二等陸佐います。一佐の本日のご出向六課メンバー全員で歓迎いたします。」

「三提督直屬、桐斗・K・ハラオウン一等空佐だ。微弱ながら俺も八神二佐の力になろう。今後よろしく頼む。」

俺と八神は互いに向き合い敬礼をし握手を交わす。俺の後では智が控えている。自己紹介をしているのはとりあえずの礼儀ということだ。

「さて堅苦しいのはここまでにして、さっきは本当にごめんな。ウチの子が勘違いして戦闘になってしまつて。」

「気にするな。連絡が遅れたこっちのせいでもある。」

俺は肩をすくめながら八神に出向の際に提出する資料を渡す。八神には俺が三提督の直屬であるということは部隊長室に呼ばれた

時に話した。彼女には六課設立を黙認している三提督との繋がりが
あるからである。また、智も義兄のクロノ・ハラオウンの下で活動
していたという事もあり六課設立の理由もしている。故に同室を
許している。

「三提督がこつちに送ってきた理由は？」

「おそらく『今のレリック事件を重くみてる』というのが妥当だろ
うな。まあ八神の所の方が俺も動きやすいという理由もあるだろう
。」

「それじゃ、今の能力ランクは？多分相当落としとるんやろ？」

「ああ、ランクはAランクだ。異常な数の能力リミッターを掛けら
れてる。幸いなのは解除の権限は非公式ではあるが俺に持たされて
る所だな。」

俺も智と夕陽同様リミッターを掛けている。正直動きにくすぎてな
らないがな。

「了解。桐斗君には部隊を持って貰おう思ってたんやけど…。フ
ェイトちゃんの要望でライトニングに入ってもらうことにするな。
隊長はフェイトちゃん、副隊長はシグナム、桐斗君は自由に動ける
形で二次隊長、ライトニング00になってもらうわ。」

あつちにはエリオとキャロのような小さい子もおるし。戦力の分割
として智のスターズ隊長補佐は変わらんとして、夕陽はライトニン
グからスターズ副隊長補佐に配置替えやな。」

俺はそれを聞いて深くため息をつく。フェイト…公私混同するな。

「了解。」

「それじゃ兄さん。部屋まで案内します。」

そして俺達は部隊長室を出る。すると目の前にある廊下の角に人影を見つけた。

「あれは……。」

「ああ、あの二人はフォアードメンバーの二人ですね。エリオ、キヤロ出てきていいですよ」

「はじめまして。エリオ・モンディアル三等陸士であります。」

「同じくキヤロ・ル・ルシエ三等陸士であります。」

二人は緊張しているようで頑なに敬礼している。俺はそれに苦笑すると二人の視線までしゃがみ敬礼する。

「桐斗・K・ハラオウンだ。二人の事はフェイトから聞いている。彼女の保護児童で『私にとってはかわいい息子と娘』とな。俺のことは好きなように呼べばいい。」

「「ハイ!!」」

二人は笑顔になりそれぞれに俺の手をとる。

「エリオ、キヤロ。兄さんを部屋へ案内してあげてください。」

「わかりました!!」

「こちらです！」

俺は二人に手を引かれ智と別れた。

「アレ？桐斗とエリオにキヤロ。」

私はエリオとキヤロに手を引かれる桐斗を見つける。

彼の手を引く二人はとても笑顔でまるで親子のようだ。

うくん……。あの二人、私にもまだあんな顔は見せてないんだけどなあ。

ちよつとだけ桐斗にヤキモチを妬きながら三人に駆け寄る。

「エリオ、キヤロ。桐斗を部屋まで案内してるの？」

「ハイ これから向かう所です」

笑顔で頷くキヤロの頭を優しく撫でて私もそれに同行することになった。

「フェイト…八神に聞いたぞ。俺をフェイトの部隊に入れてもらうように頼んだらしいな。」

エリオとキヤロの手を繋ぎながら桐斗は横目で私を見てくる。

「本当ですか桐斗さん？」

「私達と同じ隊なんですか？」

目を輝かせている二人に彼は頷く。本当に嬉しそうな二人を見て思わず私も笑顔になる。

「基本は高町に仕込んでもらうとして暇があれば模擬戦ぐらいなら付き合っただけよ」

「あ、私の相手もお願いね？」

笑顔になる私達四人。こんな時間がいつまでも続いてほしい。心からそう願った。

FILE 4 (後書き)

感想お待ちしています

FILE 5 (前書き)

今週の更新は伝説の剣のみです

「それじゃ、そろそろ休憩しよっか？」

早朝の訓練。

朝早くからなのはさんの厳しい訓練。訓練校の時とは比にならないトレーニングをこなしていた私達。

ある程度メニューをこなした後なのはさんは私達に休憩を言い渡す。

「いつや〜。なのはさんの教導ってスパルタだね〜」

隣では訓練校時代からの腐れ縁であるスバルが笑いながら肩で息をついている。

今まででもけっこう鍛えてたつもりだったけど、なのはさんの指導を受けてるとまだまだ甘かったんだって思うわホントに…。

「流石体力バカ。こうしてるとアンタの体力がホントに羨ましいわ」

「へへ…。ティアに誉められた〜」

なにやらうれしそうにしているこのワン子をよそに私はタオルを置いておいた場所に一人フォアードメンバーの輪を離れる。

「タオル、タオルつと……」

離れた場所に置いて置いたタオルを拾い汗を拭う。今朝のフィールドは『都市』なので物を置いた位置が把握し易い。フィールドが『

森』の時は下手したらフィールド解除するまで見付からないというのもあつたりする。

まあ、私に限ってそんなことはないのだけど。ちなみに上記はスバルの例である。

「さて、汗も拭いたし。もどるかしらね……ん？」

汗を拭いた後私はある人物を見つけた。

スターズ分隊隊長補、三人いる六課所属の執務官の一人。

「霧咲…智、隊長補？」

六課の制服の姿の彼。確か今朝の集合の時はいなかった筈だ。多分執務官としての仕事をしていたと思う。

けどなんでここにいるのだろうか？

彼は一人私達とは離れた場所へと歩みを進めている。

いつもの私なら別にも止めずにフォアードメンバーの所へ戻るのだが、この時の私は何故か気になって彼の後を付けた。

「別に私達の所への顔出しって訳じゃなさそうね……」

物陰に隠れ上官を観察する。

霧咲智執務官。

三年前に私とスバルが巻き込まれた立てこもり事件を瞬時に解決した二人組の局員の一人。

あの事件の後なんとなく他の訓練生に聞いてみた。

そして出てきた回答は

『クロノ・ハラオウンに続く若手執務官』

『執務官兄弟』

『イケメン執務官』

『明灰の略奪者』

その他他種多様。

訓練校の女の子の進路希望で霧咲智執務官の執務官補佐という子もいた。

そんな彼がなのはさん達と繋がりがあつたとは思わなかった。

同じ世界、同じ街の出身。

私からしたらとんでもないコネの持ち主だ。

そんな事を考えながら彼を見る。

場所は大きく開かれた大通り。

その真ん中に立つ人物は設定用のパネルを展開させるとそこに色々と打ち込んでいく。

そして

「ウロボロス…モード1で起動してください。バリアジャケットはいりません」

『OK』

左手首に付けられたシンプルな作りの腕輪が輝く。

明灰の魔力光が両の手に収まり形を成す。現れたのは重鈍そうなりボルバータイプの銃型デバイス。

それに併せて周囲に展開された五十数個の大小様々な自動狙撃型スフィア。

それらはそれぞれ自律行動をし彼目掛け狙撃を開始した。

「なによ……あの動き」

降り注ぐ魔力弾の雨の中、彼は踊るようにしてそれらを避ける。

迫り来る魔力弾のほとんどを紙一重で避け、誘導性のある弾丸はデバイスで作り出した魔力刀で切り裂く。

私達に見せた時の動きより優雅で綺麗で思わず見とれてしまうその動き。

私はただじっとそれを見ていた。

「アレね。智が使うスタイルなんだけど見ていると全然飽きないでしょ?」

「な、なのはさん!？」

いつの間にか横に立っていたスターズ分隊長。

私は驚き飛び退く。そんな私にお構いなく彼女は続ける。

「動きには必ずリズムができる。完全な不規則なんて存在しない。そのリズムを掌握すれば相手の動きも掴める。その持論の下にできたのがあのスタイルなんだ。」

視線の先では回避に徹していた彼が次々とスフィアを破壊していく。回避に徹していた時は最初に立っていた半径2メートルの範囲から出ずにいた。が、今は1メートルから出ずに迫り来る魔力弾は切り裂きカウンターのようには撃ち返している。

「……………」

この時私は無意識に彼と周囲に飛び回るスフィアのリズムを辿ろうとっていた。

トッ、トトン、トン、トトン、トトン……違う。

トトン、トトン、トッ、トッ、トトン、トトン……これも違う。

「どうかな？」

「え？、あ、はい」

感想を聞かれ慌てて返事をする私。

「華はあるとおもいますが……。実践向きつてのが疑問に思えます」
そう言うとなのはさんは苦笑する。

「ティアナは手厳しいね。アレでも自慢の弟なんだけとなあ」

瞬間私は固まった。

は？弟？霧咲隊長補が？

「霧咲隊長補ってなのはさんの弟なんですか！？」

隊長補って一佐の弟でフェイト隊長の義弟よね？二人は夫婦だから

…え？もしかして一佐って一夫多妻！？

「あー、なんか間違った方向に考えてるみたいだけどそれ違うからね？私は独身だし智は弟は弟でも弟分だから」

で、ですよね？

ホントにびっくりしたわ。アイツがなのはさんの弟だったらかなりシヨックだし。

そんなこんなで少し休憩が長くなったからそろそろ戻るのかなのはさんが言った時。

スフィアの破壊音と共に私達の間には石でできた大きな突き刺さった。

「……………」

「……………」

突然の出来事に私達二人は目をパチクリさせる。

そんな中

「……………なにしてるんですか？なのは姐さん、ティアナさん。」

やっと私達の存在に気付いた隊長補が呆けた顔をしていた。

只今、私達ハラOWN夫婦は仕事のついでに六課まっでのドライブを楽しんでいます。

仕事というのははやてを空港まで送る為の護送。

ホントは私一人で事足りるのだけど彼女が気を利かせてくれたおかげで桐斗も同伴させてもらえた。

だから今の私はかなり上機嫌です。

行きは三人で昔の懐かしい話し。帰りは2人で今後の事を話している。

さて、つい先程から助手席人座る私の旦那様は熱心に小型スクリーンに映し出された何かを見ています。

運転しつつも私はそれを横目で覗き込んでみる。

「なに見てるの？」

「ん？こっちの世界的で使われている魔法式のプログラムだ。」

彼が見ていたのはミッドチルダ、ベルカ式魔法のプログラムだ。そういうえば、智と夕陽は専用のデバイスを持っていた。彼はどのようなだろうか？

「桐斗はデバイスつてもってる？」

「貰い物だがストレージをな。プログラムをざっと見たが俺達が本気で使おうとしたら発動どころかデバイスがふっ飛ぶぞ」

そうやって取り出したのは待機中のバルディッシュと同じ形のデバイス。色は黒に白い淵。

あー、確かにそういえばそうだね。生半かな強度のデバイスじゃ彼等の魔力とかに耐えられないんだよね。夕陽もかなりの数のデバイス壊してるし。専用機である『セレスティア』でも8割以上の力で使うと一発でフルメンテ要の状態になる。

「いつそのこと。デバイスは飾りにでもするか？」

そうやって目の前にミッド式魔法陣を光で作り出す。

「……デバイスが飾りだとせっかくのその子がかわいそうじゃ……。じゃなくてリミッターは!？」

そういえば彼にはリミッターがかかっている。自身の任意でかける制御リミッター。そして出向の際にかけられた能力リミッター。確か夕陽は能力リミッターのせいで力を使いたくても使えないと言っていた。

「それは解釈の間違いだな。この力は遺伝子レベルで組み立てられているモノで云わば身体の一部だ。出力さえ抑えられてはいるものの使えないことはない」

そうやって彼は目の前に作り出した光の魔法陣を掻き消すと再びプログラムに目を通し出した。

「それじゃ、一応ごまかしはできるんだね？」

「まあ、見る分にだけはな。解析されると一発でバレる」

う、確かにバレる。

ウチにはシャーリーというデバイスマイスターがいて彼女は好奇心旺盛なのだ。

うーん……どうすればいいかな？

「桐斗がプログラムを使い分けるとか……。あはは、流石に無理だよな」

「そうだな…それでいくか。」

え？これ採用？

「……………一応冗談のつもりだったんだけど」

「おいおい。アルハザードの守護者は皆力の行使の際にはスパコンとは比にならない速度と量の情報処理をやってるんだぞ？マルチタスクも一体いくつ並列処理してると思う」

スパコンと比にならない情報処理能力。

そっいえば智の事務処理速度も速かったよな。夕陽だって私じゃ一週間かかるモノを愚痴こぼしっただけど半日ちょっとでやっただよな……。

「頭の中で回答ができてもそれを一々打ち込んでいかないといけな
いから夕陽でも半日かかるんだよ」

それを聞いた瞬間私はガクツとうなだれる。どうりで智も夕陽も執

務官試験を一発で受かつちゃうんだね。

小学生時代智が必死に勉強していたのは地球の教養レベルに合わせて
為だったんだ……。

二度落ちた私は改めて知った自分の弟妹のスペックの高さにどよ
んと落ち込んでいく。

ごめんね智、夕陽。こんなにスペックの低いお姉ちゃんで。

ごめんね桐斗。こんなにスペックの低い奥さんで

「あー、何を落ちこんでるかは知らないが俺も智も夕陽も気にして
ないからな。」

「下手な慰めはいらないよ……どうせ私はアリシアお姉ちゃんの出
来損ないの劣化クローンだから」

あはは……。なんでだろう。急に悲しくなってきた。

ディープな状態になった私。このまま彼を連れて身投げ（道連れ）

しようかと左手の海を見た時

額に鋭い痛みが走った。

「あうっ！」

いきなりのことに驚い走行が危うくなるがなんとか持ち直して再び
真っ直ぐ走り出す。そして片手で額をさすりながら涙目になりつつ
隣を見る。

「うう……なにをするの？」

「……お前は誰だ？」

私にかけられた妙な質問。なんでそんな事を聞くの？と問い返した

いところだが彼の目がそうはさせなかった。

「フェイト……テストロツサ・ハラウン」

「お前が告白した人物は誰だ？」

「霧咲桐斗」

「俺がプロポーズした女はお姉さんのアリシアさんか？」

「違う…私」

「わかってるならバカかなこと言うな」

それだけ言うと彼は頬杖をつきながら外の方に顔を逸らした。
心なしか耳が赤く見える。

そんな彼を見て私は小さく苦笑して『ごめんね』と呟く。

彼からしてみれば自分の方がこんな夫でいいのか？と言いたい所だ
ろう。

ロストロギアで人殺し、両親の能力を引き継いだ劣化コピーな自分。
私はそれとなくプロポーズの言葉を思い出しつつ。

「桐斗は世界で一番大切な私の旦那様だよ」

と彼に小さく告げた。

と、その時。

【EMERGENCY EMERGENCY EMERGENCY
EMERGENCY】

緊急通信が入った。

なんとなくいい雰囲気を崩された私は通信を繋げて

「ちょっと空気読もうよグリフィス」

と笑顔（もちろん目は笑ってないよ）で彼に言う。

もちろん副音性で『後でちょっと“お話し”があるから』を付け足しておく。

いきなり笑顔を向けられた彼は血の気が引いた顔で『スミマセン！スミマセン！』と頭を下げている。

ザンバーがいいかな？スマツシャーがいいかな？

「はあ…止めるフェイト。桐斗はどうした？」

そんな私達の間桐斗が入る。

む、命びろいしたねグリフィス。

『は、はい。ガジェットが出現しました。場所は西の山岳地帯。標的が狙っていると思われる対象はリニアールで移動中。

キリサキ・ハラウン一佐、テストロツサ・ハラウン執務官の両名は至急現地に向かってください。』

グリフィスの報告をする。

なんだガジェットか。まあ、ちょうどいいかな？このやるせないフラストレーションをぶつけるには丁度いいかもしれないし。

「わかった最寄りのパーキングに車を止めた後直ぐに向かう。飛行許可を出すぞ」

『了解しました!!』

そう言っただけで通信が切れた。

あ、そういえば

「桐斗の初陣だね。緊張してない」

もちろんしてるわけじゃないよね？

「俺の事よりもエリオやキャロの事を心配してやれお前にとって息子、娘同然なんだだろ？」

パーキングに車を止めると私達は車を降りる。

「桐斗の息子、娘でもあるんだよ？」

私の旦那様なんだしね。

「なら二人の手前、不様な姿は見せられないな」

桐斗の周りに光と陰が集い出す。

「フフ 私も頑張らないと」

主に私のフラストレーションの発散の為だけだ。待機中のバルディッシュを取り出し

「バルディツシュSetup!!」

『Standby lady Setup.』

金色の閃光と共にバリアジャケットを纏う。

さて、桐斗のバリアジャケットはどんなのなんだろ。

「ツヴァイハンダー起動」

彼の呼び掛けと共にストレージデバイス【ツヴァイハンダー】が起動する

足元から立ち上がる漆黒の魔力光が彼の防護服、バリアジャケットを形成する。

私のバリアジャケットの男性バージョンと言っている彼のバリアジャケットは私のと似ていた。襟は立てておりベルトは黒。白いマントは腰につけられている。

「これってもしかして私とお揃い？」

「ツヴァイハンダーはお義母さんから送られたモノだ。」

母さんグッジョブ!!

と内心で母、リンディ・ハラオウンに親指を立てる。

「クソ…プロテクトがかかってやがる…パターンが5秒毎にかわって…はあ!?!解除すると自爆!?!」

えっと母さんはなにがなんでもこのバリアジャケットを彼に着せたいらしいです。

万が一解除されても自爆。それを察知した母さんによる粛正が始ま

ることでしょう。

「なんで19にもなってペアルック……」

ものすごく沈んでいる旦那様の背中をポンポンと叩く私。

ちなみに今の私はものすごくいい笑顔です。いいじゃないですかペアルック。夫婦って感じで。母さんと姉さんも夫婦は基本ペアルックって言ってたし。

注：もちろん騙されてます。

「で、それが“ツヴァイハンダー”の戦闘形態だね？」

桐斗が手に持つ漆黒の取っ手、S字の柄。そして白銀に輝く巨大な刃。

大剣型デバイス【ツヴァイハンダー】

これも私のザンバーモードに似ていた。

「こいつの魔力運用は一方的に俺から魔力をむしり取るって感じだな。基本的な形態維持とバリアジャケット構成だけのデバイスだ。魔法運用は俺が自分でやる。」

「あ、もしかしてさっき見てたのって……」

「悪いがフェイトの魔法使わせてもらっぞ」

「うん！ー！」

笑顔で頷く私。

『それじゃ行くぞ』と彼に言われ。私は真剣な眼差しになる。
そして白銀と金色の魔力を迸りながら上空へと飛び上がる

「ライトニング01。フェイト・T・ハラオウン」
「ライトニング00。キリト・K・ハラオウン」

「行きます!!」
「出るぞ」

FILE 5 (後書き)

桐斗のデバイス【ツヴァイハンダー】のモチーフは実在した大剣で大きな刃、S字の柄が特徴です。

ツヴァイ：『二つ』。ハンダー：『手』

ツヴァイハンダー：『両手持ち』って意味ですね。

ちなみにコイツ。攻撃等の魔法はほとんどプログラムされてません。常に必要以上の魔力を桐斗から搾り取り、魔力刀、バリアジャケツトの形状維持、サーチの補助が基本です。文字通り飾り。

桐斗が使う攻撃魔法は自分でプログラムを使い分ける形にしました。

使用魔法

【アークトライデント】

トライデントスマッシュャーのパクリ。黒い直射砲

【サテライトランサー・ファンクランスシフト】

プラズマランサーのパクリ。変換資質雷はなく。フェイトのプラズマランサーの白銀版。もちろん普通のサテライトランサーも使えます。

後はツヴァイハンダーでめった斬りだったり、刀身である魔力刀をパージして攻撃用に使ったりです。

戦闘スタイルはプロフィールにも書きましたが基本的に必要以上に動きません。

だから固定砲台的な戦い方で砲撃メイン。
囀兼防衛線的な立ち位置です。

霧咲兄弟の守護者として戦うのはまだ後になります。

それでは今後ともご愛読よろしく願います。

感想お待ちしております。

御礼報告(前書き)

10万、1万記念

御礼報告

つい先程アクセス件数を確認した所。

累計PVが10万、ユニークが1万を超えている事を確認しました。

これにつきまして皆様に御礼と感謝の気持ちを込めましてリクエスト小説を書くつもりです。

こういったシチュエーションを書いてほしい。

誰と誰のIF。

そういったモノでもOKです。

詳しい内容を記載の上。感想、もしくはプレビューにお返事をいただけますようお願いいたします。

少し時間はかかりますができる限り早く書き上げますのでよろしかったらご掲示の方をよろしくお願いいたします。

御礼報告(後書き)

今後ともよろしくお願いします

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・前編】（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・前編】

『私、本当のお姉ちゃんになりたいんだ。』

『なってるだろ?』

『違うの。言葉だけの関係じゃなくて本当のお姉ちゃん……。』

『それもあるんだけど。あのね!私!!』

あの時俺はフェイト・T・ハラオウンに告白された。

最初はなんでこんな血にまみれた殺人者なんかを好きになったのかわからなかった。

俺なんかのような人殺しの道具でしかないモノに彼女を幸せにできる訳がないと思ってた。

けど、気付けば首を縦に振っていた。

多分、俺は心のどこかで身と心を休める場所が欲しかったんだと思う。

そして彼女に惹かれていたという自分がいるということ。

あの時は自分に自信が持てなかった。

だってそうだろ?

同じ事を言うようだが俺は俗に言う殺人兵器。現在の技術では再現

のできないロストログアだ。今までに何千、何万もの命を奪っている。
そんな俺でいいのだろうか？ 純粹な心を持つ彼女の隣に俺はいいのだろうか？

そして、彼女に対するこの言い得ない感覚。
これは一体なんなのだろうか？

俺はそう思っていた。

魔法少女リリカルなのは〜伝説の剣〜

陰陽の剣から金色の閃光へ

「そう、キリト君はフェイトとお付き合いする事にしたの」

俺がいる収容所の一室。

今日の前にいるのはフェイトの母。リンデイ・ハラOWN提督。

俺なりの筋の通し方としてまず彼女に面会できるようにした。

理由はもちろん彼女の娘と付き合い事になったということの報告。

「ハイ。先日より、リンデイさんの大事な娘さん。フェイトさんとお付き合いさせていただく事になりました。」

面会が始まり、終始笑顔の彼女。

秀困気では俺達が付き合う事に喜んでるように見える。が、俺には聞きたいことがあった。

「俺なんかでいいのでしょうか？リンデイさんもご存知の通り俺は戦争で大量殺戮してきた兵器です。人殺しを目的に造られた俺で本当にいいのでしょうか？」

「……キリト君は他人思いなのね。」

は？俺が他人思い？

「今だつてフェイトの事を考えてるでしょ？自分の幸せよりも他の人が幸せになれるのかを考えてる。私はアナタがあの子の為に考えて悩んでいると知っただけでもアナタが彼女の隣にいてもいいと思えるわ」

そう言われて俺は再び苦悶の表情を見せる。そんな俺を見て彼女は肩をかる叩き『娘をよろしくお願いします』と言った。

「そうそう。キリト君は知っているかしら？ウチのフェイトって局じゃ狙っている人が多いのよ？」

それを聞いて俺に戦慄が走る。自身にかけたリミッターから魔力が漏れ出すのを感じた。

「フェイトは命を狙われてるんですか？それも身内から……」

だったら局を敵に回してでも彼女をまもらなければならぬ。

アイツは俺の中では最優先で護るべき対象としてあるのだ。

そう、たとえ彼女に拒絶されようとも……

「プ、アハハハハ」

「????」

そんな中、いきなり吹き出したように笑い出す彼女。

俺は首を傾げる。

なにかおかしい事を言ったのだろうか？

「いえごめんなさいね。別に悪意で笑った訳じゃないのよ？」

お腹を抱えつつ頭を下げられた。

俺は未だになんなのか解らないでいる。

「狙っているというのはフェイトの彼氏や旦那さんになりたいって
いつている殿方がたくさんいるって事。自慢じゃないけどあの子か
なり競争率が高いのよ？」

「……………そうですか」

なぜだか知らんがそれを聞いた時、かなりムシャクシャしてきた。
手に持つ鉄製のコップがひしゃげる。壁に殺気で罅が入る。
隣の部屋で誰かが倒れる音がした。

「き、キリト君？」

「すみません。何故だか分かりませんが今不快な気分……………」

ああ、無性に何かを叩き壊したい気分だ。

「……………質問なんだけどいいかしら？」

「なんででしょう？」

「アナタ…………『愛情』『友情』『心情』の『感情』の自覚をしたこ
とある？」

「あ、確かに僕達はその手の事には疎いですね」

数日後。リンデイさんに続き今度はミッドチルダに遊びに来た智と恵那が俺に面会に来てくれた。

懐かしい地球、日本の服。今年二人は小学校卒業を控えた身で後に中学校へ進学する事になっている。（実際は管理局に入局）ちなみに二人は去年から付き合いだした。そこで俺は二人に相談してみることにしたのだ。

「どつゆつ事？」

「僕達守護者。アルハザードの兵器達は可能な限り不要な感情を消された状態でロールアウトされるんです。恋人同士の恋愛感情、敵や弱い者への情けの情、家族間での親愛の情などは戦闘に不要なものと考えられてましたから」

「ふ〜ん。けど夕陽ちゃんは智やお兄さんのこと大好きだよね？」

「そこは『経験』の問題だ。夕陽は生まれて間もなくしてこっちの時間軸の世界に来たからな。周囲の環境でそういった事は関係なくなる」

他にも俺達のように兄弟、または子供がいる守護者は身内間の情も
できやすい。

そういえば一番変わったって言われてたのはお袋だったな。

「ふ〜ん。そうなんですかあ……」

この時恵那はなにやら冷たい眼差しで智を見ている。

どうやら自分の彼氏はどうなのかと気になっているようだ。

「恵那。そんなに心配しなくても大丈夫だと思うぞ？」

「だって智は6年間アタックし続けて今までスルーしてたんですよ
！？バレンタインも！夏祭りも！クリスマスも！」

それはそれでスゴいな……。

6年間アタックし続けてたお前もスゴいが

「それは付き合っつて決めた時に謝ったたる！？」

「ウルサイ！男が言い訳するな！！」

智が敬語を使わず彼女に接している。アレは一種の壁的なモノで、
守護者として戦場に出て以来使うようになった。

それを彼女と接している時、それもたまにだが取り払っている。

おそらく無意識なのだろう。それだけ彼女に対して心を開いている
という事だ。

また、それはコイツの中に【恋愛感情】というモノができたという
ことを意味する。

「あ、恵那。一つ聞きたい事があるんだがいいか？恋愛感情とは
どんな感覚だ？」

「え？んー…、それは人それぞれなんで明確な答えがないんですよ」

明確な答えがない。

その人物といると【落ち着く】。

その人物といると【ドキドキする】。

その人物を【独り占めをしたい】

その人物に【自分だけを見てほしい】

その人物と【触れ合っていたい】

のように千差万別の回答があると言った。

『お兄さんはお姉さんといるとどんな感覚になりますか？』

と聞かれ『どちらかと言うと落ち着く』と応えた。

次に

『お姉さんが他の男性からデートに誘われたらどうですか？』

と聞かれ

『そいつを殺す』

と無意識に即答。

「……お兄さんってもしかして鈍感？」

「相馬さん曰わく『難攻不落の個人要塞』と言ってましたよ。当たって砕けた方は数知れず」

「アンタも人のこと言えないでしょ？」

失礼な事を言っている二人を冷たい眼差しで見る。

ついでにムカついたので合金製のコップを二人の目の前で普段見せない小さな笑みと一緒に握りつぶして見せた。

「小僧、小娘、囃に乗るなよ？」

「え〜とお兄さんのお話しを聞くにあたって出た結論は……」

その後、俺に謝り通した二人。

土下座もした恵那が検討した結果を述べる。

「ぶっちゃけお兄さんもお姉さんも相思相愛ってことですね」

「そうなのか？」

「お兄さん鈍感すぎますよ……」

こちらにビシッと指差してくる恵那。

「言っておきますが付き合ったからと言って安心しないでください！そこがゴールとは思わないでください！お兄さんはあと3年はまともに二人で過ごすことができないというハンデがあるんです！その間にお姉さんが心変わりする可能性があるんですよ……」

「……………するかな？」

大声で俺に迫る弟の女。

隣で小さく疑問を呟く弟。

「お兄さんはもっと危機感を持ってお姉さんを繋ぎ止めとかなくちゃいけません！！お姉さんが来た時にはこの施設内限定ですが散歩

したり自分から彼女の現状を聞いたりするんです!」

「和弥さんとはやてさんが『フェイトちゃんのろけが凄まじい』
って言ってたよう」

とりあえず恵那の言いたい事は分かった。目の前で自分の彼氏に裏拳を入れた女。鼻を押さえつつうずくまっている。

そんな二人を横目に俺は一人思考の海に潜る。

そうか…。俺はアイツの事が好きなのか。

自分の感情の変化に気付かされ、自然と身体が軽くなるのを感じた。

心変わりする可能性があるんですよ

そして焦りを覚えた。

「なにかアルバイトはないかだと?」

二日後、俺はフェイトの兄であるクロノ・ハラウンを呼び出した。

「ハイ。ここを出て入局するのはいいのですがこちらのお金で手持ちがありません。地球のお金をは弟と妹の学費と生活資金に当てますから身の回りのモノを買う余裕がないんですよ」

「そ、そうか……」

なにやら視線を横に流しながら冷や汗らしきモノをかいているクロノさん。

すしだけ気になったが触れてはいけないことだろうと結論づけて追求することはしなかった。

「しかしだな……。一応君は囚人扱いの身だ。そう簡単に仕事をあげる訳には……」

「リンデイ提督、ご友人のレティ提督、その他要人にも許可をもらいました。ここの所長もOKを出してくるましたよ」

リンデイさんのご友人達への説得には骨が折れた。出所後の勧誘の嵐だったがなんとか『検討する』ということの話がついた。

それに比べてここの女所長は直ぐにOKを出してくれた。今度礼を言わなければ

「……分かった。それじゃ君にやってもらいたい仕事なんだが『文献の解読』というのはどうだ？」

「文献の解読？」

アルバイトの内容は管理局のデータベース【無限書庫】から発掘された昔の文献を解読するというもの。

確かに昔は他の世界とも一応の交流があり、複数世界の言語をイン

ストールされていたから文字もある程度は読む事ができる。

「アルハザード出身だしその時代の言語に詳しくさうだからな。」

「アルハザードの文字は大丈夫ですが。他の世界の言語は保証できません。それでもいいですか？」

だが他界の言語がインストールされているとはいえ、俺の中にあるのは辞書のようなモノ。解読できる文が限られてくる。その事を彼に伝える。

「それでも構わない。解読し終えたデータはこちらに送ってくれればいい。」

「了解。しかし、お渡しするデータはこちらで検討させてもらいます。過ぎた力は世界を滅ぼす。今のこの世界に相応しい技術だけお渡しします。」

「もちろんだ。」

さて、猶予は最低でもあと3年。それまでに間に合うか……。

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・前編】（後書き）

後編はもうしばらくお待ちください

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・後編】（前書き）

更新がおそくなって申し訳ないです。

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・後編】

「そう、お兄ちゃんのツテでアルバイトを始めたんだ……」

今日はおよそ1週間ぶりにフェイトが面会に来てくれた。

俺達は施設の中庭にあるベンチに腰掛けている。

最初はいつも通り彼女の近状報告から始まり、俺がここを出た後、局で何をしたいのか？彼女と同じように執務官資格を取ってみないかだとか、陸ではなく自分と同じ海に来てほしいとか、そういった事を話してた。

それで今は俺が彼女の義理の兄であるクロノ・ハラオウンからのツテでバイトを始めたということ話を話した。

「ああ、内容は無限書庫で発掘された文献の解説だ。」

俺は目の前にモニターを展開させる。

「これがなかなか面白いモノだな。例えばコレなんだが」

そして、ある一枚の文献を表示する。

表示されたのは廃れた絵と文字が書かれた一枚の紙。

「コレの年代は俺が造られた頃だ、出元は今ももうすでに滅んだ世界のモノで。クライアントは技術部の偉いさん。『コレは素晴らしい技術を記した文献なので是非とも解説してほしい』との事だ。」

「ふん。もう解説できてるんだよね？なんて書かれてるの？」

少し興味深そうにモニターを覗き込む彼女。

俺は苦笑混じりで答えた。

「『脅威の高級牛肉70パーセントオフ!!』」

「プツ……」

小さく吹き出した彼女。

そんな彼女の隣で俺は続ける。

「『本日17時より、1000円以上お買い上げのお客様。お一人様につき卵サイズ、1パック60円のタイムサービス!!』」

「う、うん。それは素晴らしいね……。今晚はすき焼き、かな？」

「ああ、これは是非とも開店と夕方17時に行くべきだな」

フエイトの声が震えていて笑いをこらえているのがわかる。

上記でも分かるようにコレは当時の技術を記された資料じゃない。文字通りスーパールのチラシだ。

技術部の偉いさんはコレを重要な資料と思い込んでいたのだ。

コレをお兄さんから受け取った時、その場で解読したのだが完全に外れの内容で二人して腹を抱え笑ったのは一昨日の事だ。

「ちなみにクライアントからのコメント『嘘だ!!』」

「だ、ダメだよ！ちよつとストップ……お腹が……お腹が!!」

フエイトもお腹を抱えて笑っている。

俺自身も少し腹がイタい。

「まだあるぞ。考古学部が持ってきた文献は小学生が夏休みに提出するような日記。無限書庫のスクライア氏が直接依頼してきたモノは数字のテストの答案だった。ちなみ2点」

「ユーノも見当はずれなモノを……それに2点……」

かなりツボに入ったようだなによりだ。
さて、トドメを刺すか。

「その2点も教師からの情けのようで、コメントに『お願いだからもっと勉強して頂戴!!』と書いてあった」

「
」

瞬間、フェイトは悶絶した。

「ダメ…、まだお腹がイタイ。」

タップリ20分笑いに笑った私は涙目になりつつもやっとの事で落ち着きを取り戻しつつあった。

桐斗の話だと今の所9割程がハズレらしくて残りの1割は医療関係の資料との事。

けどそんな事よりも私が嬉しかったのは彼が兄弟と離れ離れになっ

た今でも家族の為にコツコツと努力を積み重ねているという事だ。そしてその中に私も含まれている。

「へへ…」

頬がだらしなく緩みにやけてくる。

私は彼の肩に頭を預けると彼の左手を握る。

周りにいる他の方々の視線が生暖かい気がしないこともないですが私には関係ありません。

たとえ注意されても。

だからなんですか？

と返すでしょう。

彼が出所するまであと3年。その3年後がとても待ち遠しくて今でも夢見ている。

そしてその後もずっと一緒にいたいそう思っていた。

あれから2年……

18になったある日、私は桐斗に呼び出された。
突然なんだろうかと首を傾げながらも半日だけが時間を作り彼の
下へと赴いた。

「悪いな。急に呼び出して」

「ううん、大丈夫だよ。私の方こそごめんね。今日は半日しか時間
がでなかつたんだ」

そして今、私達はいつものように施設の中庭にあるベンチに腰掛け
て近状報告をする。

けど、この時の私は彼が何故いきなり私を呼び出したのかが気にな
っていた。

桐斗がここに入って6年。彼から私に対する面会の要望が一度もな
く、今回が初めての要望。

以前私は『会いたくなったら桐斗から私を呼び出してもいいんだよ
?』と彼に告げたのだが彼はそれを断った。

理由は『学校や管理局の魔導師、夕陽や智の世話で忙しいのに俺の
我が儘で呼び出せるわけがないだろ?』と言われたから。

その代わりに私が開いている時間、私がここに来たい時に来てくれ
ればいいといってくれた。

桐斗は自分が発言した事は頑として曲げない。

その彼が自分の発言を曲げて私を呼び出したのだ。

「話は変わるけど今日はどうしたの?桐斗から私を呼び出すなんて
初めてだよな?」

だから私は聞くことにした。

この問いに桐斗は少し気まずそうな雰囲気を出した。

そういえば今日の彼は変だ。いきなり私を呼び出したり、いつも以上に会話が弾んだりしている。

そんな事を思った時、心の隅に不安という影が差した。

「あ、ああ……今日はフェイトに言いたい事があってな……。」

少しつまつたような返事が不安という影を大きくする。

脳裏に【別れ】という言葉がちらついてきた。

「その……なんだ……。」

影がどんどん大きくなってきた。

私の手が小さく震える。

「なに？」

続きを聞くのが怖いのに私は次の言葉を求めるように彼に促していた。

「あ………………。あゝクソ…………。」

小さな舌打ちと共に差し出してきたのは小さな箱。

その中には一粒の小さなイエローダイヤが埋め込まれた指輪があった。

私は呆然とそれを見ている。

彼は大きく深呼吸をすると語り出す。

「我が名は今亡き光明と暗黒を主とする陰陽を統べる剣。

金色の閃光、我が刃は貴公と永久を共にしたいと望む。光明でも、暗黒でもなく、貴公と共に」

「……………」

「コレはもしかしてアレでしょうか？」

「私はプロポーズされているのでしょうか？」

「いきなり格式ばった彼の態度に戸惑う私。」

「頭の中が混乱してプロポーズなのかも判断できないでいる。」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン。俺がここを出たら結婚してくれないか？」

「やっぱりプロポーズだったようです。」

「本来ならば俺にはこんな事を言う資格なんてない。だがこんな血にまみれた兵器に好きだと言ってくれたお前を手放したくない。だから結婚してくれないか？」

「私は赤くなる頬隠そうと手で押さえるが代わりに涙腺から涙が次々と溢れ出してきた。」

「わ、悪い！突然ですまない。へ、返事はまた今度で構わないから……！」

「そう言っただけ私の手に指輪の入ったケースを置く。私を泣かせてしまった事に混乱しているのだろう。そのまま施設へと歩いていった。」

「バルディッシュ……………」

『YES, Ser.】sonic mood』

勤務時間が終わり、だいたい夜の11時頃。私は隊舎の食堂で六課の女性陣と楽しい楽しい談話に勤しんでいます。

メンツは私と親友のはやて、なのは。

ロングアーチのシャーリー、ルキノ、アルト
フォアードのティアナ、スバルだ。

なのはとはやて、当時アースラクルーだったルキノは桐斗がロストロギアだと知っているので本当の事を言っても構わないのだけど、シャーリーやアルト、ティアナやスバルには現在は言えない事情なのでそれっぽい話しを作り上げて説明した。

ちなみに反応はご覧の通りである。

「手放したくないなんて一佐も見かけによらず独占欲強いんですね」

「まさかプロポーズしたのがお兄さんからだなんてちょっと意外でした……」

アルトがもの凄く楽しそうにしています。

ティアナがもの凄く驚いた表情をしています。

正直私もあの時はかなり驚いたモノです。後から聞いたのですがあのアルバイトは私の指輪と結婚式の為の資金を稼ぐ為にやっていたとのこと。

まあ結婚式はその日から2週間後に母さんによる獄中結婚が強制的に行われ、婚姻届も母さんの裏工作でその日に地球とミッドチルダのお役所に届け出されました。

「あゝあ、私達3人からフェイトちゃんだけ一抜けかゝ。私もはよっええ人見つけん」と

「私も置いてけぼりを喰らわないようにしないとねえ。何気にテイアナとルキノ、アルトは大丈夫かもしれないし」

苦笑する親友二人。はやては和弥とはどうなってるんだろうか？なのはもユーノと相馬からラブコール受けてるって話しだよね？（情報元は夕陽）

「それにしても学生時代難攻不落と言われてた桐斗君がねえ……」

「せやねえ……。私は鈍感やからあと10年はかかると思っつつたんやけど」

そのまま鈍感な旦那に対する評価（いい意味や悪い意味を含む）を言いたいほうだいい言いだす私以外の女性陣。

『その旦那さん那の奥さんが目の前にいるんだけど遠慮ないねみんな』
と思いつつあえて口に出さない。
何故なら……。

「人の品評会は楽しいか？」

私の目の前にその鈍感な旦那がいるからです。

動きやすい訓練服の彼は私の目の前、他の女性陣の死角に立っている。

途端に空気が凍りつくこの空間。今は少しSっ気の混じった笑みをみせています。

「ランスター、訓練場で智がノビてるんだが後を任せもいいか？」

「わかりました！！」

先ずは一人逃げました。

「ナカジマ、明日も早いんだ。体調管理も貴様の立派な仕事の内だろうが。」

「すみません！直ぐに就寝します！！」

二人目

「フィニートノ、明日早朝訓練にある模擬戦の為にフォアード陣のデバイスのメンテナンスを頼んだ筈だがどうした？」

「今すぐ戻ります！そして絶対に間に合わせます！！」

三人

「クラエッタ、お喋りするのは構わないがヘリのメンテナンスをサボるのは感心しないな。」

「申し訳ありません！！直ぐに戻ります！！」

四人

「リリエ、勤務時間が終わった所すまないがロウランが探してたぞ？」

「わざわざありがとうございます！失礼します！！」

こうして部隊長、分隊長を除いた全員が食堂を後にしたのを確認した彼は私の隣に座ると足を組んで手に持つドリンクを一口。

「……………」

「あ、あの、一佐はどこらへんからお聞きになられてたので？」

この時に流れる沈黙に耐えられなかったはやてが恐る恐る口を開いた。

「そうだな……。『それにしても学生時代難攻不落と言われてた桐斗君がねえ…………』」

『せやねえ……。私は鈍感やからあと10年はかかると思っと思ったんやけどな〜』からだ」

ようするに桐斗に対する品評会開催時からですね。

ところでなんでなのはとはやては私に『助けて〜〜！』って視線を送っているのでしょうか？

助けるわけないじゃないですか。人の夫を品評会にかける人達をなんで助けなくちゃいけないんですか？

あと、『なんで私達だけ』って顔をされても知りません。

「八神二佐。高町一尉。上に立つ人間として少し心構えがなってないんじゃないのか？」

「ハッ！申し訳ありませんでした！！」

「以後気をつけます！！」

もの凄く不気味な笑みを見せる上官に二人は勢いよく立ち上がって敬礼する。

「まあ、自分の部下に対する不備」は多目に見てやる。」
その言葉を聞いて二人は『助かった』と安堵の溜め息をつく。
けど二人ともなにか勘違いしてないかな？

「だが、人を品評会にかけた愚行は償ってもらうぞ？安心しろ部下の汚点は上司が償うモノだ。明日の業務には響かないでいどで肅正をかけてやる」

「にゃ！？にゃ～～～～！！！？！？」

「い、いやや～～～～！！」

ドナドナされる親友を横目に私はコーヒーを飲みつつ左手の薬指に輝く指輪を眺める。
そして食堂から出て行く夫の背に

～～～
I LOVE YOU · My best partner ·
～～～

と小さく呟いた。

記念小説【陰陽の剣から金色の閃光へ・後編】（後書き）

感想お待ちしています。

FILE 6 (前書き)

更新が遅れてしまいすみません。

FILE 6

私達4人の新しいデバイスの受け渡しの際鳴り響いた第一種警報のアラーム。

すぐさまへりに乗り込み向かう先は西の山岳地帯。

目標はリニアレールで移動しており、それに群がるは複数のガジエツト。

そう、コレが私達フォアドメンバーの初陣であり、私の夢への第一歩である。

だから見ていてほしい。

いつも優しかった兄へと言葉を紡ぐ。

魔法少女リリカルなのは〜伝説の剣〜

I N V A S I O N O F N I G H T M A R E

始まります。

ティアナ・ランスター生きてます。

「……………」

ヴァイス陸曹が操縦するヘリ『JF-704式』の中私達はでなのはさんから任務の説明を受けている。

私達4人は誰もが見ていてわかるだろう緊張の面持ちをしている。

そんな中、私はふとなのはさんの隣に座るスターズ分隊長補の顔を見た。

席に腰掛けている彼は左足を組んだ状態で真剣な眼差しで話を聞いている。

六課に入ってから見てきた和やかな表情とは全く違うその表情。

思わず背筋がゾクリとした。

だってどこか殺気のようなモノを感じたからだ。

その殺気はもちろん私達に向けられているのではない。

モニターに映し出されリアールに群がっているガジェットに向けられているのだ。

「それじゃ任務の説明はここまで。霧咲隊長補は先に出てもらえますか？後から直ぐに追いかけます」

「……了解しました」

彼女からの指示を受けた彼は静かに立ち上がり開け放たれたハッチへと向かう。

『気をつけてね』と姉貴分からの言葉を背に受けて若き執務官は空へと飛び出していった。

目の前に群れているのは飛行型ガジェット“？型”。

姐さんから言い渡された僕の任務は姐さん達が合流するまでの間の足止め。

姐さんが合流した後はコイツ等の殲滅に移行。

黒いコートを風に靡かせて手に握るは双頭の蛇ウロボロス。

脳内の波長をあの手共々にシンクロさせる。耳で、肌で動きを掌握する。

頭の中で流れたのは彼女が好きだったG線上のアリア。

さあ、踊りましょう。

彼女の為に

青い空に十数もの明灰の閃光が駆け抜ける。それらは一つも外すとなく鉄屑を射抜き爆散させた。

この程度の兵器足止めどころか僕一人で殲滅できる。

正直言つて一睨みで全て落とす事ができる。

けどそれはできない。

そんな事をしては六課の皆に迷惑がかかってしまう。

しかし、それをもどかしく感じる自分がいる。

一機、また一機と破壊する度に湧き上がる私怨を抑え、兄と妹に悟られないようにリンクを切っておく。

「鬱陶しい……落ちろ」

自分の周囲に展開させた20もの魔力弾。それを石の杭に構築し一斉に放った。

刹那、この空に輝くは爆炎の華。

その中心でこの怪物は一人私怨に駆られる。

『マスター、お兄さん達が近づいているわ』

そんな時、ウロボロスから兄達の接近を告げられた。

もう来たのか……。

内心で舌打ちをしデバイスに了解の返事をする。一度群集の中から

離脱し距離を置く。

早く仮面を被れ、自分を偽れ

何時もの人当たりのいい自分としてのペルソナを身に纏え……。

プラズマランサー・ファンクランスシフト!!

<<<Plasma Lancer Phalanx Shift
Set.

サテライトランサー・ファンクランスシフト

<<<Satellite Lancer Phalanx Shift.
ift.

アクセルシューター!!i

<<<Axel Shooter.

シュート!!

ファイア!!

ショット

目の前で次々に爆散するガジェット。
それが私達の任務開始の合図となる。

ていうか本当に桐斗自分でプログラミングしたんだ。
ツヴァイハンダーはバリアジャケットの維持と魔法発動時の音声、
あとあの魔力刀の構築だけ。
正直言つてアクセサリーとなんら変わらない。

「ごめんねツヴァイハンダー。せつかくのマスターがあんなので」
「バケモノみたいに言うな。」

思わず彼のデバイスに同情する私。
だってデバイスより演算能力が高く、情報処理速度の速いマスター
つてデバイスにとってちよつと辛いかと

『私の事はお気になさらないくださいミセス・ハラオウン。私は
私のできる事を成しサーを支えますので』

女性の音声で返事を返してきたデバイスに私は苦笑する。あれ？そ
ういえばツヴァイハンダーってバルディッシュの兄妹機になるんだ
よね。

「よかったねバルディッシュ。妹ができて」

『ありがとうございます。ツヴァイハンダー、ミスターの足を引っ
張らないように』

『愚問です兄上』

兄妹機のやりとりを苦笑しながら見た後私は真剣な眼差しで前方を睨みつける。

「桐斗、任務内容は分かってるね。」

「ああ、フォアードが任務完了するまでの間、ガジェットの足止めだ」

ようするにこれは一種の防衛戦、桐斗と智が得意とする戦い。

「だが(けど)」

「任務完了するまでに」

「全部落とす!!」

私達二人、スピードを上げて智となのはの反対側、ガジェットの進行方向にまわり込む。

「いくぞ(いくよ)」

「バルディッシュ」

「ツヴァイハンダー」

『『yes, sir』』

「お待たせ智」

アクセルシューターを放った後、私は自分の補佐である智の隣に移る。

先程の攻撃でかなりの数を落としかけたけど見る限りまだ7、80は残っている。

「いえいえ、僕も大して数を落としていないのでちょうどよかったです。兄さん達も到着したようですね」

そう言われて私達はガジェット達を挟んで反対側を見る。そして同時に一言。

「「ペ、ペアルック……」」

視線の先には六課所属のハラオウン夫妻。バリアジャケット、デバイスからしてほとんど同系統。

片やもの凄くいい顔している私の親友。

片やもの凄く嫌な顔している親友の夫。

多分、いや絶対にアレはリンディさんの趣味だ。クールな桐斗君をからかう為にエイミイさんとグルになって仕組んだ事だ。

そして親友はそんな二人に騙されている。
私だってキツイモン19でペアルックなんて……。

「あ、あはは……」

二人の弟はもの凄く引きつった笑顔を見せている。コメントしたくてもできない。兄が怖いから。

『ツツコミは後で聞いてやるから今はコイツ等をさっさと落とすぞ』

念話で任務開始を促してきた彼、声が震えているという事には触らず私と智は頷く。

「いくよ……」

私の掛け声と共に自身とフェイトちゃんが横に動く。

4人で作り上げたのはガジェットを囲むようにした菱形の包囲網。ガジェットの進行方向には絶対守護者の桐斗君、対面にはフロントアタッカーとしても動けるガンナー智、両翼にはオールレンジ、霧咲兄妹を除く六課最速の閃光フェイト・T・ハラオウンと砲撃を得意とする私高町なのはだ。

「はあああつ……」

まず後方より智が切り込み追い詰めるようにして次々と数を減らしていく。

「ハーケン……セイバー……」

「デイバイン……バスター……」

横に逃げて行こうとする奴は私とフェイトちゃんが逃がさず撃ち落とす。

必然的にガジェットはその場から動かない桐斗君の所に行くのだが

「ツヴァイハンダー、シュートブレイド。satellite
ancertwentiesopen。」

周囲に展開された白銀の槍と彼が放つ漆黒の魔力刀によって打ち抜かれていくのだった。

FILE 6 (後書き)

感想お待ちしています。

FILE7 (前書き)

短いです

「これで大方片付いたな。」

空の上から俺は現状を見渡す。ガジェットの数ももう少ない。あの数なら高町とフェイトが直ぐに始末するだろう。

「そういえば兄さんと同じ戦場は初めてですね。初めてガジェットを相手してどうでしたか？」

智が俺の隣に来た。

確かに智と同じ戦場はこれが初めてだ。ガジェットを相手しての感想と言えば能力リミッターをかけている今でもまあ問題ないと言える程度だ。

「問題ない。」

「そうですね。」

「こら二人ともなにサボってるの！！」

そうこうしていると高町が傍観に徹していた俺達二人を然りに来た。いや、別にサボっていた訳ではないのだがな。

とりあえず高町に弁解しようとしたとき。

『ライトニング04飛び降り！？』

常にこちらへフォアードの現状報告をしていたオペレーターの驚きの声が聞こえた。エリオが敵に崖下へと投げ捨てれキャラがそれを

追いかけて飛び降りたとのこと。

「エリオー!!」

「キャロー!!」

それを聞いた俺とフェイトは一目散に二人を助けようと滑空する。だがそれは高町と智、それと通信によるはやての声によって止められた。

「落ち着いてください!大丈夫です!!」

「早く助けないと二人が!!」

「二人とも落ち着き、あれでええんや」

はやての言葉に俺達はあることに気付く。

「そうかAMFから離れるから」

「うん、使えるよ。フルパフォーマンスの魔法が!!」

同時に落下する二人を魔法陣が包み白い竜が姿を表す。

あれは竜召喚士であるキャロの竜フリードリヒ。キャロが召喚した白竜はエリオとキャロを乗せ再びリアールへと舞い戻る。

そして見事に二人は敵を殲滅し任務を成し遂げた。

「エリオ、キャロ大丈夫!?」

レリックを回収し終えて引き継ぎを済ませた後、隊舎ではお姉ちゃんとお兄ちゃんが二人に駆け寄っています。

「はい大丈夫です。」

「ご迷惑をお掛けしました」

エリオとキャロは二人に頭を下げる。

無茶をして怒られるとも思っているのだろうか。けど二人は怒ることなくお姉ちゃんはキャロを抱きしめ、お兄ちゃんはエリオの頭を撫でる。

「無事ならいいの。よく頑張ったねキャロ。」

「よくキャロを守ったなエリオ。」

とりあえずこの光景を見て一言。

「まんま親子だねえ」

「ハア…ハア……」

俺は誰もいない街中を走っている。息は乱れ身体中汗塗れ。いつもの俺ならばこんなことはない。不完全ながらも兵器として調整されたこの肉体はこの程度で汗をかいたり息を乱すことはないのだ。だが今は違った。いつもの俺とは違い汗かき息も乱している。それに今までにない怯えた表情で何かから逃げていた。

フフフ

俺の後ろで女の不適な笑い声が聞こえる。そう、俺はアイツから逃げているのだ。アイツが俺は怖かった。初めて感じた恐怖。アルハザードの絶対守護者と呼ばれた俺が恐怖を感じた。何度か意を決して立ち向かおうと俺の支配下にある光と影に集えと命令を下すが何故だか陰陽は命令に従わない。だから俺はひたすら逃げている。

待ってよ

女の声が大きくなってきている。

どれだけ必死に走ってもあの声は大きくなってくる。

だがふと女の声が聞こえなくなった。

俺は立ち止まり後ろをみる。そこには誰もいない。諦めてくれたのだらうかと安堵していると

つゝかまえた

無邪気な笑い声と共に誰かが俺に抱きつく。そして俺の耳元で小さく呟いた。

私からは逃げられないよゼノ。

「……………」

ゆっくりと目を開ける。

視界がグラグラしていて気分が悪い。またアイツが夢に出てきた。正直気分は最悪だ。

しかし以前のアイツと違い夢に出たアイツは桁外れに強かった。まるで俺の両親のように。

「だが夢は夢だ」

夢に出てきたアイツを俺は否定し気分転換に今日の訓練には参加しようと思った時。自分の横に人の気配を感じた。

「なんでフェイトがいる」

横にいたのは俺の妻フェイト。

昨日は確か一人で寝たはずだし。彼女にはちゃんと自分の部屋で寝ると釘を刺したはずなのだが。

何故だ？

「ん……」

俺が起きた事に気づいたのか眠たそうな声を出してゆっくりと目を開ける。

とりあえず朝の挨拶。もちろん相当な不機嫌オーラでだ。

「おはよう……」

「おはよ。なんだか朝から不機嫌だね。」

ほう、そんな事を言うのはその口か。

惚けているのか寝ぼけているのかはしらないが一応聞いてみた。

「なんでここにいる？」

「なんでって家族は一緒に寝るモノだって母さんが。」

なる程、我らが母リンディ・ハラオウンの更なる入れ知恵か。
ん、待てよ？

「家族？」

「うん、ほら」

そういつて彼女は掛け布団を捲る。そこにはフェイトの保護児童で同じライトニング分隊のライトニング03エリオ・モンディアルとライトニング04キャロ・ル・ルシエがいた。二人共安らかに眠っている。

思わず頭痛がした。

俺は一度ため息を付くとエリオを起こす。

「エリオ朝だぞ訓練があるんじゃないのか？」

彼は眠たそうに目をこすりながら身体を起こす。

「おはようございます。」

「おはよう。フェイト、俺達は準備して先に出るぞ」

「うん……いつてらっしゃい」

眠たそうにしながら俺達を送りだすフェイト。そして同じく眠たそうにしているエリオを抱えて二人分の準備をすると部屋を出ていった。

部屋を出る時、あの夢の事を一瞬思い出した。起きてからはっきりと覚えているあの夢。

「まさか来ているのか？」

7年前の事件で葬った【侵略と模倣の悪鬼】の件もあってアルハザードは次元の狭間に今も存在していることは確信している。だがアイツにはあの虚数空間を飛ぶだけの力はないはず。

「考えるだけ無駄か。」

俺は考えるのを止めた。

この世界にアイツがいるはずがない。

そう考えを纏めると準備の為にロッカールームへとむかっていった。

FILE7 (後書き)

感想お待ちしています

FILE 8 (前書き)

駄文ですがご容赦を

《ミッドチルダ首都南東地区上空・ヘリ内》

「それじゃあ改めてここまでの流れと、今日の任務のおさらいや。」

「はやてちゃんがウィンドウを出しつつ、これからのことを話していく。」

これから行く所【ホテル・アグスタ】では今日、骨董品オークションが開かれる。

その中には取引可能なロストロギアも含まれており、その反応を先の事件で明らかになった敵・ジエイルⅡスカリエツィ、その手駒であるガジェットが誤認する可能性が考えられたのである。

つまり、今回の任務とは、端的にいつてしまえば拠点防衛のことである。

「それで会場内の警備は私を含める隊長三人、そして夕陽と桐斗君なんやけど……」

ここまで淡々と話していたはやてのテンションが急激に下がる。そして私のテンションも急激に下がる。

「なんや、何があつたんや？夫婦喧嘩か？」

はやてちゃんの視線の先には椅子に座り左足を組み物凄く無表情な桐斗君、右足を組み物凄く不機嫌そうなフェイトちゃんがいた。ちなみに私はというと二人の間で物凄く気まずいです。

「そんな事ないよ。ね、桐斗？」

「……………」

なにも喋らない桐斗君。この時、彼女の眉間に青筋が見えたのは気のせいにしたい。

「モロ夫婦喧嘩やな。けどこれから任務に就くんやからしつかりしてな。」

「わかってるよはやて」

ん、そう言えばなんか妙に静かな気が……。いつもならこういった時は決まってはしゃいでる子がいるハズなんだけど。そんな事を考えているとキャロがおずおずと手を上げた。

「あ、あのさつきから気になっていたんですけど」

なんとかこの空気を少しでも和らげようとキャロが話題を振ってきた。えらいよキャロ、エリオも彼女を見習わなくちゃね。

「そのケースはなんですか？」

その問いにヴォルケンリッターの【湖の騎士】シャマルが笑顔で答える。

「ああ、これはね。隊長達のお仕事着よ」

【ホテル・アグスタ】

山地に作られたこのホテル。

内装もなかなかのモノで聴いた話しではここではよくオークションが行われているとか。

中も人が多くて賑わっていて私達女性陣四人はというとシャマルの用意したドレスを着てホテル内の警備にあたっている。

「うん、よく似合ってる。やっぱり夕陽はなに着てもかわいいね」

すみません嘘を付きました。

面目に警備をしている女性陣はなのはとはやて。私は久しぶりにお姉ちゃんモードMAXです。

「あはは、ありがとうお姉ちゃん……………」

夕陽は緑が似合うのだが今回は大人の雰囲気を出す為に私と同じ黒を基調とした感じにしています。実はというところ最近エリオとキャロの事を考えていたのでなかなか夕陽の事は見てあげられなかったのです。ですから今はその分お姉ちゃんをしています。

「お姉ちゃん……………今、任務中だよ」

「分かってます。それじゃみんなと合流」

ある光景が目に入った。三、四人で黄色い声を上げながら楽しそう

に談笑している女の子達、どこかの令嬢だろうか。けどそんなことはどうでもいい。問題はその中心にいる人物。うっすらと笑みを浮かべているのは私の旦那だ。

なにしているのかな？

隣で夕陽が『ヒイツ！？』と声を上げているが今の私には関係ない。

殺意を込めた眼差しで夫を睨む。すると彼はこちらに気づいたようで一度こちらを見ると無表情になり女の子達を置いてどこかに行ってしまった。

その時チクリと胸が苦しくなった。

「ねえ、お姉ちゃん。お兄ちゃんと何があったの？」

夕陽が聞いてきた。私は何でもないと答えるが彼女には通用しなかった。

「そんなことないでしょ。お兄ちゃんずっと怒ってるよ。同時に泣いてるし……」

夕陽は続ける。

「お姉ちゃんだって悲しい顔してるよ」

彼女に言われ私は少し押し黙る。そしてこの前あった事を話した。私の話を聞いて彼女は驚いたように目を見開き。

「お姉ちゃんのバカ!!」

大声で私を怒鳴りつけた。

【昨日】

俺の目の前ではフォアードメンバーが肩で息をしながら整列している。

新人にしてはなかなか頑張っているということが見て取れた。

「それじゃ今朝の訓練の仕上げ、一佐との模擬戦を始めるよ」

「ハハハハハハ!!」

高町の指示に四人は大きな声で返事をする。
ふむ、まだいけるようだな。

「それじゃ一佐お願いします。」

一応の礼儀として高町は軽く俺に頭を下げる。
一歩前に出て四人の顔を見る。ランスターの顔が引きつっているよ
うだったがきにしない。

「模擬戦をするにあたって一応言っておこう。俺を殺すつもりでこい。一撃クリーンヒットを当てればお前たちの勝ちにしてやる。しばらくはこちらから手を出さなしキャラには今回竜魂召喚の許可を出そう。遠慮はするな。」

真面目に喋る俺にまずはティアナの表情が険しくなってきた。

彼女の気持ちは解らないでもない今の内容は模擬戦ではなくシュートイベーションなのだから。さらにはキャラの竜魂召喚の使用許可も出たのだ。

はつきり言っただけでいるとしか思えないだろう。

「どうしたランスター二等陸士不満があるのなら言え。」

「ハイ。一佐の言われるルールでは模擬戦ではないと思ひまして……」

俺の睨みに彼女は更に険しい顔で俺を睨んで異論を唱えてきた。やはりランスターは頭がいいな。けど俺並に固い。

「お兄ちゃん……いくらなんでも言い過ぎだよ」

「そうですよ。彼女達も頑張ってるんですから」

智と夕陽が苦笑しながら彼女の側に付く。俺は溜め息をつくとき彼女に理由を説明した。

「俺はデータや映像でしかお前たち4人の実力を知らない。だから手っ取り早く実力を知る為にさっきのルールを設けた。心配しなくても途中からちゃんと模擬戦をする。言うなれば『調子に乗っているS級犯罪者対フォアード4人』という設定だな。高町後は頼む」

「ハイ。」

ランスターの頭をポンポンと軽く叩いた後、ゆっくりと広場の中心に移動して徒手空拳で立つ。

バリアジャケットもなにも装備しない。六課の制服のままポケットから義母より贈られたデバイスを起動させる。

「ツヴァイハンダー起動……」

執行の魔力光と共に纏うは妻の戦闘服と似たバリアジャケット。左手に掴むは白銀の刃を持つ大剣。ジャミングをカットしてダミーの魔力反応を流す。

次に俺は自身の内の底に潜ると戦闘時の自分を引きずり出そうと……

「「ペ、ペアルック!?」」

するが星の副隊長、副隊長補が声を上げてドン引きした。分かっていた……。こうなる事は分かっていたさ。

「この模擬戦が終わったら副長と副長補の二人は俺と実戦形式の模擬戦だ。手加減無用で来い。俺も手加減しない」

「キリト……あんまり無茶はさせないでね。」

苦笑紛れにフェイトが声を掛けてきた。

魔力波長のダミーを放出、
戦闘出力B - に設定。

使用術式、ミッドチルダAランク魔法
外装、BJを外装とし不要と判断。

コード入力不要 .

戦闘モード移行不要。

「ああ……」

「だったらいいけど……」

「下がってください姉さん。」

設定を完了した俺を見て智がフェイトに離れるように促す。

「兄さんのことですから必要最小限の設定にしているはずですよ」

彼女に小声で語りかける智。フェイトも渋々納得たようで智と共に離れた。

「みんな準備はいい？」

「……ハイ!!」「」「」

「一佐は拠点防衛及び攻略衛戦を得意としてる戦略級魔導師だから簡単に攻撃が通るとは思わない事。彼が攻めに転じてきたら頑張らないと1分持たないからね!!」

高町が手を上に掲げる。それが振り下ろされて模擬戦は開始された。

FILE 8 (後書き)

感想お待ちしています。

FILE 9 (前書き)

更新が遅くなるすみません。

FILE 9

模擬戦開始直後

「ハアアアアッ!!!」

真っ先に突っ込んできたのはナカジマ二等陸士。

デバイス「マツハキヤリバー」で駆けて、リボルバーナックルを振りかぶる彼女。

先手必勝という考えなのだろうか。

ブチッ

脳内で何かが切れた音を耳にしつつ、俺は無表情でその拳をツヴァイハンダーを持っていない素手の右手で受け止める。

「う、うそ!？」

魔力付加された拳を簡単に受けとめられた彼女は驚愕な表情を見せた。

当たり前のように受け止めている俺はそのまま彼女を投げ飛ばす。

「スバルさん!!!」

彼女を受け止めたのはモンディアル三等陸士。

空中で受け止めたのと入れ違いに俺に襲いかかるオレンジ色の魔力光。

それは複数の魔力弾だった。

おそらく相棒への追撃を阻害為にランスター二等陸士が放った誘導

系射撃魔法【クロスファイア】だろう。不規則な軌道を描きながら此方へと向かってくるそれを睨みつける。

接近する魔力弾数5

現戦闘レベルでの迎撃に支障なし

左側から迫り来る魔力弾を改めてひと睨み。そしてそれが俺を捉える寸前に全て掻き消えた。

その直後、

「たかまちiiiiiiii!!!」

上空で家内達と観戦している戦技教導官に向けて普段出さない声で怒鳴りつけた。

全力の殺気を彼女個人に向ける。

身体をビクつかせた彼女は一瞬で顔を青くさせ、硬直する。

息もできない程の殺気を受け手足が震える。

「桐斗止めて！一体どうしたの！？」

妻が彼女を支えるように寄り添いこちらに怒鳴りつけてきた。けど俺はそれを無視し、静かに問いかける。

「コイツ等に一体何教えてきた？手札の全く解らない相手に戦闘開始直後特攻かける事が貴様の教導か？お前は言ったな。“相手は拠点防衛、攻略戦を得意としている戦略級魔導師”だと。」

この言葉に今方特攻をかけてきたナカジマはハッと何かに気付いたように顔を伏せた。

「正確に言えば俺は拠点防衛、迎撃型だ。実戦なら今の特攻でナカジマは戦死により二階級特進。更に彼女を受け止めたモンディアルも戦死、よってこのチームはフロントアタッカーとウイングガードを失った事になる。開始10秒で戦闘続行不可能だ。唯一誉める点といえばランスターの援護射撃のみ。チームとしての戦い方も重要だが手札の解らない格上との戦い方も早い内に教えておくことだ。フォアードはもういつ現場に出てもおかしくない。もしかしたら隊長陣が抑えられ、フォアードが高危険度の犯罪者と戦闘しなければならぬかもしれないんだぞ」

そう、終わった後では遅すぎる。

力があれば対等に戦う事ができるかもしれない。しかし、将来的には優秀な魔導師になるだろうコイツ等。素材としては確かに申し分ない。しかし、まだまだ経験やらなにやら足りないのだ。

「ナカジマも“殺す気で来い”とは言ったが“死にに来い”とは言っていない。陸士訓練校主席が聞いてあきれるぞ。ランスター、さっきの援護は正解だ。的確な判断だったな。」

「す、すみませんでした!!」

「は、はい。ありがとうございます」

必死に頭を下げる彼女を冷たい目で睨んだ後。地にツヴァイハンダーを突き刺すと腕を組んで目を閉じた。

「仮想標的の情報を掲示する。

霧咲桐斗第一級犯罪者。

危険度SSクラス。

拠点防衛、迎撃型戦略級魔導師。

犯罪経歴、次元航行艦隊一個中隊を単独で殲滅。

性格は戦闘をゲーム感覚で捉える事があり、戦闘開始直後は相手に合わせて遊ぶ傾向と基本的にその場から動かずに戦闘を行う事から余程の自信家と思われる。

使用魔法で判明しているのは大剣形の魔力刀ザンバーモード。

多弾射撃魔法、サテライトランサー。

三筋の直射砲、アークトライデント。

広域殲滅魔法所持の可能性大。

レアスキル所持の有無は不明。

魔力量は一個中隊を殲滅できる事からSSは最低限保有していると思われる。

以上だ。

5分待つ、この情報を元に作戦を立てる。」

「それじゃ情報を整理するわね。」

物陰に集まった私達4人は一佐の提示した情報を元に作戦を組み立てる。

本当は情報を受け取る事事態嫌なのだが、先程の事もあり今回は大人しく情報を受け取っておく。

私はチームリーダーとしてただ一発を入れる為に作戦を思考する。

「一佐は宣言通り最初は私達に合わせて迎撃、要するに近接の防衛もしくは射撃の相殺をしてくる。」

「うん。けど時間がたったら私達をお年に来るから勝機は戦闘開始直後しかない。戦略級魔導師なんて私達に相手できる訳ないもん」

スバルの言うとおりの勝機は戦闘を再開して一佐自身が迎撃をしかけて来るまでの僅かな時間しかない。

「あの、戦略級魔導師ってなんですか？」

キヤロが首を傾げて私を見てくる。

聞き慣れない“戦略級魔導師”という単語が気になっていたようだ。

「戦略級魔導師。ある人物一人が一艦隊、一大隊に匹敵する魔法を
持っていて戦略上その人物を戦線投入する事事態が“一つの戦略”
と言われる人の事を指す言葉よ。」

「うん、八神部隊長もある意味“戦略級魔導師”っていつてもいい
かな。SSランクなんて管理局全体の1パーセントにも満たない数
だし。」

「き、桐斗さんって凄いですね」

「ええ、そうね……」

エリオの感嘆の声を耳に作戦会議の最中私は思考する。

そういえば八神部隊長はどうやって彼を引き込んだのだろうか。

SSランクの“八神はやて”という人物が部隊を立ち上げるのはわ
かる。

けど他の戦略級魔導師なんて引き込もうと思って引き込めるもの
はない。

それに彼やその弟妹がいればスバル達はまだしも私なんていない
のではないのか？

そう思った。

異常な部隊に集まる才能に満ち満ちた人材達。

その中で凡人なのは私だけ。

そう思うと胸が苦しくなってきた。

「ティア？」

相棒が私の異変に気付いたらしく顔を覗き込んできた。

ダメだ、私の弱さを見せてはいけない。仮面を被れ、いつもの強気な私の仮面を……。

「なに？」

「う、ううん……。なんでもない」

「ヘンなヤツ……。ところで作戦を立てる前にみんなに確認を取ってんだけど」

先程物影で様子を窺っていた私は自分の魔力弾が彼を捉える寸前にかき消されたことを三人に話した。魔力の発動は感じられなかった。AMFの発動でもない。

その事についてフォアードメンバーの意見を聞く。

「私にはかき消されたようにしか……」

まずはキャラコが今の光景を見ての感想を述べる。フルバックの彼女にはそう見えたようだ。

「多分ですけど桐斗さんは魔力弾を殴ったんだと思います」

エリオが自分の推測を言う。それを聞いて私は耳を疑った。

『なに馬鹿なことやってんの、そんな非常識なことあるわけ』

そこで私の言葉が止まる。

そういえば彼はスバルの拳を受け止めていた。魔力付加を加えたあ

の拳をだ。

『エリオが正しいと思うよ。一瞬だけど桐斗さんの手が動いたのが見えたからほぼ間違いないと思う』

格闘技を使うスバルもエリオと同意見のようだ。ならばそれで間違いない。しかし魔力弾を素手で殴るなんて常識にも程がある。才能というのだろうか。あの人は特例で三提督の部下になり異例の一佐就任を果たした。どういったコネを使ったのかは知らないがあの人を見下した態度は何故だか彼の弟を沸騰させてならない。ならば証明してやろうではないか。

『ちょっと考えがあるから良く聞いてね。』

『僕にも考えがあるので参考程度に聞いて貰ってもいいですか？』

『私も試してみたい事があります』

エリオとキャロの活力ある声を聞いて彼女達がなんだか頼もしく思えた。

猪突猛進のスバルに見習わせたいものだ

『頼もしいわね。いいわ、話してみなさい。そしてあの人に一発入れるわよ！！』

『『『ハイ（オウ）！！』』』

FILE 9 (後書き)

感想お待ちしています。

FILE 10 (前書)

一応更新

「ごめんなのは。気を悪くしたなら謝るよ。後でキツク言っておくから……」

私は隣にいるなのは頭を下げた。いくらなんでも言い過ぎだ。彼はなのはの教導の意味を知らない。本来なら彼女の教導に口を出すべきではないのだ。私はそれが無性に腹立たしくて、いつの間にか彼を睨んでいた。

「気にしないでいいよ。桐斗君の言ってる事は正しいよ。けど私がそれを教えるのを後に回してただけ。にやはは……、言われてから気付くなんて私もまだまだだね」

苦笑しながら私を宥める彼女。彼女が言うなら私からは口を出すことができない。

けども私のイラつきはまだ治まらずにいた。

「ところで……今の見えた？」

「うん。あの魔力弾全部殴ってたね」

戦闘の光景をモニターで出来事、みんな顔が引きつっている。桐斗が強いのは知っているがまさか魔力弾を素手で殴るとは思わなかった。

「アレって実はそんなに痛くなかったりする？」

「そんなわけないよ。素手で殴れる程度の威力じゃないし当たり前じゃ一発で相手の意識を持っていけるんだよ?」

夕陽の質問をなのはがご丁寧に斬る。

だよねえと苦笑する義妹を横目に見つつ私は再びモニターに視線を戻した。

フォード陣はそれぞれ隠れている。なにやら作戦を練っているようだ。

私は心の中で応援する。

頑張れ……

「あいかわらず兄さんはデタラメですね」

苦笑する智。私もそうだねと相づちをうつ。

けどね智。智も十分デタラメなんだよ?

などと思っている間にフォードメンバーに動きがでた。

どうやらなにか策があるみたいだね。

『Wingload』

「ダアアアアッ!!」

機械音と共に先ずは桐斗の真上に走る水色の翼の道。

そこから飛び降りてきたのはスバル。

放ったすかさず放ったのはリボルバーシユート。動かない彼押し潰すように降り注ぐ衝撃波。

だがその程度を喰らう桐斗ではない。

その衝撃波をツヴァイハンダーで叩き斬り四散させた。

そこへすかさずエリオの追撃が加わる。力こそまだ未熟なものス

ピードに特化した彼は瞬く間に間合いを詰めて切りかかる。スバルはというと追撃はせずに新たに展開したウイングロードで駆け出した。

エリオに対して桐斗はエリオのデバイス【ストラダ】の腹を殴りつけて彼の体制を崩し、柄を掴み投げ飛ばす。

入れかわりにどこからともなく飛来してきたティアナの魔力弾の数々。それも全て殴り消し飛ばしたが絶妙のタイミングでの攻撃に少しだけ、桐斗の表示が曇った。

「お、いい感じに追い詰めてんじゃん」

ヴィータがちょっとだけ感心したように頷く。

「そうだね。あの手のやり方も一つの手かな」

彼女達の行動は多彩な動きで攪乱させるといふモノ。一撃は大きい
がモーションも大きいスバルに接近戦をさせず、その機動性を生か
させた動き、一撃、一撃の威力は低いけど高いスピード性を持つエ
リオにはソニックムーヴを多用させたヒットアンドアウェイ戦法。
そして、絶妙のタイミングで襲いかかるティアナのクロスファイア。
今はまだ原石の状態だがその才能をかいま見せている彼女達。今後
がとても楽しみで仕方がない。

それに多分、ティアナは薄々気付いているだろう。桐斗の戦法がち
よっとおかしい事に、それに気付いたからこそこの戦法を取ったは
ずなのだ。

実は桐斗には戦闘での才覚、バトルセンスがない。桐斗達、アルハ

ザードの守護者は人為的に造られた決戦兵器。その膨大な魔力、巨大な多重演算能力、開発された第6感。他の守護者にはバトルセンスがある。智もそつだ。けど桐斗にはない。彼は常に脳内で計算し、演算し、可能性を、答えを導き出して戦闘しているから。

だから自分のデータにないイレギュラーが起こると一瞬だが淀みが出てしまう。

それを彼女は見逃さなかったのだ。

薄々だけどそれに気付いたティアナもなかなか……、それだけで終わらないよね？ 早くしないと桐斗にデータが揃ってしまうよ。

来た。

私の経験が呼びかけた通り再び降り注ぐティアナのクロスファイア。その中に一発だけ別の魔力弾があった【ヴァリアブルシュート】だ。魔力弾に魔力による外殻を纏わせたそれは真つ直ぐ襲いかかる。これには桐斗も先程のようにノーモーションでは消せないと判断、ツヴァイハンダーで叩き斬っては相殺に僅かだがタイムラグができてしまう。故に今度はクロスファイアを全て叩き斬ってから拳を大きく振りかぶってそれを殴りつけて弾き飛ばした。

うわ……、アレも殴れるんだ。

けどそれが彼の一番の隙となる。

「ハアアアアア…サンダー……」

「デヤアアアア…デイバイン……」

隙をついて桐斗に二人が反対側と頭上から再び追撃にかかってきた。放たんとするのはそれぞれに【サンダーレイジ】【ディバインバスター】。更に

我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士と戦士に、駆け抜ける力を

フルバックであるキャロのグローブ型デバイス〔ケリュケイオン〕がコア光る。

「ブーストアップ・アクセラレーション」

『Boost Up Acceleration』

キャロの補助魔法が桐斗を捉える寸前にスバルとエリオを強化。それを確認して桐斗は迎撃に入るが

「まだまだ……」

ケリュケイオンの光がその輝き増す。展開したミッド式の魔法陣は消えていない。むしろ更に巨大になっていく。

それに合わせて桐斗の周囲に次々と展開していく魔法陣。その数は2つ3つどころではない。その数、20。魔力にモノを言わせた荒技、制御はケリュケイオンに任せて彼女自身はこの瞬間に全力を注ぐ。

我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼

鉄の縛鎖。錬鉄召喚！！

「アルケミックチエーン！！」

召喚した鎖の大群。召喚された幾多のそれは桐斗の動きを戒める。手、足、胴、首、獲物へと次々と。キヤロ、なんか凄いね……。桐斗が目を見開くのが見える。これで詰みかと思った私、けど私達の愛娘はこれで終わらなかった。

「フリード！！」

ち、ちよつとキヤロ！？

いつの間にか竜魂召喚を済ませて本来の姿になった白竜【フリードリヒ】

主の命により凄まじい火力がチャージされ更にキヤロのブーストアップが施される。

「ハアアアアア………ファントム！！」

そして桐斗に向けられたレーザーポイント。それはティアナの最大砲撃魔法。今まで姿を見せなかった彼女がビルの屋上で雄叫びを上げた。

『Sirr…!』

「黙ってる……」

この作戦はまあとりあえずアレだと思っ。

「レイジ!!!」

「バスター!!!」

「ブラストレイ!!!」

「ブレイザー!!!」

攪乱は劣り、本質は
最大火力でドン

訓練スペースに響き渡る盛大な爆発音。

スバル、ティアナ、エリオ、キャラによる最大火力の集中放火。
まずキャラのアルケミックチェーンで桐斗の自由を奪いエリオとスバルをブーストアップで強化、二人はそれぞれサンダーレイジと至近距離のデイベインバスター。更に遠距離からフリードのブラストレイとティアナのファントムブレイザーを同時に叩き込むというもの。私は正直惨いと思いました。多分今回一番活躍したのはキャラかもしれません。

「さ、流石の桐斗君もアレは……」

自分の教え子の凄まじい攻めに顔が引きつっているのは。前のシユートイベーションでアレをやられたらなのはでも危ないかもしれ

ないね。

「桐斗大丈夫かな……」

オロオロと夫の心配をする私。さっきの不機嫌もすっかり忘れてしまっている。

私もアレは直撃とと思ってしまった。夕陽も自分の兄が大丈夫だろうか心配している。他の副隊長陣もそうだが、智だけは真剣に爆発の起こった場所を見つめていた。その手は訓練フィールドの設定モニターを呼び出してなにやら設定を変更していた。

『姉さん』

そんな彼が私に念話を繋げてきた。

『兄さんがあの程度を食らうと思ってるんですか？ アルハザードを守護する者達の中で序列第三席に君臨し絶対守護とまで呼ばれる守りを持つと言われていたあの剣が……』

『えっ？』

「……………」

私は離れた位置でキャロと共に私達の最大火力を叩き込んだ場所を

見つめている。

先程、私が提案したのは各々の最大火力を同時叩き込むというもの。一佐は初めのうちは攻撃しないと断っていたし、観察して彼は基本的にその場から動かないということがわかっていた、更には予想外の動きには一瞬だが動きが鈍る事も確認できた。だからこの作戦を取った。

そこにキャラコの提案の攪乱する二人の補助、一佐の捕縛を付け加えた。

彼は『殺すつもりでこい』とのことなので全く容赦せずに撃ち込んだアレを凌げる筈はない。

緊張がほぐれたのか私は肩を撫で下ろして息を吐く。

「いい援護だったと思うわよキャラコ」

「ハイ。できる限りの全力でいかせてもらいました。」

笑顔の彼女に私も笑顔で返す。

今日のMVPはキャラコだろう。そんな事を考えているとスバルからの念話が繋がられた。

『て、ティア………』

「ちよとごめんね。なに？」

この時、彼女の声が震えていた。

『ティアナさん………』

『エリオ？』

更に繋げられたエリオからの念話。二人の様子がおかしい。

「どうしたのフリード？」

なにやらフリードの様子もおかしい。敵意むき出しでどこかを睨んでいる。

それで私は気付いた。いつまでたってもなのはさんによる模擬戦終了の合図が私達に告げられないことに。

直ぐに私は煙立ち込める一佐が立っていたであろう場所を見た。

ゆっくりと煙が晴れていく。その煙の隙間から一佐の姿が見えた時、私は驚愕した。

傷は愚か、汚れ一つバリアジャケットに付いていないではないか。一体何をして防いだ！？ そんな私と同じくしてキャロもエリオもスバルも驚きを隠せないでいた。

一佐はじつとこちらを見ている。すると彼の表情が軟らかくなりつつすらと笑みを浮かべた。

「作戦を組んだのはランスターだな？ 今のは良かったぞ。キャロもエリオも良く頑張った。ナカジマ、良く我慢したな」

突然誉められた私達、頬が熱くなるのを感じた。けど、それは一瞬で引いた。

「そろそろ時間だ。こちらからもいくぞ レアスキル・明暗の指揮者」

発動

FILE10 (後書き)

キャラ、頑張りました

FILE11(前書き)

更新が遅くなって申し訳ありません

「レアスキル 明暗の指揮者発動」

小さく言葉を紡ぐ。同時に脳内を駆け巡る数字、数式の数々。幼少より慣れ親しんだソレを用いて自身の魔力を循環させ、構築させ、展開し、掌握する。ちなみに“明暗の指揮者”なんてのは適当につけた名前だ。

戦闘レベル変更：設定完了：能力リミッター固定維持のまま術式展開。【インヨウノツルギ】起動

周囲を駆け巡る光を、潜み蠢く影を従えて剣は此処に顕現した。

「……………」

それはとても幻想的な光景だった。一佐を中心取り巻き踊るように回る光輝く剣の数々。まるでお話しに出てくる舞踏会、剣達がこの立体シュミレータで作り上げた市街地というダンスホールで踊っ

ていた。

彼等の指揮者はその中心で瞳を閉じ、てただ立っているだけ、それだけなのにその姿は圧倒的で、魅力的だった。

私は呆然とその光景に見入っていた。そのまま時間だけがゆっくりと過ぎていく。

そして彼がゆっくりと瞳を開けた時

逃げて!!

「ッ!?!」

この身を叩き潰さんばかりの殺気とフェイト隊長の叫び声が放たれた。

同時に驚異的なスピードで増えていく白銀の剣達、3、4、8、16、32、64、128 凄まじさ数の剣群が生み出され、一佐を中心して円を描くように回転していく。それは次第に早くなり……

「全員後退!!」

まるでカッターのように周囲を切り刻みはじめた。

次々に倒壊し、爆散していく立体シュミレータが作り出したレイヤー建造物。それはあたかも草刈機で雑草を切り飛ばしていったかのよう。

とっさに呼びかけたおかげで幸いにも全員無事で、今はスバルが作り出したウイングロードの上からその光景を見下ろしている。

「あれが……戦略級魔導師」

エリオが呆然とした表情で呟く。戦略級魔導師の実力を目の当たりにしたのだ無理はない。私だってリミッター付きであれほどとは思わなかった。

「……どうしますか？」

「待つて……今、作戦を考えるから」

私は思考を巡らせる。あの高速回転する剣群を突破する手段は私達にはない。一撃を入れる為にはどうする？

考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える
ろ

「ランスター、俺を前にして長考するとは大した度胸だな。下ががら空きだぞ？」

「……………え？」

一佐の声が聞こえたと思った刹那、鼻先を真っ黒い何かが掠めた。直後に硝子のように砕けたスバルのウイングロード。私達は宙に放り出された。

この時私が見たのは地面から伸びる一本の槍。そう、この槍がスバルのウイングロードを砕いたのだ。

「ティア！」

「私の事はいいから各自体勢を整えて！！」

陸士である私達が宙に放り出されるといふ事は空士や砲撃魔導師

にとって格好の的になるということ。スバルが助けようと手を伸ばして来るが私はそれを拒否。

そんな事をしていたら直ぐにでも一佐に射抜かれるわよ!!

「……アーク、トライデント」

けど、一佐は私達に大勢を整える時間もくれない。剣群の中から私達目掛けて襲いかかってくる三筋の黒い閃光。

とっさに防ぐもこれで私達は完全に分断された。一番不味いのは私だった私だけ一人、遠くまで弾き飛ばされてしまう。

そして………

「終わりだ」

天から降り注ぐ白銀の雨と地から天に向かって伸びる漆黒の槍達が私達を刺し殺そうと迫ってきた。範囲も広く逃げ場がない。諦めた私は静かに目を閉じた。

その時、

『
』

何かに引っ張られる感触を感じた。

「紫電…一閃!!」

「ラケーテン・ハンマー!!」

「デイバイン……バスター!!」

「ソーラーキャノン・ファイア!!」

直後に響いた隊長陣の声、続いて響くのはけたたましい爆音の数々。

一体何が起きたのだろうかとゆっくりを瞼を開けていく。

「へ?」

最終に目に入ったのは霧咲隊長補。現状を確認してみると私は彼に抱きかかえられていた。俗に言うお姫様抱っこである。

「な、なな……!?!?」

顔面が真っ赤になるのを感じた。頭の中がぐるぐる回転している。なんでこうなってるの!?!?

言葉に出したくても言葉にならない。肉親以外の男の人にお姫様抱っこなんてされるのは生まれて始めてなのだ。一体私はどうすればいいのだろうか?

「ティア大丈夫!?!?」

そんな中、スバルが新たに作り出したウイングロードで走り寄って来た。けども私は口をパクパクさせて彼女の存在に気づいていない。

「スバルさん、お怪我はありませんか?」

「あ、私は大丈夫です」

「ただ彼は私のことなど気にもせず彼女の安否を確認している。いくらレアスキルとはいえ怪我などする筈がないのに。」

「すみませんが今日の訓練はこれで終了です」

「「え？」」

その言葉に私とスバルは同時に彼を見る。そしてその直後に次々とレイヤー建造物で作り出した廃棄都市区画の窓がけたたましい音を立てて砕け散っていく。

一体何が起こったのか、半パニック状態で周りを見渡す。窓が割れ、至る所にヒビが入っていく。そして、私はあるモノをみた。

それは地を、壁を駆け抜ける金色の雷。それを放てる人物はこの場には一人しかいない。

「……………」

この訓練フィールドの地を歩く一人の女性。黒い法の執行者の服を纏い、その身に溢れる程の雷を帯電させている。彼女の向かう先は己の伴侶の立つ場所。既に絶対守護領域とも言える剣群は動きを止めており宙で停止、四散した。

この時私は恐怖した。普段は温厚な彼女の変貌ぶりに背筋に鳥肌が立った。

「そこまでだよ……………桐斗」

彼女の言葉には確かに怒気が込められていた。

「なあなのはちゃん。フェイトちゃんと桐斗君どないしたん？この前からずっとあんな感じじゃで？」

警備の最中に私は様子のおかしい二人の事が気になりフェイトちゃんと同室であるなのはちゃんになにかしらないか聞いて見た。

「うん……私も聞いてみたんだけどなにも教えてくれないの。なにかあったっていうのは確かなんだろうけど。」

「うーん……あ、噂をすれば旦那さんのご登場や」

視線の先には黒のスーツを身に纏いこちらに歩いて来る桐斗君の姿。クールで大人っぽいその雰囲気は周囲の女性の視線を集めている。何気に彼の後方について歩いてきているどっかのご令嬢達が気になるが

「あんまり目立っているとフェイトちゃんが嫉妬して怒るで」

とりあえずあのご令嬢の方々には悪いがご愁傷様と心の中で合掌し、彼に嫌みがたら笑いかける。

「しらん。そんなことより会場内には特に異常はないぞ。」

ぶっきらぼうに場内を見て回っての報告をする。それに対して私

達は苦い表情を浮かべる。

「ご苦労さん。けどいい加減仲直りせなあかんで？」

「……………」

忠告するも彼は返事もせずそのまま歩き去ってしまった。
こりゃ深刻やね。

ため息をつく私達。とりあえず今は気を取り直して警備を再開することにした。

「……………」

私は今ロビーの椅子に座っている。テンションはと言うとモノ凄くブルーです。それはもう地に落ちたぐらいじゃ足りない。海底一万メートルに沈んだぐらいブルーです。理由は妹に怒られたこともあります。夫に言った一言に対してやっと気づいた自分に対しての気持ちが一番です。

夫に対して言った一言

私達とは違う

この言葉が私を苦しめていた。

FILE 11 (後書き)

感想お待ちします

FILE 12 (前書き)

更新が遅くなって申し訳ないです？

夫に対して言った一言。

『桐斗は私達とは違う』

私はプロジェクトF・A・T・Eによりアリシア・テストロツサの遺伝子から作り出され記憶を転写された劣化クローン。普通とは違う作り出された存在。

桐斗は二人の弟と妹と共に過去に存在した伝説の超高度文明アルハザードよりこの時間軸、世界へとやってきた彼等。今健在する世界で最先端の技術を豪語するミッドチルダでも再現する事のできない技術

光と影を掌握し従え剣とするロストロギア【陰陽の剣】。

触れるモノ、見るモノを全て石へと変えるロストロギア【ゴルゴン】

植物を意のままに操るロストロギア【森の雫】

この事から私と彼はなんら変わりはない。いつしか自分を普通の人間と思い、彼は普通の人間じゃないと思ってしまうていたのかもしれない。

だからあの時私の口から彼を差別する言葉が出てしまった。

その言葉は同時に彼の弟妹も差別する言葉だった。

自分が嫌になる。自分を棚に上げて愛する夫を蔑んだ自分が……

目の端に涙が浮かぶ。任務中だからなんとか我慢しようとするがどうしようもできない。

「私……嫌われちゃったかな……」

脳裏に浮かぶのはあの時の彼の表情。

今、彼にあの目で見られたら立ち直れないかもしれない。けど何もしい訳にはいかない。

「ちゃんと謝らないと……」

私は涙を拭い立ち上がる。そして顔を上げフラフラとした足取りながらも彼を探す為に歩き出した。あの時の事を思い出しながら……

「実践ならいざ知らず模擬戦で力を使うなんて一体なに考えてるの！？」

訓練を終えた私はその日の夜、食堂で桐斗怒鳴りつけている。理由はもちろん模擬戦で桐斗がフォード四人を危険な状態にまで追い込んだからだ。

「あの時私達が止めたから良かったけど止めなかったらどうするつもりだったの！？訓練なのにあのまま刺し殺すつもりだった!？」

今、私の頭の中は煮えたぎっている。ちょっとやそつとじゃ収まりそうになかった。次々と私の口から出る彼を罵る言葉。

周りは誰もいない。

桐斗は私の言葉を黙ってきいているだけ。

なにも喋らない彼に私の怒りは更に沸き立つ。

「それにエリオとキャラ口はまだ子供なんだよ！そこは考えた!？制限無しの夕陽を相手にしているわけじゃないんだよ!？」

保護児童である二人は私の娘、息子みたいなモノだ。仮にも母親としては尚更アレは許せなかった。

「すまない……」

「すまないって……桐斗の力って非殺傷設定ができないのは自分がよくわかってるよね!？一歩間違えれば取り返しがつかないことになってるんだよ!？」

そして私はある一言を口走ってしまった。

急に名前を呼ばれ振り返ると桐斗が出ていった二つある食堂の入口のもう一つにキヤロとエリオ、ティアナ、スバルがいた。

今のやりとりを聞かれたと思った私は強張った顔をできるだけ柔らかに笑いかける。

「恥ずかしいところ見せちゃったね。」

「あ、あの……キリトさんと喧嘩してたんですか？」

エリオとキヤロが心配そうな表情で私を見てくるどうやら内容までは聞かれていないようだ。

「ううん、ちょっとお説教をしてただけ。そういえばティアナとスバルは大丈夫？ とくにティアナはとっさに防いだとはいえ桐斗のアークトライデントをまともに受け止めたみたいだし」

「あ、はい。大丈夫です」

「お気遣いありがとうございます」

「そう言ってくれると助かるよ……。あ、桐斗には私からキツく言っておいたから。」

小さくガッツポーズを決め私は3人に早く休むように言つと逃げるように食堂を出て行くのだった。

「今の所異常はないですね」

周りが森で囲まれているここ【ホテル・アグスタ】。今回警備の対象となっているオークション会場の周りを散歩がてら見回っている。

木々の隙間を駆け抜ける風がとても気持ち良くてできることなら何も起こらない事を願いたい。

『お兄ちゃん聞こえる?』

ん?夕陽からの念話のようですね。
僕は直ぐにそれを繋ぐと何事かと聞き返す。

『お兄ちゃんが怒ってる理由がわかったよ。原因はお姉ちゃんにあったみたい。まあ正直どっちもどっちなんだけどね』

そのまま彼女は兄さんが怒っている理由を話した。

なるほど『私達とは違う』ですか。それは兄さんでなくても僕や夕陽もちよつと頭にきますね。

僕達三人はロストロギアである。【陰陽の剣】【ゴルゴン】【森の雫】。

最後の夜天の主である機動六課部隊長八神はやてさんが【歩く口

ストロギア」なら僕達兄妹は【生きたロストロギア】確かに普通とは違う。

けど兄さんは自分はいくら兵器や人外と罵られても構わないが僕と夕陽だけでも皆と同じであってほしいと考えている。

だから僕達の管理局入局に怒りを示してくれた。

だから姉さんのその一言がとても頭にきてしまったのだろう。

『姉さんはどうしてます？』

『ゾンビみたいにホテル中徘徊してるよ。正直言つとちょっと不気味』

なら問題ないでしょう。けど夕陽不気味はひどいのでは？

まあ後は自分でなんとかするでしょう。そう思い念話を切りふと視線を前に戻す。

どうやら入り口付近まで戻って来たみたいですね。

するとそこに佇むティアナさんの姿が目に入りました。

なにやら暗い雰囲気で見ている彼女の所まで歩み寄る。

「そんな暗い面持ちじゃ他の三人に影響が出ますよ」

声を掛けられ彼女はゆっくりとこちらを見る。そしていつものようにこちらを睨んでくる。

「なんですか？」

と思ったがいつもと違ただこちらを見てくるだけだった。その事に違和感を感じた。返事を返そうとするもそれより早く彼女は次の言葉を切り出してきた。

「そういえば隊長補と副長補って一佐のご兄弟でしたよね」

いきなり問いかけてきた質問に僕は頷くことで返事をする。

「以前なのはさんから聞いたんですが隊長陣は全員リミッターをかけてるとか。隊長補はいくつリミッターを掛けるんですか？」

端から聞けば部下の興味本位の質問と取れるだろう。けど彼女の目はそういった雰囲気ではないように感じた。その目はあの時の彼女に近く感じた。

「今、僕達三人はAランクまで落ちてます。リミッターの数は僕が3ランクダウン、夕陽が2ランクダウン、兄さんが4ランクダウンです」

分かるとは思いがちなみにコレは嘘だ。

実際にこの身体に掛けているリミッターを普通の人と同じだけかけたら異常をきたす程、それでもしないとこの世界に溶け込む事ができないのである。

僕の答えに彼女は目を見開く。そして再び悲しい雰囲気のまま視線を落とす。

「凄いですね……。ホント羨ましいです」

小さく呟く彼女の言葉にその雰囲気は

凄いね……。ホント、羨ましいよ……

「……………ッ!？」

僕は思わず彼女を重ねてしまった。息を呑み、思考から邪念を振り払う。

「一体どうすればそんなに強くなれるんですか？」

一体どうすればそんなに強くなれるの？

「エ……………ナ」

だけど紡ぐ言葉、紡ぐ言葉が彼女を思わせてくる。

「私には射撃しかないのに」

私には“隠れる”というしかないのに

やめる……。その表情で彼女と同じ事を言うな。仮面が……………ペ
ルソナが……………崩れ

『クリアルヴィントのセンサーに反応!! シャーリー!!』
『シャマルさんからの緊急の通信が入った。』
『ハイ!! 来てますよ。物凄い数です!!』

ギリギリの所で持ち直した僕はメインオペレーターのシャーリーさんの言葉を聞いた後全員に回線を開いた。なのは姐さん、高町隊長の補佐として全員に指示を出す。

「こちら“スターズ01”。スターズ01に代わり指示を出します。ライトニング02、スターズ02、ザフィーラは直ちに迎撃に出てください。スターズ02も前線に参戦。シャマルは今後現の場指揮を頼みます。フォアード陣は彼女の指示に従ってください。僕も迎撃に入ります。」

『了解しました』

『了解!』

『心得た』 『ハイ!!』

『『『了解!!!!』』』

各員の返事を聞いた後、待機状態のデバイスを取り出す。

「ウロボロス。set up」

『all right・stand by ready set
up。』

明灰の魔力光に包まれ黒いロングコート、ライトグレーのスーツ

という少し異質のバリアジャケットを身に纏う。手には蛇の彫刻が施されたリボルバータイプの銃が二丁。

『不備なし。いつでも行けるわよ』

デバイスの返事を聞き飛び立とうとする。だけど側にいるティアナさんの視線に気づき今一度彼女を見る。

そして……

「ティアナさんは誰にも負けない才能をもつてると思いますよ。少なくとも“奪う”だけの力しかない“俺”よりわね」

少しだけペルソナを外した心からの言葉を彼女に送り僕は空へと飛び上がって行った。

FILE 12 (後書き)

感想お待ちします

FILE 13 (前書き)

本日更新

「せーのっ!!」

私の掛け声と共に森の中で次々と起こる爆発。木々の隙間を駆ける深緑の閃光。大型ハルバート形状デバイス【セレスティア】を駆使しガジェットを駆逐する。

「うっ……久しぶりの出番だよ」

森の上に飛び上がって天に向い高々と叫んで見ました私、機動六課スターズ分隊長補佐の霧咲夕陽。

六課に出向しての戦闘といえばフォアード陣に見せたデモンストレーションだけ。あとは全部待機や事務仕事（お姉ちゃんのも少し含む）ハッキリ言ってストレス溜まりに溜まってつい最近まで無理やりリミッターをぶっ壊して智お兄ちゃんと模擬戦をしようかと思っただくらいだ。

だから今ぐらいは八つ当たりしてもいいと思います!!

『ハアアアッ！紫電一閃!!』

少し離れた場所でガジェット？型が爆散するのが見えた。はやてさんの騎士、ヴォルケンリッター【烈火の将】でありライトニング02のシグナムさんが近くにいますようだ。

ヤバイ八つ当たりで夢中になって迎撃線を考えてなかった。

このままでは兄怒られてしまうので私はすぐに自分のもといった場所にまで戻ることにした。

【一刻前】

ホテルと戦場を一望出来る崖の上に立つ二人　　灰色のコートを着る壮年の男性と長い紫髪の子供ほどの少女。
見た目の印象は親子。

傍観者だった彼らのもとに、通信用の空中モニターが現れる。

『ご機嫌よう。　　騎士ゼスト、ルーテシア』

映し出されたのは、幾何学的な装飾を施された外壁の暗い部屋を背景に薄く笑う、鋭い金眼と青紫の長い髪を持つ学者然とした年齢不詳な男性　　第一級次元犯罪者にして超広域指名手配者、ジェイル・スカリエッティだった。

「うきげんよう」

無感動に、しかしどこか親しみを込めて挨拶を返した薄紫髪の少女　　ルーテシア・アルピーノ。

「何の用だ」

明らかに貴様と話すのは不愉快だ、と言わんばかりの屈強な肉体を持つ中年男性　　ゼスト・グランガイツ。
だが、ジェイルは気にした素振りも無い。

『冷たいねえ。近くで状況を見ているんだろう？あのホテルにレリックは無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少し協力してはくれないかね？君たちなら、実に造作もないことの筈なんだが……』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めた筈だ」
断固として首を横に振るゼスト。

『ルーテシアはどうだい？頼まれてはくれないかな』

瓢々として本懐を悟らせない猫撫で声。
それに対して彼の連れである小さな少女は、

「いいよ」

と、静かに了承した。

ルーテシアの了承を受けて、モニター越しのジェイル・スカリエツティは嬉しそうに薄く笑む。

『優しいなあ……。ありがとう。今度ぜひ、お茶とお菓子でも奢らせてくれ。』

君のデバイス　　アスクレピオスに私が欲しい物のデータを送ったよ』

少女が両手に装着した黒いグローブ　　ブーストデバイスの甲

にある紫水晶が光る。

それを確認し、ルーテシアは頷いた。

「ん……。じゃあ、ごきげんよう。ドクター」

『ああ。ごきげんよう、吉報を待っているよ』

互いに挨拶を終えるとモニターは閉じた。

「いいのか？」

全身を包んでいたクリーム色のローブを脱ぐルーテシアからそれを受け取りながら、ゼストは短く少女に問う。

彼女の目的は、とあるシリアルナンバーのレリックを探すこと。イレギュラーな雑事に時間を費やす暇など無い筈だ。

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、ワタシはドクターのこと、そんなに嫌いじゃないから」

「そうか」

しかし、ルーテシア自身がそう言うのなら是非はない。“殺されている”母親に代わって彼女を守ることが、自分の選んだ使命なのだから。

そして、少女のローブを手にゼストが離れると。

キーン

黒いキャミソールとミニスカートを着るルーテシアは足元に、黒の四角い魔法陣を展開する。

「我は……請う……」

「小さき者、羽ばたく者」

ルーテシアの言霊を受けて、召喚魔法陣の四つ角それぞれの基点からニユルニユルとゼラチン質の柱が出現した。

「言の葉に応え、我が命を果たせ」

やがて、湿り気を帯びていた表面が硬質化。

「召喚 インゼクト・ツーク」

パキツ、と柱は縦に割れて、中の卵から孵化した無数の羽虫。宙を舞う彼らはマザーの指令を待つ。

「ミッション、オブジェクト・コントロール……。行ってらっしゃい、気をつけてね？」

彼等は彼女の命を受けそれを全うせんと飛翔した。

『度々すまないね』

同時に再びモニターが開かれジェイル・スカリエツティが姿を表す。

「なんだ」

『伝え忘れていたのだけど少しだけマズい事にそこには【伝説の守り手】がいてね。能力が制限されているとはいえ、アレの能力は無視できない。それに君達にもしものことがあつては大変だからね。同じ守り手の一体【鏡盾】を向かわせたよ』

何処とも知れぬ薄暗い空間で、スカリエッティは感嘆の声を漏らす。

「やはり素晴らしい」

そして、戦況を映す大型モニターの隣、小型モニターに映る金眼の美女。

極小の召喚獣による無機物の自動操作、“シュテーレン・ケネゲン”

「それも、彼女の能力の一端に過ぎないがね」

「しかし、本当に彼を向かわせてよかつたのでしょうか？」

ジェイルの後ろに控えている彼と同じ紫髪の女性、ジェイル・スカリエッツィの作品、戦闘機人【ナンバーズ】ウーノ。

「予定していた数の5倍のガジェットを投入。それに加え召喚師として素晴らしい才能を秘めているルーテシアお嬢様。参戦の意志がないとはいえ元管理局ストライカーとして、オーバーSランク魔導師と名高い騎士ゼスト・グランガイツ。いくら【守り手】でもAランクにまで落ちた現状では恐るに足りないと思うのですが」

「そうだね……。私も私が作り出した作品は使い捨てではあるが自信作ではあるよ」

不適な笑みを零すジェイル・スカリエッツィ。モニターを見つめながらサッカーの試合をテレビで観戦しているかのように楽しそうだ。そしてモニターに映る戦闘エリア全体の映像ではホテルを囲むようにできている爆発の数々、あれが今回のミッションの戦線その戦線の内二カ所だけが異常に広くまた押し返しつつある。

そんな中、彼の後ろをハイヒールのかかどが床を鳴らす音が耳に入った。ジェイルはゆっくりと振り返りその人物を確認すると笑みを零す

「バカねえ。アナタが作り出した兵器なんて所詮玩具、比べる対象を間違ってるわよお」

「これはこれは。どうかな？一緒に観戦でもしないかね？」

その誘いに足音の主は誘いに乗るように笑みを零す。だが、彼の笑みとは対象にウーノは怒りを滲み出した表情で足音の主を睨みつけた。

「ドクターを愚弄するのは許しませんよ……」

「誰に口を聞いているのかしらあ？ 人形の分際で……」

暗闇に浮かぶ赤い光。足音の主の赤い深紅の瞳の光がその輝きを増した。

「ッ！ うゝ あああ！？」

突然苦しみだしたウーノ。床に崩れ落ちてもがき苦しむ。その声は断末魔にも等しいモノだった。

「ま、まあまあ、彼女の失言は私から謝るよ。頼むからそこまでにしてくれないかい？」

「ウフフ 良かったわねえ人形^{ドール}ちゃん。お父様に感謝しなさいなあ」

苦痛から解放され苦しそうに息をつくウーノ。それを見てジェイは安堵のため息をつく。とパネルを操作して新たに2つのモニターを出した。そこに映るのは互いに黒い髪と青い瞳の少年少女。

「この子達が君達の言う【伝説の守り手】。アルハザードより流出したロストロギアの内の二体だね。最初はにわかには信じがたかったが君の力を見せられては流石の私も信じざるを得ないよ」

「けどいいのかしらあ？ ルーちゃん達の所には【ゴルゴン】が向かってるみたいよ？ 【森の雫】は元々戦闘用じゃないからまだ問

題ないとしてあの子は戦闘能力が半端じゃないからリミッター掛けようが関係ないわよ？ ま、私はどうだっていいんだけどねえ…ウフフ」

楽しそうにジェル・スカリエッティに忠告する。声は女性のモノで髪は黒色、瞳は深紅。モニターの光を浴びた事により見えるようになった容姿はこの世のモノとは思えない程美しく女性。その声は聞いている者をどことなく落ち着かせてくれる。

「ご忠告ありがとうございます。けど心配はいらないよ。【鏡盾】を彼女達の所に向かわせてあるからね」

「なら問題ないわねえ。同じ第4防衛線の守護者でも【ゴルゴン】は末席、代わりがロールアウトされるまでの間に合わせ。だけど【鏡盾】は真正銘の第4防衛線の守護者、勝負にならないわあ。けど、あの子達のお兄さんとは戦わせない事ね、逆に勝負にならないから」

女性は何も無い場所に腰を下ろす。宙に脚を組ながらくつろいでいる姿はなんとも異質だった。

「君の御墨付きがもらえればなんにも問題はないね。ご忠告もきっちり守ろう。ではゆっくりと観戦といこうじゃないか。」

スカリエッティは再びモニターに視線を移し楽しく観戦を始める。その後ろでは女性が笑みを浮かべながらモニターに映し出される映像をみていた。

「会いに来たわよ。貴方はわたしから逃げられない」

視線の先にはホテルを中心とした戦場。

「貴方の聖母は貴方の為だけにここに来たのだから……」

ゆっくりと口元がつり上がる。その表情は先程とは違って変わり見たものを恐怖させる歪んだ笑みだった。

「受け入れてね…今度こそ、貴方を狂う程に愛しているこの私を…
…ウフフフ…」

FILE 13 (後書き)

感想お待ちします

FILE 14 (前書き)

本日更新

インターリヒト。

オブジェクト二十二機、転送移動

ホテルの正面玄関前。

同じ召喚師である彼女キャロル・ルシエは敵の動きを瞬時に看破した。

「遠隔召喚！来ます！」

突如前方に展開される黒い四つの召喚魔法陣。それらから小型が二十機、大型が二機の合計二十二機が召喚される。

驚くエリオとスバル。キャロは冷静に、しかし敵の技量に戦慄して身構えた。

「優れた召喚師は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

だからどうした、と仲間から離れた位置、林の中で銃を片手にテイアナは鼻で笑う。

「何でもいいわ。迎撃いくわよ！！」

クロスミラージユを現れたガジェットに向けて彼女は叫んだ。

「……………」

空を駆ける僕は黙々とガジェットを撃ち抜く。明灰の魔力弾と魔力変換資質で作りに出した石の棘。それらはこの青空の中雨のように降り注ぐ。

そういえば皆は大丈夫だろうか。

先程からガジェットの動きが急に良くなってきているので敵がなにやら策を行ってきたたのは僕も気づいている。

けどこれだけでヴォルケンリッターや夕陽達の迎撃線をかいくぐれるとは思えない。もしかしたら相手方に召喚士がいるのか？だとしたら……………。

兄さん聞こえますか？

智か。どうした

自身の深層に潜り込んで兄とリンクを繋げる。その際に兄さんの怒気を一心に浴びてしまったがなんとか持ちこたえる。

相手に召喚士がいる可能性があります。もしかしたら潜入さ

れる可能性があるのでオークションに出品される荷物を見てきてください

わかった。智、無理はするなよ。

そして兄さんとのリンクは切断された。

さて、僕は召喚士の方を叩きますか

「ウロボロス。召喚士と思われる魔力の位置特定はできましたか？」

『無論よ。この近くおよそ一キロ先にそれらしい反応があるわ』

既にサーチを行っていたデバイスに僕は頷くと空高く飛び上がり魔力反応の源と思われる召喚士の下へと向かって行った。

戦場を一望出来る切り立った崖の上に立つ私の元へ、転送したガジェットに紛れて潜伏させた一匹のインゼクトから、とある信号が届く。

「ドクターの探し物、見つけた。 ガリユー、ちょっとお願いしていい？」

呼びかけたのは紫水晶が詰められている黒いグローブ、その向こうで繋がった一体の召喚獣。

そして、“彼”は『もちろんいいよ』と水晶を点滅させることで答えた。恐面だけと優しい“彼”に、私は自然と笑みを溢す。

「邪魔者は、インゼクトたちが引きつけてくれる。荷物を確保して?」

再び点滅。

『うん、わかった。がんばるね、るーてしあ』。

「ん。気をつけていつてらっしゃい」

右腕を掲げてから“彼”を送り出した瞬間。

「まさかキヤロと同じぐらいの女の子が召喚士とは。最近の子供は将来有望というべきか、社会的に問題ありというか」

いつの間にか後ろで私に向けて銃型のデバイスを突きつけている男の人がいた。私はゆっくりと振り返ると男の人を見つめる。どうやら管理局員のようだ。インゼクトに気付かれずにここまで来たのだから実力も相当なモノだろう。

彼の反対側では同じく銃を突きつけられているゼストがいる。

「時空管理局機動六課所属、スターズ分隊長補佐霧咲智です。所属と名前、目的を述べて大人しく投降してください。今なら弁解の余地が与えられます。」

『ルーテシア』

ゼストから念話が繋がられた。

『ガリユーは目的のモノを手に入れたか？』

『うっん。まだ』

彼の問いに私はまだガリユーがドクターの欲しいモノを手に入れている事を伝えた。彼の考えは用が済んだら即座に彼を抑えて撤退するつもりだろう。そんなことを考えていると私達に向かって銃を突きつけている男の人は突然妄言を口走った。

「ホテルに召喚獣を忍び込ませたなら直ぐに戻した方がいいですよ。あそこには一人で管理局を潰せる人が警備についてますから」

は？

多分ゼストと私の考えている内容は同じだろう。何を言っているのだろうか。時空管理局は幾多の世界を管理する巨大な組織である。戦闘構成員は何百、何千といて、魔導兵器、技術も現存する世界の中でも他の追隨を許さない。その管理局をたつた一人で潰せる人間があのホテルにいる。そう彼は言った。

そんな戯れ言、虚言はハツタリだ。私は再び冷たい視線で彼を見る。ただ視線の先にある瞳は全く揺るがない、ゆっくりと心臓の音が高鳴っていく。それが次第に早くなっていき

「っ！？…ガリユー戻って！！」

グローブ型のデバイス【アクレピオス】を通じてガリユーに向かって叫んだ。

この人が言うことの真偽は定かではないがもし本当ならば《彼》が危ない。必死に呼びかけるも《彼》からの反応がない。私のお願の事の為に必死に戦っているのかもしくはもうすでに……。いや、そんなはずはない《彼》ならきつと大丈夫だ。

私は気持ちを切り替えるとゼストに念話で現状打破、撤退を伝える。彼がデバイスを手にしようとしたとき銃声が響く。

「大人しくしてくださいね。でないと奪わなくていいモノまで奪うことになります」

静かになおかつ私を感じたことのないほどの殺気を放ってきた。

恐怖で足が竦む。これほどの殺気を放つ人間がいたのか。

逃げれない。そう私達は悟った。

けど逃げなければいけない。マルチタスクの一つで操作しているガジェットの一体に呼びかける。一瞬でいい、一瞬だけ彼の気を逸らせれば…

俺は智に言われオークションに出品される品物が集まる地下に來ていた。視界に入るのは数台のトラックと作業員。

現状ではなにも異常はない。

それにしてもこんなガラクタのなにがいいのか。物好きもいるものだ

「この世界では俺も骨董か……」

小さく鼻で笑う。以前フェイトに言われた事を思い出した。私達とは違う。その言葉は俺だけではない弟と妹も蔑む言葉。それに対して俺は彼女に対して怒りを覚えた。

彼女の言うことも間違いない。彼女も造られた存在だが兵器ではない。

だが俺は兵器だ。敵を殺す為に造られた兵器なのだ。彼女といることで一時的ではあるがそれを忘れることができた。それがとても心地よかった。

「アルハザードの絶対守護者も弱くなったな……」

仕方がない彼女に謝ろう。そしてフォアードメンバーにも。

フェイトは差別心を持って言ったんじゃない。エリオ、キャロの母親的立場として言ったんだ。それにその考えは俺も共感がもてる。そつだ、この機会に俺の持つ戦闘の定義と親の教えも彼女に話そう。

だがその前に

「侵入者を排除するか」

今この空間に何かが侵入したことを俺は肌で感じ取った。数は1。強さとしてはそこそこの強さか。会場内の隊長陣に念話を繋げる。

『こちらキリ』桐斗どこにいるの!?!』

いきなり脳内に叩き込まれたかん高い声。頭痛のする頭を抑えて続ける。

『これより地下駐車場で侵入者と思われる召喚獣の駆逐に入る。し

ばらくここには誰も立ち入らせないように頼む。それとハラオウン
執務官』

『……………な、なんででしょう?』

『後で話がある。では切るぞ』

念話を切り意識を集中させる。ステルス性のある奴と戦うのはガ
キの頃の母親以来だから少し手間取るかもしれないが

「まあ、なんとかなるだろう。……………戦闘モード起動」

不気味にざわめく空気。俺は作業員に逃げるように指示を出して
彼等が逃げたのを確認するとツヴァイハンダーを起こす。バリアジ
ヤケットは纏わずにスーツのままだ。

『サ、バリアジャケットを纏われなければ後で奥様がご心配され
ると思うのですが…』

ツヴァイハンダーが少しだけ心配そうにバリアジャケットを装着
するよう促してきた。

「大丈夫だ」

本心で言えばフォード戦で追い込まれたから少しトレーニング
をしたいという事なのだが。間違ってもそれは口には出さない。嫁
の母方の息がかかったコイツの前では

「さて、様子見てないでかかってきたらどうだ?」

虚空に向けて俺は言い放つ。同時に殺気が俺に向けて放たれた。さて、やるか
左手のツヴァイハンダーに力を込めた時。

「ふん……。ステルス能力なんて珍しいね」

俺の横を通り抜けた深紅の魔力弾。それは空中で何かに衝突したように弾ける。直後その後方で壁が突然ひび割れ凹んだ。

「やあ、桐斗。久しぶり、それと結婚おめでとう」

ゆっくりと後ろに振り返るとそこには7年ぶりに見る成長した親友の姿があった。

FILE 14 (後書き)

感想お待ちしております

FILE15(前書き)

更に更新

ゼスト、ルーちゃん。そこを動かないでね。

男の人の目の前に突如現れた虹色に変色していく正六角形。後ろのゼストと私の正面、彼との間に壁を作るように作られたソレ。私はそれを知っている。それはあの人の力。

それを見た彼は驚愕の表情を見せた。

「これは!?!」

僕はこの壁に見覚えがあった。

僕達兄弟には短く。時間としては遠い遙か昔。僕達生誕の世界、現在この世界で伝説とまでいわれている超高度文明アルハザード。

僕はその世界の守護者という名の兵器の一人、一つ、一体として戦っていた。

守護者として守っていた戦場は第四防衛線。けど僕は両親が消えた事により間に合わせで昇格した守護者。代わって兄は実力で第四防衛線から最終防衛線、母とじのガーディアン第三席に君臨した守護者。

「くそっ」

次の瞬間、上空より飛来してきた同じ正六角形、直径2メートル

の壁。それは僕を押し潰さんとしていた。

ウロボロスモードセカンド起動

双頭の蛇よ彼女の御手をここに成せ

『mode second』

「ウリアウレー!!!」

あの人の力にはこの世界の魔法、質量兵器など意味がない。今の僕にできるのは一瞬でもいい避ける時間を稼ぐこと。

彼女には辛いかもしれないがこれしかなかった。

彼女は一瞬で分解されて右腕に新たな姿となる。

黒のロングコートとスーツの上着が吹き飛び。

そして禍々しいまでに機械なその腕を壁に叩きつけて膨大な量の魔力を放出する。リミッターをかけられている今でも無理やりなら異常量の魔力放出は可能。その際に身体に多大な負荷がかかるのはわかっている。だがこの身はその程度で異常をきたすほどやわではない。

ウリアウレーの軋みを上げる音を耳に魔力と壁のぶつかり合いを確認すると瞬時にその場から離脱。

安全な空へと飛び上がった。爆発が起きた場所を睨む。立ち上る煙、その勢いは次第に弱まり視界を空けた。

「久しぶりだね」

姿を現したのは虹色に変わる髪と瞳を持ち僕より年上の青年。その姿は優雅というべき雰囲気を持ち、兄と同じ不屈の存在を感じさ

せる。彼こそ真正銘アルハザードの第四防衛線守護者。

正式名称【パルンティノガーディアン】第五席 第四防衛線守護者筆頭。シリーズ【エンゲージ】の第13作品にして最高傑作

「【鏡盾】ラス・ミフォール・エンゲージ……」

「悪いけどこの二人を捕まえさせるわけにはいかないんだ。【ゴルゴン】ヴーゼル・ドリユス・アルシエラ」

「なにこの感じ……」

ガジェット？型を落としたと同時に遠くで響いた凄まじい音と大気の揺れ、そして肌で感じた奇妙な波動。

私はセレスティアで地に縫い付けた？型の上で音のした方を見る。あつちは智お兄ちゃんがいたはずだ、ということはお兄ちゃんの身になにかあったのか？

直ぐに自身の深層に潜り込んでリンクに繋げようとする。だがいくら呼びかけでもかれは何も返事をしてくれない。

『こちらスターズ02。これよりスターズ01の援護に入ります。私のいた迎撃線が空くので一旦後退してフォアードメンバ―と合流するのが打倒かと』

『こちらシャマル援護、を許可します。気をつけ』

シャマルさんに繋いだ通信が突然ノイズと一緒に切れた。一体何が起きている？ フォアード陣が心配になってホテルにサーチャーを飛ばすが全く意味を成さない。次いで検索魔法を展開するがそれもノイズだけしか返ってこない。

私は慌てて空に飛び上がると一直線に波動の感じた場所、兄がいるであろうポイントへと飛び立った。

そして兄のいるだろうエリアに着いた時、その場は極度の緊張に包まれていた。

まず、兄の右手が機械的な大きな腕になっていた。アレはウロボロスの二次形態【ウリアウレー】だ。対する兄が睨んでいる人は徒手空拳で立っている。そして妙な波動があの人から感じた取れた。

端から見ればただ睨み合っているだけ。けど私から見たら兄の方が動きたくても動けないように見えた。それに先程から虹色に色彩を変化させている正六角形の板みたいなのが男の人を中心に回転している。まるで意志をもっているかのように兄を威嚇しているように見えた。兄は一度も魔法を放っていない。

イメージとしては魔導師対別のなにかの対決。考える私はある結論にたどり着いた。

「私達と同じロストロギア？」

たどり着いた結論はあの男性が自分達と同じ存在だということ。そうだとすれば兄が危ない。同じロストロギアだとしても今はリンクまで能力が制限されて【ゴルゴン】としての力が使えない。

まだ、相手は私に気付いていない。好機と思い私はセレスティア

に命令を下す。

「セレスティアネクストモードリリース。【インフェリア】起動
」

『YES・Your Highness』

バルバート型のデバイスセレスティアの形状が組み替えられる。姿を成したのは直径50センチ程の魔力刀で形成された二つの輪っか。その中心にはそれぞれ柄があり持つことができる。これこそセレスティアのもう一つの姿。円月輪形状のブレイカー型デバイス【インフェリア】。

それを宙に投げると両手を使い円を描く。それに併せてインフェリアも私の前で円を描きミッドチルダ式の魔法陣を展開させた。その中心には深緑の魔力が充填されていく。

「ターゲット捕捉。」

更に魔法陣の先には魔力で構成されたスコープが形成され標的である男性を捉える。放たんとするのは遠距離射撃の直射魔法

「ソーラーキャノン…スタンバイ」

『stand by』

徐々に充填される魔力と共に私は右手を標的に向ける形でタイミングを伺う。そして視線の先で兄と対峙する男の人が右手を上に向けた瞬間。

『stand by・complete』

「ファイア!!」

深緑の砲撃魔法は放たれる。

それは大気を切り裂き兄と対峙する男性を捉え、次の瞬間凄まじい爆音が辺りに響いた。

夕陽!!

「……………え？」

だけど次の瞬間、兄の背中が目の前にあった。そして兄が利き手である右手で受け止めているのは私が先程放った魔力砲、ソーラーキャノンだ。

兄はそれを全力で振り抜き掻き消す。そして大きく溜め息をついて私に視線を向けた。

「大丈夫ですか？」

「ヴーゼル。その子は？」

その声には私は砲撃を放った方を見る。私が狙った男の人は何事もなかったように私達を見据える。直ぐ私は再びインフェリアを構えた。

「この子は僕の妹です。」

「森の雫…レーエンか。大きくなったね」
やはり彼は私達と同じロストロギア？

彼のその言葉に私は一瞬動きを止めた。次の瞬間、側にいた二人

の男女も範囲に入れるように見たことない魔法陣が足元に展開された。

それじゃ、また会おう。ヴーゼル、レーエン。

そして、そのセリフだけを残して三人はどこかへ転移した。

「お兄ちゃん……あの人……」

「あの人は【鏡盾】ラス・ミフォール・エンゲージ。僕達と同じロストロギアです」

「じゃあ……ヴーゼル、レーエンって？」

「任務が終わったら話します。今はフォアード陣の所に戻りましょう。」

お兄ちゃんという言葉に頷くと空へと飛び上がっていった。

僕達はフォアード陣と合流するために飛行を続けている。僕と夕陽は互いに沈黙。まさか敵側に自分達と同じ存在がっているとは思わなかった。

「夕陽……。任務中に彼と遭遇したら迷わず撤退してください」

「うん、私は非戦闘用だしなにより経験が全然違うからね。あの人を見たら直ぐお兄ちゃん達を呼ぶよ」

「いえ、僕では話になりません。奥の手を使ってもあの盾を抜けるかどうか……」

「……こそ」

夕陽が驚いたように目を見開いた。

そもそもその人物は僕と同じアルハザード第四防衛線を守っていた守護者を取り纏めていた人だ。やりあうにしても僕で足止めできるかどうか。確実に捉えるには兄さんクラスでないといけない。

「はやてさんに言っただけで緊急会議を開かないと……」

「そうですね。あ、見えてきました。夕陽、このことは会議の時まで内密に」

「はい」

ホテルが遠くに見えてきた所でフォアード陣を探す。彼女達は直ぐに見つかった。必死ながらもガジェットの群れを抑えている姿から自然と笑みが零れる。

だがこの時、フォアード陣の司令塔であるティアナさんがらしくない行動に出た。

前に出ていたエリオを後ろに下げて自分が前に出たのだ。どうやらスバルさんとのコンビネーション【クロスシフト】をやるつもりらしい。そこまではまだ目を瞑れた。カードリッジを四発ロードするまでは……。

「カードリッジを四発ロード！？ティアナさん大丈夫なの！？」

隣で夕陽が驚きの声を上げる。僕は真剣な眼差しでそれをみてメ

デューサに指示を出す。

「メデューサ……フラツシユムーヴの準備をしておけ……」

『わかったわ……程ほどにね。』

「クロスファイアー……」

僕の口調が変わった

ティアナさんの周囲に展開される複数の魔力スファイア。放たんとするのはクロスファイア。普段の彼女なら問題なくこなせる十八番だ。だが今回彼女は明らかに焦っているようで更には四発ロードという無茶もしている。

「シュート!!」

叫び声と共に放たれたオレンジ色の魔力弾の数々。同じ僕も飛び出す。

魔力弾は次々とガジェットを射抜いていったが内の一発がそれってしまった。

それは真っ直ぐにスバルさんの所へ向かっていく。

完全に直撃コースのそれを僕はウリアウレーとは反対の左手で掴んだ。

「隊長補!?!」

僕の後ろでスバルさんが驚きの声を上げる。仕留め損ねたガジェットは夕陽が仕留めたのを確認して僕は魔力弾を握りつぶした。

「ティアナ! オメエなにやってんだ!!」

その後ろに少し遅れて来たであろうヴィータが降りてきた。怒鳴られていたティアナをフォローしようと話しているが僕には全く聞こえていない。

「ふざけるな……お前ら「ティアナ・ランスター二等陸士！」」

僕が上げた怒鳴り声に周りのメンバーが驚きの表情を見せた。

「及びフォアードメンバー全員は前線より後退。ホテルの警備を命じる！」

静かな森に僕の怒鳴り声が響いた。

FILE 15 (後書き)

感想お待ちします

FILE16(前書き)

更に更新できました

「うんわかった。夕陽はそのまま引き続き現場検証をお願いな。」

モニターを閉じると私は一度ため息をつく。

夕陽よりあつた報告は敵からのホテル防衛に成功の旨とティアナのミスショット、そして六課に戻り次第隊長陣による緊急対策会議実施の申請。

最後の申請の理由は極秘事項とのことで理由はまだ聞いてないが彼女の表情からは深刻なモノと取れた。

けど今はそれより気になっていることがある。ティアナのミスショットだ。

普段は冷静にフォアードの指揮をしている彼女が焦りを見せてミスを犯した。

やはり兄の死とそれに対する上官の発言、それと周りの隊員による焦りを感じているのだろう。

けどこれは彼女の問題だ。彼女自身の手でなんとかするしかない。それに今は副隊長補である智の心境も気にかかっている。

はあ……。どないしょ。

下を向きながらため息を尽き顔を上げる。するとそこには見慣れた金髪の女性の後ろ姿があつた。

そつだ。彼女に相談してみよう。

そつ思いその人物に声をかけた。

「フェイトちゃんちょっと相談があるんやけどええかな？」

こついうときは親友に相談するのが一番。故に小学校からの付き合いで幼なじみである彼女に話を持ちかけた。

この時私は忘れていた。彼女は今危険な状態にあることを。

「はやでえ〜……」

「……………へ？」

涙声で私の名前を呼ぶ彼女に呆けた声を出す。こちらに振り向いた彼女の顔は涙と鼻水で化粧が崩れ酷いモノとなっていた。それはもうせつかくの美人がが台無しって所じゃない。不気味。怖い。そう言った言葉が一番当てはまる。まさかホラー映画以外で、それもリアルでこれを拝めるとは思わなかった。

言うなれば目の前にいる彼女の顔はまさにゾンビ。

墓場より這い出てきた親友に思わず私は一歩後ずさる。とりあえず彼女に一言。

「い、一度御手洗いにいこか。顔が物凄いいことになっとなるで……」

「ぎりどが……ぎりどが……」

「ぎりど？ああ、桐斗君か？桐斗君がどないしたん？」

彼がどうかしたのか？二人が喧嘩をしていたのはわかってはいるのだが。

私は首を傾げ問う。

「ぎりど…が、話があ…るっ……………で…ヒック……」

ふむ……………。桐斗君がフェイトちゃんになにやら話があるってことやね？

でなんでそんな顔しとるん？ただ話しがあるだけやのにね。とり

あえず私は彼女になぜ泣いているのか尋ねてみた。

「話しがあるってだけでなんでフェイトちゃんそない泣いとるん？」

「わたしだぢ……別れるがもじれない……」

……は？

なにをいつているのだろうか彼女は。なぜ話しがあるってだけで別れる展開までいくのだ？

「とりあえず今はお化粧直して、落ち着いて話せる場所いこうか。ちゃんとお話は聞いたるさかい。」

「うん……。」

私は親友の肩を抱きながらゆっくりと彼女のお色直しの為に御手洗いへと歩き出す。途中緑髪のお気楽査察官と出くわしたがこんな親友を見せる訳にはいかないので顔面に一発拳を叩き込んで昏倒させたのは別の話し。

「で、なんで桐斗君と離婚するかもしれないって言い出したん？」

私はホテルにある喫茶店で親友の話しを聞くことにした。

彼女もある程度落ち着いたようで目の橋に涙は浮かべてはいるが先程よりは大分マシになっていた。とりあえず私達はそれぞれにコーヒーとアイスレモンティを呑んでいる。

はあ…。本当は私が相談にのって貰お思ったんやけどなあ。
内心ため息をつくが直ぐに切り替えて親友の言葉に耳を傾ける。

「私が…桐斗に酷いこと言ったから」

静かに語り出すフェイトちゃん。

以前桐斗君対フォード陣の模擬戦の時にフォード陣を危険にさらしたこと。それにより彼女が桐斗君に激怒した際に言ってしまったロストロギアである彼等兄弟を蔑む差別的な言葉。それを後悔している自分。

私は黙ってそれを聞く。

「多分それはフェイトちゃんの思い過ごしとちゃうのかな？」

「桐斗怒ってるし…さっきだって私のこと【フェイト】じゃなくて【ハラオウン執務官】って……」

そのままブツブツと念のように呟きだした彼女。途中『桐斗に別の女の子ができたら私殺しちゃうかも』などいろいろと危険なワードが入ってきたが聴かなかったことにした。

「あのなあ、フェイトちゃん。フェイトちゃんは私からしたら凄く羨ましいんよ？」

「……………？」

彼女は首を傾げる。これのどこが羨ましいの？と言った顔だ。

「好きな人、それも旦那さんと同じ職場なんて同じ女性局員として
はこれほど羨ましいことはない。それに喧嘩は夫婦生活につき物や。
夫婦喧嘩は夫婦しかできへん。それともあれか？ たった一回の喧嘩

で別れてしまうほど二人は簡単な関係なんか？」

私の問いに彼女は静かに首を横に振る。

「さっきの桐斗君からの念話だつて任務中やからフェイトちゃんの事を【ハラウン執務官】って呼んだと私は思つんや。彼、真面目やからね。それに比べて……」

ここで私は何かを思い出したかのように額に青筋を浮かべてアイスレモンテイの入ったグラスを握りしめる。グラスにヒビが入ったのが目に入ったが気にしない。弁償しろと言つたら百個でも二百個でも弁償したるわ……経費で。

「は、はやて？」

「どっかのゲーマー提督はメールしても一向に返事をくれん。稀にある休みに食事でもどうやって誘つてみてもグラナガンのゲーセンに槍バカと出とるつて秘書の人に言われるし。メールくれた思うたら内容が『やあ、元気？』なんて短文のみ。返事を返してもそれ以降は返つてこつへん。なにが…なにが『やあ、元気？』や！こつちの気も知らんでちつたあこつちもかまつてくれてもええんとちゃうんか！アンタの恋人はゲームか！？二次元なんか！？このゲーマーが！…てかなんで槍バカと一緒にやねん！アンタら隊ちやうやるが！！もしかしてアレか！？アツチの趣味があるんか！？だつたら槍バカ共々【青い悪夢】（前作参照）飲ましたるか！？あ…あぁっ！？」

ゼエ…ゼエ…と肩で荒い息をしながら私は溜まりに溜まっていた鬱憤を吐き出した。さながら42・195キロを全力疾走ノンストップで走り抜けた気分だ。

「あ、ありがとうはやて。元気でたよ」

「そうか？なら良かったわ 私もちよっとスッキリしたし」

満足そうに頷く。

「あ、あのねはやて……」

なにやら引きつった笑顔で私を見てくるフェイトちゃん。ん？ど
うしたん？

「ゲーマーとは酷い言われようだね。それにアレを飲むのは俺もご
めんだし相馬とはそんな関係もあるはずもない。あとメールと食事
の誘いについては初耳なんだけど？」

瞬間私は固まってしまった。そしてゆっくりと後ろを振り向く。

そこには黒のスーツを身に纏った桐斗君、そして同じく黒のスー
ツを身に纏ったゲーマー提督こと第82番航行部隊総隊長兼提督で
あり元第44番隊、別名『魔導騎士の座』のNo.2

魔導弓士【天津 和弥】がそこにいた。

「え、ええええええ！？」

思わず声を上げる。なんで和弥君がここにおるん！？仕事とちゃ
うの！？

後ろではオロオロと戸惑っている親友、目の前の提督の後ろでた
め息を漏らす親友の旦那さん。

アカン……思いつきり聞かれてもた。血の気が引き顔が青くなっ
て今度は真っ赤に染まっていく。

「お、お久しぶりです。天津提督」

なんとかごまかそうと私はぎこちない動きで敬礼するのだった。

「……………」

「……………」

離れた席で私達ははやてと和弥を横目で見つつ互いに沈黙を続けている。

私は俯きながら下を見て、そんな私を無表情で見ている。
はやてに励まされはしたがやっぱり怖かった。
最悪の言葉が彼女の口からでるかもしれない。

「……………フェイ「和弥とはさつき会ったの?」」

気づけば彼の言葉を私は遮っていた。その問いに少し考えると彼は頷いく。話しによると地下に侵入してきた姿が見えない召喚獣を迎撃する際に彼が来たらしい。姿が見えなくても彼のレアスキルからは逃れることはできない。彼等の放つジャミングの影響下でも存在が知られてしまう程だ。

「あんな「このドレスどう?義母さんに選んでもらったんだ。ちなみに夕陽のは私が選んだの。今回は大人っぽく仕上げてみました」」

再び遮る。ちゃんと聞こうと思うのだが口から無意識に言葉がで

てくる。

怖い。頭の中はそれ一色だ。

「夕陽は緑が似合うけどやっぱりと同じ黒も似合う」「すまない……
フエイト」「

今度は桐斗がわたしの言葉を遮った。同時に私の中を不安が駆け
巡る。

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいや
だいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいや
だ。

「俺「桐斗がいやな所は直すから！もうわがままいわないから！
公私混同はしないから！」

彼の言葉は私の耳には入っていない。

「私が酷い事を言ったのは謝るから！！だから！……だから……別
れようなんて言わないで……」

付き合って三年。彼氏、彼女という関係と呼べないまま結婚。彼
が出所してきてやつとそれらしい関係になれると思ってたのに。

それは意図も簡単に崩れさったそれも自分の手で。私はそう思った。
視界が涙で霞む。桐斗の顔も見えない。

そんな中私の涙は拭われた。

「馬鹿なこと言うな。俺はお前に謝ろうと思ったただけだ。この前は
怒って悪かったな。それにちゃんと話そうと思っただ俺の戦いの
定義をな……」

瞬間涙が溢れ出した。
そして声を上げて泣いた。

「お、おい！！場所を考えろ！！」

慌てふためく桐斗君。

私に泣き止むように言うが正直無理です。

止まらないんです。安心して、嬉しくて。周りからの視線が集まるなか私は嬉涙を流し続けた。

事後処理の為の現場検証をしている最中私は桐斗お兄ちゃんの怒りが完全に静まっているのに気付いた。

良かった、どうやらお姉ちゃんと仲直りしたようだ。

二人の仲がもとに戻ったことにより残る問題は後一つ。

「兄が兄なら弟も弟か……」

視線の先にはなのはさんと話している智お兄ちゃん。今の彼は普段と違って顔が強張っている。それに深層で繋がっているリンクから悲しみがこちらに伝わってきているのだ。

私はため息を漏らす。あの時お兄ちゃんは思い出したのだ。

やっと振り切ったのに思い出した最悪な悪夢。こういふとき彼女がいれば無理やりにもあの兄を立ち直らせることができるだろう。

けど彼女はもういない。

いずれ私のもう一人の義姉になるだろうと思っていたあの人が、
当時14歳という若さで二等陸尉の肩書きをもちAAAランクの陸
戦魔導師。レアスキル【隠蔽された存在】を駆使し無からいきなり
現れては手に持つ双頭の蛇で標的を仕留めていたガンナー。

伊集院 恵那

次の日、私は午後の訓練が終わった後一人自主訓練をするために
あまり人の来ない林に着ていた。予定外の訓練は禁止されている。
なのに私が自主訓練を行おうとしているのは自分が周りに遅れを取
っていると感じたからだ。だからミスショットもした。私の力が
至らないから。なのはさんの教導では足りない。足りない分は自分
で補わないと……

そう思いつつ訓練を始めようと思った時私がいる位置から更に奥
の方から音が聞こえてきた。その方へとゆっくり歩いていく。音が
次第に大きくなるにつれて自分がその場所に近づいていることがわ
かった。

「……………」

たどり着いた先は私の視界に広がる空き地だった。

その空間を埋め尽くすように展開された自動攻撃用のオートスフ
ィアがありその中心でひたすら銃を放つ執務官の姿があった。彼
は周りが放つ様々な種類の弾丸に的確な弾を当てて相殺。外殻を纏

つて突っ込んでくる奴にはウロボロスから伸びる明灰の魔力刀で弾き返している。

それも私かなのはさんとやっているような速さではない。異常な速さ。50機の自動機銃を相手にしているような感じだ。

「……………どこが自分より才能があるよ」

小さく呟く。唇を噛み締めて彼を睨みつける。

目の前にいるのは明らかに人を超越した天才。いや彼等兄弟は正に天才だ。

彼等がいるのになぜ自分を引き抜いたのか。兄を下馬されたことの同情？それとも書類上での審査？

ま、どうでもいいことよね。

そのまま私はその光景を見つめていた。
すると

「誰ですか？」

智執務官は私の視線に気付いたようどこちらに銃を向けてきた。別に隠れている理由もないので私は陰から彼の前に出る。

「こんな所になにをしにきたんですか？」

「そっちこそ何をしてるんですか？」

問に問いで返した私に対して彼はため息をつく銃を下ろす。

「鍛錬ですよ。時間があるとこつとして自主鍛錬しているんです。」

そう言つと私に背を向けて再びデバイスを構える。

「……………私に戦い方を教えてくれませんか？」

「高町教導官の指導では不服だと？」

「なのはさんの教導に不満があるんじゃないんです。不満があるのは私自身。もう、あんな思いはしたくないから……」

脳裏によぎる親友を撃ち抜きそうになったあの光景が浮かび上がる。

あんな思いはもうたくさんだ。だから自身の強引な底上げをした。そう思い目の前に立つ若き執務官の背中を見つめる。

「………分かりました。けど教えを付けるのはこの時間帯だけです。」

「わかりました………」

そして私の特訓は始まった。

FILE 16 (後書き)

感想お待ちします

FILE 17 (前書き)

本日更新

「それじゃ、緊急対策会議を始めよか」

薄暗い会議室に私達隊長陣の姿があった。智と夕陽から緊急対策会議の申請があり、深夜私達は集まったのだ。

内容は二人以外皆知らない。だが二人の面持ちからそれが深刻なモノだということが分かった。

「今回、私達が対策会議を申請したのはジェイル・スカリエッティに私達と同じ存在が付いていることが分かったからです。」

夕陽と智以外の全員が目を見開く。

私もそうだ。桐斗達と同じ存在がこの世界に来たのだ。それも敵側に。

「智、そいつは誰だ？」

「【鏡盾】です」

桐斗の問いに智は静かに答える。

「桐斗と智はソイツのことしってるのか？」

「正式名称アルハザード守護部隊【パルンティノガーディアン】第五席 第四防衛線守護者筆頭シリーズ【エンゲージ】第13作品【鏡盾】 ラス・ミフォール・エンゲージ。シリーズ【エンゲージ】中最高傑作と言われた最高の盾だ」

「ちなみにその人物の戦闘能力は？」

シグナムが問う。

「リミッター無しの智でも勝負にならない。俺もリミッター付では勝てないな。あの人の能力は反射性の障壁展開。魔法、物理関係無しに威力を上乗せして返してくる。分かりにくいなら管理局に健在する全てのアルカンシェル一斉掃射を防ぎきり反射してくるでも思ってくれ」

ウソ…そんな事ができる人間が敵についたの？

「それで対策としてはなにがあるん？」

はやてが二人に問う。私も隣に座る桐斗を横目に対策として何があるのか考える。

「まず、アイツと戦闘になりそうになったらすぐに逃げることだな。盾と言ってもその盾を武器として使ってくる」

「まあ彼自身、逃げる敵に手はだしません。」

「やっぱり逃げる…か。」

「けど逃げるに逃げれない状況だったら？」

「通信で兄さんと呼んでください。座標と陰があれば直ぐに援護に来てくれます。」

「それにしても二人ともその人に詳しいな」

「まあ、昔の部下で俺達の先輩的な人立ったからな」

「もしこれでゼリア姐さんまで来てたら目も当てられませんね」

「アイツの性格でそんな事があるわけないだろ？」

なにやら兄弟で話してますが。先輩と聞いて私達は気まずい空気になる。とここで私はあることに気付いた。

「智？ ゼリアって誰かな？」

久しぶりにちょっとダークになった私は面妖な笑みで弟を見る。すると彼は慌てて口を抑えた。

「はあ、ゼリアは正式名称守護者第四席シリーズ【エルツール】第2作品【雷鎚】ゼリア・ヴォル・エルツール。たあの幼なじみだ。アイツは間違ってもスカリエツィの側には着かない」

「そ、それに兄さんとは幼なじみってだけで何にもありませんよ？
……………全部スルーされてましたし」

「で、どうしたフェイト」

「うっん。なんでもないよ？」

なにやら智が言ってますがとりあえず桐斗とは後で話し合う必要があるようですね

「大元の対策なんだが俺が上にリミッター解除の権限を掛け合ってくる。できるだけこちらに有利な条件でな」

「うっん…できるかなあ？ 本局はまだしもレジアス中将がなあ」

はやてが頭に手を当て唸る。そう、承認を得るには地上本部のトップであるレジアス中将の承認を受けなければいけないのだ。

「あ、レジアス中将には私が地上に転属するつてのを交渉材料にしてくれていいよ」

「……………え？」

私達は同時に夕陽を見る。

夕陽…それ…どうということ？

「ヒッ！ あ、あのね…前から地上に来ないか？つて言われてたの…」

「夕陽はお姉ちゃんと離れたいの！？」

涙ぐんだ私は夕陽に詰め寄る。彼女は慌てて首を横に振る。

「ち、違うの！ 地上は人員不足でしょ？ 本局にはお兄ちゃん達がいるし、私が地上に行けば少しだけでも人員不足が補えてミッドの人達を守るから」

私は気付いた。私は自分のエゴで妹を引き止めようとしていた。けど彼女は自分の考えで決めて一般人の事を思つての答えなのだという事。

「わかった…夕陽が決めた事だもんね。お姉ちゃんからはなんにも言わないよ」

「そうですね。クロノさんやリンディさん達は僕が説得しましょう」

「ならば俺はその他提督クラス連中を説得するか。霧咲家家訓その
6」

「……家族の選んだ道は家族で支えよ」「……」

揃い家訓を述べた後、私達は揃って笑う。

「ハイ、なら決定やな。それまではいままでどつりっちゅう事で」

こうして会議は終わった。

そして会議が終わり私は桐斗と共に彼の部屋にいる。

「ラスって人は桐斗達の先輩なんだよね？その人と戦う事になるとして桐斗はなんとも思わないの？」

私は聞いてみた。

「なんとも思わないと言われれば嘘になるな。だが、あの人も考
えがあつてアツチに付いている。幸いなのはあの人、【鏡盾】の目
的が俺達の破壊じゃないって所だ。だったら極力説得してみるさ。」

ベッドに横になりながら返してくる彼。

「一つ聞きたいことがある。」

「なに？」

私は首を傾げる。

「智の様子がおかしいんだがなにがあった？報告ではランスターのミスショットを智が受け止めたとしか聞いてないんだが？」

それを聞いて私は少し考える。そして一つの結論に行き着いた。

「恵那のこと覚えてる？」

私はゆっくりと喋りだした。

今日もいつも通り私、高町なのははフォードメンバーとの訓練に入る。

最近4人とも力をつけてきたのでそれがとても嬉しく。ミスショットを犯したティアナもその事を引きずってはいないように見えた。

けど今の私は疑問に駆られている。

昨日からティアナの戦闘スキルが一変していたのだ。

幾つか例を上げてみよう。

彼女はある程度離れた標的に対してはシングルモードで狙い撃つようにしていた。けど今はダブルハンド、二丁拳銃の状態のまま更に言うと驚く程の早撃ちをしていた。

次に自分に迫る魔力弾を瞬時に識別して撃ち抜く訓練。

それも簡単にクリア。むしろ球数を増やして欲しいと言ってきた。

この時私はあることに気付いた。彼女の弾丸はある一定のリズムで撃ち出されている事に。

トン、トトトン、トツ、トン、トトトン、トツ、トン、トトトン、トツ、トン、トトトン、トツ……。

目を閉じてそのリズムを感じ取る。

このリズム……どこかで……。

そして更に疑問に思ったことがある。ティアナが智と話しているのだ。彼女はフェイントにたまにだが笑顔も見受けられた。

話している内容はガンナーとしての技術的なモノだろう。

そういえば今のティアナ動きどことなく智に似ているような……。

「……………気のせいだよね」

私は自己完結させると再びティアナに指示をだすのだった。

「では、ティアナさんこれまでのおさらいをしましょうか」

訓練の最中私は霧咲隊長補の指導の下、なのはさんとは違う教えを受けていた。現在なのはさんはスバル達の方にまわってもらっている。隊長補が事前に申請してくれたおかげで最初なのはさんの確認を受けた後、残りを彼が教導してくれる事になったのだ。

「まずティアナさんに僕のスタイルをお教えするのはティアナがBランクを完全に逸脱した射撃能力、魔法、洞察力、判断力等をお持ちだからです。ハッキリ言ってあなたはフォードメンバーの中で一番突出しています。だから自分が一番遅れているなんて思わないでください。マイナス思考でこのスタイルはできません」

「……は、ハイ」

あの日と同じ事を言われて私は必死に赤面しようとする表情を抑える。

「それじゃあコレを」

渡されたのは耳に付けるタイプの小型音楽プレイヤー。

私はそれを耳に付け、再生ボタンを押す。耳の鼓膜を通して頭の中に響く音楽達。

瞳を閉じて私は耳を傾ける。紡がれる一つ一つの音色達、それに合わせてゆっくりと四肢を重心を動かし踊る。最初はゆっくりとしたリズムなのでゆっくりと動く。そしてそれが早くなるに連れて動きも早くなっていく。

「動きとは一つ一つのリズムになっています。それを肌で耳で感じてください」

そういえば音楽を聴くことなんてなかった自分。この音楽を聴きながら踊るといふ訓練が楽しいと感じている自分がいる。

嫌な事を忘れて次第に笑顔になっている自分がいる。そう思った。

気付けば隣では隊長補が私に手を差し出していた。私は迷う事なくその手を取り共に踊る。互いのリズムを感じ取り、それに合わせ

て

。

FILE 17 (後書き)

感想お待ちします

FILE18 (前書き)

更新です

「以上が私から申し上げる敵の脅威。それに対抗するための私達兄弟のリミッター解除とその理由です。」

薄暗い会議室。そこには普段の管理局では有り得ない光景が広がっていた。

伝説の三提督を始めとしてクロノ・ハラウン、リンディ・ハラウン、レティ・ロウラン、神田相馬提督並び天津和弥提督含む元44番隊『魔導騎士の座』のメンバー9人。聖王教会からカリム・グラシア。その他最低三佐以上最高大将クラスの人間がこの一室に集まっている。

その中にはもちろん八神の姿もある。

俺達3人がアルハザードより来たロストロギアだということは八神や六課の隊長陣や一部を含め少将以上の人間しか知らない。まず俺は自分の素性を全員に話す。

次に自分達と同じ存在が敵に付いた事を知らせた。そしてその対策として自分達3人のリミッター解除の自由化。

これがこちらの最低条件だ。
だが

「ふんっ、馬鹿馬鹿しい。相手は一人なのだろう？ならば数で攻めればいくらロストロギアでも恐れることはない。」

声の主は陸の守護者と呼ばれる男。レジアス・ゲイズ中将。

彼の言葉を聞いて八神が眉をしかめて立ち上がった。

「お言葉ですが中将。相手側に付いたのは霧咲智執務官と以上の戦

闘能力の持ち主とのこと。あまり甘く考えない方がよろしいのでは？」

「それでも一体た。心配の必要はないではないか」

その言葉に陸の将校達は同時に頷く。だが一人だけは違った。

「いや、そうとも言い切れませんよ中将」

立ち上がったのは108部隊隊長ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。

「実はウチの隊全員彼の弟君に模擬戦で瞬殺されてね。ウチの娘も手合わせしたんですが能力も使わずに倒されたとのこと。私としては今回の議題は無視できないモノですね」

「七年前私と神田提督もアルハザードより来た兵器の一つに敗北をしています」

「く……」

ゲイズ中將は苦虫を噛み潰したような表情になる。そして発言したナカジマ三佐、和弥に対して「それは責様や隊の人間が不甲斐ないからだろう！」などと罵声を吐いている。

そんな時俺の上司が口を開いた。

「レジアス中將。そんなに納得できないなら一度試してみればどうだい？」

その人物はミゼット・クローベル。俺に一佐就任を言い渡した三提督の一人だ。

「他の皆も信じられない奴は試してみるといいさ。構わないかい？
キリサキ・ハラオウン一佐」

アイコンタクトでなにかを伝えてくる。それを見て俺は直ぐに理解した。

「構いませんよ。言っちゃ悪いですが管理局の魔導師などいくら束になった所で私の敵ではありません」

「き、桐斗君!？」

視界の隅で八神の顔が青くなっているのがわかった。

さらには離れた席で義母のリンディさん、義兄のクロノ、ついでに六課最大の後ろ盾カリム・グラシアまでもが顔を青くしていた。ちなみに相馬と和弥は必死に笑いをこらえている。周りの将校達の顔も怒りに顔が赤くなっている。どうやら俺の言葉がカンに触ったらしい。

「そこまで言うなら試させてもらおうではないか!！」

そして俺対時空管理局主力軍隊との模擬戦という名の交渉が決まった。

「……………まだ終わらないのかな」

只今私は地上本部のロビーで会議中の親友と夫を待っています。今回の会議は三佐以上の将校のみが出席する会議なので執務官であり一等空尉の私は参加することができません。ちなみにかれこれ二時間はここで待っています。

海の間である私が一人ここで待っているのはちよつと恥ずかしいです。周りの視線が痛いです。

やっぱり海と地上は仲が悪いからなんでしょうか？（多分違います）さつきから周りに男性局員の方々が集まりだしています。

うう……。早く帰ってきてよ……。思わず涙目になったところで私は周囲の異変に気付いた。周りの局員がある方向を向き皆敬礼しているのだ。その視線を辿っていくと。

「……………へ？」

来るわ来るわのお偉い様方。全員が将校クラス。大将を先頭に三提督、中将、少将、提督、一佐、二佐、三佐と異例の光景。地上だけではない。陸、海、空と揃っているのだ。その中にはもちろん桐斗とはやての姿もあった。

あまりの光景に私は思わず呆けていたが直ぐに周りに合わせて敬礼をする。

なんですか？この大名行列は？

『フェイトちゃん大変や……………』

こちらに気付いたのであろうはやてが念話を繋げてくる。一体どうしたのだろうか？

心の中で首を傾げながら理由を尋ねるとなんと全部隊の選抜メンバー対桐斗という無茶苦茶な模擬戦を行うとのこと

その選抜部隊の中には和弥や相馬、クロノの名前もあり大将も出るのか。

幸い六課に出向しているエースメンバーやヴォルケンリッターは選抜されなかった。だが私は言いたい。なんでこんな事になってるの!?

後に桐斗が喧嘩をふっかけたという話を義兄から聞いて一晩彼と口喧嘩したのは別の話。そしてこの模擬戦で桐斗が思いもよらない人物と再開する事になる。

翌日、私は管理局で訓練用と称される管理外世界に足を運んでいった。

文明が全く発展しておらず無害ながらも魔力を持った生物の楽園は管理局の訓練用としてもってこいの場

名称を第58管理外世界、通称【アガレスト】。

それでなんで私がここにいるのかというと。それは今日管理局選抜軍隊との模擬戦を行う夫の応援の為です。

彼はどうか分かりませんが私は気合い十分。なんですが…。

「皆何処に行ったんだろ？」

私は一人人ごみの中を歩いています。さっきまで一緒にいたのにちょっと目を離したらすぐにこれです。もう、いい歳して迷子とは。

「すまない。少しいいか？」

少しだけご機嫌斜めで頬を膨らませせいる私に話しかけて来たのは黒い髪に青い瞳の女性。あまりの綺麗さに思わず見とれたが彼女の着ている将校の制服を見て直ぐに姿勢を正し敬礼する。それに対して楽にしていといわれ敬礼を解く。

「君は機動六課の人間だったな。」

「ハイ。機動六課ライティング分隊長フェイト・T・ハラオウン執務官であります」

「そちらに出向しているキリサキ・ハラオウン一佐について聞いたのだが」

桐斗について？私は首を傾げて考える。なんなのだろうか？とりあえず目の前に立つ女性を見る。

……美人。若い。見た目からしてキャリアウーマンって感じた。

なぜだかわからないが妙に危機感を覚えて更に敵対心が湧いてきた。

「夫の何が聞きたいのでしょうか？」

「夫？」

私の口調が冷たくなり。女性の眉間がつり上がる。今の私には相手が上官だろうが関係がないのだ。

「ええ、キリト・K・ハラオウンは私、フェイト・T・ハラオウン

の夫ですが？」

「……まあいい」

何かを考えた後に彼女はゆっくりと目を閉じて私に聞いた。

「報告書には彼はロストログリア【陰陽の剣】とあるがそれは事実か？それと弟と妹もだ。」

「……全て事実です」

それを聞いて彼女は納得したように頷くと殺気めいた笑顔で私を見た。この時背筋に悪寒が走ったのは良く覚えている。

「質問に答えてくれてありがとう。礼に君の席を用意しよう。最前列の特等席だ。なに遠慮はいらない」

そう言っただけで彼女は近くの局員を呼び止めると私を席にまで案内させた。

私はというと彼女の態度がどことなくムカついたのでそのまま案内されることにした。

「……何処にいった」

その頃俺はというと一緒に行動していたであろうフェイトがいき

なり姿を消したので義兄のクロノ、義母のリンディに断りを入れて彼女を探しに出ていた。

「キリト!」

呼ばれて振り返る。そこにはハラウン家の方々がいた。

「キリトくん。フェイトは見つかったかしら？」

「いえ、まだ。すみません。俺が目を離したばかりに」

頭を下げる俺に義姉のエイミイが笑いながらそれを制した。

「キリト君は悪くないよ。あの子が天然なだけ。今頃迷子だと気付いて私達を探してるんじゃない？」

「いや、俺達が迷子だと思ってるはずですよ。確実に」

アイツはたまには自分に都合がいいように自己改竄するからな。さてどうするか。こういうときは和弥と相馬がいてくれると助かるんだか。

「!?!??」

そんな事を考えているときに突如背筋に走った悪寒。

俺は周囲を見渡しそれが誰かを探す。感じたのは殺気だが殺気の主はもう姿を消したらしくそれらしい人物は見当たらない。

この感覚はアイツではない。もっと懐かしい感じた。

忘れかけていたそれは心の底でその存在を訴えかける。

俺はコイツをしっている。誰だ？

「どうしたの？」

「いえ……。妙な視線を感じたもので。」

「妙な視線？」

クロノの表情が険しくなった。

「けど、気のせいでしょう。昨日はフェイトが寝させてくれなかったので少し感覚が狂っているのだと思います」

その答えに俺を除く全員がポカンとした表情になる。

それに気付かない俺は時間になった事を確認すると一人輪から抜けて会場へと歩いていった。

「……………」

只今私霧咲　夕陽は物凄く不機嫌です。

何故かというと最近智お兄ちゃんが私にかまってくれないのあります。今日桐斗お兄ちゃんの応援に行くのをはやてさんに禁止させられたからです。

お姉ちゃんは応援に行ったのになんで私は行ってはいけないので

しょうか？

不公平です！差別です！

「あの、夕陽さん……」

エリオ君が気まずそうに私に話し掛ける。

「あ、ごめんね。それじゃ今朝はこの辺にしとこうか？」

今朝、私が担当していたのはエリオ君。槍型のデバイス所有者が六課にはいないためデバイス形状的に近いセレスティアを持つ私がお姉ちゃんの代わりをしているのだ。

「ハイ。ありがとうございます。けど夕陽さんのセレスティアってハルバート形状なのに戦闘スタイルを変えて槍型のように扱えるなんて凄いですね」

尊敬の眼差しを向けてくる少年に私は苦笑する。

「そんなことないよ。所詮見よう見まねの付け焼き刃だし本職にはかなわないよ。あ、今度相馬さんがエリオ君の為に一日だけ来てっ
て話しだから」

「相馬さん？」

首を傾げるエリオ君。そんな彼に私は説明する。

神田相馬提督。元44番隊所属の魔導槍騎士。生粋の槍使いの彼は現在若き提督として第96番艦隊の総隊長をしている。

「なのはさんが頼んだら快くOKしてくれたそうだよ」

「そ、そんな。僕なんかの為に」

焦っている二つほど年下の少年を見て私は笑顔になる。

「家にある鉄の家訓なんだけど『人からの好意は無下にしない』つてのがあってね？エリオ君ぐらいの子は黙ってそういう好意は受け取っておくものだよ」？

「ハイ!!」

元気よく返事をする彼に満足そうに頷く私。そんなとき視界の端で智お兄ちゃんに指導を受けているティアナさんの姿が目に入った。この時私は呆然と彼女を見ている。

彼女の動きがある人にダブったのだ。最小限の動きで踊るように銃を放つその姿は兄のソレではない。兄の恋人だった人のモノだ。

「なんであの人がああの動きを知ってるの？」

私の口調が冷たくなる。

「最近ティアナさん。智さんに指導をお願いしているようですよ？」

ソレを聞いて私は悟った。お兄ちゃんが私にかまってくれない理由はティアナさんを隠れて指導しているからだ。

けどそんなことはどうだっていい。なんでお兄ちゃんがあの動きを他人を教えるのが解らなかった。私のもうひとりの姉的存在だった伊集院 恵那の動きをだ。

兄の見よう見まねで真似たのか？

だったらそれは彼女に対する冒瀆だ。あの動きは本人以外で兄のみが赦される。

「夕陽さん？」

「なんでもない。そろそろなのはさんと合流するよ。」

エリオ君に対して冷たい口調のまま私は返事をするとそのままなのはさんの所へと合流しに行った。

FILE 18 (後書き)

感想お待ちします

FILE19 (前書き)

更に更新です

「それじゃ、最後に2on1をやるうか？」

合流した後になのはさんの指示の下、朝の訓練最後のメニューに入った。

フォアードメンバーが返事をする中。私はティアナさんを睨んでいた。

智お兄ちゃんは別件でティアナさんの指導が終わると同時にどこかに行ってしまうている。

「それじゃ先ずはスターズから。」

ティアナさんとスバルさんが位置に付く。そしてシャーリーさんの掛け声でスタートした。

「スバル!!」

「了解!!」

私の指示で先ずはスバルが先陣を切る。彼女が駆け出したと共に

私はカートリッジを二発ロード。それを前奏に周囲のリズムを感じ取り踊り出す。

『スバル！そのままっすぐ突っ込んで！！』

「クロスファイア……シュート！！」

放つのは六つの魔力弾。更に続いてマルチショットで四発を速撃ち、計十発をなのはさんに向ける。誘導弾六つはなのはさんの周囲から、マルチショットで放った四発はスバルの顔と脇下から襲いかかる。

なのはさんは歴戦の戦士だ。この程度で落ちるはずがない。彼女は直ぐにアクセルシューターを7発放つ。私は彼女を中心とし反時計回りにリズムを合わせ走り出す。そして直撃の直前にフィギュアスケートのアクセルジャンプのように跳ぶ。宙で回転する私の手にはダガーモードのクロスミラージユ、それで魔力弾を全て叩き斬る。着地した瞬間も私は踊るように回転、再びなのはさん目掛けてクロスファイアを放つ、それに周りの目が取られた隙に

「クロスミラージユ。フェイクシルエット。こことあのビルの屋上
をお願い、それともう一つ……」

次に指示したビルの屋上に幻影を作るモーションは砲撃魔法とクロスファイアでいいだろう。

『いくわよスバル！！特訓の成果クロスシフトC！！』

なのはさんとスバルの二人がぶつかり合っている所。ギャラリィでは完全に一変した私のスタイルに戸惑いの声が上がっていて皆、

フェイクシルエットに目が行っている。

「ファントム!!」

そしてなのはさんの後ろから溶け出すように姿を現した私。私の持つ幻影魔法の一つオプティックバイトだ。フェイクシルエットは二体共闘、周囲も敵も幻影で惑わし夢から現れ切り裂く。

これが“彼”から教えてくれた私の切り札。

気合いと共に魔力刀を振りかぶる。この時、なのはさんの顔が驚愕に染まる。

「ワル」

突然背筋に悪寒が走った。

『捕らえる。我が僕達』

そして恐ろしいモノが私に襲いかかった。

「え?」

いきなり腹部に走る衝撃。私はなのはさんから引き離されてビルに叩きつけられた。そしてビルに貼り付けるように何か私を縛り上げる。

私に巻き付いたのは棘。ソレを見たなのはさんの驚きの表情が目に入る。私はというとなにがなんだかわからなくなっていた。

リミッター強制破棄完了

コード確認

【森の雫】 起動開始

硝子の割れるような音と女の子の声と共に訓練スペースに溢れだす膨大な魔力。深緑の魔力が作り出す魔力の濁流は肉眼で捉えられる程の異常さだ。

「夕陽止める!!」

「夕陽!!」

シグナム副隊長となのはさんの声を聞こえて私は空を見上げる。そこには冷たい表情のスターズ副隊長補佐の姿があった。そして同時に気付く。さっきの一撃は彼女から受けたモノだ。更にこの異常なまでに膨大な魔力は彼女から溢れ出していた。

他の彼女の周りにいる。隊長陣は魔力の奔流に近付けないでいた。

「……………」

そんな隊長陣には目もくれずに夕陽執務官は右手を上にかざす。
同時に彼女の真下から広がる見たことのない魔法陣。それはこの
訓練スペースを飲み込んでいく。

「……………」

そして私は薄れゆく意識の中信じられない光景を見た。

地から溢れ出す木々。それは瞬く間にフィールドを森のへと作り
替えた。

私は夢でも見ているのだろうか。

少女の後ろに作り出される木の槍を見ながら思った。

遠くで私の名前を叫ぶ親友の声が聞こえる。『逃げてティア』と。
煩いわね。そうしたいけどコレほどけないのよ。あと今にも気絶し
そうだし。

こころの中で悪態をつくが意味はなく。自分に向かって襲いかか
ってきた木々を見て私は意識を手放そうとした。

能力限定強制解除

解除完了

コード入力

コード承認

パルンティノガーディアン第九席【ゴルゴン】起動

だが一人の少年の声で私は現実に取り戻された。

これが私が教えを乞い、そして妬んだ少年の本当の姿を知った瞬間だった。

目の前に降り立った少年は私に迫ってきていた木の槍の一本を受け止めている。その光景を見て驚いている深緑の女王。

「……………奪え」

少年が呟く。同時に石となっていく木の槍。

「お兄ちゃん退いて!!」

深緑の女王の名を冠する少女が怒声を上げる。だが少年はそれを無視してゆっくりと瞳を閉じていく。

「マズイ!! 全員智の視界から退避しろ!!」

「っ!!???」

シグナムさんの声で隊長陣はフォアドメンバーを抱えて訓練フィールドから退避する。彼が私達の前に飛ぶ少女は自分の眼前に木々を集めて盾を作る。

「奪え…なにもかも……」

ゆっくりと目を見開く少年。一瞬彼の眼前に夕陽が展開したものと同じ魔方陣が展開され次の瞬間私達の前に広がる緑の世界が命を奪われ石となり灰色の世界と変わり果てた。

「……………」

目を開ければそこは六課の医務室だった。またここに来ちゃったと内心自分にあきれながら私は身体を起こす。

「あら、気が付いたのねティアナちゃん」

声の主は機動六課所属医務官シャマル。私は一体どうしたのかと彼女に聞いてみた。

「リミッターを壊した智君と夕陽ちゃんの強すぎる魔力に当てられて気を失ったの」

私はあの時の光景を思い出す。訓練スペースを軽々と呑み込んだ深緑と明灰の魔力。大気を揺るがしたアレはとてつもない年の少年と12の少女が持てる魔力量とは思えなかった。

不意に目の奥が熱くなる。一人になりたい。そう思った。

「すみません。席を外して貰えますか……少し一人にしてください」

「え、でも……」

私は繰り返す。

「お願い……します……」

そんな私に彼女は頷くと一人医務室を出て行った。スライド式の扉が閉じるのを確認すると私は一人声を上げて泣いた。

悔しい。いくら実力のある人間の技術を貰っても、教えを裏切つて独自の戦法を組んでも才能の前にはやはり意味を成さなかった。分かつてはいたが実際にこうまで叩き潰されてしまうととても悔しい。きつと任務からも外される。命令に従わない人間は必要ないから。私のプライドはズタズタ。涙が止まらない。

「五月蠅いですよティアナさん……」

そんな中、少女の声が私の耳に入った。

声はカーテンの仕切りの置くから聞こえた。ゆっくりとカーテンを開くとそこにはベッドの上で横になる同い年の少年。そしてその少年を看病している少女がいた。

少年の目には包帯が巻かれていた。思わず息を飲む。彼の身に何があったのだろうか。けどそんなことよりも私は知りたい事があった。

「貴方達、一体何者なの？植物を操ったり物石に変えたり。」

その問いに彼女は小さな笑みを浮かべ「知りたいですか？」と聞き返してきた。何故か背筋に悪寒を感じつつも私はゆっくりと頷く。

「本当は小将クラス以上を含め一部しか知らない機密情報なんですけどティアナさんはもう私達のチカラを見えていますから教えますね」

私達ロストロギアなんです。

FILE 19 (後書き)

感想お待ちします

FILE20(前書き)

更に更新!

………は？

私は目を丸くして少女を、霧咲夕陽を見る。何を言っているのだ？ロストロギア？彼女が？彼が？一佐が？ロストロギアとは過去に流出した現在では再現出来ない技術だ。

それをあたかも「あ、私高校生」とか「一人っ子」みたいに簡単に言つてのける彼女の意外な答えに私の頭の中は真っ白になる。そんな私を見ながら彼女は笑みを浮かべたまま続ける。

「私達は伝説やおとぎ話と呼ばれていた超高度文明アルハガードから第97管理外世界の時間軸、世界にやってきた技術。桐斗お兄ちゃん【陰陽の剣】智お兄ちゃんは【ゴルゴン】そして私は【森の雫】。信じられないって顔してますね。けど不思議に思いませんでした？桐斗お兄ちゃんのレアスキル。智お兄ちゃんの魔力変換資質」

そして極めつけはあの時の光景。

馬鹿げている話だ。ロストロギアを取り締まる機動六課にロストロギアが働いているなんて。それにおとぎ話と思われていたアルハガードの存在にも驚いた。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして後お兄ちゃんにお礼を言つてあげて下さい。実は私あの時ティアナさんを殺そうとしたんです。」

兄の顔を寂しそうに見つめる少女。

私は無意識に警戒した。

「けどお兄ちゃんに止められました。本人が使いたがらないチカラを【ゴルゴン】と言う名の石化の魔眼と魔手を使って…。」

『奪え…なにもかも……』

兄が瞳を閉じると同時にシグナムさんの声が訓練スペースに響く。私も咄嗟に自身の前に盾を作るように木々を集める。そして見開かれた石化の魔眼。

私の支配下である木々は全て自由、時、命を奪われ石と化す。

この時だ。私の頭の中で煮えたぎっていた血が急速に冷えたのは。

「夕陽……【霧咲家家訓その七】」

石と成り果てた木々の盾の反対側から兄の声が聞こえる。同時に私は背筋に悪寒が走るのを感じた。

【霧咲家家訓その七】

身内の愚行には制裁を

次の瞬間目の前の盾が突き破られ私は一撃で意識を刈り取られた。

「お兄ちゃん目の包帯は魔眼の後遺症による一時的な失明を起こしているからです。あ、安心してください。私はもうティアナさんを殺そうなんてしませんから。キツイ制裁もつけましたし。」

目の前の女の子は痣になったお腹を見せてチロツと舌を見せる。彼女から敵意を感じない私は警戒を解くと彼女に聞いた。

「なんで私を殺そうとしたの？」

「ティアナさんが使ってたあの動きがお兄ちゃん以外に使われる事が許せなかったんです。伊集院恵那って知ってますよね？」

私は頷く。もちろん知っている。三年程前に立て籠り事件に捲き込まれた私とスバルを助けてくれた一人だ。

12歳にして三等陸尉の肩書きを持つ女性。自分と同じガンナーだ。最近彼女の噂をめつきり聞かなくなった。なにかあったのだろうか？

「お兄ちゃん目の包帯は魔眼の後遺症による一時的な失明を起こしているからです。あ、安心してください。私はもうティアナさんを殺そうなんてしませんから。キツイ制裁もつけましたし。」

目の前の女の子は痣になったお腹を見せてチロツと舌を見せる。彼女から敵意を感じない私は警戒を解くと彼女に聞いた。

「なんで私を殺そうとしたの？」

「ティアナさんが使ってたあの動きがお兄ちゃん以外に使われる事が許せなかったんです。伊集院恵那って知ってますよね？」

私は頷く。もちろん知っている。三年程前に立て籠り事件に捲き込まれた私とスバルを助けてくれた一人だ。

12歳にして三等陸慰の肩書きを持つ女性。自分と同じガンナーだ。最近彼女の噂をめっきり聞かなくなった。なにかあったのだろうか？

「彼女のデバイスをなんでお兄ちゃんが持っていると思います？」

それは私も気になっていた。

何故この少年が彼女のデバイスを持っているのか？引退？違う、まさか……。

「もしかして……」

「ハイ。彼女は……私のもう一人の姉的存在でお兄ちゃんの恋人だった伊集院恵那はもうこの世にはいません。」

「……夕陽。」

その声に私と少女はベッドに横になっている少年を見る。

「お兄ちゃん……起きてたんだ……」

少年はゆっくりと身体を起こす。

「夕陽が怒っていたのはそういうことだったんですね。」

彼はゆっくりと自身の妹の方を向く。そして

「歯、喰いしばれ……」

「！！！！！」

次の瞬間彼の左腕は振りかぶられ石如き拳が妹の右頬に叩き込まれた。殴り飛ばされた少女は凄まじい勢いで壁に叩きつけられて轟音と共に壁を陥没させ床に崩れ落ちる。

「ちよつと！なにやって……ッ!？」

私は彼を取り押さえる。その際、目の包帯が外れた。

その時私は息を飲んだ。彼の目に光はなく。真っ黒に染まっていた。そしてそこから滴り落ちる黒い血液。それは彼の悲しみのようにおもえた。

「……………八つ当たりも大概にしる。お前がやるうとしたことは恵那が望んだことか？」

「……………違い…ます。恵那姉さん…はこんなこと望んでません……」

ゆっくりと身体を起こす少女。

部屋の外が騒がしくなってきた。今の音で人が集まろうとしているのだろう。

だが二人はそんなことに気も止めていない。私はベッドから出ると制服を着替えて立ち上がり出口へと向かう。

「けど……お兄ちゃんは悲しくなかったの？他人に姉さんの動きを教えてなんにもおもわなかったの？」

「……恵那からの遺言だ。『役に立たないかもしれないけど私の技術で他の人が夢に近づけるなら手助けしてあげて。あと夕陽にごめんねって伝えてくれるかな。お姉さんになれなくてごめんねって』
彼女は石になる間にそう言い残した。」

その言葉に私は動きを止める。

「最初は俺も躊躇したさ。他の人間に彼女の技術を使わせて良いのかって。」

この時私はとても重いモノに手を出した事を理解した。
そして決めた。

「けど、夢で恵那に怒られたよ。『あんたは黙って私の命令に従ってればいいのよ』ってね」

私は私の夢を確実に実現させる。彼女の為にもそして私の為にも。

副長補が兄に抱きつき泣いてる時私は邪魔してはいけないと思い

医務室を出る。遠くからなのはさん達が走ってくるのが見えた。私は彼女達の前に立ち塞がり。両手を広げる。

多分本日二度目の命令違反をしてしまうかもしれない。だが別に気負いしないので今は仕方なしとしますか。

「一体何事だ!！」

目の前に揃っているのは六課前線メンバー。一番前に出て来たのはライトニング副隊長シグナム。

「今は医務室に入ることは遠慮してください。」

「何を訳の分からない事を言っている!今の音はなんだ!?命令だそこを退け!！」

凄みを効かせて迫ってくるシグナム副隊長。私は無言でソレを見据える。後ろでなのはさん達が彼女を止めようとした時医務室のドアが開いた。

「何事ですかシグナム副隊長」

そこから姿を見せたのは霧咲隊長補。六課の制服を身に纏い。口調も元に戻って再び目に包帯を巻いた彼は妹に支えられながら医務室から出てきた。

「智今の音はなに?あと目の方は大丈夫?」

「なんでもありません。それより……」

彼は目の包帯に手を掛けてそれを引きちぎる。

「現在残っているロングアーチ、スターズ、ライトニングを全員モニタールームに集めて下さい。キリサキ・ハラオウン・佐から連絡が入りました。『始まる』と」

《機動六課モニタールーム》

智に言われて私は六課前線メンバーをモニタールームに集めた。理由はもちろんアルハザードより流出した兵器の性能を一度フォアドメンバーに見せておくためだ。そうだとしても彼の本気の戦闘を私はまだ見たことがない。親友であり彼の奥さんであるフェイトちゃんは彼のリミッター無しは7年ぶりといっていた。

『皆、揃つとるみたいやな』

モニターが開いて姿を見せたのは機動六課課長、八神はやて。いつもの六課の制服ではなく。地上の将校の制服を身に纏っていた。

『隊長陣と以前アースラに乗艦しottaたモンは知つとると思うけどフォアドメンバーや7年前の事件を知らん人間はこの機会に置いて置いてほしい。』

「あの、八神部隊長。これから一体なにが始まるんですか？」

スバルが手を挙げて質問をする。はやてちゃんが応えようとしたとき彼女の前にある人物が割って入った。

『僕達が説明しよう』

FILE20(後書き)

感想お待ちします

FILE 21 (前書き)

本日更新!

モニター越しにはやてちゃんの横に出てきたのはクロノ君ことクロノ・ハラオウン提督。

「ハア〜イ 皆元気？」

更には彼の母親リンディ・ハラオウン提督までもが姿を現した。

『これから始まるのは模擬戦と言う名の交渉。桐斗さんが智さんと夕陽さんのリミッター解除の自由化を掛けて管理局の選抜軍と戦うの』

「……軍って大体何人位ですか？」

キャロが首を傾げながら訊ねる。

『管理局選抜軍は管理局、聖王教会より抜擢された総勢1000名。最低でも陸戦Aランク、最高基準の総合SSランクの魔導師、騎士が彼と戦うことになる。』

フォアードメンバーや一部の人間が驚きの声を上げる。

ちなみに私やフェイトちゃん、はやてちゃん、ヴォルケンリツターが選抜に選ばれていないのははやてちゃん経由で参戦を辞退したからである。

「ちょっと待ってください！1000人を一人で相手するんですか

!？」

更には声を上げたのはヴァイス陸曹。

『そのとうりや』

『こうでもしないと上が納得しないのよ。それにね。多分1000人だろうが2000人だろうが彼には関係ないの』

リンディさんの言葉に智と夕陽が立ち上がると続く。

「そうですね…僕と兄さんには関係ありません。僕達はこの世界の技術では再現できない造られた兵器」

「つまり私達はロストロギアです」

俺の眼前には総勢1000名の魔導師がいる。

これから始まるのは敵側に付いている【鏡盾】に対抗するため俺達リミッター解除の権限を賭けた交渉と言う名の模擬戦。

思うに三提督やナカジマ三佐、義母のリンディ、義兄のクロノ、相馬と和弥は事の重大さを理解しているがああレジアス中將は俺達を舐めていると思えない。

七年前の映像を彼は見ていないのだろうか？訓練校の新米魔導師

が見ても【模倣と侵略の悪鬼】との戦いは異常なモノと見て取れる筈。アルハザードの誇る守護者と言う名の兵器が一人だけでも管理局の脅威となるのだと。

だがまあいい。要は勝てばいいのだから。

魔導師達はなにやらレジアス中將の指示を聞いている。俺は始めるのをただジツと待つ。そんな中魔導師達の中に見に覚えのある人物の姿を見つけたので念話を繋げる。

『なんでお義兄さんがそこにいるんですか？』

『上の命令だ。神田提督、天津提督を含め【元魔導騎士の座】のメンバーもいるぞ？』

クロノ義兄さんが肩をすくめて言う。

彼の言うとおり確かに相馬と和弥もいた。幸い六課メンバーはいないようだが。

『桐斗には悪いが久しぶりの模擬戦なんだ胸を借りるつもりで全力で行かせてもらう』

『……危なくなったら迷わず逃げてくださいよ』

一応忠告しておいて念話を切る。

そしてなんとなく周りを見渡すとお偉いさん方の席に何故かいらつしやる人物が

「桐斗！頑張って！」

それは我が妻フェイト・テストアロツサ・ハラオウン。笑顔でこちらに叫びながら手を振っている。周りにいる将校、佐校の人間は驚愕の顔でこちらを見ている。というかなんでそこにいる……。

思わず頭痛がしたがなんとか持ちこたえて再び魔導師達へと向き直る。

たまにというか何時もどこか抜けている彼女だがそんな彼女の声は俺の力となる。連れの手前無様な姿を見せる訳にはいかない。

さあ、久しぶりの本気だ。背後には俺が命を賭して守るべき女、本来防衛戦が俺達守護者の本業。

夕陽もこの映像を見ているだろうからこの際に見せてやろう。アルハザード守護者【パルンティノガーディアン】の守り方を……。

プロテクト及びリミッター解除、起動シークエンス開始

俺を中心とし取り囲むように展開されている帯状の環状魔法陣が姿を見せる。

能力リミッター全行程強制破棄

脳内に能力リミッターの弾ける音が響く。

第一から第九プロテクト解除

俺を拘束するように展開されている帯状の環状魔法陣が次々と弾け飛ぶ。

起動コード入力・承認

最後の一つが弾け飛ぶと共に周りの大気が魔力の奔流により荒れ狂う。

術式展開。戦闘レベル最大出力

足元から広がるように展開される魔法陣。ミッドでもベルカでもない三重円の中に二つの正四角形と二つの正三角形、更に中央に十字の文様を伴ったそれは戦場を飲み込むように広がっていく。

全行程完了

奔流する魔力が光と影を巻き込み俺の体へとまとわりつくそれは禍々しい甲冑となりアルハザードの絶対守護者が姿を現す。

「我は陰陽を統べる剣なり」

【パルンティノガーディアン】 第三席

「光よ、影よ、我に従え」

最終防衛線守護者

「この身は貴様等と共に戦おう。我等に徒なす者には暗く冷たい死を。護るべき者には光の加護を与えよう」

陰陽の剣・起動

『そ、それでは始めますキリサキ・ハラオウン対管理局選抜隊！！』
司会役である女性の声が響く。どこか怯えているようにも感じられるがどうでもいい。右手に光輝く剣を作り、左手に黒く蠢く影の短剣を生み出し、俺は魔導師達を見据える。

『始め！！』

開始の合図と共に砲撃系魔導師が一齐に構える。その中心には魔導弓士天津和弥の姿もある。

「撃て！！！」

指揮官であるレジアス中将の掛け声で一齐に放たれた砲撃。万色異彩の魔力光が迫ってくる。

アイツ等、俺が避けたらどうするつもりだ。まあ、避けるつもりはないが。

俺は右手を上げる。同時に周囲に現れる光の球体。数にして千数百。それを一齐に迫り来る砲撃へ迎撃するべくこちらも砲撃を放つ。ぶつかり合い凄まじい爆発を起こし視界が閃光に包まれる。

続いて視界晴れるのを待たずして地上を滑走してくる陸戦魔導師彼らに対しては左手に作り出した影の短剣の一振り。それにより膨大な魔力を帯びた影の濁流が彼らを襲う。

この懐かしい感覚。昔の記憶と共に守護者だった時の記憶が蘇る。迫り来る様々な魔法を正面から叩き潰し、敵に容赦を見せず、護るべき者の為に力を奮え。

この身体はその為の絶対に折れる事のない剣なのだ。

FILE 21 (後書き)

感想お待ちします

FILE22(前書き)

更新!

目の前に広がるのは万色異彩の魔力光、そして漆黒と白銀の嵐。まるで戦争を目の当たりにしているこの光景に私は息を呑む。

いや、私だけではない。周りにいる他の局員も目の前の光景に呆然としていた。

これが彼の霧咲桐斗という名の青年の力。光と影を従えそれらを刃として用いて戦う彼の本当の姿。

七年前に見た彼の力はほんの一角でしかないということをお前は思いついた。

迫り来る陸の魔導師を影の濁流で寄せ付けず、空の魔導師の砲撃を全て撃ち落としまた寄せ付けない。異常…。それが私の感想だ。

「どうした表情が暗いぞ？」

横に座る私をこの席に招待してくれた将校の女性がうつすらと嫌味な笑みを見せながら声をかけてきた。

「いえ、やっぱり彼は強いなって思っただけです」

「嘘を言うな。異常だと思ったのだろうか？」

彼女の言葉に思わず反応する。

「まあ確かに異常だろうな、普通なら開始数分も持たないだろう。何故あんな芸当があの子にできるかわかるか？」

目の前で直立不動の彼を顎で指しながら聞いてくる。

もちろんわかるはずがない。

「人間の脳は常にリミッターを掛けた状態にある。自己防衛本能というやつだな。あの子や弟、妹の脳内はなりミッターが完全に外されている。それに踏まえて遺伝子レベルから魔力容量の異常な底上げ、脳内の情報処理の回転率の破格的向上、第六感の開発、そしてそれらに見合った肉体の改造、補助核の移植などをこの世界では再現できない技術で生まれる前や生まれた後様々な事を行ってきた。故にあの芸当ができる。まあ生まれながらの資質もあるがな」

淡々と説明する彼女に私は眉を潜める。

産まれる前からそんな事を…。

「彼のお母さんはなにも思わなかったんでしょ？息子、娘が兵器として扱われる事を……」

「そうだな。その世代の兵器はそういった感情が乏しい。要らぬ感情は弱さに比例すると考えられてたからな。『強いて言うなら共に戦う事ができると嬉しい』かな」

この時私はあることに気付きとなりの女性を見る。

「ちょっと待ってください！！将校殿はなんで桐斗の事をそんなに知っているんですか!？」

「そりゃわかるさ。ん？ どうやらあの子から打って出るようだぞ」

その言葉に私は戦場へと視線を移す。

クロノが放ったであろうエターナルコフィンをはるか上空で相殺させた桐斗は直立の体勢から構えを変えた。それは私がザンバーを

奮う構えと似ていて左足を大きく前に出して大剣を振りかぶるような構え。

「桐斗が構えるのはじめて見た……」

「皇帝の剣を撃つつもりか……。あの子相変わらず遠慮がないな。このままじゃ局の主力の過半数を失いかねん」

「え？」

隣の女性は立ち上がると通信を開いた。

「レジアス中将、私も参戦するが構わないか？」

『フレイヤ中将か。わるいが頼のむ。今は少しでも戦力が欲しい。アレス大將が全くやる気を出さんのだ』

「分かった。ウチのバカ亭主には私から渴を入れておく。それと他の局員を全員下からせる。無駄死になるぞ。あの子は私とアレスで叩く」

「……了解した。」

通信が切れる。私は驚いた。目の前にいるのは中将でレジアス中将も信頼を置いている人間だということを

「流石に力を使わなければ厳しいか……。ん？ なに狐に摘ままれたような顔をしている？ そうか自己紹介がまだだったな」

女性は笑みを浮かべたまま右手を天に翳す。次の瞬間、太陽の光

が柱となり彼女に降り注ぎ包み込む。そしてその光が晴れたとき白き騎士甲冑を纏った女性が姿を見せた。

「時空管理局地上本部所属フレイヤ・アルシエラ中将。又の名をパルンティノガーディアン前第三席、シリーズ【アルシエラ】第一作品『白き戦姫』あそこでバカな一撃を放とうとしている小僧の母親だ」

「アレス大将！いい加減にやる気を出さんか！我々はたった一人の相手に一撃も入れられていないのだぞ！！」

戦闘エリアの最後尾、地上本部首都防衛隊所属レジアス・ゲイズ中将は戦況を見ながらケラケラ笑っている大将に怒鳴り付けている。

「いやいや、わかってはいるのですが個人的に他の部隊のレベルが知りたくてですね。こうして少しの間だけ傍観に徹しているわけですよ」

アレスと呼ばれる男は銀色の髪と青い瞳が印象的でケラケラと笑っているが暗い圧迫感を放っていた。

「まあ、あの坊主とやり合うには命を本気で掛けないと一撃すらいれさせてくれないでしょうけどね」

「わかっとなるわ！だから部下の負担を軽くするためにさっさとやる

「気になれと言っておるのだ!!」

レジアスの眉間に青筋が浮かぶ。

「レジアスさん。俺達が地上を離れないのはレジアスさんの考えに少なからず共感できるモノがあつたからです。それだけは裏切らないで欲しい。代わりに俺達はアナタの守る地上を命を賭して守りましょう。まあ、アナタとゼストさんにお世話になつたお礼とでも取っておいてください」

「……………」

彼が顔を背ける。それにアレスが苦笑していると二人の間にモニターが開かれた。

『レジアス中将、私も参戦するが構わないか?』

「フレイヤ中将か。わるいが頼のむ。今は少しでも戦力が欲しい。アレス大将が全くやる気を出さなのだ」

レジアスがアレスを横目にニヤリと笑う。

『分かった。ウチのバカ亭主には私から渴を入れておく。それと他の局員を全員下がらせる。無駄死になるぞ。あの子は私とアレスで叩く』

「……………了解した」

モニターが消える。同時にアレスはため息を吐きレジアスに背を向け宙に浮上する。

「レジアス中将。フレイヤ中将の指示の通り全員後退させる……」

不意に変わるアレス大将の口調。だがレジアスは慌てる事もなく
全局員の後退を指示する。

「悪いな……。お前と俺達の秘密が明るみになることになる」

「気になさるな。局が壊滅的打撃を受けるよりはマシです。だが被害は最小限に頼まれますぞ」

その言葉に頷きアレスが額に手を当てる同時に足元から噴き上げる陰。それは彼を包み込み球体となる。

リミッター解除

コード承認完了

覚醒

陰の球体から飛び出すどす黒い閃光。

それは銀色の髪を靡かせ深紅の瞳を持ち漆黒の甲冑を見に纏う男。

「さあて、バカ息子に久しぶりに稽古でもつけてやるか!!」

「……………」

飛び立った友を目にレジアス・ゲイズは一人思いに馳せる。管理局に喧嘩を売ってきた青年は彼とその連れの子。最初はにわか信じ難かったが目の前の光景を目にしてからは納得してある。また

最近敵側に出現したロストロギアの少年の危険度は自分も良く理解しているつもりだ。なら何故桐斗の提案を拒否したのか。それは勘だ。なにか嫌な予感がしたからだ。相手側に出現したロストロギアには友の二人が自分達をぶつけると言ってきた。彼等もなにか感じ取っていたのだ。

二人の気持ちも汲んで自分が悪役を買ってでた。

「こうなっては仕方ないか…。ワシはせいぜい悪役を勤めるとするよ。」

一瞬緩んだ表情を厳しく正し局員に激を飛ばす。
今は親子の再開を心から祝福しよう。

【白き戦姫】 フレイヤ・アルシエラと

【黒き暴君】 アレス・アルシエラよ。

まあ、私にそんなことを言う資格はないがな…。

FILE22(後書き)

感想お待ちします

FILE23(前書き)

更新です

「一佐と二人がロストロギア？」

六課のモニタールームにスバルの音が響く。どこか恐怖に震えているように聞こえた。

それは他のメンバーも同様に驚きの表情を隠せないでいる。

私も聞いた時は驚いた。なんせ古代遺失物、つまりロストロギアを管理する部隊でロストロギアが働いているのだから。

「ええ、僕達三人はこちらでは伝説と言われている世界アルハザードで作り出された技術と兵器です。」

「この事は七年前の事件を担当した元44番隊の一部と当時のアースラのクルー。そして将校クラスしか知りませんから」

七年前の事件それは第97管理外世界『地球』で確認された妙な魔力反応から始まったと言う。森の雫の発見から始まり、超広域指名手配集団【狩人】の出没、魔導騎士筆頭の裏切り、そして彼等兄妹の真相、それらを順に説明される。

説明の後、ヴァイス陸曹が挙手をする。

「お二人のロストロギアとしての能力は？」

「二人共見せてやってくれんかな？」

モニターに映る八神部隊長促され目の前の二人の内先ずは副長補がおもむろに手を振る。同時にモニタールームに置かれている観葉植物が急激な成長を始め自在に動き出す。

「私はロストロギア【森の雫】。能力は模擬戦でも見せましたがご覧の通り植物の自在操作」

「次に僕……」

不意にヴィータ副隊長から投げ渡されたボールペンを受け取る。次の瞬間そのペンは石化、石の棒と成り果てた。

「僕はロストロギア【ゴルゴン】能力は触れたモノを石に変える石化の魔手と石化の魔眼。」

その光景に息を呑む。

「じゃあ…桐斗さんの能力は？」

「兄さんの能力は光と影の自在操作です。皆さんとの模擬戦で見せたのがそうです」

私達はスクリーンに映る戦闘の光景を見る。管理局の誇る魔導師達の砲撃、魔力弾が全て光の砲撃と剣達に寄って撃ち落とされ。近付こうとする者は一佐を取り巻く影の濁流によって近づけないでいる。

『ティアナさん……見たくなかったら見なくてもいいですよ？』

隊長補が念話を繋げてきた。

彼は私が力を欲する理由をなんとなくだが察してくれていた。だから私にあの技術を教えてくれた。

『見ますよ。流石の私も生い立ちまで妬むつもりはないです。隠してた理由も相応のモノがあるんですよね？』

『……………ありがとう』

これで私達は念話を切る。

そして私は再びスクリーンを見る。隊長補は別の意味でスバルと同じくして戦う為に作られた。

敵を殺し、滅ぼす存在。

何故だか恐怖を感じなかった。代わりに智の戦う姿からは痛みと苦しみが感じとられた。

自分に恐怖しているそういった感じた。今、目の前でペンを石にした時もそうだ。彼の妹は兄は自分の力を嫌悪していると言っていた。詳しくは聞いていないが彼の生前の恋人、伊集院恵那に関係があると思う。

この時私は自分の事より隊長補“霧咲智”の事を考えていた。その意味に気付かずに……………。

迫り来る魔導師達の砲撃を撃ち落とし、また寄せ付けない。

この時代に来るまでは当たり前だった戦争。擬似的なものだとしても今回の模擬戦はそんな昔の感覚を呼び覚ましてくれる。

あえて敵の正面に立ち敵の攻撃を無に返す上で敵を粉碎、駆逐する。

それが俺のスタイルであり絶対守護者としての在り方。

それが俺の尊敬する人から教えられた唯一の戦い方。他の戦法もその人達は使うようだがそれを教えて貰う前にそのひとたちは俺の前から姿を消した。

故に俺はこの戦法にこだわった。

「相馬！！時間稼ぎ頼む！」

「ギンガ！お前も行け！他の高速移動魔法を使える奴等もだ！！残りはその援護！！」

「あいよ（了解）！！」

クロノ義兄さんと陸士108部隊の部隊長のナカジマ三佐の指示が飛び遠くで相馬とナカジマ二等陸士と同じリボルバーナックルを装備した濃い髪の女が此方に向かって飛び出す。

それに合わせて他の魔導師も高速移動をしかけてきた。

それでも俺はその場から動くことはない。即座に敵の行動を認識次に取るであろう動きを計算、算出し彼等の移動する先々に光の柱を叩き落とす。

魔導師の高速移動魔術、フェイトのソニックムーブやフラッシュムーブなどには俺自身目を見張るモノがあるが俺には意味をなさない。

いくら早く動こうが単身で走れる人間の限界速である4秒1を超える事はない。魔法でそれを越えてもこの世界の技術では音速を超

えるスピード（オーバーソニック）を叩き出す者はいない。

比べて俺の光の砲撃、剣の弾丸は文字通り光速。故に後だしでも敵を迎撃することができる。

『うわああああああっ！！』

『きゃああああああっ！！』

このように魔導師がある程度此方に近付いてきたと同時に撃ち落とす。威力もバリアジャケットでギリギリ防げて尚且つ相手の意識を刈り取る事ができる威力だ。

まあ、これは昨日散々フェイトと口喧嘩したあげくに決定した事だったりする。

「キイイイイイイイトオオオオオ！！」

次に飛んで来たのは槍バカ兼親友の神田相馬。愚直に突っ込んできたあのバカに苦笑すると光の剣を放つ。

「俺にんなモンが効くわけねえのは知ってるよなあ！！」

雄叫びを上げながら相馬の姿が空中にできた歪みに消え、また現れる。

これがコイツのレアスキル【Space distort】空間をねじ曲げワームホールという道を作り出す能力。

「わかってるさ……」

自身を中心とした半径百メートルの地面に影が広がる。そして漆黒の槍が一斉に空に向けて放たれた。

「相変わらずのチート野郎があああ!!」

「有効手段を用いているだけだそれに……」

「だあああああああつ!!!!」

笑みを浮かべる俺の視線の先には槍を掻い潜ってきたバカがいた

それに対して俺は右手を奴に翳す。そういえばアイツと和弥だけだったなこの時代で俺が素を見せるのは……。まあ、この際言わせてもらおうか。

「能力でお前に卑怯者呼ばわりされる筋合いはない!!お前も十分チートなんだよ!!」

そして光の砲撃が放たれた。

だが

「^{ゲート}門展開」

奴は自分が展開したゲートに姿を消した。代わりに

「ハアアアアアアア!!」

頭上にゲートが開かれて一人の女が飛び出してきた。先程、ナカジマ三佐がギンガと呼んでいた女だ。

そいつは俺に向かって拳を叩き込んできた。

ウチの隊にいる突撃娘と同じリボルバーナックルを装備している彼女。突破力を相馬が買って詰めに使ったようだ。

俺は冷静に彼女の左手を受け止める。

「う、ウソ……」

それに対して驚愕の表情を見せる。ホントに同じ反応するな……。

「君はウチの隊にいる子とそっくりだな。そのシューティングアーツといいデバイスといい」

「へ？あ、それ私の妹です」

俺の言葉に彼女は呆けた顔になる。

ふむ、どつりで顔つきまで似ている筈だ。ちなみに彼女からの攻撃は続いている。」

「機動六課ライトニング00キリト・K・ハラオウン一佐だ」

「陸士108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。……ところで一佐はキリサキ・サトル執務官とお知り合いですか？キリサキの姓をお持ちですし」

「ん？智は俺の弟だが？」

それを聞いた瞬間彼女は飛び退き慌て出した。

一体どうした？

「キリサキ執務官のお兄さんなんですか！？そうとは知らずつい思いつきり！……」

「いや、模擬戦で手を抜いてどうする？」

「ちよっとお父さん！……どうしてくれるんですか！……」

模擬戦の最中にモニターを開いてナカジマ三佐に怒鳴っている。
お父さんということは三佐は彼女とナカジマ二士の父親か。
いやそれ以前に模擬戦の最中、それも敵の前で通信なんかしてん
だ……。

思わず頭が痛くなった。額を押さえながら念話を繋ぐ。

「相馬……彼女を離れた場所に飛ばしてくれ…頼む」

『……………了解』

通信を切ると同時にギンガ・ナカジマ陸曹の足元に開かれたゲート。そこへ落とし穴にはまったかの如くかわいい悲鳴を上げて落ちていった。

これでいい…。これで頭痛も治まる。

「お悩みの所すまないが自分の身を案じたらどうだ？」

その言葉に俺は頭上を見上げる。そこには二本の杖を手にした義兄の姿があった。

悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ

(Eternal Coffin)

エターナルコフィン!!!!

頭上で輝く青白い光。それを見たちよく後直ぐに俺はソレ目掛け光を放つ。

「……………」

次の瞬間放たれた義兄の魔法は掻き消された。

刹那辺りは凄まじい極光に飲み込まれた。そして閃光が晴れた時、この模擬戦でじめて俺は攻勢に出た。

大剣を振りかぶるような徒手空拳の構え。構築するは俺自身唯一無二にしての剣。

「集え…光よ……影よ………」

手に具現する影により作り出して漆黒に輝く大剣の柄。それはこの身の強よさの象徴。

「命により我が敵を焼き払え………」

刃とするは白銀に輝く光の刀身。それは敵を焼き払う絶対の力。

俺が構築したのは天と地の両方を断ち切らんと言わんばかりに巨大な剣。

白銀に輝く刃は天高く伸び先が見えず。ただそこにあれば光の壁とも見間違う程。

これが俺自身の唯一の剣。

かつて数々の世界からその世界を守る。為に奮った力。

それが顕現された瞬間周囲は沈黙に包まれた。そして俺の言葉だけがその沈黙に小さく染み渡るように響く。

「インペリアルブロー」

これでこの模擬戦が終わる……その筈だった。

あの人達が現れるまでは

切り札は最後の最後まで使うなと教えた筈だぞ

女の声と共に背後に立ち上がる光の柱。共鳴するように大剣の刀身が粉々に砕かれてそれらは光へと還っていった。

その光景に俺は目を見開く。

あり得ない。俺の構築が簡単に破られる筈がない。

それにできたとしてもそんなことができるのは4人だけだ。

よう……。久しぶりだなクソガキ

更に大剣が砕かれたと同時に響く男の声。それに併せて影が俺の支配を逃れて目の前である姿となる。

それは腕。なにか巨大なバケモノの左腕が目の前に顕現した。その腕は俺の頭を鷲掴みにするとそのまま地面に叩き付けた。

「がっ!？」

口の中に広がる鉄の味。

この味を味わったのは本当に久しぶりだった。そして思い出す模擬戦の前に感じた殺気。今から15年前、俺が4つの時はじめて経験したモノ。

伝説の超高度文明アルハザードでまだ守護者に成り立ての頃に経

験した殺気。

これは……

「生きてたのか……」

当時アルハザードの絶体守護者として最終防衛線に君臨した二体の兵器。

「久しぶりだな我等の産み出せし剣よ」

光の支配者。その姿戦場を光明で包み気高く振る舞う姫の如く。

パルンティノガーディアン第三席 最終防衛線守護者 シリーズ【アルシエラ】第一作品の一体

【白き戦姫】フレイヤ・アルシエラ。

「見ねえ内にでけえツラしてんなあ」

闇の破壊者。その姿戦場を闇で呑み込み破壊の限りを尽くす暴君の如く。

パルンティノガーディアン次席副長 最終防衛守護者 シリーズ【アルシエラ】第一作品のもう一体
【黒き暴君】アレス・アルシエラ。

俺達三人の産みの親だ。

FILE23(後書き)

感想お待ちします

FILE24(前書き)

更に更新です

「桐斗……」

私の視線の先では地にひれ伏した夫の姿。そして彼を挟むようにして立つ二人の男女。

周りが騒々しくざわめく……無理もない。

自分達の上官である大将と中将が今まで一撃も入れる事の叶わなかった一人の青年を意図も簡単に地に叩き潰し、更には二人が魔導師としてはアリエナイ力を奮ったのだ。

それは周りの将校達は愚か今この模擬戦を見ている全ての魔導師に動揺をもたらしただろう。

「フェイトちゃん!!」

名を呼ばれ私は振り向く。

此方に向かって走ってくる一人の女性。機動六課課長兼部隊長の八神はやてだ。

「桐斗君は大丈夫なん!? ていうか大将と中将はバケモノかいな!」

はやてが慌てふためいている。彼女も全く予想外の展開でなにがなんだか分からなくなっているようだった。

「あの二人の事ははやては知ってる!？」

かくなる私もなにがなんだかわからなくなっていたりする。

「フレイヤ・アルシエラ中将とアレス・アルシエラ大将のか？ウチも佐校の端くれ、名前ぐらいやったら知っとるで？あと異例の将校夫婦っちゅうて二人揃えば管理局最強って噂ぐらいやけど……」

彼女の説明に私は目を細める。

そして先程中将が言った事を彼女にも言った。

「あ、あの二人……桐斗のご両親だって……」

「……………」

沈黙が私達二人の間に流れる。はやての目が見開いて大きく息を吸う……そして。

「ええええええええ！？」

彼女の叫び声が私の耳の鼓膜を貫いた。

い、今のは効きました……。こつ耳をずきゅーんってきました。

「どういうことフェイトちゃん！！ワタシんな話し報告にもなんも聞いとらんで！？」

揺れ揺れて揺られ揺らされる私。肩を掴まれ前後にガクガクとされて頭の中がシエイクされています。

お願い止めて目が目が！！

「ちょ、っと！まっつてはやて！！揺らさないで！！しゃべれないかりや……」

「あ、ごめんなフェイトちゃん」

解放された私はふうと肩で息をする。はやてはと言つと頭を抱えながらブツブツ呟いている。

そんな彼女を横目にもう一度戦場へと視線を戻す。

地に伏せた彼は一向に動かない。

気を失っているのだろうか？心配になって私は席から飛び出そうとしたとき私に念話が繋がった。

『テストロツサ・ハラオウン執務官ですね？』

それは男性の声、いきなりの事に私は動きを止める。

『コイツの事はそんなに心配しなくていいですよ。この程度で気絶する程やわではありませんから』

声の主はアレス・アルシエラ、桐斗の父親にして地上部隊の大將を勤める男。

『それにホラ、もう起き上がりますから』

言われて桐斗を見る。

彼の言う通り夫はゆっくりと起き上がる。顔を伏せたままで表情は見えないが彼が無事だということにひとまず安堵のため息をつく。よかった…。

内心そう呟く。この模擬戦は桐斗の負けだけど彼が無事で良かった。落ち込んでいるかもしれないからあとで慰めてあげよう。そう思った。

「ダメエエエツ!!!」

「お兄ちゃん!」

モニタールームに夕陽の叫び声が響く。スクリーンに写し出されているのは地面から生えた黒く巨大な腕によって地に叩き伏せられている兄さんの姿。

他の隊長陣も啞然としてその光景を見ていた。

「ウン……」

「なのはさんどうしたんですか?」

上司の様子がおかしい事にスバルさんが気付く。

「シャーリー今壊された桐斗君の大剣の解析出来てる?」

「は、はい!!えっと……解析結果は…【ERROR】?」

表情された解析結果のエラーにシャーリーさんは首を傾げる。

「桐斗君達はロストロギア。この前ちょっと彼等の事を聞いてみたんだけど夕陽は別として桐斗君と智はアルハザードを守る守護者と

言う名の決戦兵器」

なのは姉さんがちらつと此方に視線を送り『ごめんね嫌な言い方して』と念話を僕達兄妹に言ってきた。それに対して僕も妹も気にしてないと返し彼女は話を続ける。

「アルハザードを守る防衛線は全部で5つそこに守護者と呼ばれる兵器が配置される。もちろん他の戦力も配備されるらしいけどそれは雀の涙程度、防衛線の主力兵器は彼等。故に守護者の魔力、能力、戦闘能力等は規格外。技術力が劣るミッドチルダでの解析結果で【ERROR】って出るのは当たり前。」

例えば兄さんの光の剣。あれは光と言う粒子を特殊な術式で収束、圧縮、凝固、形成したモノ。並大抵の力じゃ折れる訳がないしなのは姉さんのデイバインバスターを容易く叩き斬れる程だ

そしてあの大剣モノは質量が増す毎に重く固くなる。

アレは兄さんの唯一にしての奥義と呼べるモノ。込められる規格外魔力はこの世界の技術では測定できる訳がない。

「だから桐斗君の大剣があんな簡単に碎かれる筈がないの」

「それにキリサキが簡単に地に伏すけともない。アイツは私達とは全く違う戦場を生きた騎士だからな」

なのは姐さんとシグナムさんの言葉に周囲が沈黙に包まれる。

「何者だよ。あの二人……」

その中で僕が一人口を開いた。

「あの二人は……」

この時の口調は震えていた。

「あの人は」

【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】
【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】
【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】【EMERGENCY】
【EMERGENCY】

六課に鳴り響く耳を突く煩い音。僕の言葉を遮ったそれは緊急のアラームだった。

シャーリーさんは直ぐに詳細を確認する。

「センサーがガジェットを感知！場所はここから100キロの海上！レリックの反応はありません！」

「試験運用…かな？」

「もしくはこちらの戦力の調査……霧咲執務官のお二人はどうみま
す？」

「私は後者ですね。隊長補佐はどうですか？」

夕陽の言葉に僕は頭の中を切り替える。

今はコレに集中さっきの事は後で考えよう。

「僕も後者です。相手の目的がこちらの戦力調査を前提に作戦を立てるべきでしょう。」

なのは姐さんは頷く。

「なら今まで通りのやり方でやるっか？」

「了解」

そして六課のへりポートへと移動する。

FILE24(後書き)

感想お待ちします

FILE25(前書き)

更新です

ヘリが巻き起こす風が全身に叩きつけられる。

六課ヘリポートで私は他のフォアードメンバーと共に並んでいる。

「敵の現在地は海上なので今回は空戦可能の隊長、副隊長のみの出撃となります。よってフォアードメンバーはロビーで出動待機」

「」「」「ハイ！」「」「」

「ああ、ティアナ」

私達が返事をしなのはさんが頷く。すると彼女は私を見て言った。

「ティアナは待機から外れてようか？」

瞬間私の頭の血が煮えたぎるように沸き立った。わかつていた……。わかつていたけど……。

「言うことを聞かない奴は……」

俯きながらゆっくりと口を開く。

「使えないってことですか？」

「自分で言っていてわからない??当たり前的事だよ…それ。」

なのはさんの言葉が沸き立った血を更に沸騰させる。

「現場での指示や命令はちゃんと聞いてます。教導だってちゃんとサボらずやってます……」

目の奥が熱くなってきた。ヤバい我慢できない。

「それ以外の場所での努力まで教えられた通りじゃないとダメなんですか？ 強くなる為に手に入れた技術は使っちゃダメなんですか！？」

私は凡人。六課に来ていつも思っていた。オーバース、最低でもニアスの隊長陣に将来を期待されているエリートのおのロングアーチスタッフ。あの年で既にBランクのエリオと竜召喚士のキャロに可能性の塊であるスバル。更には夢物語しかでてこないアルハザードの兵器である霧咲兄弟。なんで私はここにいるのだろう。

「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし。スバルやエリオみたいな才能もキャロみたいなレアスキルもない。ましてや一佐や霧咲執務官達みたいに異質な存在じゃない！ 少しくらい無茶したって死ぬ気でやらなくちゃ強くないじゃないですか！！」

「！？」

次の瞬間私の胸ぐらには誰かに掴まれ引き寄せられた。

その人物はシグナム副隊長。彼女の腕がな振りかぶられて瞬間的に私は殴られるのだと悟った。

そして鈍い音が夜のヘリポートに響く。

「……………え？」

だがそれは私が殴られた音ではなかった。
「どういってもりだ智」

目の前に立つ私と同じ年の黒髪の少年。
彼は何事もなかったかのように口を開いた。

「シグナム副隊長：他人を殴る隙があったらさっさと出勤メンバーにヘリに乗るよう促したらどうだ？」

その口調と視線はとても冷たく。見つめられたシグナム副隊長はまるで石になったかのように硬直。なのはさんもヴィータ副隊長もいきなり人柄が変わった彼に怯えていた。

それを流し目で見た後、隊長補は私の方に向き直り、私の右肩を掴む。

「ティアナ、高町隊長はお前が必要じゃないから待機から外したんじゃない。俺と夕陽の毒とも言える濃度の魔力に充てられたから身を案じて待機から外したんだ。そこを間違わないでくれ」

右肩を掴まれたままその青い瞳で見つめられ思わず頷いてしまう私。

「高町隊長、ヴィータ副隊長直ぐにヘリへの搭乗願います。シグナム副隊長、霧咲副隊長補佐六課を頼む」

「うん（了解）」

「了解しました」

「それじゃティアナゆっくり休め。また朝から訓練してやるから」

そして彼は軽くポンと私の頭を叩くとなのはさんヴィータ副隊長へりに乗り込み飛び立って行った。私はただボクッとその光景を見送っている。

「行くぞ…」

シグナム副隊長が六課ロビーに向かう為に踵を返す。

「シグナム副隊長!!」

そんな彼女をスバルが呼び止めた。一瞬の沈黙が辺りを包む。ってアンタ何にらみ返されて弱気になってんのよ。

ぼーとする意識の中スバルがなにかいっている。

そしてこの後、シャーリーさんによって私はなのはさんの教導の意味。そして霧咲智の過去を知る事となる。

「智！オイ智!!」

ガジェットが出現した海域に向かうへりの中僕はスターズ副隊長ヴィータと呼ばれた。

「なんですかヴィータさん」

「なんですかじゃねえ。お前なにさっきからずっとぼうつとしてんだ。」

「どうやら僕はへりが飛び立ってからずっと呆けていたらしい。直ぐに笑顔を作りすみませんでしたと彼女に謝る。」

「智、体調が悪いなら出なくていいよ……」

「なのは姉さんが僕の顔を見ながら少し心配そうな顔を見せる。問題ない。そう彼女言いい僕は窓の外を見る。遠くに見えるのはガジエツト？型。規則正しい動きで旋回飛行を続けている。」

「これ以上近づくのはマズいですね。高町隊長、ここらへんから出撃した方がいいかと」

「そうだね。ヴィータ副隊長もいい？」

「あいよー！」

「あ、そうだ。さっきはありがとう智」

「なのは姐さんは僕の隣に腰掛けて笑みを零す。」

「礼を言う前に姐さん達はもっとコミュニケーションを取るべきだと思えますよ。皆しゃべらなすぎるんです」

「ウフフ 確かにそうだねえ。ティアナが悩んでたのにも気づいてたのに全然話しをしてなくて、私の独りよがりで、分かってくれ

るって勝手に思い込んでね。最後には弟に押し付けてるみたいな形になってちゃって……。あはは、これじゃダメなお姉ちゃんだね」

自分の頭をコツンと叩き苦笑する姉貴分。とここで姉貴分の副長が気づいたように身を乗り出してきた。

「そっぴやサトル。何気に素が出たぞ？　もしかしてティアナに気があんのか？」

「黙れ年齢偽証幼女」

「……テメエ、ぶっ飛ばすぞ？」

「ハイそこまで、そろそろ行くよ？　ヴァイス陸曹！」

「ハイ！」

なのは姉さんがヴァイス陸曹に呼びかけることでヘリの後部ハッチが開く。強い風が畿内に入り込み荒れ狂う。

それをものともせず副隊長、副隊長たちはそこから飛び出した。

「スターズ01、高町なのはいきますー！！」

「スターズ02、ヴィータ出るぞー！！」

桃色と赤い魔力を見送る。

『マスター、またあの時の事を思い出してたの？』

「……………」

デバイスが語りかけてきたが返事はしない。

『エナはアナタの事を恨んでなんかいないわ。だから自分を責めないで』

「……………ウロボロス。セットアップ」

『……………OK, my master. standby ready setup.』

ヘリから明灰の魔力光が飛び出す。双頭の蛇を手に僕は空に飛び交う鉄くず共を駆逐するために飛翔する。

「スターズ01 霧咲智……………でます」

今更、俺は自分を許す事なんてできない。
何故、俺はこんなにも無力なのだろう……………。

FILE25 (後書き)

感想お待ちしています

FILE26(前書き)

本日更新です

私はモニターでなのはさんの過去を知った。ただ魔力が多いだけの女の子がしてきた無茶。

その結果は私達を教え導く人のあまりにも酷く痛々しいモノだった。一生飛ぶことも、歩く事もできないかもしれないという現実を突きつけられた彼女はどう思ったのだろうか？

もしそれが私だったらどうなっていたのだろうか？

「なのはさんはね。みんなに自分のようになって欲しくないんだよ」
デバイスマイスター兼通信士のシャーリーさんの言葉が重く心に響く。

「ランスター。禁止された自主訓練をサトルに付き合っで貰って行っていたらしいな。」

「ハイ……、二時間の内一時間半を実技、残りを音楽を聴きながらの整体を受けていました」

シグナム副隊長の質問に包み隠さず話す。私が訓練を頼んで以来、訓練が終わったら二時間だけが今言ったような内容のメニューをやっていた。

「なるほどな……。道理でお前に伊集院恵那の動きができた訳だ」

「そしてそのお陰で身体に残っている疲労も予想の半分だった訳ね。彼、魔力の精密操作が得意だから整体と同時に自分の魔力でマッサ

「ジしていたんだと思うわ」

「あの……伊集院、恵那って誰ですか？」

エリオが二人に質問した。まあ、そうだろう。私が聞き覚えのない人間の動きをしていたのだから。

「伊集院恵那さんはティアと智、霧咲隊長補佐と同じ年の一等陸尉だよ」

スバルがエリオに答える。
だが彼女の話題は上官の間では御法度。シグナム副隊長が話題を変える。

「この話しはまた後日だ」

「シグナム副隊長。お兄ちゃんから連絡。『任務完了』だった」

それを聞きシグナム副隊長は私達4人に解散するように言った。
暗い面もちのまま散っていくフォアードメンバー。スバルと共同で生活している部屋の側まで来た時私はなにかひっかかるモノがあった。

あの時のアイツの目。

言葉ではああ言っていたがあの時の目からは悲痛な痛みが感じられた。

「スバル、私ちょっと散歩してくるわ」

少し考えたくなくて私は相棒にちょっと出ると告げる

「あ、だったら私も……やっぱりいや……今日はちょっと冷えるから体調に気をつけて早めに帰ってくるんだよ」

「うん……ありがとう」

その後私は海辺でなのはさんに声を掛けられ私は自分の間違いに気付いた。

なのはさんは私の、私達の事を考えていてくれた。それに気付かずただ突っ張っていた私。

その時私は本気で泣いた。こんなにも素晴らしい恩師を私に与えてくれた神様と彼女自身に感謝した。

「ちょっと聞きたいんだけどいいかな？」

泣き止んで少ししたときなのはさんが尋ねてきた。

「智の様子に最近異変を感じたこと……ない？」

その質問に首を傾げて考える。

訓練も休憩時間も特訓もほとんどあのム力つく笑顔を振りまいていたわよね？別に異変なんて……。

「そっいえば……」

「なにか気付いたことあるの!？」

なのはさんが私に詰め寄る。思わず後ずさってしまいがゆっくりと頷き話した。

「出勤前、シグナム副隊長に殴られそうになって隊長補佐がかばってくれた時、補佐の目がどこか悲しくて、私をみてるんですけど私じゃない誰かを見ているような感じだったんです」

それを聞いてだんだんと顔を青くする我がスターズ分隊長。

「多分、いや絶対にその誰かは伊集院恵那。補佐が手に掛けた人物……違いますか？」

「どこでそれを!？」

声を荒げて私の肩を掴む彼女。この時の彼女の慌てようは今まで私が見たことがないくらいだった。

私は医務室での話しを語る。

「そう…これで夕陽の言っていた事が確認された」

「どづいつことですか?」

「……………智は今、心身共にボロボロ。このままじゃ私より酷い事になる」

……………は?

どづいつこと?

「理由は私の口からは言えないけど智は…身体に致命的な傷を負っているの。そして心にも傷を…。私達に心配かけまいと仮面被って自分を戒めるように自分を偽って…。」

じゃあ、あの時のアレも偽り？

どれだけ分厚い仮面被ってるのよ！！

特訓を見てもらって、技を教えてもらって、私を庇ってくれて、少しでも認めてもらったと思ってるのに。それが偽り？私は貰うもの貰って代わりにアイツの傷を抉ってたって事じゃない。

それじゃ私、バカみたいじゃないのよ！！

「ティアナ？」

なのはさんが私の名前を呼んだが無視。というか聞こえない。あのバカを一発ブン殴らないと気が済まない！！

「なのはさん……。霧咲隊長補佐は今どこに？」

「え、多分ロビーだと思うけど」

「ありがとうございます。あと魔法の使用許可をください」

「なにするつもりなのかな！？ていうか一瞬で想像できた自分が嫌なんだけど！ダメだよティアナ！！」

私の袖口を掴むのはさん。彼女を引きずりズンズン進む私。

シリアスを一発でぶち壊した私はもの凄い形相で隊舎へと向かう。

なんでだかしらないけど無性にあの顔目掛けてファントムブレイザーをぶち込みたいのだ。

『なのはちゃん大変や〜！！！！』

だがそんな私を止めるように開かれたモニター。

そこには六課部隊長八神はやての姿があり。彼女の表情はかなり焦っており血の気という血の気が引いていて真っ青だった。

ていつか帰ってくるのエリアく速いですね!?

『それは桐斗君が次元転移してくれたからなんやけど……そんなことよりも高町一等空尉、ランスター二等陸士兩名至急ロビーに集合や!他のみんなも先にきてる!急いで来てな!』

「ちょっとはやてちゃんどうしたの!?

」

何事かとなのはさんが八神部隊長に問う。

『地上の中將と大将の緊急訪問や!』

……………はい?

皆さんお久しぶりです。フェイト・T・ハラオウンです。私は只今機動六課のロビーにいます。

今、ここにいるのはなのは、ティアナを除いてスターズ、ライトニング、ロングアーチ、バックヤードスタッフほぼ全員。

さて、何故管理外世界『アガレスト』にいたはずの私がここにいるのでしょうか。

「すみません。もうすぐで全員揃いますのでそちらにお腰を掛けてお待ちください」

へこへこ頭を下げてはやて。彼女が頭を下げてるのは普通

ならこんな場所にいるはずのない人物。

「別に楽にしてもらってもかまいませんよ」

アレス・アルシエラ大将

「こちらのことは気にするな」

フレイヤ・アルシエラ中将

地上前線トップの二人だった。私がここにいる理由。この桐斗と一緒にこの二人に連れてこられたからです。

模擬戦の結果は桐斗の敗北。模擬戦の事後処理をこの二人はレジアス中将に任せ視察を兼ねて六課に転移したのだ。

お陰様で六課は大パニック。

そして現在私の夫と義理の弟は

「……………」

「……………」

もの凄い形相であの二人を睨んでいます。

ちなみに桐斗にいたっては所々焦げていて頬に痣ができていたりします。

ちなみに私はオロオロしてます。

「申し訳ありません。遅れました!!」

「申し訳ありませんでした!!」

そんな中遅れてきたのはとティアナ。二人が列に加わってはやてが全員を確認した後姿勢を正し、声を張り上げる。

「総員！ 大将、中将閣下に敬礼！！」

彼女の号令の下、私達は敬礼する。

礼に始まり二人に歓迎の言葉を述べた後、主要メンバーの自己紹介に入る。

先ずはこの部隊で階級の高い二人

「機動六課課長兼部隊長、ロングアーチ01八神はやて二等陸佐です」

「ライトニング、ライトニング00。桐斗・K・ハラオウン一等空佐」

ロングアーチ

「部隊長補佐、ロングアーチ02リンフォース・ツヴァイ空曹長です！」

スターズ

「スターズ分隊長、スターズ01高町なのは一等空尉であります」

「スターズ分隊長補佐、スターズ01 霧咲智執務官です」

「スターズ分隊長副隊長、スターズ02ヴィータ三等空尉です！」

「スターズ分隊長副隊長補佐、スターズ02 霧咲夕陽執務官です」

「スターズ分隊スターズ03、スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「同じくスターズ04、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

そしてライトニング

「ライトニング分隊長、ライトニング01フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「ライトニング分隊副隊長、ライトニング02シグナム二等空尉です」

「ライトニング03、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ライトニング04、キャロル・ルシエ三等陸士であります！」

一人一人前に出て自己紹介をする。そして全員の紹介が終わった後に二人が立ち上がりアレス大將がまず前が出る。

「地上本部、アレス・アルシエラ大將です」

そしてフレイヤ中將も前が出る。

「同じく、フレイヤ・アルシエラ中將だ。まず始めにだが、キリサキ・ハラオウン一佐、霧咲智執務官、霧咲夕陽執務官。以上三名は前が出る、バックヤードは下がってくれてかまわない」

その指示で非戦闘員は全員下がり桐斗、智、夕陽の三人が前に出る。

「ではお前達の正式名称を聞こうか？」

その問いに夕陽を含め桐斗、智以外の全員が首を傾げる。

「記全歴20XX、パルンティノガーディアン第三席 最終防衛線
守護者 シリーズ【アルシエラ】第二作品 正式名称【陰陽の剣】
固有名称“ゼノ”。登録名称、ゼノ・ヴォル・アルシエラ」

「記全歴20XX、パルンティノガーディアン第八席 第四防衛線
守護者 シリーズ【アルシエラ】第三作品 正式名称【ゴルゴン】。
固有名称“ヴーゼル”登録名称、ヴーゼル・ドリユス・アルシエラ」

二人は機械的な口調で淡々と言葉を紡ぐ。

“ゼノ” “ヴーゼル”それが私の夫と弟の本当の名前。

それを聞いた後、中將は夕陽へと視線を送る。夕陽はビクリと肩を震わせる。視線を逸らそうとするがその眼差しに捕らわれそらす事ができない。二分程の沈黙が流れた後、中將はゆっくりと口を開いた。

「 Yauna Nema Spena . (お前の正式名称を
言ってみろ) 」

それは聞いた事のない世界の言葉。

厳しくも聞こえるその言葉。けど中將の視線はとても優しくて一人の母親を思わせる眼差し。夕陽は応えるように言葉を紡いだ。

「 Ya Mirdes 19XX Rout . Arcel

a Nb 4 “Fost dorp” . Nema “Leen” .
Axcneme “Len・Sic・Arcela” (記全
歴19XXロールアウト、シリーズ【アルシエラ】第四作品 正式
名称【森の雫】。固有名称“レーエン” 登録名称“レーエン・シ
ス・アルシエラ”)

兄達に続くように可能も機械的な口調で、なおかつ中将と同じ私の知らない言葉で淡々と言葉を紡いだ。恐らく彼女は無意識にこの言葉、アルハザードの言語を紡いだのだろう。

それに対して中将は嬉しそうな表情を見せると目の端に涙を浮かべて彼女に返事を返す。

「記全歴19XX、パルンティノガーディアン第三席 最終防衛線
守護者 シリーズ【アルシエラ】第一作品【白き戦姫】 固有名称“
フレイヤ” 登録名称“フレイヤ・アルシエラだ。よく生きていてく
れたなレーエン”

「え？ 今私……」

レーエンこと夕陽は無意識に紡いだ言葉に混乱しているようで首を傾げて小さく自問自答をしている。そんな彼女を両親は苦笑しながら見ている。

その光景は文字通り親子。

場違いではあるがのほほんとした空気がこの場を包んでいる。六課メンバーも緊張を忘れて小さく笑みを浮かべている。

だが

「フェイト・T・ハラオウン執務官。前に出ろ」

その言葉で六課は再び緊張に包まれた。

FILE26(後書き)

感想をお待ちします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7557k/>

魔法少女リリカルなのは 伝説の剣

2011年10月13日19時51分発行